令和２年度指定

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

研究報告書・第１年次（令和２年度）

研究開発構想名

「SDGs 未来都市長野」から世界へつなげる信州版AL ネットワーク

令和３年３月

長野県教育委員会

カリキュラム開発拠点校　長野県上田高等学校

目　次

はじめに	学びの改革支援課長	曽根原好彦	1
	上田高等学校長	廣田　昌彦	2
【１】 事業の概要	構想概要		3
	令和２年度事業実施計画書		5
	イメージ図		11
	令和２年度事業完了報告書		12
【２】 管理機関の取組	Ⅰ　ＡＬネットワークの構築（ＡＬネットワークの構築）		22
	Ⅰ　ＡＬネットワークの構築（外部機関との連携）		24
	Ⅱ　カリキュラム開発（小布施ウィンタースクール）		25
	Ⅲ　より深い学び（高校生学びのフォーラム）		25
	Ⅳ　国際的な学び（海外進学・留学講座）		26
	Ⅴ　高度な学び　（特別講座）		27
【３】 拠点校の取組	上田高等学校		
	Ⅰ　WWL研究開発の概要		
	WWL事業の教職員指導体制		29
	Ⅱ　課題研究		
	課題研究の概要		30
	グローバルスタディⅠ長野県内フィールドワーク（日帰り16 コース）		33
	グローバルスタディⅠ　JICA・ICAN国際理解教育「世界が百人の村だったら」		36
	グローバルスタディⅠ　課題研究入門講座		37
	グローバルスタディⅠ　地域に暮らす定住外国人との共生について考える		38
	グローバルスタディⅡJ　日本語課題研究		39
	グローバルスタディⅡJ　KDDIとの連携授業		44
	グローバルスタディⅡE　2020-2021		45
	グローバルスタディⅢ　受講者ポートフォリオ		49
	グローバルスタディⅢ　北陸新幹線サミット		52
	Ⅲ　海外研修・海外交流		
	海外研修・海外交流の概要		55
	2学年台湾研修旅行代替のオンライン交流		56
	ボストンスタディツアー　オンライン版		59
	ボストンスタディープログラム　オンライン版		60
	ヒューマンアクトインマニラ　オンライン版		61
	カンボジア井戸プロジェクト		62
	留学フェローシップ		63
	Ⅳ　研究発表		
	研究発表の概要		64
	第１回・第２回アカデミックプレゼンテーション		65
	マイプロジェクトアワード 長野県Summit・第４回和歌山県データ利活用コンペティション		66
	WWL全国高校生フォーラム・愛媛大学附属高校発表会		67
	長野県上田高等学校グローバルスタディ報告会		68
	Ⅴ　活動記録		
	令和２年度WWL研究開発活動		71

【４】 共同実施校の取組　松本県ケ丘高等学校 73

【５】 連携校の取組　長野高等学校 79
長野西高等学校 81
篠ノ井高等学校 82
屋代高等学校・附属中学校 84
上田染谷丘高等学校 85
野沢北高等学校 87
伊那北高等学校 89
飯田高等学校 90
松本深志高等学校 91

【６】 評価　生徒による1年間の自己評価と事業評価 93
WWLに関する1年生，2年生の1年間の意識の変化 94
SGH5期生（令和元年度入学生）の意識の変容 95
ＷＷＬ活動がどのような能力を高めているか？ 96
WWL事業に関するＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃ分析と考察 97
WWL事業に関する教職員アンケート分析と考察 99
WWL事業に関する保護者アンケート分析と考察 101
WWL事業に関する英語能力の分析と考察 102

おわりに　カリキュラムアドバイザー　内堀　繁利 103

資料　運営指導委員会議事録 104
ルーブリック試案 132

令和２年度 WWL コンソーシアム構築支援事業研究開発報告書に寄せて

学びの改革支援課長　曽根原　好彦

本年度、長野県から文部科学省指定事業のＷＷＬ（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業のカリキュラム開発拠点校に上田高等学校が、共同実施校に松本県ケ丘高等学校が採択されました。

上田高等学校は平成 27 年度より５年間ＳＧＨの指定を受け様々な先進的な学びに取り組んできました。本事業では探究科を設置し「探究的な学び」に取組んでいる共同実施校・松本県ケ丘高等学校、それぞれ特徴を持つ県内全域からの連携校９校（長野高等学校、長野西高等学校、篠ノ井高等学校、屋代高等学校、上田染谷丘高等学校、野沢北高等学校、伊那北高等学校、飯田高等学校、松本深志高等学校）とともに長野県の新しい学びを作るために成果を広く普及していくことが期待されています。

長野県がＳＤＧｓ未来都市として指定をうけていることから、構想のテーマを「SDGs 未来都市長野から世界へつなげる信州版ＡＬネットワーク」と掲げ、ＳＤＧｓを切り口に、探究的な学び、高度な学び、国際的な学びの機会を生徒に提供し、Society5.0 の時代に向けたイノベーティブなグローバル人材の育成に取り組んでいきます。

実施初年度にあたる令和２年度はコロナ禍により、計画した海外研修が軒並みオンラインとなり、学校の外へ飛び出して探究する活動も制限を受けました。そのような中でも生徒たちが熱を失わずに探究に取り組む姿、他校の生徒と協働する姿は、本取組の将来につながるものと思います。

３年間の指定期間の中で高校生国際会議や大学の先取り履修など取り組むべき課題は多くあります。始まったばかりの事業ではありますが、高校生の可能性を開く基盤が創れるよう進めていきたいと考えています。

最後になりましたが、本事業を推進していただいている AL ネットワーク参加校の関係者様、運営指導委員の皆様、連携先の企業・団体・大学・研究機関の皆様のご協力に感謝いたします。今後とも御指導くださいますようお願いいたします。

コロナの１年とWWL

長野県上田高等学校長　廣田　昌彦

多くの皆さまのお力添えをもちまして、本校は令和２年度、WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業のカリキュラム開発拠点校に選ばれました。スーパーグローバルハイスクール事業の次のステップとして是非進みたいと念願していたことですので、大変嬉しく、誇りに思います。しかし、その採択の通知を受けた時はすでにいつ解除されるかもしれぬ休校期間に入っていました。

教育活動のあらゆることが影響を受け、大抵のものは中止されました。その中でもどうにかオンラインで代替できるものは無いかなどと、この前例がない事態にそれぞれの高校で、とにかく挑戦し続けた一年の記録がこの冊子にまとめられています。本校でも全スタッフが、本当によくがんばってくれたとの思いにたえません。

振返ると苦しい一年でしたが、考えようによればこのような事態も、高校生が成長していく上で、また、探究活動にかかわる先生方が、あらたなヒントを生徒に提示するための、とてもよい機会になっていると思います。

大人でさえ経験したことのない状況の連続ですから、人生経験が未熟であると、当然視野が狭く、向き合っている試練をとても乗り越えることができないと思いがちです。そんなときに年を重ねた者たちが、これは君の一生にとってすれば断じて大したことではなく、必ず乗り越えることができるのだと教えられることは、高校生の成長のためだけならず、世代間が支えあう上でも、とても大事なことのように思います。

また、例えば、感染症予防と経済対策は裏腹の関係になっており、どちらかだけを追求するわけにはいかないというジレンマを、ありのまま理解するということも高校生には難しい問題です。物事には肯定的な部分と、それと裏腹な否定的な一面があり、両方をそのまま受け止める事が出来る「否定性受容」も、課題が生じている環境をより巨視的に俯瞰するためには重要な要素だと思います。環境保全と経済活動はまさにこのような裏腹の関係ですが、これらを両立させ、互いの否定性を受容するような提案が、現実にＳＤＧｓに前進をもたらすと期待されています。

長野県に学ぶより多くの高校生の誰もが、肯定的な結論を自らの未来の探究に導くことができるよう、連携する学校の皆様、運営指導委員の皆様はじめ、コンソーシアムを構成する様々な団体様と共に、はりきって努力してまいりたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

【別紙様式４－１】

期間	ふりがな	ながのけんきょういくいいんかい	都道府県番号
令和2年度 ～ 令和4年度	管理機関	長野県教育委員会	長野県
	ふりがな	ながのけんうえだこうとうがっこう	20
	事業拠点校	長野県上田高等学校	

令和２年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
構想計画書（概要）

構想名（30字程度以内）

「SDGs未来都市長野」から世界へつなげる信州版ALネットワーク

構想概要（400字以内）＊テーマ設定したグローバルな社会課題について必ず記載すること

長野県では、将来WWLコンソーシアムを県内に構築することを可能にするプラットフォームの整備を進めてきた。これらを「イノベーティブなグローバル人材育成のためのプラットフォーム」という視点から再構築又は新規に構築し、信州版ALネットワークを3年後までにWWLコンソーシアムの中核となる組織に仕上げる。

事業拠点校となる上田高等学校は、SGH校としてこれまでグローバル人材育成にかかる拠点の役割を果たし、21世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきた。この成果をベースとして『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってSDGsを探究する』ALネットワークを構成する。これにより、地方公立高校の生徒たちに、単独校では得られない教育の機会を与え、時間や場所等の条件を超えて、自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができるグローバル・リーダーの育成をめざす。

研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報							代表者・校長名
管理機関		長野県教育委員会							原山　隆一
事業拠点校		長野県上田高等学校（公立）							廣田　昌彦
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	
		対象：	全日制普通科	320	320	320	960	960	
							0		
		対象外：					0	0	
							0		
事業共同実施校	①	長野県松本県ケ丘高等学校（公立）							杉村　修一
			学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模	
		対象：	自然探究科・国際探究科・英語科	81	80	39	200	953	
			普通科	241	234	278	753		
		対象外：					0	0	
事業協働機関（国内外の大学，企業，国際機関等）	①	㈱KDDI							松野　茂樹
	②	一般財団法人日本国際協力センター（JICE）							山野　幸子
	③	台湾高雄市政府教育局							王　進燄
	④	ミネルバ大学							杉本　亜美奈
	⑤	長野県知事部局各課							阿部　守一
事業連携校（国内外の高等学校等）	①	長野県長野高等学校（公立）							宮本　隆
	②	長野県篠ノ井高等学校（公立）							小金　典子
	③	長野県屋代高等学校（公立）							高澤　邦明
	④	長野県上田染谷丘高等学校（公立）							根橋　悦子
	⑤	長野県野沢北高等学校（公立）							山﨑　裕史
	⑥	長野県伊那北高等学校（公立）							埋橋　浩
	⑦	長野県飯田高等学校（公立）							斉藤　則章
	⑧	長野県松本深志高等学校（公立）							今井　義明
	⑨	長野県長野西高等学校（公立）							小松　容

【別紙様式４－１】

	⑩	延平高級中学	（ 私立 ）	劉　栄順
	⑪	苗栗高級中学	（ 国立 ）	劉　瑞圓
	⑫	新竹女子高級中学	（ 国立 ）	呂　淑美
	⑬	科学工業園区実験高級中学	（ 国立 ）	李　健維

（別紙様式１）

令和２年５月 21 日

事業実施計画書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　長野県長野市南長野幅下６９２－２
管理機関名　長野県教育委員会
代表者名　　教育長　原山　隆一　　印

１　事業の実施期間
契約締結日～令和３年３月 31 日

２　事業拠点校名
学校名　　長野県上田高等学校　　学校長名　廣田昌彦

３　構想名　　「ＳＤＧｓ未来都市長野」から世界へつなげる信州版ＡＬネットワーク

４　構想の概要
長野県では，将来WWＬコンソーシアムを県内に構築することを可能にするプラットフォームの整備を進めてきた。これらを「イノベーティブなグローバル人材育成のためのプラットフォーム」という視点から再構築し，信州版ＡＬネットワークを３年後までにWWＬコンソーシアムの中核となる組織に仕上げる。
事業拠点校となる上田高等学校の，ＳＧH校としての成果をベースとして『「いのち」を視点に，統合的・全体的アプローチによってＳＤＧｓを探究する』ＡＬネットワークを組織する。これにより，地方公立高校の生徒たちに，単独校では得られない教育の機会を与え，時間や場所等の条件を超えて，自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができるグローバル・リーダーの育成を目指す。

５　令和２年(2020 年)度の構想計画
（１）ＡＬネットワークの形成
ア 運営組織作り　　連携先，協働機関と学びの改革ＡＬネットワークを立ち上げる
イ 情報共有体制の整備
ＡＬネットワークの高等学校間で定期的な会議や打合せを行う。また，「信州学びの改革ＡＬネットワーク(仮)」のポータルサイトを作成し，こまめな情報発信を行う。拠点校と共同実施校は本事業に係るウェブサイトを設置し，日本語と英語での情報発信を行う。
ウ 修了生の国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進に向けた計画
（ア）海外進学ワークショップ【管理機関・拠点校とも】
ＮＰＯ法人留学フェローシップやH-LAB　OBUSE の企画への協力を通じて海外進学が進路の選択肢となる意識の醸成を図る。

（イ）新たな指標による進路選択への転換【拠点校・共同実施校】

「学びの指標」を用いて生徒が自分軸を構築する中で，一人ひとりの成長や，学びの進化を評価することを取り入れる。

（ウ）グローバルな活躍をしている講師による講演会【拠点校・共同実施校】

拠点校・共同実施校で，世界で活躍する人物を講師に招き，全校対象の講演会や小規模の座談会を開催する。ＡＬネットワーク内で遠隔配信する。

（エ）生徒の自主活動の推進～教科の学習以外の「個人的経験」をする機会を保障

共同実施校による「高校生会議」の実施。テーマを決めて討論し，関係部署へ提案を行う。活動場所の提供等により支援を行う。

（オ）ポートフォリオの作成指導【拠点校】

コアリッションアプリケーションの研究を進める。

エ カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置計画

（ア）カリキュラムアドバイザー

カリキュラムアドバイザーを配置し，カリキュラム開発会議を年３回程度実施。

（イ）海外交流アドバイザー：連携機関に依頼。（ＪＩＣＥ，アイキャン等）

（ウ）グローバル講師（外国人講師）：専門性を有する外国人講師を拠点校へ配置。

（エ）事務職員：非常勤職員を拠点校に配置する。外部との連絡調整等を担当。

オ テーマと関連した高校生国際会議等の開催に向けた計画

（ア）海外連携機関（候補）

ａ 台湾高雄市政府教育局　・台湾師範大学

台湾への研修旅行の実施。（拠点校・共同実施校）連携機関でのフィールドワーク。

ｂ ミネルバ大学　学生に拠点校等の生徒の指導を依頼。

（イ）テーマと関連した高校生国際会議などに関する計画

上田高等学校がＳＧＨ指定以来交流を重ねている北信越や関東及びネットワーク連携校の高校生を招聘し，課題研究発表会を実施。分科会助言者は連携機関に依頼する。

カ フォーラムや成果報告会等の実施に向けた計画

（ア）学習成果報告会・アカデミックプレゼンテーション

２月の学習成果報告会では，拠点校・共同実施校の生徒が各自で取り組んだ課題研究を，ポスターセッション形式で発表する。また，各連携校から選抜された生徒や大学生もプレゼンテーションを行い，連携強化を図る。拠点校では「アカデミックプレゼンテーション」を通して，意見交換する。助言者をネットワーク内の協働機関から招く。

（イ）県のＳＤＧｓ推進政策とリンクした高校生の海外での発表の機会の確保

「ＳＤＧｓ未来都市」である本県の施策と連携して，高校生の発表の機会を設ける。

キ 情報収集・提供等，その他の取組に関する計画

（ア）教員研修会

新たな評価，学びの指標について学ぶ合同ワークショップや講演会等の機会を積極的に設ける。

（イ）海外の高等学校との姉妹校提携

協働できる海外の学校と協働のための姉妹校提携に向けて協議していく。拠点校・共同実施校のこれまでの取組を連携校と共有していく。

（２） 研究開発・実践

ア テーマとして設定するグローバルな社会課題

『「いのち」を視点に，統合的・全体的アプローチによってＳＤＧｓを探究する』

上田高等学校の５年間のＳＧＨカリキュラム研究開発の成果をステップアップさせながら，ＳＤＧｓを「いのち」という視点で探究する。

イ 関係機関による先進的なカリキュラムの研究開発・実施体制

（ア）データ通信会社との連携による授業開発

株式会社ＫＤＤＩと連携し，最先端の知見を取り入れた授業の開発を行う。

（イ）国際関連機関，学術機関，民間企業等でのフィールドワーク

上田高等学校が連携協定を結んでいる東京外国語大学を始め，ＪＩＣＡや佐久総合病院，県内外の大学など学術機関及び民間企業等でフィールドワークを行い，学びの深化を目指す。

（ウ）教育現場の課題解決を目的とした海外大学の学生インターンシップ受入れ

ミネルバ大学や，海外に学ぶ学生をインターンとして迎え，教員が生徒とも協働しながら日本の高校教育現場の抱える課題を研究し，解決に向けたプランを作成する。

ウ 新たな教科・科目の設定

（ア）新教科「グローバルスタディーズ（ＧＳ）」（教育課程の特例）

地球市民としての感性や価値観の養成を目的に，教科等横断的な学びの視点を取り入れた教科「グローバルスタディーズ」の開発を拠点校で行う。

◆１年次　「グローバルスタディⅠ」（１単位・学校設定科目）

探究的な学びを通して，協働性・可塑性や国際感覚などの汎用的な能力を養成する個々のＳＤＧｓの課題の背景となる構造的で複雑な側面を教科等横断的な視点で探究する。

◆２年次　「グローバルスタディⅡ」（２単位・学校設定科目）

「グローバルスタディⅠ」で育んだ資質・能力の更なる養成を図る。１学年で取り組んだ課題を更に深め，議論し，解決策を校内外で提言する。その際，課題の中にある対立・ジレンマに特に着眼しながら，全体性・統合性という視野の中で，否定性受容力の向上をはかる。ＩＣＴ機器を駆使した調査やプレゼンテーションの技術を身につける。

◆新科目「グローバルシチズンシップ」「デザインシンキング」「グローバルスタディⅢ」の導入に向けた準備

エ カリキュラムに位置づけられた短期・長期留学や海外研修

（ア）台湾研修旅行【海外研修】【拠点校・共同実施校】

総合的な探究の時間の一環として，２年次の秋に全員が台湾での研修を実施する。現地でのフィールドワーク，研修先での研究課題をテーマにした英語による発表や討議を行う。

（イ）拠点校・共同実施校との海外研修の合同実施

新たな試みとして，拠点校・共同実施校が従来から，独自に実施してきた以下のプログラムについて，相互乗り入れを検討する。一般財団法人日本国際協力センター（JICE）の協力を得て，プログラムの充実をはかる。

ａ　ボストンスタディープログラム【短期留学・拠点校】

ｂ　ヒューマン アクト イン マニラ【海外研修・拠点校】

ｃ　カンボジア井戸プロジェクト【海外研修・拠点校】

d　カナダ語学研修【短期留学・拠点校及び共同実施校】

e　マレーシア・シンガポール研修【海外研修・共同実施校】

（ウ）高校生海外留学支援事業「信州つばさプロジェクト」の活用

県が整備する留学プラットフォーム「信州つばさプロジェクト」を活用し，海外での探究活動につなげていく希望を持つ生徒の支援。

オ バランスよく学ぶカリキュラムの編成

全員が，人文科学分野・社会科学分野・自然科学分野の科目をバランスよく学ぶことのできるカリキュラムの開発に着手

カ 工夫された学習活動の実施に向けた計画

（ア） 県立学校「未来の学校」構築事業【管理機関】

県独自事業において，先進的・先端的な研究開発に５年間取り組む実践校６校に指定されている連携校の野沢北高等学校・松本深志高等学校の取組を共有していく。

（イ）「高校生学びのフォーラム長野」の開催【管理機関】

各校の「探究的な学び」の成果を学校の枠を超えて発表し合う場とする。

（ウ） 連携校間での自由選択科目群の共同実施や教員の相互乗入計画

各校間で，低学年のうちから遠隔通信を活用するなどして，自由選択科目の履修を可能にするシステムの開発に着手。

（エ） 外部講師として民間の知見を活用し，より実践的な課題解決の方法を学ぶ

ＰＢＬ型の学びに，協働機関から講師を招き，実践的な学習ができる環境を整備する。

キ 大学教育の先取り履修の実施に向けた計画

（ア）長野県高大連携プラットフォーム

「長野県高大連携プラットフォーム」を活用し，高校の学びの質の向上を図る。

a 「総合的な探究の時間」研修会と「主体性を育む夏合宿」

b 高校生対象講座（サマーチャレンジ）の開催

c 長野県立大学のグローバルマネジメント学部とのブリッジプログラム

（イ）県内大学との先取履修の実施に向けた研究

県立大学との先取履修に係る研究を高等教育振興課と連携して進めていく。松本県ケ丘高等学校探究科生徒が，信州大学松本キャンパスでの聴講あるいは科目等履修をカリキュラム内に設置できるかについて，具体的に大学側と研究していく。

（ウ）より高度な内容を学びたい高校生のため拠点校・共同実施校の条件整備

ＪＭＯＯＣのようなオンライン講座のカリキュラム化について，拠点校で研究を開始する。高大連携プラットフォームの大学生にアドバイスをもらうような体制を研究する。

ク 留学生の受け入れ及び体制の整備

アジア高校生架け橋プロジェクトへの協力を進める。連携校まで含めて留学生受け入れのためのプラットフォームの整備に着手する。

（３） 財政支援等

ア 自己負担額の支出計画

事業名	内容	予算（千円）
高校生海外留学支援事業「信州つばさプロジェクト」	県内高校生の留学支援事業。「企業版ふるさと納税」（H31年３月内閣府認定）も活用し県・民協働で高校生の主体的な留学を支援する。	34,791

高校生学びのフォーラム長野	「探究的な学び」の成果を発表し合う場とし，「マイプロジェクト・アワード(仮)」地方大会として位置づけ，全国大会へ出場のチャンスを与える。拠点校・共同実施校の生徒の研究を全県に発表する機会となることを期待。	3,647
県立高校「未来の学校」構築事業	先進的・先端的な研究開発に概ね５年間取り組む実践校を指定。連携校との交流を推進。	5,564

イ　人的または財政的な支援，研修やセミナー等の実施に向けた計画

（ア）　グローバル講師の配置

授業の一部を単独で行う特別非常勤講師の ALT を拠点校に配置する（県費負担）。

（イ）　教員の研修等への財政支援

ａ「学びの改革」フロンティアスピリッツ事業

選考によって選ばれた教職員が国内外で研修する際の費用を一部負担する。

ｂ「海外での学び」推進事業「信州つばさプロジェクト」

県が企画する１週間程度の高校生短期留学プログラムの引率に，今後活躍が期待される若手教員を充て，教員のスキルアップの研修機会ともなるよう設定する。

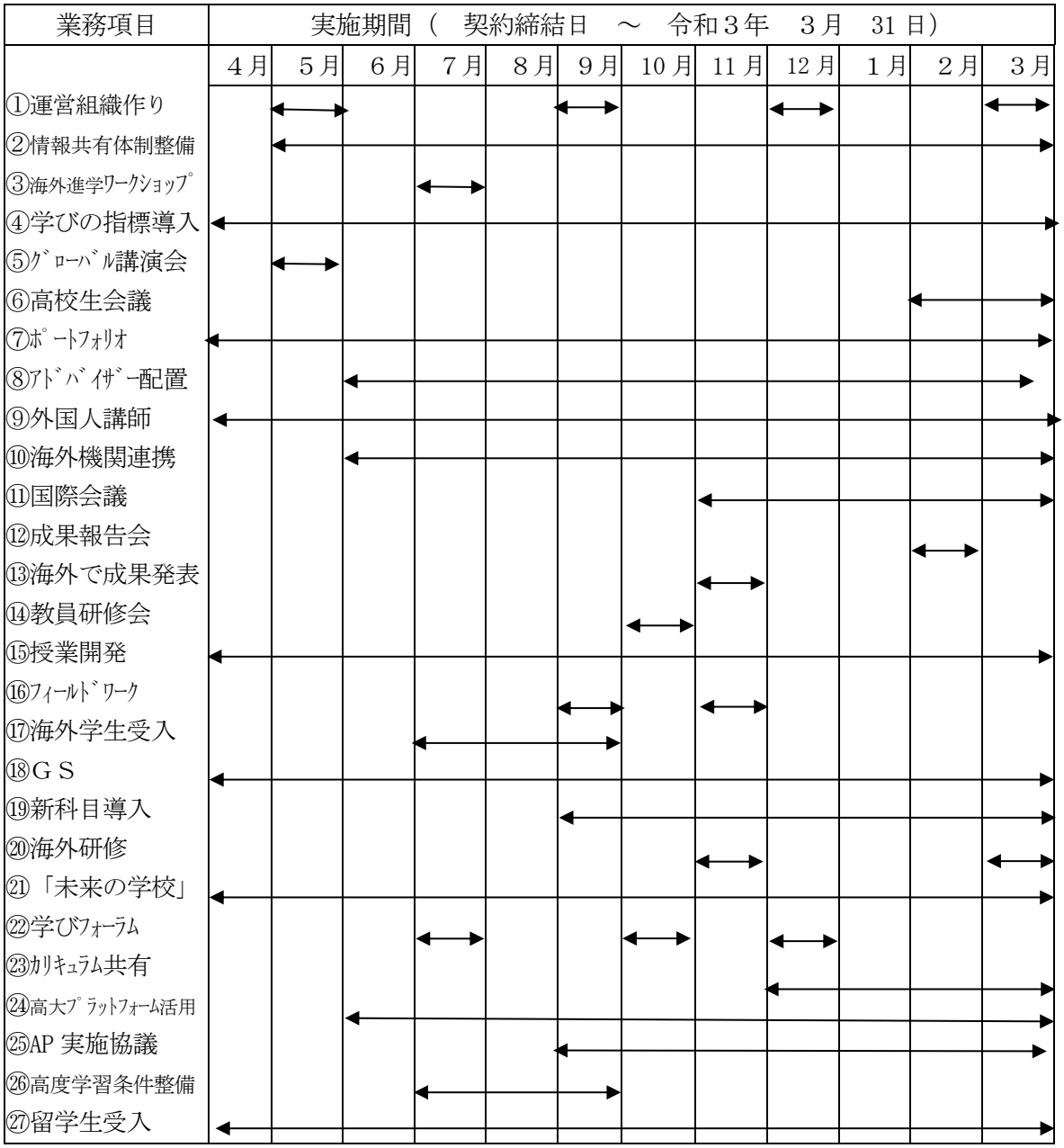
＜添付資料＞　令和２年度教育課程表

６　事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
①運営組織作り・運営会議	学びの改革支援課	学びの改革支援課　宮下美和
②情報共有体制の整備	学びの改革支援課	学びの改革支援課　宮下美和
③海外進学ワークショップ	県内公立高等学校	学びの改革支援課　宮下美和
④学びの指標の導入	上田高校・松本県ケ丘高校	上田　市川　　県ケ丘　徳永
⑤グローバル講演会	上田高校・松本県ケ丘高校	上田　白鳥　　県ケ丘　羽賀
⑥高校生会議	松本県ケ丘高等学校	松本県ケ丘高校　　宮下達郎
⑦ポートフォリオ	上田高校	上田高校　市川 格
⑧アドバイザーの配置	学びの改革支援課	学びの改革支援課　宮下美和
⑨外国人講師	上田高校	上田高校　髙野芙美
⑩海外機関との連携	上田高校	上田高校　髙野芙美
⑪国際会議	上田高校	上田高校　髙野芙美
⑫学習成果報告会	上田高校・近隣施設	上田高校　白鳥敏秀
⑬海外での成果発表	上田高校・松本県ケ丘高校	上田　北澤　県ケ丘　羽賀
⑭教員研修会	上田高校・松本県ケ丘高校	上田　市川　　県ケ丘　徳永
⑮授業開発	上田高校	上田高校　小林まゆ子
⑯フィールドワーク	上田高校	上田高校　小林まゆ子、白鳥敏秀
⑰海外学生受け入れ	上田高校	上田高校　市川格
⑱学校設定科目ＧＳ	上田高校	上田高校　小林まゆ子
⑲新科目導入への準備	上田高校	上田高校　髙野芙美
⑳海外研修	上田高校・松本県ケ丘高校	上田　白鳥　　県ケ丘　羽賀
㉑県立学校「未来の学校」	県内６校	学びの改革支援課　宮下美和
㉒学びフォーラム	学びの改革支援課	学びの改革支援課　宮下美和
㉓連携校間でのｶﾘｷｭﾗﾑ共有	上田・松本県ケ丘、連携校	上田 市川 県ケ丘　齋藤

㉔高大連携ﾌﾟﾗｯﾄﾌｫｰﾑの活用	学びの改革支援課	学びの改革支援課　宮下美和
㉕AP 実施協議	学びの改革支援課	学びの改革支援課　宮下美和
㉖高度な学習への条件整備	上田高校	上田高校　髙野芙美
㉗留学生受け入れ	上田高校・松本県ケ丘高校	上田高校　菊原健吾

7　課題項目別実施期間



8　再委託先の有無　　無

9　所要経費　別添のとおり

【担当者】

担当課	学びの改革支援課	ＴＥＬ	026-235-7435
氏　名	宮下　美和	ＦＡＸ	026-235-7495
職　名	主任指導主事	E-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

「ＳＤＧｓ未来都市長野」から世界へつなげる信州版 AL ネットワーク

長野県で育成するイノベーティブなグローバル人材に求められる資質・能力

- 混沌とした社会の中にある課題を見抜いて、テーマを設定し、チームとして協働しつつ、対立やジレンマを乗り越えて解を見つけ、アクションを通じて新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができる資質・能力
- 社会（世界）との関わりの中で、「一度しかない人生を自分はどう生きたいか」という自分の人生を構想する力
- 信州に根ざした確かなアイデンティティと世界に通じる広い視野、資質・能力

信州学びの改革
アドバンスト・ラーニング・ネットワーク

長野県教育委員会

- 探究的な学び・STEAM カリキュラム開発
- 海外留学・高校生国際会議
- 高大連携・AP 構築
- 企業等との連携
- 信州ＳＤＧｓ

◆拠点校
長野県上田高等学校
◆共同実施校
長野県松本県ヶ丘高等学校

「私のプロジェクト」発表大会

- ◆地球市民としての完成や価値観の養成を目的とした新教科「GS（グローバルスタディ）」「デザイン・シンキング」
- ◆文理融合科目、CLIL による編成
- ◆ミネルバ大学・高雄市政府教育局との連携
- ◆フィリピン、ボストン等海外研修実施
- ◆留学フェローシップ「海外大学進学講座」
- ◆留学生受け入れプラットフォーム整備
- ◆長野県高大連携プラットフォームとの連携
- ◆長野県内大学との単位先取履修の研究
- ◆JMOOC 等オンライン講座のカリキュラム化
- ◆株式会社 KDDI と連携した STEAM 授業開発
- ◆JICE による海外交流アドバイス
- ◆JICA 等国際関連機関、学術機関、民間企業でのフィールドワーク
- ◆「SDGs 未来都市」県の事業との連携
- ◆「信州SDGsプラットフォーム」との連携
- ◆地方創生応援税制（企業版ふるさと納税）で留学「信州つばさプロジェクト」の推進

すでに長野県にある“学びのプラットフォーム”を再構築し、イノベーティブなグローバル・リーダーに必要な資質・能力の育成をめざす

高校生に高度な学びを提供する
持続可能かつ進化し続ける信州版 AL ネットワークの構築

事業完了報告書

1　事業の実施期間

令和２年５月 27 日（契約締結日）～令和３年３月 31 日

2　事業拠点校名

学校名　　長野県上田高等学校

学校長名　廣田昌彦

3　構想名

「ＳＤＧｓ未来都市長野」から世界へつなげる信州版ＡＬネットワーク

4　構想の概要

長野県では、将来WWＬコンソーシアムを県内に構築することを可能にするプラットフォームの整備を進めてきた。これらを「イノベーティブなグローバル人材育成のためのプラットフォーム」という視点から再構築又は新規に構築し、信州版ＡＬネットワークを３年後までにWWＬコンソーシアムの中核となる組織に仕上げる。

事業拠点校となる上田高等学校は、ＳＧH校としてこれまでグローバル人材育成にかかる拠点の役割を果たし、21 世紀型学力の向上に資する成果の普及を図ってきた。この成果をベースとして『「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってＳＤＧｓを探究する』ＡＬネットワークを構成する。これにより、地方公立高校の生徒たちに、単独校では得られない教育の機会を与え、時間や場所等の条件を超えて、自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができるグローバル・リーダーの育成をめざす。

5　教育課程の特例の活用の有無：有（拠点校）

１年次　世界史Ａ（２単位）現代社会（２単位）

→ＧＳⅠ（グローバルスタディーズⅠ）（１単位）ＩＲ（国際関係論）（３単位）

２年次　社会と情報（２単位）→ＧＳⅡ（グローバルスタディーズⅡ）（２単位）

6　管理機関の取組・支援実績

（１）実施日程

	実施期間（令和２年４月１日　～　令和３年３月 31 日）											
	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10 月	11 月	12 月	１月	２月	３月
運営会議		運営組織会議	ＡＬネットワーク会議				運営組織会議	運営組織会議ＡＬネット	運営組織会議ＡＬネット	運営組織会議ＡＬネット	運営組織会議ＡＬネット	運営組織会議ＡＬネット

<table>
<tr><td></td><td colspan="3"></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>ワーク会議</td><td>ワーク会議</td><td>ワーク会議</td><td>ワーク会議</td><td>ワーク会議</td></tr>
<tr><td>運営指導委員会、検証委員会</td><td colspan="3">運営指導委員の選定、依頼、会議開催準備</td><td>検証委員打合せ</td><td>第１回運営指導委員会</td><td>検証委員打合せ</td><td>運営指導委員会準備</td><td>第２回運営指導委員会</td><td></td><td>運営指導委員会準備</td><td>第３回運営指導委員会</td><td>検証会議</td></tr>
<tr><td>SDGs プラットフォームの基盤作成</td><td></td><td colspan="2">産業政策課を通じて SDGs 推進登録企業にサポーターを依頼</td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2">知事部局各課、信州環境カレッジ、長野 SDGs プロジェクト等との連携</td><td>長野県 NPO センターとの連携</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>海外進学ワークショップ</td><td></td><td colspan="2">打合せ、準備</td><td>第１回海外進学・留学講座</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>小布施ウインタースクール</td><td>打　合せ、準備</td><td>第２回海外進学・留学講座指導講座</td><td></td></tr>
<tr><td>人的配置</td><td colspan="12">カリキュラムアドバイザー
海外交流アドバイザー
G 講師
事務職員</td></tr>
</table>

（２）実績の説明

ア　ＡＬネットワークの形成

（ア）　運営組織作り

カリキュラム開発拠点校、共同実施校、カリキュラムアドバイザー、管理機関それぞれの担当者で運営組織を作り、連絡会を行った。年度の後半 11 月からは毎月ＡＬネットワークミーティングを開催し、今後の事業の進め方の打合せや情報交換を行った。

ＷＷＬ(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業実施要項に示されている「本事業の運営に関し，専門的見地から指導，助言に当たる運営指導委員」として、県内外から６名を選定、依頼した。令和２年８月 10 日、11 月 20 日、令和３年２月６日にオンラインを併用しながら委員会を実施し、それぞれの立場から有益な助言をいただいた。

運営指導委員（敬称略）

信州大学　教職支援センター　准教授	荒井　英治郎
ベネッセ教育総合研究所　主席研究員	小村　俊平
ライフイズテック株式会社　取締役	讃井　康智
東京インターナショナルスクール理事長	坪谷　ニュウエル 郁子

長野県立こども病院　感染症科部長　　南　希成
公益財団法人国連大学協力会　事務局長　　森　茜

（イ）　情報共有体制の整備

ＡＬネットワークの高等学校間で定期的な会議や打合せを年間６回実施。拠点校においては本事業に係るウェブサイトを作成した。ＡＬネットワーク内での情報共有を目的にWWＬ通信を発行し、各校の取組を発信した。

（ウ）　修了生の国内外へのトップ大学への進学や海外留学等の促進に向けた取組

①　海外進学ワークショップの実施

ＮＰＯ法人グローバルな学びのコミュニティ・留学フェローシップによる海外進学・留学講座を生徒向けに３回、教員向けに２回実施した。

（生徒向け）

拠点校、共同実施校をメイン会場としてオンライン併用で夏２回、オンラインで冬１回の講座を実施した。ＡＬネットワーク内外の高校生 84 名が参加した。

（教員向け）

海外進学や留学を目指す生徒の指導に資するため、教員向け海外進学指導講座を初めて実施した。

②　新たな指標の活用による進路選択への転換

長野県版「新しい学びの指標」の導入に向けて、説明会、意見交換会を実施。令和３年度から試行・検証を行う。

③　グローバルな活躍をしている講師による講演会

・学校で以下の講演会を実施した。可能な場合は、ＡＬネットワークからも参加した。

拠点校:ＪＩＣＡ職員　竹内岳氏、ＮＰＯ法人ＩＣＡＮ　直井恵氏
共同実施校：旅行作家　齋藤政喜氏
連携校（長野高校）：ＪＡＸＡ　澤田弘崇氏

・11 月に運営指導委員のＯＥＣＤ日本イノベーション教育ネットワーク事務局長でもあるベネッセ教育研究所主任研究員の小村俊平氏による、ＡＬネットワーク特別講座を実施。３校から 40 名ほどの生徒が Zoom で参加し、世界と日本の教育についての講演をお聞きし、講師と対話した。

④　生徒の自主活動の推進～教科の学習以外の「個人的経験」をする機会を保障

・共同実施校で「県高校生徒会交流会」を５月と１月に実施。オンラインの強みを生かし、これまで地区内で行われてきた交流会の参加範囲を全県に広げ、県内 40 校から 140 人が参加した。文化祭運営の悩みを共有する機会となった。

・拠点校では、課題研究からアクションを起こす生徒が増えている。

例：・友人に呼びかけファストファッションの着なくなった衣類を集めてフリーマーケットを実施。
・地域の小学校で手作りせっけんを使って手洗い指導。

⑤　小布施ウインタースクールの実施

(エ)　カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置

①　カリキュラムアドバイザー

長野県教育委員会高校改革推進役の内堀繁利氏に依頼。運営指導委員会やＡＬネットワーク会議において、広い見地から助言を得た。

②　海外交流アドバイザー（拠点校に配置）

海外に強いネットワークを持つ以下の３人に依頼。令和２年度はコロナ感染症の影響で中止、代替となるプログラムが多かった。

ＮＰＯ法人　ＩＣＡＮ代表　直井恵氏（フィリピン）

松本空港国際課特別顧問　恵崎良太郎氏（台湾）

一般財団法人日本国際協力センター（ＪＩＣＥ）特任研究員　岸本昌子氏（海外に広いネットワークを持つ）

③　グローバル講師

ＩＢ等の指導経験豊富な県直接雇用のＡＬＴをグローバル講師として拠点校に配置。２年生のＧＳのうち１単位を中心になって指導にあたる。

④　事務職員

拠点校にて、取組の評価、報告書作成等にあたる事務職員を雇用した。

(オ)　テーマと関連した高校生国際会議

①　令和４年６月の高校生国際会議の実施を目指してＡＬネットワーク内でイメージの共有を図った。

②　上田高等学校で課題研究発表会「新幹線サミット」を実施。今年度はコロナウイルス感染症の影響で初めて Zoom を用いてオンラインで実施。国際会議をオンラインで開催する場合のシミュレーションとなった。

期日	令和２年６月 13 日
テーマ	「はなれていても思いは届く　話し合おう、未来のために」
分科会テーマ	Ⅰ 信州発いのち・健康フォーラム Ⅱ 地域の課題から地域創生を提言する。 Ⅲ グローバル課題から解決策を提言する。
助言者	Ⅰ 蓮見順平氏（佐久医療センター小児科医長） Ⅱ 大室悦賀氏（長野県立大学教授） Ⅲ 瀧澤郁夫氏（ＪＩＣＡ人間開発部次長）
参加校	県内高校　ＡＬネットワーク他(10 校) 県外高校　（６校）

(カ) フォーラムや成果報告会等の実施

①学習成果報告会

＜拠点校＞

２月に拠点校で学習成果報告会を実施した。代表者が全体会でプレゼンテーションを行い、２年生全員が１年生を観客にしてポスターセッション形式で２年間の課

題研究の成果を発表した。第３回の運営指導委員会と同日に開催し、運営指導委員や、ＡＬネットワークの職員にオンラインで指導を受けた。共同実施校生徒からの発表もあった。

＜共同実施校＞

１月に「Kenryo Researchers Grand-Prix2020」として課題探究発表会を実施。ＡＬネットワークからも参加した。地元の企業関係者にも審査を依頼し、直接講評をもらった。

②アカデミックプレゼンテーション

７月と 10 月に拠点校にて、アカデミックプレゼンテーションを実施。日頃の探究学習から発展した自主活動や、海外での学びについてプレゼンテーションを行った。

いずれも参加者から熱心に質問が出され、活発に議論が行われた。発表の様子はＡＬネットワークにも配信した。

第１回　７月 11 日(土)Zoom にて

1) 「アメリカ留学報告」
2) 「ベルギーでの留学体験」
3) 「カンボジア井戸プロジェクト」
4) 「別所線の活性化に関する研究発表」
5) 「オンラインボストンスタディーツアー」発表

第２回　10 月 10 日(土)上田高校にて

テーマ「グローバルとローカルの視点から課題解決を考察する」

1) 「ボランティア活動を通して」
2) 「格安ファッションのカラクリ～江戸から学ぶ消費者のあり方～」
3) 「外国ルーツの子供達の学習支援」
4) 「習慣は確実に感染を防ぐ～子供たちの手洗いから学ぶ～」

③全国高校生フォーラム

拠点校及び共同実施校から一組ずつ参加し、共同実施校が「審査委員長賞」を受賞した。

④高校生学びのフォーラム

「探究的な学び」の成果を発表する場として設定。

（キ）情報収集・提供等、その他の取組

①教員向け研修会

・ＡＬネットワーク教員向けに「探究的な学びと評価」をテーマに運営指導委員でもある信州大学荒井英治郎氏による講座をオンラインにて３回シリーズで実施した。ＡＬネットワークより各回 20 人の程度の参加者があった。ＷＷＬの担当者だけでなく、探究の指導にあたる教諭など広く参加者があった。教員研修として複数名で視聴した学校もあった。

・新しい「学びの指標」について管理職向け説明会・意見交換会を実施。

②ＳＤＧｓ探究のプラットフォーム

・知事部局産業政策課の協力を得て長野県ＳＤＧｓ推進企業に本事業の周知を行ない、高校生の探究学習サポーターとしての登録を依頼し、41 社の申込みがあった。
・知事部局環境政策課の信州環境カレッジにも同様に連携を依頼し、14 社(団体)の申込みがあった。
・学びサポーター登録企業(団体)の一覧表をＡＬネットワークに配布し、探究活動の連携先として活用できる体制を整えた。

7　研究の実績

（1）実施日程

業務項目 実施日程（2年4月1日　～3年3月31日）												
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①ＩＲ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
②ＧＳⅠ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
③ＧＳⅡ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
④ＧＳⅢ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑤ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ						→						
⑥ｵﾝﾗｲﾝ台湾交流						→	→	→				
⑦ﾃﾞｻﾞｲﾝｼﾝｷﾝｸﾞ			→			→		→				
⑧ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ							→			→	→	
⑨GS報告会											→	
⑩ｱﾒﾘｶ研修				→					→	→	→	→
⑪ﾌｨﾘﾋﾟﾝ研修												→
⑫ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ研修									→	→	→	→
⑬プレゼンテーション	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑭外国人講師	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑮留学促進				→							→	
⑯研究成果普及	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

（2）　実績の説明

（ア）「いのちをテーマに据えた SDGs 探究」

ア 授業内での取組

１年のＧＳＩで SDGs について学び、課題研究の際に関連づけてテーマを設定する。

イ　ＪＩＣＡ・ＩＣＡＮ国際理解協力（「世界が 100 人の村だったら」）

１学年全員実施。クラスごとにワークショップを実施後、講義で世界の実状を学ぶ。

２年生がファシリテーターとして参加。10 月８日。

ウ　１学年課題研究入門講座（オンライン）

各専門分野 14 名の講師に、研究内容やその手法を伺う。８月 28 日

（イ）　外部機関との連携

ア ＫＤＤＩとの連携による授業開発(デザインシンキング授業)

ＫＤＤＩと連携し、ＳＴＥＡＭ人材のマインドセットに欠かせないデザインシンキングを学ぶ（２年生全員）

第１回　　６月（これからの時代に必要な能力は何か）
第２、３回　９月（デザイン思考体験ワーク～マシュマロチャレンジ～）
第４回　　11 月（課題発見　デザイン思考をはじめよう）
第５回　　３月（ライフデザインについて）

イ フィールドワークやワークショップ

計画していたフィールドワークはコロナ禍の影響があり、２年生の首都圏フィールドワークは中止した。代わりにオンラインでできることを模索し、以下のプログラムを実施した。また、同窓会と連携し、２年生の課題研究テーマと同窓生の専門分野が重なる場合、双方をマッチングし、オンラインまたはメールによるインタビューを行った。

１）　１学年県内フィールドワーク

・訪問先を昨年までの県内２カ所から１カ所に絞り、ＰＢＬの手法を取り入れ、訪問先から事前に課題を頂き、生徒が取り組み、現地で発表する方式とした。
・全８コースによる調査を実施

２）ワークショップ

①ＡＣＣＵ（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター）主催韓国教職員招へいプログラム。１月 26 日。自作の学校・地域紹介ビデオを放映、日韓の文化、教育について意見交換［生徒 22 名、教員８名参加］

②ＪＩＣＥ連携授業

・ＪＩＣＥと協働し、「内なる国際化」をテーマに全１年生に実施。
・ＪＩＣＥ職員の講義、現地連絡調整員（日本在住の外国人）による自己紹介・課題提起後、自分たちにできることについてグループワーク。２月 16,17 日。

（ウ）　新たな教科・科目の設定

ＳＧＨ指定期間から開発している以下の科目の充実を図った。

ア　ＩＲ（国際関係論）［１年全員　３単位、学校設定科目］

・「世界史Ａ」「現代社会」を学校設定科目とし再編成し、３単位で行った。
・地歴公民科の基礎知識を習得させグローバル課題の理解と考察を深めた。
・ＧＳＩと連携してグローバル課題についての背景まで含めた多角的な学習。

イ　ＧＳＩ（グローバルスタディⅠ）［１年全員　１単位、学校設定科目］

・「世界史Ａ」「現代社会」を学校設定科目とし再編成し、１単位で行う。
・「ＩＲ」と「総合的な探究の時間」「英語」と科目横断・融合型授業を展開。
・課題研究の基礎となる学習。

ウ　ＧＳⅡ（グローバルスタディⅡ）［２年全員　２単位、学校設定科目］

・「社会と情報」２単位を学校設定科目とし再編成し実施。
・生徒個々の課題研究について、多角的に検討させ探究を深めた。
・共通の課題を持つ生徒同士がグループ学習を進めた。

・台湾オンライン交流やＧＳ報告会を通して研究発表の実践的な取組を行った。

エ ＧＳⅢ（グローバルスタディⅢ）［３年希望者　１単位、学校設定科目］

・選択者は増加単位分として、放課後や休日などを利用して調査研究を行う。
・実情に即した政策提言でその影響評価まで含めて研究を行った。
・「北陸新幹線サミット」（オンライン）を主催。６月 13 日開催　参加 16 校　参加生徒 51 名。他、各校教員、講師、管理機関職員等参加
・他のＷＷＬ指定校が主催する発表会で取組の成果普及と共有を図った。

（エ）　カリキュラムに位置付けられた短期・長期留学や海外研修

本年度の海外研修はすべてオンラインでの実施に変更となったが、以下のような工夫をし代替プログラムを実施した。

ア オンライン台湾交流プログラム（２学年　８クラス　合計 319 人）

・台湾研修で行う現地の高級中学訪問に代え、両校をオンラインでつないで意見交換、プレゼンテーション実施。地元の特徴や学校生活の紹介、「オンライン調理実習」の実施等生徒のアイディアも取り入れて実施した。
・交流校４校　国立科学工業園区実験高級中学、国立新竹女子高級中学、国立苗栗高級中学、私立延平高級中学

イ　ボストンスタディーオンラインプログラム

・世界最先端の知性に触れ、今後必要になる学びを理解する。
・2020 年３月の渡航予定者 16 名が参加。探究成果を米ハーバード大の教授等に英語でプレゼン、質疑応答、指導助言を受けた。
・2020 年 12 月～３月に同プログラムを実施中。本校７名、連携校３名、計 10 名参加（12 月～基礎研修、３月 17～20 日に現地とのセッション）

ウ　ヒューマン・アクト・イン・マニラ　オンラインプログラム

・ＮＰＯアイキャンが進める支援活動を学ぶための体験的なプログラム。
・３月上旬に海外交流アドバイザーの事前学習、３月 17～20 日に現地とのセッション

エ　カンボジア井戸プロジェクト

・現地に渡航して井戸を掘り、寄付まで行う体験プログラムで、きっかけは生徒の自主活動。
・生徒が中心となり、毎年３月組織解散、４月に新組織発足。
・2019 年度に、井戸２基分の資金を集めた。昨年度から渡航はできていないが、活動の広報、書き損じ葉書収集等の資金集めは継続している。

オ　ネパール　オンライン　スタディツアー

・共同実施校で予定していたカナダ語学研修、マレーシア・シンガポール研修の代替として生徒の課題解決能力の向上を目指し、オンラインを活用した研修を実施した。
・10 月から 12 月まで５回で構成
・ＡＬネットワークからの参加者も含め 26 名の参加があった。

8　目標の進捗状況，成果

目標の進捗状況については、コロナ禍で特に海外研修は計画した通りのプログラムの実施はできなかったが、オンラインを活用するなどして、代替のプログラムを実施し、本年度の目標はほぼ達成された。他は予定通りの進捗の状況である。

拠点校では、学習の成果を以下のような機会に発表し、共有を図った。また、連携校においても全国高校生フォーラム 2020 で審査委員長賞を受賞するなど熱心な取組の成果が表れている。

ア　新入生WWLガイダンス　4月6日

・上級生が、自らの探究成果を１年生にプレゼンテーション。１年生は、今後の学習イメージを持つ。

イ　アカデミックプレゼンテーション［各学年希望者及び関係者］校内開催

・第１回　7月 11 日　留学体験、在住外国人との交流等

・第２回　10 月 10 日　日本語学習支援ボランティア、小学生への手洗い啓発、ファストファッションフリーマーケットの開催等

ウ　11 月 7 日信州ベンチャーコンテスト 2020

（信州ベンチャーコンテスト実行委員会主催）

・「“推し”の芸術を着よう！」本校３年生　高校生部門準グランプリ

エ　12 月 12、13 日　マイプロジェクトアワード長野県 summit

（高校生学びのフォーラム長野）

・ＮＰＯ法人「カタリバ」が支援、例年実施。昨年度から長野県教育委員会主催

・拠点校は３名の生徒が参加、内１名が本選に進出、長野県教育委員会賞を受賞。他にもＡＬネットワーク参加校から 16 プロジェクトの参加があった。

オ　12 月 19 日　和歌山県データ利活用コンペティション

・和歌山県が総務省統計局とともに行い、ねらいはデータに基づく統計的思考の育成。

・高校生部門 89 点中、最終審査を経て全国４位入賞。チーム名「マコモ大好き girls」

カ　12 月 20 日　WWL全国高校生フォーラム

・文部科学省主催、全国のWWL等指定校在籍生徒が集まり、発表及び議論。

・拠点校及び共同実施校から一組ずつ参加。

・拠点校発表タイトル「あらゆる上田市在住外国籍市民を包括的に支援する多言語アプリ」

・共同実施校発表タイトル「信州つばさプロジェクト」について

・共同実施校の発表が審査委員長賞を受賞した

キ　12 月 25 日　愛媛大学附属高等学校発表会「ＳＤＧs×高校ユースミーティング」

・８校から 20 チーム参加

・発表タイトル「災害後のまちづくり～ＬＥＥＤと災害復興の視点から長野の災害、復興を考える～」

ク　２月 13 日　課題研究合同発表会（STUDENT WORKSHOP）［２年生 15 名参加］
・青山学院大学地球社会共生学部ＧＳＣ学生連合主催、佼成学園女子中学高等学校、同連合、本校の３校で実施

ケ　３月 20 日　金沢大学、附属高校主催高校生国際会議
・拠点校から２名が参加

コ　３月 21 日　ＷＷＬ・ＳＧＨ×探究甲子園（関西学院大学等主催）
・拠点校から２年生が参加

サ　３月 14 日、21 日　ベネッセＳＴＥＡＭフェスタ
・共同実施校から１組が参加

9　次年度以降の課題及び改善点

・大学の先取り履修については、長野県立大学を中心に協議を始めている。履修の方法、内容、単位習得について等引き続き検討していく。
・令和４年度の新教育課程編成に向けたカリキュラムの構築については、まだ研究が必要であり、拠点校を中心にＡＬネットワークの情報共有をしながら構築していく。
・令和４年６月に実施予定の高校生国際会議に向けて、生徒実行委員会を組織し、内容や方法、参加者等について具体的な計画を立てていく。
・ＡＬネットワークの各学校の取組を共有し、協働していくことに更なる課題があることから、更に連携を密にして、生徒同士、教員同士が繋がれる機会を作っていく。

【担当者】

担当課	学びの改革支援課	ＴＥＬ	026-235-7435
氏　名	宮下　美和	ＦＡＸ	026-235-7495
職　名	主任指導主事	E-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

管理機関の取組　Ⅰ　ＡＬネットワークの構築

ＡＬネットワークの構築

1　高等学校間のネットワーク

カリキュラム開発拠点校　上田高等学校
共同実施校　松本県ケ丘高等学校
連携校　長野高等学校
長野西高等学校
篠ノ井高等学校
屋代高等学校
上田染谷丘高等学校
野沢北高等学校
伊那北高等学校
飯田高等学校
松本深志高等学校

拠点校、共同実施校が中心となってカリキュラム開発や探究的な学びを進め、その成果を連携校に波及していくことを目的に、ＡＬネットワークの一環として高等学校間のネットワークを整備した。連携校は、理数科や国際教養科を持つ学校、県の「未来の学校」指定校で特色ある学びに取り組む学校、地域との協働による高等学校教育改革推進事業の指定校など様々な特色をもつ。それぞれの特色ある学びをＡＬネットワークの他校の生徒も体験できるよう連携を深めていく

これら11校の連携を深めるため、６回の連絡会実施。生徒の発表会や講演会などの折には、他校にも連絡し、オンライン・オフラインで希望者が参加できる態勢を整えた。

2　運営指導委員会

運営指導委員として下記６名を選定・依頼し、３回の運営指導委員会を実施した。

氏　名	所　属	専門分野
荒井 英治郎	信州大学教職支援センター	教育行政、長野県の教育
小村 俊平	ベネッセ教育総合研究所	OECD など国内外の教育問題
讃井 康智	ライフイズテック株式会社	ICT 教育
坪谷 ニュウエル 郁子	東京インターナショナルスクール	国際教育、IB
森 茜	公益財団法人国連大学協力会	国際問題
南 希成	長野県立こども病院感染症科	医療、健康

(1) 第１回

期日　令和２年８月７日（金）14時から17時まで
実施方法　オンラインにて実施
参加者 運営指導委員
カリキュラム開発拠点校　校長、教頭、担当者
共同実施校　校長、教頭、担当者

カリキュラムアドバイザー
管理機関

内容　事業の説明
生徒発表
取組の留意点について意見交換

(2) 第２回

期日　令和２年 11 月 20 日（金）14 時から 16 時 30 分まで

実施方法　オンラインと上田高等学校会場での集合会議のハイブリッドにて実施

参加者　運営指導委員
カリキュラム開発拠点校　校長、教頭、担当者
共同実施校　校長、教頭、担当者
連携校　管理職１名、担当者
カリキュラムアドバイザー
管理機関

内容　取組報告
生徒発表
授業参観
「育てる生徒像」を育成できる取組となっているか意見交換

(3) 第３回

期日　令和３年２月６日（土）14 時から 16 時 30 分まで

実施方法　オンライン

参加者　運営指導委員
カリキュラム開発拠点校　校長、教頭、担当者
共同実施校　校長、教頭、担当者
連携校　管理職または担当者
カリキュラムアドバイザー
管理機関

内容　１年間の取組報告
生徒発表
１年間の取組と今後の取組について助言、意見交換

３　情報共有

ＷＷＬ通信の発行（年間６回発行）

Web サイトの整備

管理機関の取組　Ⅰ　ALネットワークの構築

外部機関との連携

Ⅰ　ＳＤGs学びサポーター

(1) 趣旨

ＳＤＧｓの課題に取り組む高校生のサポーターとして新しい学びの機会を提供する。

(2) 依頼内容

ア　フィールドワークの受け入れ

イ　個人やグループの課題研究に対する指導、アドバイス

ウ　高校生への出張講座

エ　共同研究　　・

(3) 協力の依頼先

産業政策課（長野県ＳＤＧｓ推進企業登録制度)、環境政策課（信州環境カレッジ)、
長野ＮＰＯセンター、長野ＳＤＧｓプロジェクト　他

(4) 活用の方法

(3)の依頼先を通じて周知の上、電子申請で登録を受け付ける。
登録された企業・団体の一覧表を学校に送付し、各学校で活用する。

(5) 登録者数

２月末時点で企業、ＮＰＯ、行政機関など55団体

２　大学の先取り履修に向けた取組

(1) 趣旨

高校生に高度な学びを提供するため、連携の方法を協議
将来的な先取り履修の可能性を協議

(2) 連携大学

長野県立大学、信州大学、公立諏訪東京理科大学、長野大学、長野県看護大学、佐久大学
清泉女学院大学、長野保健医療大学、松本歯科大学、松本大学

(3) 検討依頼事項

高校との連携
課題研究のサポート
高校生向け講座の設定
令和４年度からのＡＰの実施

(4) 課題と今後の見通し

・先取り履修については、授業時間、地理的制約、提供方法などクリアすべき課題が多い。オンデマンドの配信も含めて引き続き方策を協議していく。
・大学教員による講座の提供など可能なところから実施してＡＬネットワークの生徒に高度な学びを提供していく。

管理機関の取組　Ⅱ カリキュラム開発

小布施ウィンタースクール

期　日：令和２年 12 月 26 日～12 月 29 日

協　力：小布施町教育委員会、一般社団法人 HLAB

目　的：海外大学生との共同生活による学びをとおして、語学力はもとより多様な価値観やグローバルな視点、STEAM の視点からの見方・考え方に係る資質・能力を育成する。

内　容：①STEAM 教育を受けてきた海外大学生らによる様々な内容のセミナー
②時代をリードする創造性を発揮している社会人講師らによるフォーラム
③「アート思考」のワークショップ

参加者：13 名

＊これまでは夏休み中に実施してきたが、本年はオンラインで冬休みの実施となった。

管理機関の取組　Ⅲ　より深い学び

高校生学びのフォーラム

１　目的

「探究的な学び」の成果を、学校の枠を超えて発表し、学び合う場を設けることで、全国大会へとつながる発表大会(「高校生学びのフォーラム長野」)を実施することで、長野県における「探究的な学び」を「実践する」段階から、探究学習を繰り返す中で、生徒が主体的に課題を発見し、自らの力で解決に向けて試行錯誤する学習へとステップアップさせることを目指す。

２　実施内容

特定非営利活動法人カタリバと業務委託契約を締結し、「マイプロジェクト」の取組と連動させたプログラムを教員・生徒へ提供している。

7月	**伴走者フォーラム①**	39 校 120 人以上の教員が参加。 主体性を育む探究に向けた指導法について学んだ
	スタートアッププログラム	２日間で 18 校 32 プロジェクト、50 名の生徒が参加。 サポートスタッフのファシリテートのもと、自分の興味関心を掘り下げ、アクションへつなげるプログラムを実施
10月	**中間報告会**	14 校 29 プロジェクト約 50 名の生徒がこれまでの取組やこれから取り組みたいことを、参加者との対話から振り返り、整理し、12 月の本大会へつなげるプログラムを実施。
11月	**伴走者フォーラム②**	18 校 25 名の教員が参加。マイプロ卒業生や地域の方のお話をお聞きし、各校の状況を共有する機会とした。
12月	**マイプロ長野県 Summit**	21 校 39 プロジェクトが 1 日目のブラッシュアップを経て 2 日目の予選・決勝に出場。熱のこもったプレゼンを行った。

3　評価

参加した生徒、ファシリテータ、サポーター（審査員)、見学者のすべてにとって、オンラインだからこそ生まれる「対話」を通して、「学びの深まり」を感じる２日間となった。また、学校の枠を超えたプロジェクト同士の協働の場面も見られた。

管理機関の取組　Ⅳ　国際的な学び

海外進学・留学講座

1　目的

グローバル化が加速する社会において求められる豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を涵養するため、多様な価値観に触れる機会を設定し、高校生に国際的な視野を持たせ、自らが主体的に行動できるようなグローバル人材の基盤を形成する。

2　主催

長野県教育委員会

3　事業内容

(1)　日本人の海外大学生による海外進学・留学に関する講話・ワークショップ

(2)　海外進学等に関する個別相談

4　実施期日及び会場（第１回、第２回はオンライン併用）

第１回　　令和２年７月 26 日（日）10:00～12:30　会場：松本県ケ丘高等学校

第２回　　令和２年７月 26 日（日）14:00～16:30　会場：上田高等学校

第３回　　令和３年２月 14 日（日）14:00～16:30　オンライン

5　講師

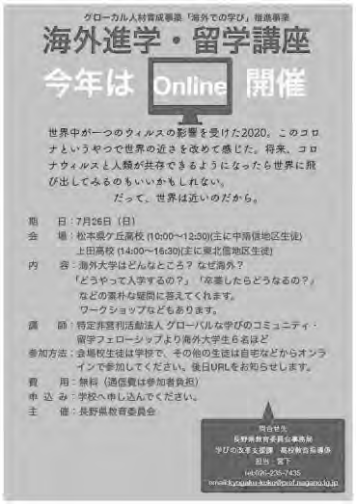
NPO 法人グローバルな学びのコミュニティ・留学フェローシップ所属の海外大学生

6　参加者数

第１回　生徒 59 名　教員７名

第２回　生徒 27 名　教員１名

第３回　生徒 19 名



7　講座の流れ

①　海外大学プレゼンテーション

②　留フェロらじお(パネルディスカッション方式の企画)

③　ワークショップ・座談会（午前と午後で別内容）

③　個人相談

8　参加者のアンケートより(10 点中の平均)

イベントを友人に勧めたいと思うか・・・・・8.6

高校卒業後の進路について深く考える機会となったか？・・・・・9.0

得られた情報量の満足度・・・・・・8.3

プレゼンテーションの満足度・・・・9.0

留フェロらじおの満足度・・・・・・8.6

（自由記述）

・普段は聞けない海外の大学や環境などの話が聞けて参考になりました！

・コロナの影響で行くのは難しいかもしれないけどなにか方法かあると思った。

・自分の進路の中で海外進学や留学も一つの選択肢になった。

9　総括

例年は、会場校にて対面で行っていたものを本年はオンライン併用としたところ、参加者が倍増した。ＡＬネットワーク７校からも 47 名の参加があった。地理的に広い本県であるため、違う地域の学校に出向くのは時間や金銭面での負担が大きい。今回の対面とオンラインの併用方式は、自宅や学校からでも参加ができ、オンラインの利点が生かされたものと考える。講師と直接会えないことで、親近感をもてないことを心配したが、顔をみて話しやすかったという感想が多かった。

コロナ禍で実際に海外にでることが難しい中ではあるが、留学や海外大学進学を含めた主体的な進路選択を考える機会となった。

管理機関の取組　Ⅴ　高度な学び

WWＬ特別講座の実施

1　運営指導委員による生徒向け講座

(1) 目的

ア　長野県WWＬコンソーシアムＡＬネットワーク参加校生徒に、運営指導委員の高い知見に触れる機会を提供し、自らの学びを深める機会とする。

イ　ＡＬネットワーク内の他校生徒との交流を通じて互いに刺激をうけ、主体的に学ぶ態度の涵養を図る。

(2) 演題及び講師　「質の高い学びとは」

ベネッセ総合教育研究所　主任研究員　小村俊平氏　（運営指導委員）

テーマ：デジタル化、少子高齢化等により、世界各国で、日本で教育が大きく変わろうとしている今。私たちの教育がよりよいものになるには、学びが豊かになるためにはどうすればよいか?

(3) 期　日　11 月 27 日（金）16 時～17 時 30 分

(4) 方　法　Zoom を利用。

(5) 参加者　ＡＬネットワーク３校より 30 名

(6) 内　容

・日本の教育について

・OECD の取組について

・国際社会で議論されている次世代の学びとは

(7) 参加生徒のチャットへの書込み(質問、コメント、つぶやき)

・日本にも教育格差があるのでしょうか。

・日本の子供の不登校という選択肢について、取り上げられることが増えていると感じます。
・日本人は間違えることにおびえているように感じます。だから３Ｓといわれるくらい発言するのを控えてしまうのかなと思いました。
・日本人の幸福度が低いのは学習に対する意欲が低く、やらされている感覚があるからではないでしょうか？

(8) 参加生徒の感想と評価

＜感想＞

・初めから否定するのは良くないので、自分と違った意見でもそのまま受け入れようと思った。間違った意見だったとしても理由を聞いたりしたい。
・与えられたものに疑いをもってうけとめられるようにしたい。
・もっと英語に触れ、海外に行っても自信を持って話せるようになりたいと思った
・学習に対する意欲を下げないように友達と協力したりしたい。

＜評価＞

大変満足　83.3%　満足　16.7%

(9) 総括

教育系の探究学習を行なっている生徒、教育系志望生徒が参加した。世界の教育の最新の動向について知ることができ、好評だった。講座中の講師への質問や自分のコメントなどのチャットへの書き込みが 40 件以上あり、生徒たちの主体的な参加が見られた。テーマを厳選して高度な学びに触れられる講座を今後も継続したい。

２　教員向け講座「探究と評価」

(1) 目的

探究的な学びの評価について理解を深め、指導のスキルアップを図る。

(2) 講師及び演題

講師：信州大学教職支援センター　准教授　荒井英治郎氏

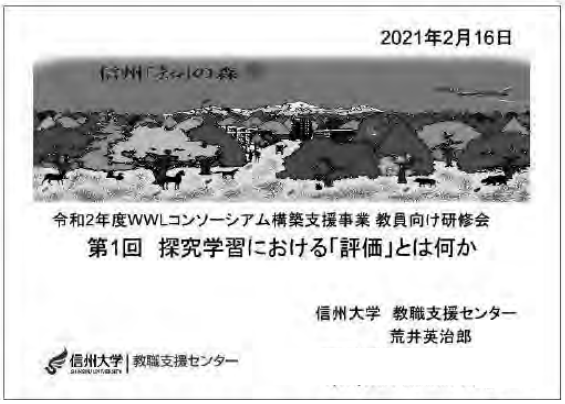
演題：第１回　「探究学習における『評価』とは何かー評価は可能・必要か」
　　第２回　「『パフォーマンス課題』とは何かーどのように評価するのか」
　　第３回　「『ルーブリック』とは何かー何を評価するのか」

(3) 期日

第１回　令和３年２月 16 日（火）16:00～17:00
第２回　令和３年２月 19 日（金）16:00～17:00
第３回　令和３年２月 26 日（金）16:00～17:00

(4) 方法　Zoom を利用。

(5) 参加者　ＡＬネットワーク校より各回 20 名。
　　教員研修として視聴した学校もあった。



Ⅰ　ＡＬネットワークの構築

カリキュラム開発拠点校の取組

上田高等学校

Ⅰ　ＷＷＬ研究開発の概要　　ＷＷＬ事業の教職員指導体制

ＷＷＬ推進係と各学年全職員と連携して、ＷＷＬ関連の教育活動を推進
学習指導係・進路指導係・ＷＷＬ推進係が協力し、全学年職員と連携して実行

長野県教育委員会　←指導←　長野県ＷＷＬ運営指導委員会

↓ 指導
↓

長野県上田高等学校
学校長　廣田昌彦

↓ 指導
↓

海外交流アドバイザー	直井　恵	岸本昌子
	恵崎良太郎	
進路指導係	櫻井　敦	
学習指導係	松本俊一	
ＷＷＬ事務職員	堀内加那子	
ＷＷＬ会計　事務長	小山　隆	

ＷＷＬ推進係会（毎週月曜日）　※ＷＷＬ業務の企画運営反省

教頭　市川　格　　○は各担当責任者

ＷＷＬ推進係（８名）　※校務分掌上の係に位置づけられ、各教科を母体として選出

地歴　○	白鳥敏秀	ＧＳＩ○　１学年○
	長野県内フィールドワーク○　北陸新幹線サミット　他校との連携	
	ＮＰＯアイキャン連携　ＪＩＣＥ連携○　ＷＷＬ通信	
	研究開発報告書○　ＲＥＳＡＳ　「信州学」推進	
	★課題研究人権ジェンダー・ビジネス都市カテゴリー指導主任　長野県立大学、上智大学連携	
情報	小林まゆ子	ＧＳⅡＪ○　２学年○
数学	ＩＣＴ○　首都圏フィールドワーク○　ＫＤＤＩ連携○　授業のＷＷＬ化	
	ヒューマンアクトインマニラ○　ＪＩＣＡ連携　アクティブラーニング　授業評価	
	★課題研究子どもスポーツ、国際協力カテゴリー指導主任　慶応大学連携	
英語	髙野芙美	ＧＳⅡＥ○　２学年
	海外留学・海外進学　外部英語検定　台湾研修旅行	
	ボストンスタディプログラム○　東京外国語大学連携　授業評価	
	★課題研究保健・医療カテゴリー指導主任　佐久総合病院、佐久大学連携	
国語	松田大輝	ＧＳⅢ○　３学年
	北陸新幹線サミット○　ＧＳ報告会○　アカデミックプレゼンテーション　学力向上	
	★課題研究歴史アートカテゴリー指導主任　早稲田大学連携	
理科	横川　憲	長野県内フィールドワーク　１学年
	ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃ　松尾ゼミナール○　ボストンスタディプログラム	
	★課題研究生命情報・テクノロジーカテゴリー指導主任　信州大学連携	
英語	北澤有里子	ＧＳⅡＥ　２学年
	国際交流担当　台湾研修旅行○　英語コミュニケーション能力向上	
	★課題研究食と防災カテゴリー指導主任　東京外国語大学連携	
英語	菊原健吾	海外留学・海外進学　１学年
	海外高校交流事業　長野ビジネス外語カレッジ連携	
	★課題研究国際協力カテゴリー指導主任　ＷＷＬ生徒作品集編集	
ＧＩ	アンドリュー・パーキンソン　ＧＳⅡＥ○　２学年	
	英語website　台湾事前学習○　英語コミュニーション能力向上	
	★課題研究国際協力カテゴリー指導主任	

※ＧＩ：グローバル講師

↓　↑　ＷＷＬ事業を連携して推進

２学年会　ＷＷＬ推進係　小林まゆ子					課題研究指導カテゴリー
国語 ○	百瀬　慎一	ＧＳⅡ		２年	ビジネス都市カテゴリー
数学	小坂　祐貴	ＧＳⅡ	**キャリア教育担当**	２年	テクノロジーカテゴリー
英語	藤沢　衛	ＧＳⅡ	ＷＷＬ担当、台湾高校交流○	２年	国際協力カテゴリー
英語	坂下　朋子	ＧＳⅡ	台湾高校交流	２年	国際理解カテゴリー
数学	横山　祐介	ＧＳⅡ	台湾研修旅行○	２年	テクノロジーカテゴリー
体育	中島　拓磨	ＧＳⅡ		２年	子どもスポーツカテゴリー
地公	桐山　彩織	ＧＳⅡ	進路指導担当	２年	保健医療カテゴリー
理科	気賀沢　洋司	ＧＳⅡ	進路指導担当	２年	環境生命カテゴリー

１学年会　ＷＷＬ推進係　白鳥敏秀					課題研究指導カテゴリー
英語 ○	竹内　光礼	ＧＳＩ	台湾高校交流○	１年	ビジネス都市カテゴリー
芸術	髙柳　剛士	ＧＳＩ		１年	歴史アートカテゴリー
理科	小林　和宏	ＧＳＩ		１年	環境生命カテゴリー
数学	横澤　克彦	ＧＳＩ	**ＷＷＬ担当、台湾研修旅行○**	１年	テクノロジーカテゴリー
国語	中山　希久子	ＧＳＩ	キャリア教育担当	１年	子どもスポーツカテゴリー
地公	吉川　泰	ＧＳＩ		１年	ビジネス都市カテゴリー
国語	宮原　永津子	ＧＳＩ	台湾高校交流	１年	人権ジェンダーカテゴリー
英語	西村　晃洋	ＧＳＩ	進路指導担当、台湾高校交流	１年	国際協力カテゴリー

II　カリキュラム開発

Ⅱ　課題研究

課題研究の概要

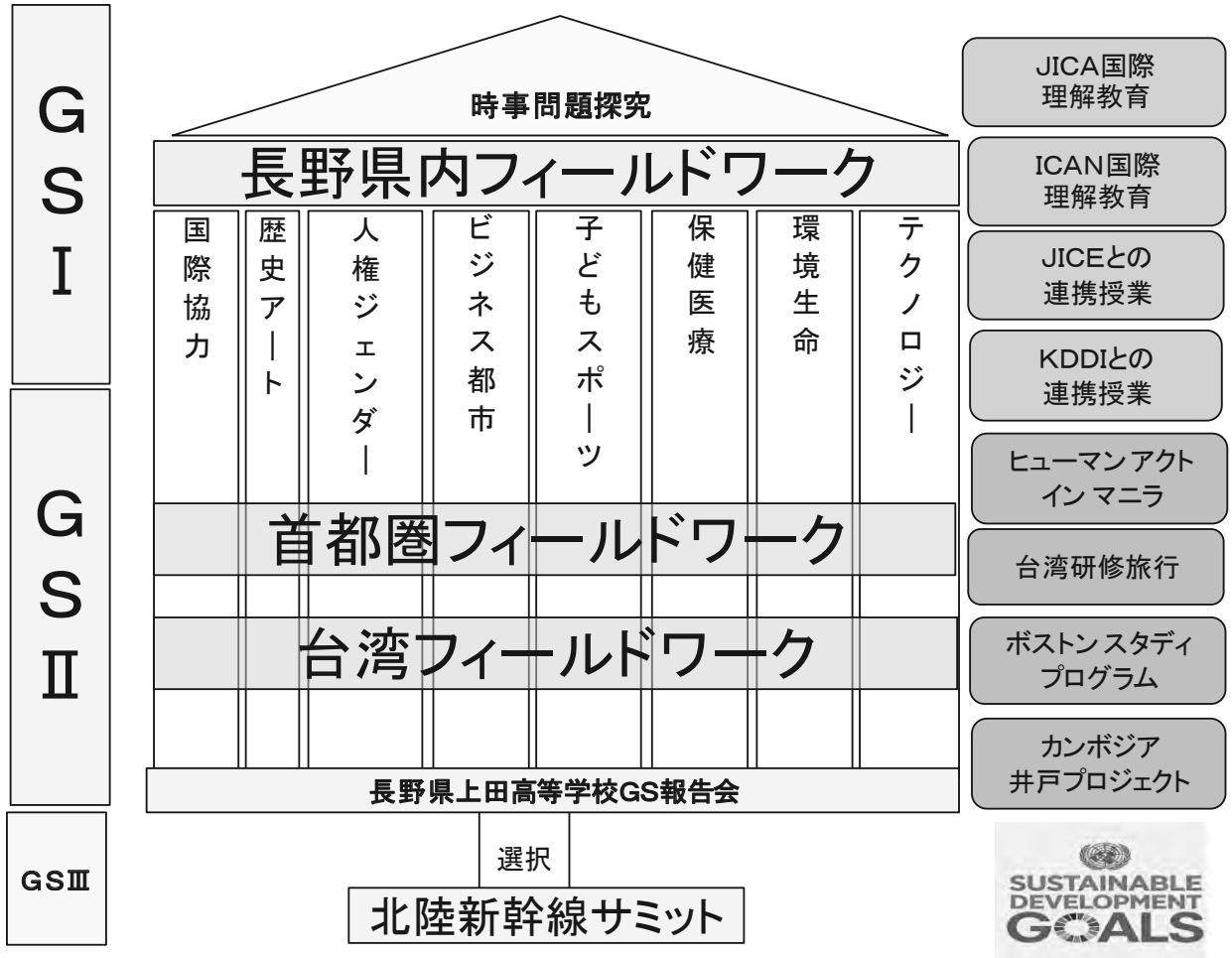
WWLテーマ　「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってＳＤＧｓを探究する

	1　　年　　生	2　　年　　生	3　　年　　生
Ⅰ課題研究	グローバルスタディⅠ 時事問題研究 フィールドワーク事前事後学習 課題研究開始 （ＧＳⅠ）　全員 週1回	グローバルスタディⅡ ＧＳＪ　課題研究日本語 ＧＳＥ　課題研究英語 （ＧＳⅡ）　全員 週2回	グローバルスタディⅢ 選択者18名 （ＧＳⅢ）　選択
	県内フィールドワーク 16コース　　9月 17日	首都圏・台湾フィールドワーク （今年度はとりやめ）	

1　ねらい

教科教育や進路の目標と連動した課題研究を重視し、グローバルな視点から地域をとらえ、同時に地域からグローバル課題について考察できる科目横断型カリキュラムを開発する。課題研究においてはＳＤＧｓとの関連を重視し、自らの研究が社会問題の解決に少しでも貢献することを目指せられるよう、全教員の協力によって指導に努める。また、１、２年次の課題研究を、フィールドワークと連動させることによってその深化を図る。

課題研究とフィールドワークカリキュラムの関連図



II　カリキュラム開発

２　概要

グローバルスタディⅠ（１年・１単位）　（視聴覚教室で実施､WWＬ推進係とＨＲＴによるＴＴ）

１　ねらい

グローバル課題を題材としてレポートをまとめる力とＩＣＴスキルを身につけ、県内フィールドワークにより、自らのキャリアプランを通して協働力を構築する。自らの設定した課題に沿って、課題研究を個人研究としてはじめ、探究力を養う。

２　年間カリキュラム（コロナ禍により実施できなかったものを含む）

４月 ５月	「時事問題からグローバル課題を探究する」 ワードレポート	4月　WWLアンケート１ 国際理解講演会
６月 ７月	「時事問題からグローバル課題を探究する」 県内フィールドワーク事前学習　　パワーポイント	生徒評価シート
８月	課題研究入門講座	講師：OB・OG諸氏
９月	**県内フィールドワーク**	県内各分野の大学・研究機関・企業訪問 全16コース
９月	県内フィールドワーク事後学習　　パワーポイント	９月　WWLアンケート２
10月 11月	ICAN・JICA国際理解教育　　講演会　座談会 「課題研究」（個人）課題設定　　日本語	講師：直井恵氏・竹内岳氏 ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃテスト（12月）
2月	**ＧＳ報告会** ＪＩＣＥとの連携授業	プレゼンテーション 2年ポスターセッションに参加
	学年成績	2月　WWLアンケート３

グローバルスタディⅡ（２年・２単位）

グローバルスタディⅡ日本語（週１時間）　（視聴覚教室で実施､WWＬ推進係担当）

１　ねらい

グローバルスタディⅠで課題設定したテーマへの探究を深め、課題解決型提言ができる２１世紀型スキルを身につける。首都圏フィールドワークにより、課題を発信して専門家より指導を受ける。さらに、台湾フィールドワークを経て、全員ポスターセッションで発信する。

２　年間カリキュラム（コロナ禍により実施できなかったものを含む）

４月 ７月	「課題研究」（個人）　　ワード 中学３年生対象課題研究ポスターセッション	4月　WWLアンケート１
８月	首都圏フィールドワーク事前学習	
９月	**首都圏フィールドワーク** ＳＧＵ大学等課題研究プレゼンテーション	首都圏各分野の大学・研究所・企業訪問 9月　WWLアンケート２
９月	首都圏フィールドワーク事後学習　　パワーポイント 前期成績	
10月	台湾研修旅行事前学習（映画「湾生回家」鑑賞）	
後期内容	台湾フィールドワーク事前学習	
11月	**台湾研修旅行**	台湾フィールドワーク
12月	台湾フィールドワーク事後学習	
1月	「課題研究」（個人） ポスターセッション　　全員 カテゴリー別に発表 プレゼンテーション　　選抜	
2月	**ＧＳ報告会**	プレゼンテーション ポスターセッション
	学年成績	2月　WWLアンケート３

※今年度は６月、９月、12 月、３月にＫＤＤＩとの連携授業（後述）を実施

II　カリキュラム開発

グローバルスタディⅡ英語（週１時間）　（324 番教室で実施、G講師と外国語科教員によるＴＴ）

１　ねらい

グローバルスタディＩで課題設定した内容を英語で探究し、課題解決型提言ができる英語コミュニケーションスキルを身につける。台湾研修旅行の場で課題を発信し、現地高校生とカテゴリー別に英語ディスカッションする。帰国後その成果についてディベートを実施する。

２　年間カリキュラム（コロナ禍により実施できなかったものを含む）

４月	プレゼンスキルアッププロジェクト	
５月	①　**自己紹介プレゼンテーション**	Tシャツ自己紹介(Show & Tell スピーチ)
	②　”3 Reasons Why Ueda SHS is the best school in Japan”	グループプレゼンテーション（PPT使用）
６月	台湾プロジェクト１：台湾リサーチ・論理・批判的思考	
	①　カテゴリー別台湾リサーチ	
８月	②　論理構成によるグループプレゼン	グループプレゼンテーション（PPT使用）
	Team Informatice Speech-Compare & Contrast	
９月	**前期成績**	
	台湾プロジェクト２：台湾高校交流プロジェクト	
	①　交流グループ決め	
10月	②　交流先との調整会議・交流スケジュールの作成	
	台湾高校交流発表準備	
11月	プレゼンテーション&ディスカッション準備	台湾FWプレゼンテーション（英語）
	台湾研修旅行	台湾高校交流・ポスタープレゼン（英語・全員）
12月	台湾高校交流事後学習（argumentative writing）	
1月	WWL報告会課題研究プロジェクト	
	課題研究ポスターセッション英語Abstract作成・スピーチ練習	
2月	ＧＳ報告会	プレゼンテーション（英語）
		ポスターセッション（英語・日本語）全員
	１年間の振返り（Reflection& Speaking-Skill Check）	2月 Speaking Skill Check
	学年成績	

ＧＳ入門　時事問題よりグローバル課題を探究する（ＧＳＩ年度当初の学習活動）

１　ねらい

グローバルスタディ入門のため、時事問題をコンテンツとして、ＰＢＬ（課題解決型学習）を行う。思考を論理的にまとめる能力、さらにはＩＣＴ活用能力と論理構成力・グループワークとを通じた基礎的プレゼンテーション能力を身につける。

２　概要

生徒の中学３年間のニュースから賛否の分かれる問題を選び、WWLカテゴリーに沿って分類した８枚の写真を提示し、生徒はそれが何を意味するかをグループで考える。そのうえで自らの選択したテーマ毎にグループを形成し、課題の解決のためのディベート→提言という活動に取り組む。

	提出レポートのテーマ名
1	レジ袋全廃に賛成/反対
2	「表現の不自由」展への公金拠出に賛成/反対
3	消費税の 10%への引き上げに賛成/反対
4	外国人労働者の受入れ拡大に賛成/反対
5	小中学校へのスマホ持込に賛成/反対
6	新型出生前診断の活用に賛成/反対
7	大学での軍事関連研究に賛成/反対
8	公的機関の顔認証カメラの導入に賛成/反対

３　評価と考察

WWL拠点校指定を受けて、従来のありかたを、グループワーク、ディベートを取り入れて、より課題解決学習色を濃くしようとしたが、折しもコロナ禍に見舞われて、ＧＳ学習が本格的に始まったのは６月だった。対面学習も難しい状況だったゆえに、やむなく図書館やインターネット情報を利用して賛否双方の論理を調べ、自らが解決策を提示するレポートを全員に課した。生徒たちは容易に解決策が見いだせない課題レポートに、興味深げに取り組んだ。その一方で、メディアリテラシー能力を涵養する機会は例年より増えた。

Ⅱ　課題研究　グローバルスタディⅠ県内フィールドワーク　　対象１学年生徒　326 名

１　ねらい

WWL 構想に基づく課題研究の一環として、県内の大学・企業・研究機関・専門施設で実地研修をし、問題解決学習を通じて探究心と発信力を養う。

２　概要

（1）日　時　9 月 17 日(木)

（2）場　所　県内近隣の大学・企業・研究機関
・専門施設

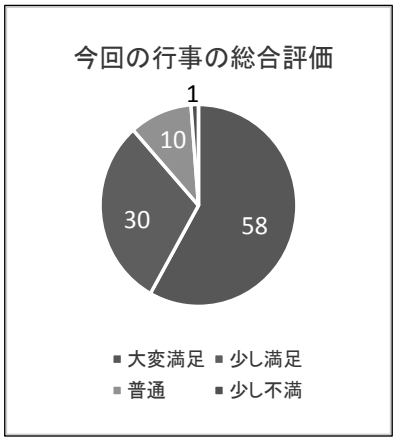
↑シナノケンシにて（５組）

（3）内　容

クラスを２つに分け、計 16 コースを設定し、生徒はいずれかを選択する。総合的な探究の時間の枠組み内で実施した。ＧＳＩ授業時間内にグループ単位で課題解決の取組み、実施前日にはその成果をグループごとに発表、クラス内で共有した。終了後には、フィールドワーク先でのアドバイスを受けて、発表作品内容を深化させ、成果をクラス内で共有した。さらに各個人がレポートを作成した。

（4）コース別内容：次ページ以降

３　生徒アンケート結果



・自分たちの調べた「長野県の SDGs」や他のグループの発表から、SDGs について知り、考えることができた。(1 組)
・自分たちで考え発表するのは初めての経験だったが、役割分担をしっかりしてまとまった発表が出来た。(2 組)
・気候変動や人口減少問題について、高校生の呼びかけがとても大事だと改めて思った。(3 組)
・講師の方にアピールできる斬新な提案をすることが出来た。(4 組)
・長野県の過疎といった悪い面ではなく、意外と強い経済力があると知って物の見方が広がった。(5 組)
・自分たちの足で取材して、要点をまとめられたことが良かった。(6 組)
・今後環境問題に取り組まない企業は生き残れないことが分かった。(7 組)
・コロナ禍で制約された中で、実際に外に出て学習することが出来て良かった。(8 組)

４評価と考察

昨年度までは 8 つのカテゴリーに基づいてコース設定を行い、バスで移動して県内 2 カ所を訪問する形だったが、訪問先での活動が講義中心になりがちで、生徒の反応も受動的だった。そこで今年度は、改善策として、まずは訪問先を 1 カ所とし、また、長野県が SDGs に取り組む企業を募集、さらにはそのなかでも生徒の教育活動への協力を表明した企業が幾つもあったことから、こうした企業との連携をも模索した。

事前学習においては従来までの反省に基づいて PBL（問題解決学習）の手法を取り入れ、訪問先から事前に課題を頂いて、生徒が事前にそれに取り組み、中間発表会、さらには前日の発表予行を経て、現地で発表する方式をとった。コロナ禍で学校実施となったコースもあったが、生徒の発信力は着実に向上し、訪問先でのアドバイスも受け、探究活動は従来よりも深化した。

II　カリキュラム開発

各コースの講師の方々と、主な探究課題

1組	県庁 JICA 国際協力推進員　竹内岳さん ○主な探究課題 ①SDG s についての概要②これまでに学校で取り組んでいる SDG s アクション③これから学校、クラス、生徒会等で取り組みたい SDG s ④JICA 海外協力隊について⑤長野県がおこなっている SDG s 達成にむけての取り組み	佐久大学　廣橋雅子准教授 ○主な探究課題 ①ゴミ問題②安全な水を届ける③命のパスポート「母子手帳」の普及④フードロスと饑餓問題⑤チョコレート危機⑥性的役割と蔑視問題⑦COVID-19 による労働問題⑧教育は社会形成の基本⑨次世代クリーンエネルギーは⑩争いのない平和な星へ
2組	県立大学ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学部大室悦賀教授 ○主な探究課題 ①高齢者が住みやすい地域づくり ②外国人観光客を増やすにはどうしたらよいか ③若者の地域へのＩターンを増やすにはどうしたらよいか ④あなたの地域で障がいをもつ方や外国人と共存していくために、何が必要か	寿製薬株式会社　小出智和さん ○主な探究課題 ①実際に製薬企業やそれ以外の企業がどのような取り組みをしているかを調べ、まとめる。 ②そこから、どのような事ができるのか。を柔軟に考える。
3組	AMU（上田市多文化共生推進協会） 安藤健二さん、マーメット・ショーンさん他 ○主な探究課題 ① 海外に行き、その国の特徴や文化を知り、日本との違いを感じ取る為（その国で）どう行動したらよいか。 ② 英語が通じる外国で、小中学生に「日本語」を教えるために、どのような教材を準備したらよいか。 ③外国籍市民とよりよく共存していくためにどんな方法が考えられるか。	相乗りくんＮＰＯ 法人 上田市民エネルギー　藤川まゆみさん ○主な探究課題 （以下、生徒のパワーポイント作品から） ①気候変動を考える ②近年の異常気象の原因の考察とそれに対する対策の提案 ③私たちの街の人口減少を考える ④地方の人口減少問題～コンパクトシティについて考える～
4組	亀清旅館　タイラー・リンチさん ○主な探究課題 近頃、文化遺産に指定された①塩田平②棚田は認定が目的でその後の活用までは検討されていなかった。高校生の目線でグローバルを意識した活用を提案してほしい。	日なた堂ベーカリー　水谷淳二さん ○主な探究課題 日なた堂の取り組みは単なる地産地消とは異なり、CSA といわれる地域の文化を守り、地域の人たちの安心安全を目的としている。地域経済が回るようにするには、地元の強みを知る必要がある。それをふまえてどんな取り組みをしていったらよいか提案してほしい。

II　カリキュラム開発

5 組	八十二銀行　総務部　中村真治さん他 ○主な探究課題 ①八十二銀行で行うべき CSR 活動を提案せよ。 ②高齢者が住みやすい地域づくりにはどうしたらいいか？ ③若者の地域への定着、I ターンを増やすには？ ④あなたの地域の観光地を、全ての人が楽しむためには？	シナノケンシ株式会社　小野塚明葉さん他 ○主な探究課題 モーター産業とは。 （以下、生徒のパワーポイント作品から） ①モータとレアアース～持続可能な社会へ～ ②シナノケンシ株式会社から考えるこれからのミライ ③モーターを小さくしよう！！ ④省エネを実現するために
6 組	信濃毎日新聞社読者センター市川朝教さん ○主な探究課題 上田市の 25 年後を考える 以下の 5 グループを作り、それぞれが①客観的データによる推計に基づき、②将来に向けた解決策を提示する。 「人口」、「教育」、「商業」、「観光」、「文化」	長野県環境保全研究所 温暖化対策班　浜田崇さん他 ○主な探究課題 身近な気候変動の影響を調べ、 ・客観的なデータの把握 ・身近な例の動画を作成 を行う。
7 組	バリューブックス　鳥井希さん ○主な探究課題 普段の生活で困ること、変えたいと思うことはどんなことか。それを自分だったらどうやって解決するか考える。市・国・世界どんな範囲でもかまわない。	シスラボ・スエヒロ　末広繁和さん ○主な探究課題 地球温暖化に対する施策（世界・国・県それぞれ）について調べ、①・②どちらかに取り組む ①中小企業における二酸化炭素削減への新しい取り組み ②大企業と中小企業の二酸化炭素削減活動の違いと、その理由を明らかにする
8 組	県立大学ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ学部森本博行教授 ○主な探究課題 SDG s の 1 番目から 3 番目までの項目のうち、ひとつの項目をあげて、実際に国や企業の取組みを調べる。	マリモ電子工業株式会社 関純さん、岩崎団さん ○主な探究課題 「SDGs に役立つ工業（電気）製品を考えてみよう」 SDGs 17 の目標達成に向け、どんな工業製品（特に電気製品＝マリモが得意とする分野）の開発が考えられるか、アイデアを出し、その実現性を探る。

Ⅱ　課題研究　　ＪＩＣＡ国際理解教育「世界が１００人の村だったら」

1　ねらい

協働機関ＪＩＣＡ駒ヶ根青年海外協力隊訓練所と共同して作成した国際理解教育カリキュラムの、学年単位での行事である。さまざまな疑似体験をともなうワークショップを通じて世界の構造やその矛盾に気づくことにより、グローバル学習を通じて学ぶ課題研究のスタートラインとする。

2　概要

（1）日　　時　10月8日（木）　第5、6時限

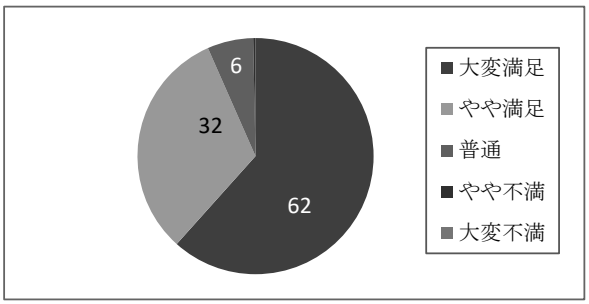
（2）場　　所　１年各ＨＲ、第1体育館

（3）講　　師　竹内岳氏（JICA国際協力推進員）
直井恵氏（WWL海外交流アドバイザー）

（4）内　　容　対象１学年生徒324名

クラス単位で年齢、性別、宗教、所得、居住地域、言語などを記した「役割カード」を各人が持ち、様々なテーマ別に集団を作り、世界や、国内の現実の疑似体験を行う。その後学年全体の場で講演を聞いてさらに学習を深める。

3　（1）生徒対象アンケート結果　　（総合評価）



（2）生徒の感想

① 本日のワークショップで気付いたこと

・一番驚いたのは、インドで女性が結婚するときにお金をいっぱい持っていかないと殺されるということで、男女差別の現実に気づかされた。
・100人という身近に感じられるような人数だと、より世界の問題がはっきりと見えた。
・贅沢しすぎている国もあれば、貧しい国もあることが分かった。読み書きができないことは、命の危険にも繋がることに気付いた。
・今まで知ることのなかった貧困地域の現状を知り、自分がいかに世界を知ろうとしていないかがわかった。
・後発発展途上国のことを今まで知ったつもりでいたけれど、実際、飢餓などの状況がひどく深刻だとわかった。

② 世界の格差を解決する方法

・世界中の人々が世界の飢餓問題、環境問題などに意識を向け、行動する。
・先進国の人々が発展途上国に持続可能な経済資源を作る方法を教える。
・自分たちを含めた先進国の人々が途上国についてもっと学び、普段の生活上でのゴミを減らすことや資源を大切に扱うことを考えるだけでなく実行していく。
・まずは平等にあるべきという価値観を互いにもち、その上で互いに尊重し合うこと。

③ 本日のワークショップの全般的感想

・改めて世界が抱える問題を実感した。これからは、そういう人々のことを考えて行動したいと思える内容だった。
・自国は自国、他国は他国という意識が他人事ではないという意識に変わってよかった。
・世界的格差があること自体は知っていたけれど、改めて現状を目のあたりにして、今自分ができることを探して全うしたいと思った。
・世界の格差を講演や体験を通じて知ることができた。
・今回世界の国々にはそれぞれの問題があり、それを解決するには各国同士の協力が必要であることが分かった。
・発展途上国の現状を詳しく知ることができたし、自分の生活している環境に感謝するべきだと思いました。
・「体験型」だったので、理解がしやすかったが、初歩的な内容が全体的に多かったかと思うので、もう一歩発展した内容で深い学びを自分ですることに興味を持った。
・楽しかっただけでなく、今まで知らなかったことも多く知れ、自分も体感でき、世界へ目を向ける良い経験になりました。

4　評価と考察

1学年人権平和教育を兼ねて実施した。第１段階として各ホームルームにおいてクラス単位でワークショップを実施し、その際のファシリテーターを昨年この講座を経験した2年生が担当、その後体育館に移動して、全体で講師の解説を聞いた。今年は「大変満足」の割合が昨年を４ポイント上回った。コロナ禍でこうした授業が持ちづらかったことも、高評価につながったものと思われる。こうした先輩の指導を受ける過程メンター制度が次第に確立していくことになる。後述のGS報告会もそうだが、SGH経験を教師，生徒ともに継承，発展させていく際にこうした学年の枠を超えた「縦割り」的行事を大切にしていきたい。

Ⅱ　課題研究　　１学年課題研究入門講座

１　ねらい

「キャリア学習」および「課題研究入門」の２つの目的で開催した。
専門分野の追究、社会で働く喜びを学ぶことで、今後の学問選択やキャリア形成の参考とする。また、課題研究の入門として専門分野の内容や現在を知る機会とする。

２　概要

（１）日　　時　8月28日（金）　12：30～13：20，13：40～14：30

（２）講　　師　以下のとおり

（３）内　　容

本校のOB・OGの方を講師としてお招きし、講師の方のこれまでの歩み、各専門分野の内容、今後に向けての生き方や考え方、探究・研究方法などをお話しいただいた。いずれも２回開催し、生徒は２講座に参加し、講座別に聴講した。

	講師名	タイトル
①	小川原正道（慶応大教授・日本政治史）	歴史研究への道案内－政治思想史・政治運動史から－
②	村上勇介（京都大教授・政治、地域）	民主主義はいらない？ －ラテンアメリカと世界から考える
③	山浦善樹（弁護士・元最高裁裁判官）	弁護士や裁判官の仕事はなぜ楽しいのか（法律学のすゝめ）
④	武田公子（金沢大教授・地方財政）	「地方創生」と地域再生施策の系譜
⑤	島田英昭（信州大教授・教育心理学）	「学びの心理学」を知る－大学の授業と心理学関係の仕事を紹介します－
⑥	荻原靖(中小企業家同友会全国協議会専務理事)	企業の社会的役割とは何か？～「地域」の視点で考える
⑦	堤宏記（東洋炭素株取締役執行役員）	人は何のために働くか
⑧	遠山里菜（筑波大４年・国際ボランティア）	国際協力を捉え直す－あなたにとっての国際協力は何ですか？
⑨	大井貴博（信濃毎日新聞記者）	がん社会を考える
⑩	清水亜矢子（信大医学部こころの相談室）	実は身近な発達障害
⑪	菅沼雅徳（東北大助教・AI）	高校生から始める最先端人工知能（AI）
⑫	水野幸治（名古屋大教授・交通工学）	自動車の安全
⑬	小宮山功一朗（JPCERTｺｰﾃﾞｨﾈｰｼｮﾝｾﾝﾀｰ国際ﾏﾈｰｼﾞｬ・ｻｲﾊﾞｰｾｷｭﾘﾃｨ）	サイバー戦争：米-中-グローバル企業の三国志。
⑭	松原隆彦（高ｴﾈﾙｷﾞｰ加速器研究機構素粒子原子核研究所教授　統計的宇宙論）	宇宙論の研究について

生徒対象アンケート結果

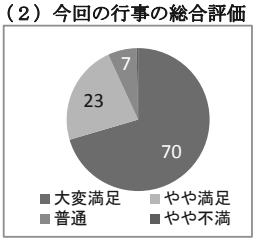
３　（１）生徒の感想

・中学高校で習う歴史はほんの一部だけで、自ら歴史を掘り下げればもっと面白いと知り、実は今の日本につながっていると感じた。(①)
・民主政治は良いものだと思い込んでいたが、デメリットもあると分かった。先入観にとらわれず多角的な視点で評価できるようになりたい。(②)
・山浦先生は今の私には足りていない考え方をお持ちで、本当に感動した。自分の人生でも、「人のために何ができるか」を常に考える生き方を私もしたい。男女別姓の問題でも言えるが、他人について知り、他人の立場に立つことが重要だとわかった。（③）
・将来、上田市を出て就職するつもりだったが、消滅してしまう市町村があると聞くと、それだけが正解ではないと思った。（④）
・ある価値観が有利なときもあれば不利になることもあるし、昔はこうすることが有利と言われていたが、今は不利と言われることもあって難しいなと思いました。（⑤）
・私は将来、経営に関わりたいと考えていて、「どんな風に売れば売れるのか」ということばかり考えていたけれど、一度冷静になって考えてみると“地域”が大切だと気付くことができた。地域に愛されるビジネスを作っていきたい。（⑥）
・先のことを考えて行動することが本当に大切だと感じた。目標をもって行動することで、一つ一つの行動に大きな意味があり、何のためにこれをやっているのか、ということを理解すると効率よく進められることを学んだ。(⑦)
・遠山さんのように、自分も身近なところからモチベーションを作り、行動に移したり、したいことを明確にしたりしていきたい。そのために自分のしたいこと、解決したいことに「なぜ？」と問い続けていきたい。（⑧）
・医療は広く暮らしをサポートすることも含んでいると気付いた。患者はもちろん、その家族のサポートも大切だと思った。（⑨）
・多くの人が発達障害について知っておいた方がいいと思った。長所についても知り、工夫の仕方はやってみようと思った。(⑩)
・AIが危険なのではなく人間の使い方によって危険になると知りました。スマホなど身近な物の使い方も考えたいです。（⑪）
・問題解決のために実験し分析し工夫しながら改善するという手順は、日々の勉強でも大切なことであり、身につけたい。（⑫）
・創作の世界でしかなかったものが現実になりうる時代になったことに改めて驚きを感じた。今まさに、連携や対立が生じていることを自分ももっと勉強したい、知りたいと思った。（⑬）

４　評価と考察

８月に入って全国および県内のコロナウイルス感染状況が悪化したため、感染予防の観点から、急遽全ての講座でリモート開催に変更することとなった。講師の先生方と生徒は直接対面できなかったが、その一方で、生徒はweb会議アプリの存在を身近に感ずるところとなり、行事への総合評価は例年と変わらず高いものであった。これからの学問選択やキャリア形成、課題研究に大いに資する、実りある講座となった。

（２）今回の行事の総合評価



Ⅱ 課題研究　グローバルスタディⅠ　地域に暮らす定住外国人との共生について考える

1 ねらい

日本の定住外国人の現実や、「外国人就労・定着支援研修」事業、さらにはこの事業を支える現地連絡調整員の仕事について理解を深めるとともに、グループごとのワークショップを通じて、地域社会における定住外国人との共生について考察を深める。

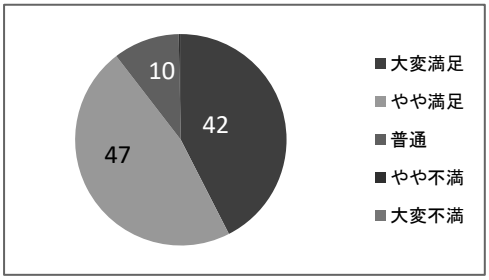
2 概要

（1）日　　時　２月１６日(火)、２月１７日（水）　３時限～６時限
（2）場　　所　上田高校定時制棟全定共有教室
（3）講　　師　マナベ バージニア氏（ペルー・長野県松本市在住）
　　脇田 ルリコ氏（ブラジル・長野県飯田市在住）
　　原田 知博氏（ブラジル・静岡県富士市在住）
　　ウラコワ マハバット氏（キルギス・京都府京都市在住、元横浜地域担当）
（4）内　　容　対象１学年生徒326名

４人の講師が2つのクラスを担当し、各1時間、のべ８回にわたって講演やワークショップを行い､自らの生活体験や、在日外国人の置かれている立場について考え、改善策をともに考える。

3 生徒アンケート

（1）行事の総合評価



（2）生徒の感想､記録より

① 地域で暮らす定住外国人の状況について

・身近な地域で暮らす定住外国人について、より詳しく知ることができ、状況についても知ることができた。
・不動産や入居等、難しい日本語や複雑なシステムがあるところで苦労していることを感じた。
・社会との関わりが難しかったり、思っていた以上に不自由なことが多くあると感じた。
・日本で生活する外国人の中には企業で働いている人も多くいて、とても必要とされていることが分かった。

② 現地連絡調整員の方の講話より

・日本人が外国から日本へ移住してきた人々に対して文化、制度を押しつけるのではなく、日本人も歩み寄ることで共存につながるという言葉が心に残った。
・日本人にとって当たり前のことが外国の方には難しいということを再認識した。
・地域で暮らしている定住外国人の生活状況を以前より理解することができ、今、自分たちにできることがないか考えさせられた。

③ 地域に暮らす定住外国人との共存にために、私たちが今できることは？

・外国人に日本のことを知ってもらうだけでなく、自分たちも他国の文化を理解する必要がある。
・自分も外国人も平等であるということを意識し、対等に話すこと、相手に歩み寄ることを大切にしたい。
・偏見をもつことをやめて、困っているようであれば声をかける。
・外国人を支援する活動など積極的に参加する。
・コミュニティの場に参加すること。
・日本語や日本の習慣を学ぶ場を増やす。
・身近な外国人の母国語を私たちも学び、外国人の方の不安を取り除けるようにする。

4 評価と考察

「地域における国際化」の重要性が指摘されて久しい。従来このGSⅠの最後の授業ではＪＩＣＡ（国際協力機構）と連携して青年海外協力隊のOB、OGを中心とした方々にワークショップをお願いしてきたが、今回は連携機関のＪＩＣＥ（日本国際協力センター）の支援を受け、日本における多文化共生について考える機会とした。またコロナ禍の移動制限にも配慮して、オンライン形式での実施とした。生徒たちは、日本の人口の約２％を占める一方で、意外に気づきにくい在日外国人の立場に目を開いていくとともに、ワークショップを通じて自らの問題として考えた。

Ⅱ　課題研究　　グローバルスタディⅡ課題研究テーマとプレゼンテーション

1 まとめ

・グローバルスタディⅡ課題研究は、個人のテーマにより実施した。他者とディスカッションしながら自己のキャリアプランに適した課題設定ができた。

・デザインシンキングを取り入れた4回の授業を通じて課題設定を見直しながら研究活動を推進した。

・GS報告会で全員ポスターセッションを実施し、ディスカッションからより深い学びを得られた。

2 カテゴリー別課題研究テーマ

課題研究カテゴリーでは、保健、テクノロジー分野に属する生徒が多い。今年度環境をテーマにする生徒が非常に増加した。

プレゼンテーションではなく、ポスターセッションの機会を増やし、相互にコミュニケーションを取れるようにした。

2学年はGS報告会ポスターセッションを全員１人ずつが経験できた。

オンラインでの発表の機会、プレゼンテーションの機会が増えた。

オンラインでのインタビューを実施し、自己の課題の最先端で活躍されている方のお話を伺い、考察を深めた。

	カテゴリー　　選択人数	319	割合
A カテゴリー	環境カテゴリー	35	11%
B カテゴリー	人権カテゴリー	50	16%
C カテゴリー	文化カテゴリー	20	6%
D カテゴリー	地域カテゴリー	25	8%
E カテゴリー	ビジネスカテゴリー	24	8%
F カテゴリー	国際カテゴリー	24	8%
G カテゴリー	教育カテゴリー	37	12%
H カテゴリー	保健カテゴリー	65	20%
I カテゴリー	技術カテゴリー	39	12%

		課題研究テーマ	人数
A		**環境カテゴリー**	35
1	環境	サステナブル建築の必要性	
2	環境	ポイ捨て問題への心理的アプローチ	
3	環境	気候変動の影響を減らす	
4	環境	海を漂うプラスチック	
5	環境	東南アジアの水問題	
6	環境	生態浄化が挑む世界の水不足と水の安全性	
7	環境	災害後のまちづくり	
8	環境	お風呂から考える温暖化	
9	環境	発酵の観点から見た食料問題	
10	環境	嫌われし作物	
11	環境	地球にやさしい建築を求めて	
12	環境	植物工場	
13	環境	上田市のごみの減量化を進めるには	
14	環境	自然災害を人の手のうちに	
15	環境	マイクロ・ピコ水力発電で地球温暖化を抑えるには	
16	環境	豪雨とともに生きるには？	
17	環境	海洋汚染とリサイクル	
18	環境	未来の農業へ向けて	
19	環境	人工降雨	
20	環境	遺伝子組み換え食品の現状	
21	環境	エシカル消費で変わる未来	
22	環境	１人１人が生き抜くために	
23	環境	中食産業の課題	
24	環境	バイオマス発電による地球の未来	
25	環境	登山道の整備	
26	環境	人間と自然環境の共存を目指して	
27	環境	安全な食料を手に入れるために	
28	環境	食品ロスとその解決策	
29	環境	外来生物によって侵される在来生物や人間の未来	
30	環境	災害ごみの処理	
31	環境	アマゾン森林火災	
32	環境	日本の貧困問題	
33	環境	バイオプラスチックは環境にやさしいのか	
34	環境	太陽光発電は本当に役立つのか	
35	環境	マイクロプラスチック対策	
B		**人権カテゴリー**	50
1	人権	ダイバーシティー経営が生み出す価値	
2	人権	非正規雇用職員	
3	人権	しあわせの基盤	
4	人権	憲法9条は改正すべきか	
5	人権	若者の政治への関わり方	
6	人権	同性パートナーへの理解	
7	人権	ストレスと向き合う	
8	人権	芸能人が自殺してしまうのを食い止める方法	
9	人権	人間の集団心理と意志決定	
10	人権	家庭内暴力による人権問題	

11	人権	日本の死刑制度は廃止すべきか	
12	人権	LGBTの問題点と未来	
13	人権	自己肯定感の向上を生きる手助けに	
14	人権	多種多様な"life-style"を認め合える社会の実現に向けて	
15	人権	日本の司法	
16	人権	高齢ドライバーによる自動車事故	
17	人権	日本の不寛容社会	
18	人権	ペットの権利を守るために	
19	人権	「独りで死ぬ」ということ	
20	人権	中国監視社会の問題点と日本の未来	
21	人権	サッカーから考える人種差別	
22	人権	誰もが暮らしやすい世の中へ	
23	人権	男女平等社会を目指して	
24	人権	育児休暇の義務化	
25	人権	実名報道の問題点、必要性とは？	
26	人権	政府による監視とプライバシー	
27	人権	ジェンダーフリー	
28	人権	日本の制服制度	
29	人権	障がい者とメディア	
30	人権	不寛容社会	
31	人権	人の多様性	
32	人権	目で見る言語	
33	人権	右利き用の世界で生きること	
34	人権	イタリアサッカーから考える人種差別問題	
35	人権	安楽死の課題	
36	人権	発達障害の人が生きやすい社会	
37	人権	日本の外国人労働者の人権	
38	人権	ヴィーガンとの共存を考える	
39	人権	今の世の中と結婚	
40	人権	犯罪加害者家族の生活と人権	
41	人権	現代社会におけるLGBTとの向き合い方	
42	人権	人類に迫る未知のウイルス	
43	人権	SNSにおける匿名の怖さ	
44	人権	日本の偏向報道	
45	人権	少年法厳罰化の是非	
46	人権	安楽死という自己決定権	
47	人権	ジェンダー平等とスポーツの関係について	
48	人権	日本の里親制度の現状と課題	
49	人権	血液型と性格の関係性	
50	人権	少女たちの自由と権利	
C		**文化カテゴリー**	20
1	文化	本を読んでいる人を見かけなくなったのはなぜか	
2	文化	SDGs達成のための傍証	
3	文化	文化の力	
4	文化	チケットの転売	
5	文化	消滅危機にある世界の言語	
6	文化	テレビ離れによるテレビ局の今後	
7	文化	現代の「表現の自由」を求めて	
8	文化	現代における大和言葉の意義	
9	文化	世界遺産の課題	
10	文化	世界遺産の未来への継承	
11	文化	これからの文化の在り方	
12	文化	長く愛されるコンテンツを創造していくには	
13	文化	芸術の発展	
14	文化	日本の伝統的な長寿の秘けつ	
15	文化	ことばのチカラ	
16	文化	「空気を読む」とは	
17	文化	ひらめきをカタチに	
18	文化	東洋神話と西洋神話から見る異文化理解	
19	文化	なぜ仏教と神道は日本で共存しているのか	
20	文化	読書を身近にするために	
D		**地域カテゴリー**	25
1	地域	自然環境に対応した都市づくり	
2	地域	景観と電柱	
3	地域	募金のあり方	
4	地域	聖地巡礼による町おこしと"効果の一過性"	
5	地域	持続可能な暮らしを守る	
6	地域	地域過疎と上田	
7	地域	コミュニティデザイン	
8	地域	地産地消の推奨	
9	地域	日本の無縁社会化を止めるために	

10	地域	景観を活かした地域再生	
11	地域	これからの医療と長野	
12	地域	御代田の町おこし	
13	地域	日本の農業と農村を守るためにできること	
14	地域	台風の被害とどう向き合うか	
15	地域	県外かそれとも県内か	
16	地域	画期的なデザインで一目置かれる地域作り	
17	地域	食品ロスで地域活性化	
18	地域	戻りたくなる長野県に	
19	地域	地域通貨で地域の活性化	
20	地域	路線バスを未来には	
21	地域	スポーツから考える地域経済	
22	地域	若者が集まるまちづくり	
23	地域	渋滞をしないマチづくり	
24	地域	あんずの里とエコツーリズム	
25	地域	ふるさと納税の理念と現状	
E		**ビジネスカテゴリー**	24
1	ビジネス	行動経済学の活用	
2	ビジネス	キャッシュレス化していく日本の中で	
3	ビジネス	社会で活躍できる人材を育てる	
4	ビジネス	「買う気」を持たせる方法	
5	ビジネス	e-スポーツの未来	
6	ビジネス	商店街が存続するために取るべき姿勢	
7	ビジネス	日本のeスポーツの未来	
8	ビジネス	経済発展と都市環境	
9	ビジネス	高齢者雇用のメリット・デメリット	
10	ビジネス	観光業界のAI導入	
11	ビジネス	現代の国際社会からみる仮想通貨の活用	
12	ビジネス	なぜ、日本は資本主義経済であるのか	
13	ビジネス	タックスヘイブンの悪用	
14	ビジネス	日本の空き家問題	
15	ビジネス	日本でのベーシックインカム	
16	ビジネス	日本のブラック企業	
17	ビジネス	人口減少社会が及ぼす影響・社会の変化	
18	ビジネス	今こそ知ろう！キャッシュレスについて	
19	ビジネス	起業家養成と経済の関係について	
20	ビジネス	知的財産を守る意味	
21	ビジネス	未来の中小企業の在り方	
22	ビジネス	ホワイト企業を増やす	
23	ビジネス	日本の農業の労働生産性を上げるには	
24	ビジネス	自転車から考える人間の未来	
F		**国際カテゴリー**	24
1	国際	カンボジア井戸プロジェクトについて	
2	国際	発展途上国の現状と私たちができること	
3	国際	世界の現状と世界幸福度報告	
4	国際	世界幸福度指数から見る日本の主観的幸福度	
5	国際	青年海外協力隊の必要性	
6	国際	食の不均衡	
7	国際	オリンピックに向けてGAP認証を進める日本	
8	国際	世界のトイレ問題のイマ	
9	国際	日韓関係	
10	国際	破綻国家の自立のためにする支援	
11	国際	本当の国際協力とは	
12	国際	近くて遠い国「韓国」との関係	
13	国際	日本と韓国のこれから	
14	国際	発展途上国に向けた美容とファッションの提供	
15	国際	核兵器廃絶への動き	
16	国際	ストリートチルドレンの今と未来	
17	国際	上田市の外国籍市民を包括的に支援するアプリ	
18	国際	世界の識字率	
19	国際	香港問題のこれから	
20	国際	移動する人々	
21	国際	アフリカの軌跡「ルワンダ」	
22	国際	ＳＤＧｓを”ジブンゴト”に	
23	国際	日本に必要な抑止力とは	
24	国際	水は子どもたちの命と未来を守る	
G		**教育カテゴリー**	37
1	教育	部活動のこれからについて考える	
2	教育	数学の歴史	
3	教育	里親制度の現状と未来	
4	教育	教育のきっかけ	

5	教育	学校に行かない教育	
6	教育	ジンバブエの子供と教育	
7	教育	スマホと学校	
8	教育	音楽を教育に結びつける	
9	教育	日本の英語教育のあるべき姿とは？	
10	教育	これからの日本と英語の必要性	
11	教育	本嫌いを生まないために	
12	教育	家庭環境の影響力	
13	教育	部活動のあり方	
14	教育	読解力の低下、どう捉えるか	
15	教育	子どもの貧困の解決に向けて	
16	教育	休憩の必要性	
17	教育	スマホが学力を破壊する	
18	教育	日本の学校のブラック部活	
19	教育	「ゲーム脳」とは	
20	教育	現代の野球人口減少について	
21	教育	ＡＩから考える未来の人材	
22	教育	世界の教育課題	
23	教育	トレーニングの重要性	
24	教育	日本の英語教育	
25	教育	子どもの未来を奪う虐待とその連鎖	
26	教育	人と言葉の関係	
27	教育	子どもとメディアの関わり方	
28	教育	外国人児童生徒への支援	
29	教育	「日本語」を学ぶほど英語に活きる	
30	教育	高校野球の現状と未来	
31	教育	これからの日本の音楽教育のあり方	
32	教育	いじめは証拠から	
33	教育	保育士不足　その裏には何が	
34	教育	学生ローンに苦しむ社会人たち	
35	教育	なぜ？宿題廃止から考えるこれからの日本に求められる学力	
36	教育	学校給食が変える子ども達の未来	
37	教育	長野県の高校野球レベルアップ	
H		**保健カテゴリー**	65
1	保健	超高齢社会を支える介護ロボット	
2	保健	貧困が招く負の連鎖	
3	保健	これからのがん治療　治療から予防へ	
4	保健	高齢社会と医療費	
5	保健	子どもの医療費	
6	保健	遺伝子改変から考える未来	
7	保健	高齢化に伴う医療の発展の可能性	
8	保健	人工知能で医療費の削減はできるか	
9	保健	日本医療の現状	
10	保健	ジェネリック医薬品	
11	保健	運動でメンタルをヘルシーに	
12	保健	「健康寿命」から考える医療費削減	
13	保健	発達障害を武器にする	
14	保健	地域医療から国際医療へ	
15	保健	どうして低い？日本のがん検診受診率	
16	保健	災害や急患、病院でのチーム医療の現状と実施病院	
17	保健	遠隔医療の可能性	
18	保健	感染症対策の現状と課題	
19	保健	医療事故から考える病院の課題	
20	保健	出生前診断から考える出産・育児	
21	保健	重い病気を治療する患者の負担を軽減する	
22	保健	外国人患者と医療機関の責任	
23	保健	睡眠について	
24	保健	2025年問題と地域医療構想	
25	保健	現代における看護のあり方	
26	保健	馬産界と各種牡馬たちの今	
27	保健	患者さんが望む最期を迎えられるようになるには？	
28	保健	薬を飲みすぎると…？	
29	保健	どうしたら医師不足を阻止できるか	
30	保健	医薬品アクセス	
31	保健	様々な立場から見る最期のあり方	
32	保健	ストレス社会を生き抜くために	
33	保健	充実した最期のために	
34	保健	お薬手帳の活用	
35	保健	出生前診断	
36	保健	高齢化や医師不足の進む未来	
37	保健	薬によってQOLを低下させないために	
38	保健	すべての人が十分な医療を受けられる社会に	

39	保健	子どもの命を守るために	
40	保健	フィリピンと日本の医療格差	
41	保健	人生の集大成の在り方	
42	保健	遠隔医療の可能性	
43	保健	チーム医療と看護師	
44	保健	赤ちゃんポストはなぜ増えないのか	
45	保健	医療と貧困	
46	保健	技術向上による人工骨の進化	
47	保健	自然から生まれた薬	
48	保健	花粉症と遺伝の関係性	
49	保健	出生前診断がもたらすもの	
50	保健	遺伝子検査の正当性と可能性	
51	保健	求められる医療	
52	保健	いじめの根本的解決	
53	保健	多剤併用による身体への害	
54	保健	医師不足を解消するために	
55	保健	現代の医師不足と解決策	
56	保健	日本の医療制度	
57	保健	医師の不足	
58	保健	世界と比べると分かる、日本の女性医師の現状	
59	保健	実は摂取しすぎている？カフェイン	
60	保健	発達障害の薬物療法	
61	保健	高齢化と今できること	
62	保健	薬がもたらす闇	
63	保健	食の安全	
64	保健	生活習慣病を予防するために	
65	保健	2025年問題へ向けて	
Ⅰ		**技術カテゴリー**	39
1	技術	超電導のしくみと可能性	
2	技術	日本の農業	
3	技術	農業の効率化	
4	技術	AIが抱える課題	
5	技術	スマホ依存の危険性	
6	技術	マイクロチップ	
7	技術	AIから考える完全自動運転への道のり	
8	技術	自動化による技術改革	
9	技術	AIによる人類の進歩、進化	
10	技術	送電ロスによって多くの電力が失われている	
11	技術	IOTと高齢化社会	
12	技術	現代の住宅建築	
13	技術	ナノテクノロジーの急速と社会実装への課題	
14	技術	超電導の日常的な場面での実装	
15	技術	地球温暖化対策に貢献する炭素繊維	
16	技術	VRによって医療にどのような影響をもたらしているのか	
17	技術	自動運転技術による交通事故の防止	
18	技術	AI機器に奪われる仕事	
19	技術	ＶＲが創る近未来の建築	
20	技術	電気自動車の現状と未来	
21	技術	運転の自動化について	
22	技術	生物模倣技術の可能性と未来	
23	技術	コンビナートの防災アセスメント	
24	技術	バイオ燃料と食糧問題	
25	技術	世界に普及し始めた人工知能（ＡＩ）について	
26	技術	AIと仕事	
27	技術	人工知能と人類	
28	技術	自動運転の安全性の向上のために	
29	技術	自動運転技術は何をもたらすのか	
30	技術	パワーアシストで介護を楽に	
31	技術	５Gの世界	
32	技術	先端素材炭素繊維	
33	技術	科学の今	
34	技術	VR産業の拡大について	
35	技術	AIと未来	
36	技術	5Gの危険性	
37	技術	オンライン診療の問題点と今後	
38	技術	AIによる職業代行	
39	技術	ＶＲと医療の未来	

Ⅱ　課題研究　KDDI との連携授業

1　ねらい

ＶＵＣＡの時代を生きるために必要な能力を，特別授業を通じて養成する。「デザインシンキング」「時代を生き抜くための人間力（挑戦力や創 造性，感性，企画力）」等をテーマに最先端の知見を取り入れた授業の開発を行う。いくつかの現実の課題の解決に向け，そこに向かうアプローチ方法や解決方法について，連携している株式会社 KDDI から講師を招いてゼミナール形式で学ぶ。否定性受容力を高め，これまで経験したことのないような問題に立ち向かう能力を身につけるために，連携先の知見も採り入れ，実践的な能力の開発を目指す。

2　概要

6 月、9 月、11 月、3 月の全 4 回で 2 学年の GSⅡJ の授業で行った。
講師として株式会社ＫＤＤＩから横幕秀明様を招き実施した。

(1)　第 1 回　「これからの時代に必要な能力とは何か」
- ・デザイン思考とは何か、なぜ必要なのか。また、本質的なニーズを探ることの大切さを学ぶ。
- ・＜共感→定義→アイディア→プロトタイプ→テスト＞のデザイン思考のプロセスを理解する。

(2)　第 2 回　「デザイン思考体験ワーク　～マシュマロチャレンジ～」
- ・マシュマロチャレンジというワークを行い、現場に「観察者」を設定することでこれまで気付かなかった問題点や課題を発見し、そこで得られた問題点などを解決するアイディアを「議論」で大量に生み出し、効果的だと思うアイディアの「プロトタイプ」をまとめる。

(3)　第 3 回　「課題発見 デザイン思考をはじめよう」
- ・ロジックツリーを用いて論理的思考力を鍛える。
- ・写真のグループ分けを通して柔軟な発想力をつける体験をする。
- ・コミュニケーションが円滑になるように相手の考えを引き出せるようなインタビューをする。

(4)　第 4 回　「ライフデザインについて」
- ・自分が本当に進みたい道は何か、受験する意味や大学進学、そしてその先の就職など未知の世界がある。高校の最後 1 年間を迎えるこのタイミングで、自分を見つける時間を作り、ライフデザインを考えてみる。

3　生徒の感想，アンケート

・とにかく失敗を恐れず何度もチャレンジすることが大切。あらゆる可能性の検討が大切。
・他の人の意見を聞けて、今後の課題研究に大いに役に立った。
・マシュマロチャレンジが難しくて 1 回目は上手くいかなかったが、2 回目はチームで考えを共有して、よく考えてできたので、どうすれば問題解決ができるかが少しわかったと思う。
・計画を立てて、周りと意見交換しながら協力することが大切だと思う。
・デザイン思考の考え方は日常でも役に立つものだと思ったし、その重要性に気付くことが出来た。

4　評価と考察

「デザイン思考」の特徴は 2 点で、ユーザーを徹底的に観察し、問題を発見し、解決するために試作品を作り、実践し、短期間で改善を繰り返すプロセスと、人間中心の考え方ということ。不確実性が増した現代において、この考え方を取り入れることによって、いまだかつて世界が経験したことのない課題を解決する力をつけていくことができるという気付きを得た。

II　課題研究　　Global Studies II: English 2020-2021

I. AIMS: The focus of the Global Studies II: English (GSII:E) activities and coursework were to increase students' ability to plan, prepare, deliver and self-evaluate presentations on a variety of topics, both individually and in groups. During the year, students engaged in five projects. Each was an opportunity to communicate in English with others about themselves, their school, their country, their research, and their own ideas on international issues. The coursework was designed to foster critical thinking and presentation skills, while developing IT skills useful for individual work and collaboration.

II. PROJECTS OVERVIEW: This year's five presentation projects are outline in the table below

Month **月**	**Project Contents** **学　習　内　容**	**No. Of Classes** **時間数**	**Learning Outcome Goals for each Project** **学　習　の　ポ　イ　ン　ト**
April **May**	**1. Self-Introduction** Presentations, I.T. Skills & pre-course Speaking skills self-assessment	7	• Make a short self-introduction presentation with visual aids, entirely in English. • Use IT skills to login to and navigate google classroom, view the instructional videos, create self introduction videos, and upload for evaluation.
June **July**	2. **Ueda SHS is the best school in Japan!** PR Presentation Project	8	• Construct logical arguments in English starting with an opinion and then constructing a thesis statement with supporting points and evidence. • Develop research and source-verification skills • Develop Collaboration and Presentation skills • Further develop IT skills: Use google docs to create script, google slides to create visual aids, google forms for enter peer evaluation data using rubric
Aug **Sept** **Oct** **Nov**	**3. Taiwan & Japan Compare & Contrast** Presentation Project → Research → Presentation → Discussion → Evaluation → Exchange	10	• Study effective presentation elements • Plan and create presentations based on research • Develop communication techniques for presentations and discussion • Design discussion questions and formats • Hold presentations and discussions for classmates
Dec **Jan**	**4. Independent Research: English Abstract and Title** Presentation Project (Research Showcase)	8	• Compose and revise short summary essays about individual Independent Research Project topics • Prepare short English speeches using topic-specific technical language to explain students' research processes, information, and results • Present English speeches using summaries and outlined ideas to an audience of peers, school members, community members, and invited English teachers from other schools
Feb	**5. SDG Product Donation Pitch** & post-course Speaking skills self-assessment	2	• Identify a target SDG, problem, and place to help with • Design a product to help with the SDG • Create and deliver a pitch to classmate 'donors' to attempt to gather needed donations for the project.

III. ASSESSMENT & EVALUATION

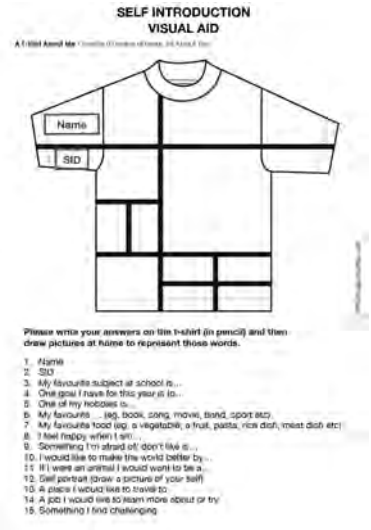
Projects were completed individually, in pairs, and in small groups to foster collaboration skills. Each project had its own learning goals and rubric for marking. Additionally, each had a self-evaluation and peer-evaluation component. Students completed these peer/ self-evaluation assessment forms online and gained increasing awareness of the components and skills of effective presentations.

IV. FEEDBACK, REVIEW & PLANNING

Students completed a post-course speaking skills check. The results indicate that students noticed an increase in their ability to interact with others using English, and in their ability to share ideas on global issues with others in formal presentations. Students' confidence in logical reasoning and providing support for opinions in their written and verbal work increased throughout the year. Students can further build on their development in this course by focusing on the self-assessment criteria, peer editing, and frequent practice of their presentations with peers throughout the process of writing.

V. PROJECT SAMPLES

Below are samples of the lesson plans, worksheets and materials related to each project, as well as work produced by students and photos of their process.



1.Self-Introduction Presentations, I.T. Skills & Pre-Course Speaking skills Self-Assessment

The first project began with students answering questions about themselves and creating a visual aid in the shape of t-shirt with symbols and pictures to represent their answers. They then created a script and made a video to introduce themselves.

This first project was also the students' introduction to using IT and google classroom. The teachers uploaded instructional videos to demonstrate how to complete the tasks. Students' work was evaluated online. They also assessed themselves and their English interaction and presentation skills. This was to form a baseline to compare to at the end of the course.

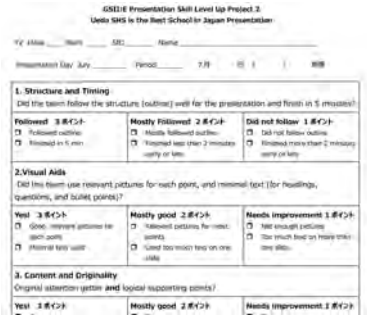
2. 'Ueda SHS is the Best School in Japan!' PR Presentation Project

Students each brainstormed three reasons to support the position that Ueda SHS is the best school in Japan. They wrote individual essays giving their reasons and and examples to support the opinion.

Next, they formed eight groups and worked together, combining their ideas to create a single presentation

script on the topic. After that, they learned how to make visual aids using google slides and created their PR presentation.

The groups rehearsed their presentations and then each presented to the class.



This was followed by self and peer evaluations based on the rubric. Evaluation focused on timing, structure and content, appearance and style of visual aids. voice, eye contact and audience engagement.

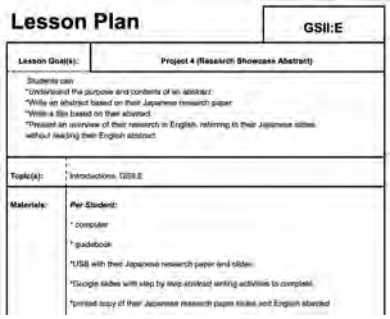
3. Taiwan & Japan: Compare & Contrast Presentation Project

For this compare and contrast presentation project, students were divided into eight groups. They chose one of eight themes to research; Geography and Environment, History, Government, Society & Social Life, People, Life style & Culture, Education, Economy & Industry.

After deciding on three aspects of their theme to compare and contrast they researched and completed a presentation script.

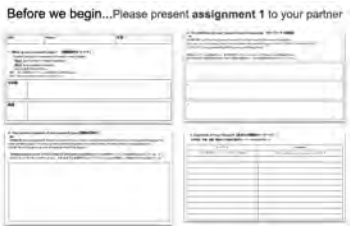
Following that they created a visual aid using google slides.

Teams then rehearsed their presentations. Finally, all teams presented their research and were evaluated by themselves and their peers on the contents, visual aids and their presentation skills and style.



4. Independent Research Showcase: English Abstract & Title Presentation Project

Over a period of six weeks, students crafted an English abstract that accurately reflected the contents of their year-long Japanese research in GSJ. At each stage they presented their work in progress to classmates.



SID:　Name:

Title: Changing the Economic Status of Developing Countries by Understanding their Actual Needs and Using our Knowledge and Technology to Provide Sustainable Support

Abstract: There are currently approximately 137 developing countries (DCs) and, although many countries and organizations are providing support to DCs, the number does not appear to be decreasing. The purpose of this study is to understand why support is not changing the economic status of DCs and what can be done to help them become industrialised and self-sufficient. In depth interviews with university students and people who work in international affairs were conducted. It was found that support given is often not meeting actual needs. In order to help DCs develop it is recommended that development agencies' first work to understand the DC's needs, and then assist them to become self-sufficient through appropriate training and resources. Further research is needed to understand how to measure needs and how to provide sustainable support, knowledge and technology that truly meets the development needs of nations Japan supports.

Following that, students wrote a title based on the abstract and, after editing and formatting, each students' slide was printed and given to students for their presentation.

Next, they rehearsed their research presentations in English following the prescribed format.

Finally, students presented their research to an audience of teachers and peers, and participated in Q&A feedback sessions, as well as panel discussions.

GSII: English Research Showcase Project Presentation Preparation Worksheet

Name: _____ SID: _____

Please look at your abstract and your Japanese slides.
Make notes below to prepare what to say during your presentation:

1.Self introduction	• Hello. My name is.. • I'm in year 2 • I chose the topic because I'm interested in .. • In the future I want to ..	1
2.Background Purpose Motivation Current situation	• What is your topic about ? • What is the current situation about your topic? • Why is this study important to you or to the listeners?	2
3.The problem	• What is the question we you trying to answer? • What is your research trying to understand? • What problem is it trying to solve? • What does research say about the topic?	3
4.Research Method	• What research methods did you use? (interviews, survey, literature review, experiment etc) • What type of study is it? • How did you gather your data?	4
5.Results	• What did you find? • How did results compare to your hypothesis? • What is the most interesting thing you learned from your research? • Were there highly unexpected outcomes or were they largely predicted?	5
6.Conclusion	• What is the meaning or importance of what you found? • How do your results connect to your purpose? • So what? Why is this important? • What are the exact effects of these results on your field or the wider world?	6
7.Further research/ recommendations/ Future action	• What is your opinion (or idea for) this topic? • What other information is needed to expand knowledge in this area? • What will YOU do in the future related to this topic?	7
8.Possible Questions and Answers	• What are some questions you hope people might ask? (what answers could you give?) • What do you hope no one will ask? (what answers could you give?)	8

5. SDG Product Donation Pitch & post-course Speaking skills self-assessment

Lesson Plan | **GSII:E**

Lesson Goal(s):	Project 5 (SDG Donation Pitch):
• Recap the projects completed and goals attained for GSII:E this year. • Students can create an SDG donation pitch in English and deliver it to their classmates. • Students can self-assess their English interaction and Presentation skills and notice their progress.	
Topic(s):	GSII:E Summary, Speaking Skills self-assessment, Presentations, SDGs
Materials:	Per Student: *Speaking skills self-assessment/ reflection sheet Per Group of 4 *SDGs and donation pitch worksheet

This exercise was to reflect on development and integrate skills learned during the year.

Students first completed the post-course speaking skills self-assessment form and noticed their progress since the beginning of the course.

GSII: English

Speaking Skill Check

Read the things you can do with your speaking skills and color "☆"

Skill→ / Level↓	Speaking	
	Interacting	Production (Presentation)
C2 Mastery	☆ I can express myself and convey finer shades of meaning precisely using idiomatic expressions and colloquialisms. ☆ If I have a problem communicating, I can backtrack and restructure my conversation so smoothly that others don't notice.	☆ I can present a clear, smoothly-flowing description or argument in a style appropriate to the context and with an effective logical structure which helps my audience notice and remember significant points.
C1 Effective	☆ I can express myself without much obvious searching for vocabulary or expressions. ☆ I can use language flexibly and effectively for social and professional purposes.	☆ I can present clear, detailed descriptions of complex subjects integrating sub-themes and supporting research, developing points and finishing with an appropriate conclusion.
B2 Vantage	☆ I can hold a conversation using a variety of vocabulary and grammar with no planning. ☆ I can take an active part in discussions in familiar situations, explaining and supporting my opinions.	☆ I can give clear, detailed descriptions on a wide range of topics related to my interests. ☆ I can explain my side of an issue, giving the advantages and disadvantages of various options and opinions.
B1 Threshold	☆ I can express how I feel easily. ☆ I can take part in classroom discussions about things I am interested in. ☆ I can repeat what has been said but just information on to another person.	☆ I can tell or retell a story in my own words with a sequence of events. ☆ I can explain my opinions and plans with simple supporting reasons. ☆ I can give instructions to complete a task.
A2 Waystage	☆ I can answer conversation questions about common topics. ☆ I can continue a short conversation with people familiar to me. ☆ I can easily participate in a model conversation, (describe, or skit when I have memorized what to	☆ I can describe my daily routines and activities. ☆ I can describe my current actions or plans for the immediate future. ☆ I can tell a simple story with the help of words or

Following that, in groups of four they identified a need in the world that related to an SDG.

Next, they chose one of 10 objects from a box and used their imagination to create a product to meet that need.

Project 5: SDG Product Donation Pitch

Hello. We are (company name) _____
We are seeking your donation of ($ amount) _____
for our product (product name) _____

The (product name) _____
will help (country/ place) _____
with (SDG) _____

*One of the problems there is ...

*Here's what our product does to help solve that problem...

Your donation will help to solve this problem. Can we count on your donation?

Donor Response	Tally
Yes! Here's all the money you need!	
No, Sorry. Not this time	

After completing the script for the product pitch they competed for donations by pitching their product to groups and then to the class.

This concluded the course for this year.

Ⅱ　課題研究　　グローバルスタディⅢ受講者　ポートフォリオ

1　ねらい

WWL全員カリキュラム（グローバルスタディⅠⅡ）で実施した課題研究をキャリアに応じて更に深化させる。

課題解決のアクションプランを地域で考案するため、地域で自主的にフィールドワークを実施し、論文を作成する。

北陸新幹線サミットを主催し、WWL高校生と課題研究をカテゴリー別にプレゼンテーションし、ディスカッションする。

2　概要　　選択教科　増単位 1単位　　18名選択　（日本語論文コース18名）

※単位修得者全員のグローバルスタディⅠⅡⅢポートフォリオと、進路先（2021年3月上旬時点）を掲載した。

1　A（男）		海外研修　フィリピンスタディツアー　ボストンスタディツアー（オンライン版）
1年	ＧＳⅠ	時事問題　タバコのあるオリンピック
	県内ＦＷ	ビジネス都市　長野県立大学　小布施町
2年	ＧＳⅡ	国際協力　課題研究　「日本人の寄付に対する意識」
	首都圏ＦＷ	ビジネス都市　東京証券取引所　ＣＡＮＯＮ　ＪＥＴＲＯ
	台湾ＦＷ	ビジネス都市　六福客棧　剥皮寮歴史地区　東三水街市場
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ａ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「日本人の寄付に対する意識」
		北陸新幹線サミット　第３分科会（発表者）

2　B（女）		
1年	ＧＳⅠ	時事問題　日韓問題
	県内ＦＷ	国際理解　長野県立大学　亀清旅館
	その他の活動	海外大学進学の話　とびたて留学JAPAN　東京外国語大学オンラインレッスン
2年	ＧＳⅡ	国際協力　課題研究　「牛丼が引き起こす水問題　～飼料用米栽培を促進しよう～」
	首都圏ＦＷ	国際協力　東京外国語大学　国際連合大学　JICA地球ひろば
	台湾ＦＷ	外交・国際協力　公益財團法人日本台湾交流協會にて発表
	ＳＧＨ報告会	全体会　「Who am I」　英語プレゼン
	その他の活動	「こんにちは県議会」本選出場　FGLC（大阪大学）銀賞
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース
		北陸新幹線サミット　第１分科会（運営スタッフ）
進路	進学先	立命館アジア太平洋大学　国際経営学部　国際経営学科

3　C（男）		海外研修　ボストンスタディーツアー
1年	ＧＳⅠ	時事問題　生態系保全・共生
	県内ＦＷ	環境・生命　清泉寮キープ自然学校
2年	ＧＳⅡ	産業技術　課題研究　「環境保全・共生　地域社会で守る豊かな自然」
	首都圏ＦＷ	テクノロジー　理化学研究所　上智大学理工学部にてプレゼン
	台湾ＦＷ	自然環境　野柳地質公園　淡水紅毛城　淡水老街　關渡宮
	その他の活動	G20エネルギー・環境関係閣僚会合　サイエンス・アソシエーション・プロジェクト報告会
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ａ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「生物多様性保全　地域社会で守る豊かな自然」
		北陸新幹線サミット　第２分科会（運営スタッフ）

4　D（女）		
1年	ＧＳⅠ	時事問題　津波による甚大な被害　石巻市立大川小学校
	県内ＦＷ	ビジネス都市　長野県立大学　小布施町
2年	ＧＳⅡ	人権ジェンダー　課題研究　「刑事責任の有無　～実刑判決が下らない心神喪失者～」
	首都圏ＦＷ	人権ジェンダー　上智大学　憲政記念館　最高裁判所　日本弁護士連合会
	台湾ＦＷ	自然環境　野柳地質公園　淡水紅毛城　淡水老街　關渡宮
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「誰もが住みよい街のすゝめ　～都市設計の面から～」
		北陸新幹線サミット　第２分科会（司会者）
		フィールドワーク　長野県内１９市建設関係の部署にアンケート
進路	進学先	早稲田大学　法学部

5　E（女）		海外研修　カンボジア井戸プロジェクト　フィリピンスタディーツアー
1年	ＧＳⅠ	時事問題　自転車シェアリング
	県内ＦＷ	国際協力　コレージオ・ロゴス　ＪＩＣＡ駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
	その他の活動	県内ＦＷ報告　井戸プロのバザー運営　関連プレゼンテーション
2年	ＧＳⅡ	国際協力　課題研究　「私たち高校生は世界のために何ができるか」
	首都圏ＦＷ	子ども・次世代　東京学芸大学附属国際中等教育学校・慶応義塾大学総合政策学部
	台湾ＦＷ	教育子ども　台北市福林国民学校・台北市立大学
	その他の活動	私のプロジェクト発表大会ベストラーニング賞受賞　マイプロジェクト全国オンラインサミット参加
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ａ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「私たちの国際協力 -そうだ、井戸を掘ろう。-」
		北陸新幹線サミット　第３分科会（運営スタッフ）
		フィールドワーク　高校生未来ラボ参加　東京大学准教授北村友人先生とのSkype
進路	進学先	関西学院大学　教育学部　初等教育コース

6　F（男）		
1年	ＧＳⅠ	時事問題　憲法改正
	県内ＦＷ	国際理解　長野県立大学、亀清旅館
2年	ＧＳⅡ	人権ジェンダー　課題研究　「日本刑事司法の欠陥」
	首都圏ＦＷ	人権ジェンダー　上智大学　憲政記念館　最高裁判所　日本弁護士連合会
	台湾ＦＷ	歴史文化　国立故宮博物院　華山1914文創園区　二二八国家記念館
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｃ　協働的思考力Ｃ　創造的思考力Ｃ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース
		北陸新幹線サミット　第２分科会（司会者）

7　G（女）		
1年	ＧＳⅠ	時事問題　過労死問題
	県内ＦＷ	保健・医療　佐久総合病院　佐久大学
2年	ＧＳⅡ	保健医療　課題研究　「ドーピングに走る人々について」
	首都圏ＦＷ	国際協力　東京外国語大学　国際連合大学　JICA地球ひろば
	台湾ＦＷ	観光行政　台北市政府観光伝播局
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「あなたの手洗い、それで完璧？」
		北陸新幹線サミット　第１分科会（運営スタッフ）
		フィールドワーク　滋野小学校（東御市）へ手作り石けんの寄付　養護教諭体験
進路	進学先	埼玉大学　教育学部　養護教諭養成課程

8　H（女）		
1年	ＧＳⅠ	時事問題　アメリカの移民制度について
	県内ＦＷ	ビジネス都市　長野県立大学、小布施町
	その他の活動	バレエ　ジャパングランプリ準入選　ヨーロピアンバレエグランプリ　3位
2年	ＧＳⅡ	国際協力　課題研究　「どうしたらグローバル人材は育成されるのだろうか」
	首都圏ＦＷ	国際協力　東京外国語大学　JICA地球ひろば　国連大学にてプレゼン
	台湾ＦＷ	外交・国際協力　公益財團法人日本台湾交流協會
	ＳＧＨ報告会	台湾研修旅行報告
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「留学の有用性」
		北陸新幹線サミット　第３分科会（運営スタッフ）
進路	進学先	慶應義塾大学　商学部　商学科

9　I（女）		
1年	ＧＳⅠ	時事問題　研究の在り方
	県内ＦＷ	保健・医療　佐久総合病院　佐久大学
2年	ＧＳⅡ	人権ジェンダー　課題研究　「日本で起こる男女格差問題をなくす方法はあるか」
	首都圏ＦＷ	人権ジェンダー　上智大学　ヒューマンライツウォッチ　日本弁護士連合会
	台湾ＦＷ	観光行政　台北市政府観光伝播局
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ａ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「長野県上田市の男女格差問題を解決しよう」
		北陸新幹線サミット　第３分科会（司会者）
		フィールドワーク　上田市役所
進路	進学先	立教大学　社会学部　メディア社会学科

10　J（女）		
1年	ＧＳⅠ	時事問題　民泊を発展させるためには
	県内ＦＷ	国際協力　コレージオ・ロゴス　ＪＩＣＡ駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
2年	ＧＳⅡ	国際協力　課題研究　「安全なトイレの重要性～子供たちの未来を考える～」
	首都圏ＦＷ	国際協力　東京外国語大学　国際連合大学　JICA地球ひろば
	台湾ＦＷ	外交・国際協力　公益財團法人日本台湾交流協會
	ＳＧＨ報告会	台湾研修旅行報告
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ａ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース
		北陸新幹線サミット　第１分科会（司会者）
進路	進学先	早稲田大学　文化構想学部　文化構想学科

11　K（女）		海外研修　カンボジア井戸プロジェクト　フィリピンスタディーツアー
1年	ＧＳⅠ	時事問題　自転車シェアリングステム
	県内ＦＷ	国際協力　コレージオ・ロゴス　ＪＩＣＡ駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
	ＳＧＨ報告会	「在日ブラジル人学校」発表
2年	ＧＳⅡ	国際協力　課題研究　「フィリピンの今と国際協力」
	首都圏ＦＷ	保健・医療　日本赤十字血液センター　国際医療協力局　国際医療福祉大学
	台湾ＦＷ	観光行政　台北市政府観光伝播局
	その他の活動	筑波坂戸高校国際シンポジウム　佐久市図書館講座　マイプロ　県大会・全国大会　他
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ａ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「日本の介護問題」
		北陸新幹線サミット　第１分科会（発表者）
		フィールドワーク　ＳＮＳを活用したインタビュー

12　L（女）		
1年	その他の活動	ベルギー王国の中高一貫校（Campus De Helix）へ留学
2年	首都圏ＦＷ	国際協力　東京外国語大学・国連大学・ＪＩＣＡ地球ひろば
	台湾ＦＷ	産業技術　科達製薬股分有限公司
	ＳＧＨ報告会	全体会「自分を知る　Know　Myself」発表
	その他の活動	留学まとめ「遠い国での一年間」
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「外国人児童の教育」
		北陸新幹線サミット　第１分科会（運営スタッフ）

13　M（女）		海外研修　ボストンスタディーツアー（オンライン）
1年	ＧＳⅠ	時事問題　アメリカの移民問題について
	県内ＦＷ	国際協力　コレージオ・ロゴス　ＪＩＣＡ駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
2年	ＧＳⅡ	国際協力　課題研究　「広がるテロ」
	首都圏ＦＷ	子ども・次世代　東京学芸大学附属国際中等教育学校　慶応義塾大学総合政策学部
	台湾ＦＷ	教育子ども　台北市福林国民学校　台北市立大学
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「インクルーシブ教育」
		北陸新幹線サミット　第３分科会（運営スタッフ）

14　N（男）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　カジノについて
	県内ＦＷ	国際理解　長野県立大学　亀清旅館
	ＳＧＨ報告会	全体会「妖×観光ー御代田編ー」発表
2年	ＧＳⅡ	ビジネス　課題研究　「目指せ観光地～軽井沢のお隣御代田の挑戦～」
	首都圏ＦＷ	歴史アート　早稲田大学　東京ジャーミィ　国立歴史民俗博物館
	台湾ＦＷ	ビジネス都市　六福客棧　剥皮寮歴史地区　東三水街市場
	その他の活動	全国高校生マイプロジェクトアワード優秀賞　長野県Summit県知事賞
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「目指せ観光地～軽井沢のお隣御代田の挑戦～」
		北陸新幹線サミット　第２分科会（発表者）
		フィールドワーク　御代田町長への取材　濱野皮革とのコラボグッズ制作

15　O（女）		海外研修　ボストンスタディーツアー（オンライン）
1年	ＧＳＩ	時事問題　核兵器廃絶
	県内ＦＷ	国際協力　コレージオ・ロゴス　ＪＩＣＡ駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
2年	ＧＳⅡ	子ども次世代　課題研究　「言葉が通じない世界」
	首都圏ＦＷ	子ども・次世代　東京学芸大学附属国際中等教育学校　慶応義塾大学総合政策学部
	台湾ＦＷ	観光行政　台北市政府観光伝播局
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ａ　創造的思考力Ａ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「友達を作るための日本語教育」
		北陸新幹線サミット　第３分科会（運営スタッフ）

16　P（男）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　LGBTと新しい人権
	県内ＦＷ	子ども・スポーツ　長野Uスタジアム　青木村児童センター
	ＳＧＨ報告会	全体会「教育県長野復興計画～他県と比較して新し教育を考える ～」発表
2年	ＧＳⅡ	教育人権　課題研究　「教育県長野復興計画～ラグビー～」「LGBTQと学校教育」
	首都圏ＦＷ	子ども・次世代　東京学芸大学附属国際中等教育学校　慶応義塾大学総合政策学部
	台湾ＦＷ	教育子ども　台北市福林国民学校　台北市立大学にてプレゼン
	その他の活動	七尾高校SSH成果発表会　私のプロジェクト中間発表会　三校交流会プレゼン
	ＧＰＳ	批判的思考力Ａ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「教育県長野復興計画～新教育とは～」
		北陸新幹線サミット　第１分科会（発表者）
	その他の活動	有志によるゴミ拾い活動

17　Q（女）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　民泊新法
	県内ＦＷ	ビジネス都市　長野県立大学、小布施町
	その他の活動	信州ベンチャーコンテスト２０１８　奨励賞
2年	ＧＳⅡ	ビジネス　課題研究　「格安ファッションのカラクリ　江戸のエコライフから学ぶ消費者のあり方」
	首都圏ＦＷ	ビジネス都市　東京証券取引所　ＣＡＮＯＮ　ＪＥＴＲＯ
	台湾ＦＷ	観光行政　台北市政府観光伝播局
	その他の活動	うえだ環境市民会議　環境講演会『ＳＤＧｓを使いこなそう』　プレゼン
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース　課題研究　「格安ファッションのカラクリ　高校生の私にできること」
		北陸新幹線サミット　第３分科会（司会者）
	その他の活動	高校生クローゼット改革（ファストファッションのフリーマーケット）
進路	進学先	早稲田大学　教育学部　英語英文学科

18　R（女）		
1年	ＧＳＩ	時事問題　原発再稼働賛成？反対？
	県内ＦＷ	ビジネス都市　長野県立大学　小布施町
2年	ＧＳⅡ	人権ジェンダー　課題研究　「少年犯罪はなぜ生まれるのか？」
	首都圏ＦＷ	人権ジェンダー　上智大学　ヒューマンライツウォッチ　日本弁護士連合会
	台湾ＦＷ	観光行政　台北市政府観光伝播局
	ＧＰＳ	批判的思考力Ｂ　協働的思考力Ｂ　創造的思考力Ｂ
3年	ＧＳⅢ	日本語コース
		北陸新幹線サミット　第１分科会（司会者）

Ⅱ　課題研究　長野県上田高等学校　第４回北陸新幹線サミット

１　ねらい

期日　　2020 年 6 月 13 日（土）10:00～15:00
場所　　長野県上田高等学校（本部）
　　他校・講師等はオンライン接続
コンセプト　関東甲信越北陸地区高校課題研究発表会
　　テーマ別３分科会形式で、各分科会において専門分野の
　　講師３名から助言をいただく
　　プレゼンテーション各 10 分（各分科会３つ、計９つ）
　　質疑応答＋ディスカッション各 30 分
　　Web 会議ツールを用いたオンライン形式での実施

講師

分科会Ⅰ　信州発いのち・健康フォーラム		
蓮見順平	佐久医療センター小児科医長	連携機関
分科会Ⅱ　地域の課題から地域創生を提言		
大室悦賀	長野県立大学グローバルマネジメント学部教授	連携機関
分科会Ⅲ　グローバル課題から解決策を提言する		
瀧澤郁夫	ＪＩＣＡ人間開発部次長	連携機関

参加高等学校

県外校	接続生徒数	県内校	接続生徒数
筑波大学附属坂戸高等学校	4	長野県松本県ヶ丘高等学校	1
東京学芸大学附属国際中等教育学校	2	長野県長野高等学校	2
新潟県立国際情報高等学校	3	長野県長野西高等学校	2
金沢大学附属高等学校	1	長野県篠ノ井高等学校	3
石川県立金沢泉丘高等学校	3	長野県屋代高等学校	2
石川県立七尾高等学校	3	長野県上田染谷丘高等学校	2
		長野県松本深志高等学校	2
		長野県伊那北高等学校	2
		長野県軽井沢高等学校	1
		長野県上田高等学校	18

この他にも、各校教員、講師、管理機関職員等が接続

II　カリキュラム開発

2　概要

開会行事

学校長挨拶・生徒代表挨拶・講師紹介

分科会

分科会Ⅰ　信州発いのち・健康フォーラム

①岩浅祐美　櫻井ひろ花（東京学芸大学附属国際中等教育学校）
タイトル：「過剰包装によって進むプラスチック問題に対する新包装材の開発」
ディスカッション：「商品の包装において環境負荷への対策をする上で、その妨げになる要素とは何か」
「どのように解決に向かえるか(商品への付加価値、衛生面、国民性などの視点から)」

②有賀千央　丸山紘人（長野県上田高等学校）
タイトル：「コロナから見直す『社会的距離』」
ディスカッション：「皆さんの地域の命を守るコミュニティは何か？」
「それらを私たち高校生が活性化させる方法は」
「皆さんのフィールドのコロナによる影響は？」

③渡部日向子（長野県松本県ヶ丘高等学校）
タイトル：「スタンディングデスクで健康と集中力を手に入れよう～日本人は世界一座りすぎている～」
ディスカッション：「椅子や机に限らず、授業中に感じる違和感について」

分科会Ⅱ　地域の課題から地域創生を提言

①森川景允　高堀瑞希（長野県上田高等学校・長野県軽井沢高等学校）
タイトル：「目指せ観光地！　軽井沢のお隣　御代田の挑戦」
ディスカッション：「あなたの街の長所、短所」
「街を発展させる！独自アイデア」

②土屋音葉　古市智香　ポカレル・スレーシャ　森飛鳥（筑波大学附属坂戸高等学校）
タイトル：「海洋プラスチック問題を小規模な場所から解決する」
ディスカッション：「プラスチック問題解決のために、私たち高校生が与えられる影響や発信方法は？」
「本活動を通して不足していた点について」

③平野杏佳（金沢大学附属高等学校）
タイトル：「防災アプリ『BATON』」
ディスカッション：「学生が行動を起こすことのメリットデメリット」
「アプリの宣伝方法」

分科会Ⅲ　グローバル課題から解決策を提言する

①小林美蘭　本田美羽　渡辺彩智（新潟県立国際情報高等学校）
タイトル：「今の自分にできること」
ディスカッション：「途上国などに教育を広めていくには、どうすればよいか」

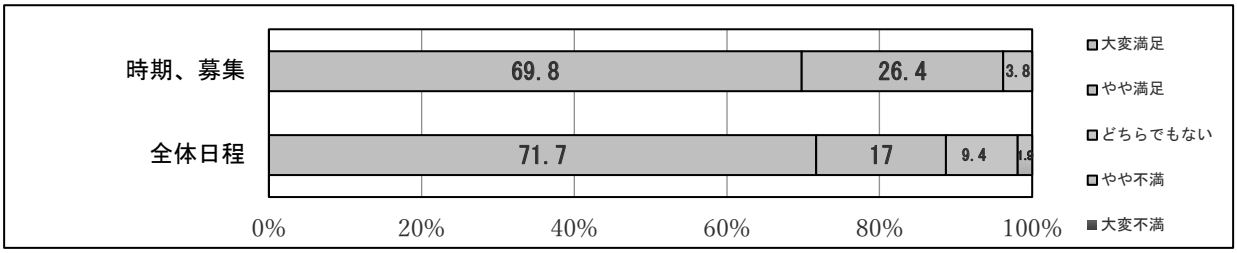
②宮澤菜月　三井怜　斉藤伊麻里（石川県立金沢泉丘高等学校）
タイトル：「国境なき食品成分表示」
ディスカッション：「日本で外国人が『言語』に関して抱えている問題を解決するために
どのような対策が求められているのか」

③出田隼也（長野県上田高等学校）
タイトル：「日本人の寄付に対する意識」
ディスカッション：「日本人に、寄付に対してもっと意識を抱いてもらうにはどうしたらいいのか」

閉会行事

シェアリング・生徒代表挨拶・来賓挨拶

3　生徒の感想，アンケート



（1）時期、募集について

○	×
・参加が決定してから、資料提出までも時間があり、余裕を持って準備することができました。事前の接続テストがあったことで、はじめてのオンラインの取り組みで不安な点もなくなりました。 ・オンラインでの開催は県外への移動が不要でよかった。	・募集の紙が配布された当初は、どんなことをする会なのかも分からず分科会の希望を決めたりすることとなり、内容を全く把握できませんでした。

（2）全体日程について

○	×
・特に司会の方の進行がスムーズで良かった。 ・大人数で、さらに通常よりやりづらいであろうオンラインでの開催にもかかわらず、資料のおかげで戸惑うことなく参加することができました。	・資料の共有について、各校で共通のクラウドを運営すればもっとスムーズに資料の共有や、事前事後の活動が行いやすいと感じた。 ・分科会ごとにタイムテーブルが違ってもいいかと思います。

4　評価と考察

例年は本校を会場に開催していたが、今年度は新型コロナウイルス対策のため、web 会議アプリ「Zoom」を活用してのオンライン開催となった。各分科会のプレゼンテーション数を３つにしぼり、代わりにディスカッションの時間を長く確保した。画面越しの話し合いとなったが、画面共有機能を巧みに活用したり、発言の仕方を工夫したりして、オンラインならではの活発な意見交換がされる様子が見受けられた。参加者からは、身の回りの諸課題に対する考えが深まったり、自らの今後の行動に活かそうと考えたりするなど、有意義なディスカッションができたという感想が発表された。インターネットの進歩により、物理的な距離を飛び越えて、人は手を取り合うことができるということを実感できるサミットとなった。来年度以降の開催形態は今後検討をする必要があるが、限られた条件下でも諸機関と連携しながら、最大限の学びを得られるサミットを目指したい。

Ⅳ 国際的な学び

Ⅲ　海外研修・海外交流

海外研修・海外交流の概要

WWLテーマ　「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってＳＤＧｓを探究する

	2年生	1・2年生		
Ⅲ海外研修	台湾研修旅行 2年全員　11月実施	ヒューマン アクト イン マニラ 選抜　　3月実施	ボストン スタディ プログラム 選抜　3月実施	カンボジア井戸プロジェクト ３月実施

１　ねらい

世界のグローバル課題を課題研究として学ぶなかで、研修先の国・地域の特性や諸問題へ視野を広げ、日本とアジア諸国について共有できる課題に関して、意見を交換したり、自分の考えを発表する。そのプロセスを通じ、生徒がグローバルに考え、かつ身近な地域でも活動する意欲・行動力を育成できる海外研修プログラム開発を目指す。

２　概要

（１）台湾研修旅行

総合的な探究の時間の一環として、２年次の秋に全員が台湾での研修を行う。現地では、高級中学校（日本の高等学校に相当）を訪問して同世代の価値観や問題意識に触れたり、大学や研究施設など様々な連携機関でフィールドワークを行う。訪問、研修先では研究課題をテーマに英語でプレゼンテーションやディスカッションを行い、学びの幅を広げる活動を取り入れる。

（２）ボストン スタディー プログラム

２年次の春休みの期間を活用し、ハーバード大学やマサチューセッツ工科大学、周辺施設のラボでの研修を通じて、知の最先端に触れ、将来的に地球規模の問題の解決に取り組む人材の育成を行う。プログラム参加者は、事前研修として約 20 時間にわたり、それまで積み上げた各自の課題を掘り下げることや英語プレゼンテーションの準備を行う。帰国後は、研修で得た知見を活かし、さらに課題研究を深化させ、その成果を学校内外で発表し、地域課題にも視野を広げる。

（３）ヒューマン アクト イン マニラ

フィリピンで貧困層の支援を行う認定ＮＰＯ法人「アイキャン」の活動に参加し、世界の格差問題や環境問題を体験して、支援の継続性や根本解決の困難さを学ぶ研修。現地で約１週間に渡って、問題の解決に向け自分は何ができるのかを考える。現地の抱える社会課題の学習や初級タガログ語講座等、約 20 時間程度の事前学習を実施し、研修ではマニラ市内での青少年との交流のほか、大学、現地の専門機関、日系企業等を訪ね、フィリピンの歴史や文化、社会課題を学ぶアクティビティーも組み入れる。旅行後にも、参加者全員が振り返りを行うとともに、各報告会や高校生会議等でプレゼンテーションを行ったり、国内や地域の問題に視野を広げる。

（４）カンボジア井戸プロジェクト

ＳＤＧｓの目標の一つである安全な水へのアクセスを可能とするために、高校生が主体となった草の根レベルでの活動として、自らの手で資金を集め、カンボジアのシェムリアップ地区へ実際に赴き井戸を掘り、現地の人々に寄贈するプロジェクトを実施する。安全な水に関わる現状を理解し、持続可能な支援の本質を考え、井戸を現地に実際に寄贈するまでの事前学習、渡航準備、資金集めや広報活動等の一連のプロセスの一切を自ら考え実行するＰＢＬ型の学びを提供する。

プロジェクトの推進には、それぞれの専門家から水・環境問題や海外支援の方法、現地クメール語等に関わるレクチャーを受けたり、自力で資金集めを行ったりする。

Ⅳ 国際的な学び

Ⅲ　海外研修・海外交流　2学年台湾研修旅行代替のオンライン交流

1　ねらい

・台湾高校生との異文化交流　・英語コミュニケーション能力向上

2　概要

2学年　8クラス　合計319人

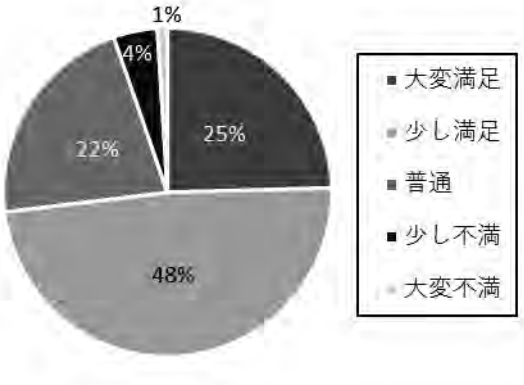
台湾の交流校　　国立新竹女子高級中学、国立苗栗高級中学
　　私立延平高級中学、国立科学工業園区実験高級中学

本校が台湾各校に提示した原案

・1クラス（40名）、計2クラスの交流　・Google Meetを使用
・時期：9月～11月、50分×2回
・Session 1：あいさつ&街・学校紹介（事前に上田市・上田高校の紹介ビデオを作製）
・Session 2：プレゼンテーションもしくはディスカッション・質疑応答

9月～10月　代表生徒による事前打ち合わせ　　11月～12月　クラス毎、台湾の高校と交流

3　生徒の評価



生徒の感想

・台湾の高校生の話を聞くことができたこと、こちらから台湾の高校生に対して英語で発信できたことが良かった。
・英語を通じて他国の人々と会話するという貴重な体験ができた。
・時間が少なかったため、できることが限られてしまった。
・台湾の生徒と交流できて楽しかったが、オンラインだと聞き取りにくく、分からない部分があった。

4　各校の交流

1・6組　【国立新竹女子高級中学】　11月5日（木）・12月3日（木）

1組（50 min.×1 session）

・5グループに分かれて交流（本校の生徒は各グループ8人）
・1時間しか時間が確保できなかったため、事前に各グループの紹介動画を撮り、共有
・街・学校紹介のビデオも事前に共有、お互いビデオを見た上で交流
・交流当日は、上田高校生が10分間のプレゼンテーションを行ったのち、質疑応答

グループ紹介のビデオより（1組）

交流当日の様子（6組）

街紹介のビデオより（新竹女子）

Ⅳ 国際的な学び

交流当日の様子（１組）

６組（50 min.×2 sessions）

・５グループに分かれて交流（本校の生徒は各グループ８人）
・1st Session：お互いの街・学校紹介、質疑応答
・2nd Session：両校によるプレゼンテーション・質疑応答

生徒の感想

・自分の話す英語が台湾の人に伝わっていたので少し自信がついた。
・もっと積極的になって、様々なジャンルについて話をし、共通の話題を見つけられれば良かった。
・他国の人とのコミュニケーションは、顔の表情が大事だと分かった。

５・７組　【国立苗栗高級中学】　11 月 11 日（水）

“we teach you make”の実施。両校がお互いに自国の料理を紹介し、調理実習をした。事前にレシピを交換し、当日は一方が作りながら説明をし、もう一方がそれを聞きながら調理をした。

５組（2 hours×1 session）

・タロイモボール(台湾スイーツ)作り（苗栗の生徒が教える）
・上田高校生によるお礼のパフォーマンス（二人羽織）

タロイモボール（５組）

７組（2 hours×1 session）

・お好み焼き作り（上田高校生が教える）
・苗栗によるお礼のパフォーマンス（手話で歌の披露）

生徒の感想

・国や言語が違っても基本的に考えることは同じで、国籍や言語の違いがあるからといって身構える必要はないと身をもって分かった。
・英語で人に説明をする時、どのような表現を使えば相手に分かってもらえるか工夫して伝えられた。
・台湾の料理を作るだけではなく、実際に現地の高校生から教わることで、楽しく交流できた。
・難しい単語や聞き慣れない単語を分かりやすく言い換えることができたらよかった。

交流当日の様子（５組）

交流時のパソコン画面（７組）

手話で歌を披露（苗栗）

２・３組　【私立延平高級中学】　11 月 18 日（水）～11 月 20 日（金）

２組・３組（50 min.×2 sessions）

・クラス単位で交流
・1st Session：お互いの街・学校紹介、質疑応答
・2nd Session：両校によるプレゼンテーション・質疑応答

交流当日の様子（延平）

Ⅳ 国際的な学び

生徒の感想

・言語が異なっていても視覚的に伝わりやすい画面構成を考える経験ができた。
・日本人以外の方と交流したことで、さらに多くの人と話してみたいと思い、もっと英語を上手く話せるようになろうと思えた。
・プレゼンの時、メモを見ながら話してしまったから、少しでも暗記してくればよかった。

交流当日の様子（３組）

交流当日の様子（４組）

タピオカ作りに挑戦（８組）

４・８組 【国立科学工業園区実験高級中学】11 月 26 日（木）・27 日（金）12 月 9 日（水）・10 日（木）

４組・８組（50 min.×2 sessions）

・５グループに分かれて交流（本校の生徒は各グループ８人）
・1st Session：お互いの街・学校紹介、質疑応答
・2nd Session：両校によるプレゼンテーション・質疑応答

生徒の感想

・スライド作成、発表原稿作成をし、プレゼンテーション力が向上した。
・台湾の方のプレゼンテーションには英語と日本語が書いてあって分かりやすかった。そういう細かい工夫で伝わりやすさは変わったと思う。
・相手の国の言語（単語だけでもいい）を少し話せればより面白かったかなと思う。

５　評価と考察

今回は、各クラス１時間もしくは２時間、クラス対クラス・グループ対グループの交流となった。「zoom」によるオンライン方式とはいえ、生徒たちは活き活きと交流に取り組んでいた。大人数で交流することで作り出せる一体感ももちろんあるが、一対一で交流することで、より自分事として交流に臨むことができるだろう。そのためには端末やインターネット回線、教室の確保などハード面の準備・調整をする必要がある。どれくらいの回数、どのような交流をすることが生徒にとってより充実したものになるかということを、交流のたびに考え、検討していきたい。

今後のオンライン交流の展望（生徒からの意見を交えて）

・スマートフォン等を使って、実際にビデオ通話をしながら学校内や街を歩き、紹介することで、臨場感が味わえるとともに、会話がはずむことが期待できる。さらに、その後の交流で、ビデオ通話の中で紹介した食べ物や特産品などを一緒に作ることも可能である。
・海外の高校生が受けている授業をうける。（台湾の高校の授業をうける。）
・台湾の高校生からアニメクイズを出されて面白かったという意見があった。単なるプレゼンテーションでなく、クイズ大会のように聴衆参加型の活動にするといった工夫ができそうである。
・長期にわたって台湾の高校生と一つのプロジェクトを行う。（共同研究や映画作製等）

Ⅳ 国際的な学び

Ⅲ　海外研修・海外交流　ボストンスタディツアーオンライン版

1　ねらい

ハーバード大学やＭＩＴなど、世界の最高峰の学術機関で活躍する講師陣に対して事前に準備したプレゼンテーションを行い、論理的構成からなるアカデミックプレゼンテーションの基礎を学ぶ。講師との意見交換を通して豊かな最先端教養に触れ、学問の枠を超えて異分野が協力し合う学際的研究の重要性を理解する。

※本研修は、2019 年度 3 月に中止となったボストンスタディツアーの代替研修として企画した。

2　概要

（1）研修方法：４日間の日程で、テレビ会議システム Zoom を使用し、ボストンの講師陣とリアルタイムでつなぎ、研修テーマ：「ＳＤGs で考える上田の未来と世界の問題」に基づいたレゼンテーションについて指導を受けるとともに、課題について講師と意見交換を行う。

（2）参加者：本校生徒１６名　（３年生６名　２年生８名　１年生２名）

（3）企画協力：ボストン ブリッジ・日本旅行長野支店（株）

（4）研修内容と講師

7 月 22 日（水）ボストンについての基礎知識と「学際都市」について

講師：蝦名　恵氏・猿橋　あや子氏（ボストンブリッジ）

7 月 23 日（木）テーマ：日米大学入試制度とリーダーシップ論

講師：Dan Bohrs 氏（パインメナーカレッジ英語研究所プログラム総括責任者）

Cyrus Konstantinakos 氏（パインメナーカレッジ教授）

生徒発表①：Renovation of Education in Japan

生徒発表②：Welcome to Ueda; Rich History, Local Delicacies, and Relaxing Hot Springs!

7 月 24 日（金）テーマ：持続可能で災害に強い上田のまちづくり

講師：Paul Pettigrew 氏（マサチューセッツ工科大学建築学スクール教授）

生徒発表①：Natural Disaster Resistant Ueda -To Secure elderlies safe & Swift evacuation

生徒発表②：Environment & Human-Friendly Public Shelter

7 月 25 日（土）テーマ：移民・持続可能な社会政策

講師：Cathryn Clüver Ashbrook 氏

（ハーバード大学ケネディ政策学スクール　外交プロジェクト主任）

生徒発表：Guest workers & Immigrants as our Brotherhood

3　生徒の感想，アンケート

・自分の世界が広くなり、ものごとへの見方が変わりました。歴史に学ぶことの大切さを知りました。

・このプログラムに参加しなかったら、自分が本当に何をしたいのかに気づくことができなかった。

・私が今学んでいる自分が学びたい分野ではない知識は、もしかすると自分が学びたい分野の「解決策のヒント」になるかもしれない。勉強する意味や世界を知ることの価値を理解することができた。

4　評価と考察

ボストンへの渡航は中止となったが、本研修の目的である「学問の本質に触れる」機会を得ることができた。海外とのライブオンライン研修は初めての試みであり、音声トラブルへの対処など苦労したが、参加者たち熱心な講師の指導を受け、幅広い視野と思考する力の必要性を学び、進路選択の一助となった研修であった。

Ⅲ　海外研修・海外交流　ボストンスタディープログラムオンライン版

1　ねらい

教科で日頃学習している英語の知識を用いて、論理的構成によるプレゼンテーションを学ぶことにより、ワールドワイドなコミュニケーション能力を養う。学術都市ボストンのハーバード大、MITといった世界最先端の学術機関で活躍する研究者とのオンラインによる意見交換を通じて、先端教養に直接触れ、世界を知るとともに、自分を知り、自分の未来を見つける機会とする。

2　概要

日　　時　　3月１７日（水）～２０日（土）
参加生徒　　１年１０名（女子５名、男子２名）　計７名
場所　　上田高校と米国各講師との Zoom meeting で結んだ会議形式
企画協力　　株式会社 BOSTON BRIDGE to higher education
（代表　蝦名　恵 （えびなさとし））
指導　蝦名　恵、　猿橋　あや子　（ボストンブリッジ）
指導　髙野　芙美　補助　横川　憲

3　研修方法

（１）参加者は上田高校で行われる約 10 回の研修を通して講師による講義およびアカデミックプレゼンテーション（学術発表）の基礎を学ぶ。
（２）「持続可能なまちづくり」を研修のコアテーマとし、グループに分かれ様々な分野から共通のテーマにおける課題解決案を提案する。
（３）研修の集大成として、最終の４日間において、オンラインテレビ会議システムでボストンの講師陣とリアルタイムでつなぎ、テーマに基づいたプレゼンテーションへの指導を受けるとともに、テーマに関するディスカッションを行う。

4　基礎研修の内容

（１）１２月１３日（日）オンライン研修オリエンテーション
・ハーバード、MIT の学生も学ぶアカデミックプレゼンテーションの基礎を知る
・アカデミックプレゼンテーション基礎講座　スライド作成について
（２）１２月１５日（火）プレゼンテーション決め・
・グループワーク：プレゼンテーションスライドの作成開始
（３）12 月 22 日(火)，1 月１２日（火）,1 月１９日（火）PPT スライド作成
・日本語でスライドのアウトラインを作成
・必要なデータ、調査、インタビューを考える
・各自持ち寄ったデータを論理的に並べ、スライドを英語で作成
・グラフの書き方、引用、論理構成などを再確認、スライドの完成
（4）１月２６日（火），２月２日（火），２月９日（火）発表練習・PPT スライド調整
・発表マナーやスライドの操作や資料の見せ方などを学ぶ

Ⅳ 国際的な学び

Ⅲ　海外研修・海外交流　ヒューマンアクトインマニラ　オンライン版

1　ねらい

(1)　プログラムを通して、異文化理解、多文化共生、国際関係など多角的な視点でグローバル課題を発見し、課題を分析し、解決策を探究出来る人材を育成する。NGO 団体や政府、企業などの発展途上国における様々な立場での役割を学び、比較して考察する。グローバルとローカルの両面から課題が探究できるリーダー性の基礎を作る。

(2)　現地で活動する NPO 法人アイキャンのスタッフや住民の方との交流を通して、フィリピン住民参加型の自立的な生活向上について学ぶ。積極的に意見交換や交流をしながら学ぶ。

2　研修方法

現地のビデオ映像を見たり、オンラインテレビ会議システムでフィリピンとリアルタイムでつなぎ、NPO 法人アイキャンのスタッフや住民の方との交流を通して、フィリピン住民参加型の自立的な生活向上について学ぶ。積極的に意見交換や交流を行う。

3　研修内容

【研修期間】2021 年３月

・事前研修（基礎理解）　（３月初旬　講師来校し講演会）

・オンラインセッション　（2021 年３月 17 日～19 日の４日間　オンライン開催）

回	日時	内容
事前研修	*3月初旬*	**フィリピンスタディープログラム　開講式** ・プログラムの概要説明・講師紹介　・フィリピンの現状、課題の学習
オンラインセッション	3月 17 日 （水） 12:00-15:00	・オリエンテーション（研修概要、フィリピン概要、自己紹介等） ・アイキャン・フィリピン人スタッフとの交流 ・アクティビティ①
	3月 18 日 （木） 12:00-16:00	１、路上の子どもたち ■貧困問題とそこで闘っている元路上の青年たちから学ぶ ・路上の子どもたちのプロジェクト事業地の紹介（ビデオ・パワーポイント） ・ブルメントリット地域散策・家庭訪問実施（ライブ中継） ・「子どもの家」の子どもたちの紹介、インタビュー ・カリエメンバー紹介、アクティビティ②
	3月 19 日 （金） 12:00-16:00	２、パヤタスごみ処分場 ■ごみ山からの健康被害や貧困に対し、母親たちが協力して運営する住民組織から学ぶ ・ごみ処分場周辺に住む人々のプロジェクト事業地と背景紹介（ビデオ・パワーポイント） ・地域散策→家庭訪問（ライブ中継） ・住民組織（SPNP・PICO）紹介、インタビュー（ライブ中継） ・フェアトレード商品説明、販売
	3月 20 日 （土） 12:00-17:00	３、世界の課題解決に取り組む日本人 ■様々な立場から世界の課題解決に取り組む日本人の話を聞き、キャリア形成における視野を広げる 様々なフィールドで活躍するゲスト３名を呼び、講演及び質疑応答 ４、ふりかえり　・振り返り：アクティビティ③

Ⅵ その他（生徒の自主活動）

Ⅲ　海外研修・海外交流　　カンボジア井戸プロジェクト

１　ねらい

カンボジアの都市部は水道が整備されているが、農村部で暮らしている人々は、今もきれいな水を得ることができずにいる。農村部では、家の近くにため池を作り、そこに溜まっている泥色をした不衛生な水を生活用水として使用している。そのため水が原因で感染性胃腸炎など様々な病気を発症し、中にはその水が原因で命を落とす子どもやお年寄りがたくさんいる。そこで生徒たちは、農村部に井戸を贈り、一人でも多くの命を救いたいと考え、平成 29 年度（2017 年度）来、自発的にカンボジア井戸プロジェクトに取り組んでいる。

２　概要

（１）井戸プロジェクト活動理念

支援活動を DEWS と位置づけ、次の４つの理念のもと、積極的に活動してきている。

①**D**oing what we can　（一人ひとりの意志の基に、無理なくできることをする支援）

②**E**veryone's happiness（自分も笑顔、相手も笑顔になれる支援）

③**W**ider reach（一緒に活動できる仲間をふやす支援）

④**S**ustainable progress（息の長い支援活動、メインテナンスの充実した支援）

（２）井戸プロジェクトの取り組みと内容

①有志の会を発足（毎年 3 月に組織を解散、4 月に新組織を発足）

②バザー品集め（回収目標物品数 200 品）

③ハガキ・切手集め（2 人で一枚を目標、全校で約 500 枚）

④井戸を掘りにカンボジアへ

＜旧式な井戸掘り作業＞

3 月下旬の終業式後、プロジェクトの最終章として、現地への井戸掘りツアーを実施する。井戸を掘る場所は、現地のコーディネーターが、複数の村長さんに問い合わせをし、今一番必要な場所を選定していただく。井戸掘りの補助は現地の業者に依頼している。井戸掘りは、30 度を超す炎天下の中（日陰となるところはない）でおこなう。水分補給に注意しながら、細パイプを人力で地面の中に埋めていく。井戸を掘る方法は、今の文明社会では考えられないほど旧式なやり方ではあるが一番安全な方法である。

３　生徒の感想から

「カンボジア井戸プロジェクトを通じて『どんな困難に直面していても、自分のことで精一杯でも、目の前が真っ暗でも、忘れてはいけないことがたくさんある。盲目になってはいけない。』という大切なことに気付かされました。過去の反省や学んだことを活かし、今後どんなに苦しくても、大変でも、“初心”を忘れずに井戸プロジェククトに関わっていきたい。」

４　評価と考察

令和元年度（2019 年度）はバザー品数は 350 品、ハガキ・切手は、図書館や地域の協力もあり 600 枚を集めることができた。いずれも目標を上回り、最終的には井戸 2 基分の資金を集めることができ、生徒の活動は高く評価できる。しかし、コロナ禍によりカンボジアでの井戸掘りは中止せざるを得なかった。また、今年度も準備活動をしたものの、残念ながら現地への渡航はかなわなかった。

有志生徒は、取り組んだ体験を熱く後輩に語り続け、後輩は先輩の声をしっかりと心で受け止める。生徒主体の井戸プロプロジェクトが、今後もカンボジアへ井戸と笑顔を贈り続けていくために、より多くの高校生や大学生、さらには企業とも目的を共有できるものに進化させていく必要がある。

Ⅳ 国際的な学び

Ⅳ 研究発表　　留学フェローシップ

１ ねらい

グローバル化が加速する社会において求められる豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を涵養するため、多様な価値観に触れる機会を設定し、高校生に国際的な視野を持たせ、自らが主体的に行動できるようなグローバル人材の基盤を形成する取組の一環として、海外大学の学生や留学経験者等による海外進学・留学講座を実施する。

２ 実践

（１）日時　　令和２年７月 26 日(日)14 時 00 分～16 時 00 分

（２）場所　　上田高等学校

（３）講師　　海外大学へ進学した現役大学生　６名

NPO 留学キャラバン隊のメンバー（敬称略）・留学フェローシップ実施時点での学年及び専攻

杉下 はる　　ヴァッサー大学（アメリカ）　新２年　政治学専攻

久野 珠樹　　イェール大学（アメリカ）　新１年　医療人類学専攻予定

道岡 瞳子　　ピッツァー大学（アメリカ）　新１年　発達心理学・ミュージカル専攻予定

高島 崇輔　　ブリティッシュコロンビア大学（カナダ）　新２年　発達心理学専攻

佐野 史佳　　ワシントン大学（アメリカ）　新２年　生化学・生物学専攻

林 文夫　　キングス・カレッジ・ロンドン（イギリス）　新２年　政治経済学専

（４）　参加生徒　本校生徒　14 名

＜実施内容＞

参加生徒は、海外大学に通う大学生による、海外への進学を決めた理由や進学プロセス、大学生活の具体的な様子についてのプレゼンテーションを聞き、海外留学に関する基礎知識を得た。また、理想の留学について考えるワークショップを通して、自身の目的に適した留学先や専攻を、場所や設備、大学の研究力など様々な観点から考えた。最後の質疑応答の時間では、必要な語学力やその向上のさせ方、奨学金に関する情報、大学生活に関するより詳しい情報などを質問し、不安点や疑問点を解決した。

なお本年度は、本実践はオンラインで行われ、各生徒はパソコンを用いて講師とやりとりをした。

３ 生徒の感想

・海外留学をすることで、日本の大学とは違った環境で、違った仲間と勉強ができるため、新たな発見ができそう。
・海外の方が課題は多いけど、自分のやりたいことは自分次第で色々できるとわかった。
・各国の日本との生活習慣や文化の違い、日本人のコミュニティーの様子などについて知ることができた。
・大きな図書館や寮のこと、教授のこともしれて良かった。
・海外進学といっても国ごとに全然金額が違って、財団から奨学金をもらうこともできることが分かった。
・自分の WHY を書いたりしてしっかりと決めることで、自分にあった学校を決められる。
・漠然としていた「留学してみたい」という気持ちがより明確なものになりました。留学生からの生の声を聞ける機会は少ないのでとても参考になりました。

４ 評価と考察

本実践のねらいは、多様な価値観に触れる機会を設定することで、生徒が国際的な視野を持ち、自らが主体的に行動できるようなグローバル人材としての基盤を形成することであった。実践後の生徒の感想をみると、日本とは異なった環境や人間関係に期待を持ったり、生活習慣や文化の違いに着目したりしており、国際的な視野の一部を養った生徒がいたことが分かった。また、自身の留学目的を深く考えたり、各国の大学施設や奨学金制度を知ったりするなかで、理想の留学を実現させるための行動を考える生徒もいたことから、主体的に行動する意志が培われたことも分かった。したがって、本実践のねらいはおおむね達成できたといえる。

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

Ⅳ　研究発表

研究発表の概要

ＷＷＬテーマ　「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってＳＤＧｓを探究する

	１年生	２年生	３年生
Ⅳ研究発表	ＧＳ報告会 ＧＳⅠ　１年全員　２月	ＧＳ報告会 ＧＳⅡ　２年全員　２月	北陸新幹線サミット ＧＳⅢ選択者　６月
	松尾ゼミナール　グローバルに活躍する社会人に学ぶとともに発信（とりやめ）		
	アカデミックプレゼンテーション　希望者発表　７月　10月		

１　ねらい

課題研究の発表を通じて、効果的に研究する意欲を伸ばし、成長していく姿を自らが発信し、報告できる方法を研究する。発信活動は、課題研究を更に深め、他校や地域におけるプレゼンテーション大会への主体的な出場につながっている。その過程で生徒の目的意識や自己理解が明確になり、さらに学習を深めていこうとする意欲につながることが期待される。

２　概要

校内で様々な課題研究発表の場を設定したほか、校外でのコンテストや発表会への参加を『ＷＷＬ通信』などを通じて呼びかけて、発信の場を与えた（詳細は後述の「参考資料　令和２年度ＷＷＬ研究開発活動」参照）。以下はその一部である。

11 月７日（土）に行われた「信州ベンチャーコンテスト 2020」（主催：信州ベンチャーコンテスト実行委員会）高校生部門で「“押し”の芸術を着よう！」という発表で準グランプリに輝いた本校生。

２月６日（土）に開催された本校ＷＷＬ活動の最大行事のＧＳ報告会。２年生が全員で課題研究のポスターセッションを行い、１年生は自らの研究の参考とし、全職員が指導する。

２月 13 日（土）、青山学院大学地球社会共生学部ＧＳＣ学生連合の主催により、佼成学園女子中学高等学校（東京都）と同連合、本校が参加してオンライン形式で開催された課題研究の合同発表会「STUDENT WORKSHOP」。２年生 15 名が参加した。

予選を突破して、３月 21 日（日）開催の「ＷＷＬ・ＳＧＨ×探究甲子園」（主催：関西学院大学など）でのプレゼンテーションに向けて練習中の本校２年生。発表テーマは「地域で目指す多文化共生」。

Ⅲ より深い学び（探究的な学び）

Ⅳ　研究発表　　第１回アカデミックプレゼンテーション

１　ねらい

海外研修体験者を中心とした生徒のプレゼンテーション能力の向上と、WWL 事業の一般への公開

２（１）日　時　7 月 11 日（土）12 時 20 分～13 時 45 分

（２）場　所　上田高等高校　会議室

（３）助言者

直井　恵氏　（ＮＰＯ法人 ICAN 代表）

（４）発表内容

①私たちの国際協力―そうだ，井戸を掘ろう。―

②A lot of differences between the U.S.A. and Japan

～私のアメリカ留学体験～

③別所線の力

④Foreign Labors and Immigrants as our Brotherhood

⑤遠い国での１年間～ベルギー留学報告～

３　聴衆のアンケートや、助言者の講評より

・支援をして終わりではなく、その後を考えることで支援をする側の自己満足ではなく、より効果的な支援ができ、質の高いボランティア活動に近づいていけると思った。

・一方的に経験を通して感じたことを話すのではなく、私たちに問いかけながらプレゼンしているのが、とても聞きやすかった。風刺画やデータ、言葉の引用などで、とても分かりやすく説得力があった。

・質問されたことに対して自分の経験と結び付けていて良かった。

４　評価と考察

この行事は本来 4 月 18 日の公開授業・2 学年ＰＴＡ総会にあわせて実施され、中学生や保護者、さらには入学後間もない 1 年生などに本校のWWＬ活動を紹介していくものだったが、今年度はコロナ禍のなか実施が遅れるとともに、３月のスタディツアーが全て中止となったため、昨年度の 10 月に台風被害で発表の機を逸した生徒の発表が中心となった。しかし生徒も意欲的に取り組み、質疑応答も活発に行われて、学校全体にも活力を与えることとなった。

Ⅳ　研究発表　　第２回アカデミックプレゼンテーション

１　ねらい

自らの活動を地域のなかで広く発信することを通じて、グローバルとローカルの視点から課題解決を考察する気運を醸成していく。

２（１）日　時　10 月 10 日（土）12 時 20 分 ～ 13 時 30 分

（２）場　所　上田高等高校　会議室

（３）助言者

曽根原 好彦氏　宮下 美和氏　（以上長野県教育委員会事務局学びの改革支援課高校教育指導係より）

直井 恵氏　（ＮＰＯ法人 ICAN 代表）

（４）発表内容

①ボランティア活動を通して

②格安ファッションのカラクリ

③外国ルーツの子供達の学習支援

④習慣は確実に感染を防ぐ

３　聴衆のアンケートや、助言者の講評より

・内容が分かりやすく、スライドと照らし合わせた時にすごくまとまっていると思った。

・「数回しか使わない洋服を捨てているのは私だけだろうか」という問いから 150 人アンケート⇒

高校生クローゼット革命という発想だけでなく行動とのリンクがすごいと思った。

・学業や部活に忙しい高校生が、このように問題意識を持ち、課題の研究に取り組んでいることに驚いた。

４　評価と考察

この行事は、本来夏季休業中の海外体験の発表が軸になって行われるものだったが、コロナ禍のなか、そのかわりにGSⅢ課題研究や地域での諸活動を通じて課題解決のために尽力する高校生の発表を軸とした。聴衆のなかには、この発表に接したことにより先輩の活動に加わった生徒もおり、活動の裾野が広がる契機ともなった。

Ⅵ その他(生徒の自主活動)

Ⅳ　研究発表　　マイプロジェクトアワード長野県Summit（高校生学びのフォーラム長野）

1 ねらい　　主催：長野県教育委員会

県内の各校の「総合的な探究（学習）の時間」や各教科等で行われている「探究的な学び」及び生徒自らの発想で取り組んだ探究活動の成果を、学校の枠を超えて発表し合い学び合い、生徒の主体的な課題の発見や、自らの力で解決することに向けて試行錯誤する学習の楽しさを共有するとともに、他者のアドバイスを受けて自分を成長させる機会にする。

2 概 要

（1）**日　　時**　12月12日（土）９：30～17：00　（１日目）　　13日（日）９：00～17：00　（２日目）

（2）**場　　所**　オンライン開催

（3）**内　　容**　「芸術を着よう！-自分の好きな芸術家をファッションで応援・信州から発信-」
「学習支援の可能性」
「ことばのチカラ-自己の確立-」

3 生徒の感想

（1）**成果と課題**

① 準備段階
- スライド１枚に載せる情報量を多くしすぎないことを実感した。
- ベースとなるスライドのデザインが派手で、シンプルな色にするとしまって見えた。

② 当日の発表
- 手書きのスライドがあり、真似をしてみたいと思った。
- 話を始める前の問いかけがあったらもっといい発表になったと思う。

（2）**全体の感想**
- 今までに出会ったことのないプロジェクトに出会うことができ、新しい世界が広がったように思う。
- 他の人のプレゼンテーションを見るだけでなく、その人たちがどのようなことを経てこのプレゼンテーションにつながったのかということがわかり、興味関心が高まった。
- 自分自身の活動の振り返りや振り返ったことで生まれた新たな発見があり、より調べてみたいことなども見つかった。

4 評価と考察

NPO法人カタリバの支援を受けて例年実施されている、県内の高校生が自分の自主活動や探究活動を持ち寄って発表するプレゼンテーション大会である。今年は３名の生徒が参加して、うち１名が予選を突破して本選にまで進出、長野県教育委員会賞を受賞した。内容は自らの米国留学体験をもとに、地方の無名アーティストの絵をＴシャツなどにして売り出していくことで地域の経済力向上にもつなげようというものだった。予選を突破できなかった生徒も、予選集団内での議論や司会の大学生のアドバイスを受けて、充実感を得た様子が感じられる。

Ⅳ　研究発表　　第４回和歌山県データ利活用コンペティション

1 ねらい　　主催：和歌山県

和歌山県は総務省統計局とともにデータに基づく統計的思考の育成に取り組んでいる。本年度のテーマは「観光とまちづくりーSGDsの観光施策ー」。
１年ＦＷでの提案を報告しました。第一次審査会の結果、高校生部門89点・大学生部門40点から、高校生部門6点・大学生部門6点の提案が選定された。

2 概 要

（1）**日　　時**　12月19日（土）

（2）**場　　所**　和歌山県データ利活用推進センター会議室（南海和歌山市駅ビル5階）

（3）**内　　容**

最終審査に選定されたチーム名は「マコモ大好きgirls」。
審査項目は、プレゼンテーション能力・ポスターづくり・質疑応答。１年生でありながら全国の舞台で、堂々と受け応えすることができた。結果は全国４位（協賛企業（wi2）賞）。
全国のレベルを知り、次へのモチベーションが高まった。

3 生徒の感想

（1）**成果と課題**

① PowerPointによるプレゼンテーション
- 調べたことを全てプレゼンするのではなく、核となる主張に絞る。
- 各スライドのアニメーションを統一すると視聴者は集中できる。

② ポスターづくり
- PowerPointスライドではなく、ポスターとしての書式にこだわった。
- セリフもポスターセッションのため、視聴者とのやり取りを意識した。

（2）**全体の感想**

全国レベルの審査会では、データに基づいた確かな分析能力は当然必要だが、それだけでなく質疑応答への対応がとても難しく、一番求められる能力となる。そのためには幅広く調べ、さらに自分の提案を自分自身で実際に手足を使って経験しておくと、説得力をもち視聴者にも納得されやすい回答ができるようになる。

4 評価と考察

SDGsをふまえた観光やまちづくりのために、これまでは特産品や観光名所をSNSで紹介するといった提案があまりにも多かった。今回、全国レベルの大会に参加してわかった探究の視点は３つある。①さらにターゲット層を絞ること。②自分たちの地域だけを見た「点」としての発展よりも、同じ特色をもった地域と連携した「面」による発展を目指すこと。③コストを計算しビジネスモデルとしての成立を実証すること。
これからの上田高校の探究活動はズクを惜しまず手を動かし、地に足の着いた提案になることを目指したい。

Ⅲ より深い学び(探究的な学び)

Ⅳ 研究発表　WWL全国高校生フォーラム

1 ねらい　主催：文部科学省、国立大学法人筑波大学（SGH幹事校管理機関・WWL幹事管理機関）

全国のＷＷＬ等の指定校に通う国際的課題意識を持った生徒が集まり、SDGs17の目標に関してディスカッションする機会を通じて発信能力を高め、研究課題について英語でわかりやすく議論する力や積極性を養う機会とする。

2 概 要

（1）**日　時**　12月20日（日）13時00分～16時00分

（2）**場　所**　全高等学校オンライン参加

発表タイトル　「あらゆる上田市在住外国籍市民を包括的に支援する多言語アプリ」

3 生徒の感想

（1）成果と課題

① プレゼンテーション〈準備〉

・先生のおかげでユニークな案を提案することができました。

・もう一段階でも、行動に移せることがあればよかったと思います。

・強調の仕方など基本的なことを学べました。

・もっとセリフを覚えてからやれば、もっとリラックスしながらできたと思います。

② プレゼンテーション〈発表〉

・勇気をふりしぼって質問してみました。
相手が理解しようとしてくれたおかげで通じました。

・そもそも英語力をもっと伸ばして、もっとアカデミックなことも話し合えるようになりたいと思います。

（2）全体の感想

・今回、全国の意識が高い高校生と出会えて、すごく刺激をもらいました。
活動しているフィールドは違うものの、同世代の高校生と問題をシェアしながら、頑張りたいと思いました。

4 評価と考察

今年度は、英語によるポスタープレゼンテーションの動画を事前に撮影し、当日はZoomを使ってテーマごとの分科会ごと、英語によるディスカッションを行った。8校の代表メンバーが進行役の大学生のリードの元、ディスカッションを行った。プレゼンテーションでは、自ら行ったインタビューの考察をわかりやすく説明することができた。当日は他校の発表に質問するなど、積極的な姿勢が見られた。世界規模の課題を英語で発信したり、研究テーマを通じた他校や留学生とのネットワーク作りに繋がることを望む。

Ⅳ 研究発表　愛媛大学付属高等学校発表会「SDGs ×高校 ユースミーティング 」

1 ねらい　主催：愛媛大学付属高等学校

・高校での教育活動や自身の生活と世界的な問題とのつながりを意識し、今後、自分の取るべき行動や考えを持つ 。

・今行っているSDGs に関する取組を、他校の生徒とともにブラッシュアップすることで、今後も継続した活動ができるような見通しを立てる。

2 概要

（1）**日　時**　12月25日（金）13時00分～16時00分

（2）**場　所**　愛媛大学付属高等学校（本校はオンライン参加、８校２０チーム参加）

発表タイトル

「災害後のまちづくり ～LEEDと復興災害の視点から長野の災害、復興を考える～ 」

3 生徒の感想

（1）成果と課題

① 準備段階

・体言止めにするだけで印象や読みやすさが大きく変わることが分かった。

・口で説明することを前提としていてもポスターやスライドでも説明したほうがいいと思った。

② 発表

・自分で自分のフォローの仕方が分かった。質疑応答では司会の先生のおかげで何とか対応できた。しかし、それをきっかけとして意見をもらうことができたので良かった。

・内容がやや伝わりにくく、活発な意見交換とならなかった。もともと専門用語が多かったので、もっと丁寧に説明すべきだった。

（2）全体の感想

・テーマだけ見たら自分の発表には関係のなさそうな研究でもつながるところはあると思った。
例えば、避難所生活の中でもジェンダーに関係する問題は発生してくるだろうし、平時にできないことは災害時には絶対にできないだろうなと思った。

・子ども食堂に参加した経験や、制服がない学校に通ってる生徒の一人として、意見を言えてよかった。
自分の経験が役に立つことがあって嬉しかった。

4 評価と考察

主催した愛媛大学附属高校は、本校同様に今年度WWLコンソーシアム構築支援事業のカリキュラム開発拠点校の指定を受けた。やはりコロナ禍を奇貨としてオンラインで県内外の高校を招聘して活性化を図っていた。本生徒の発表は、オンラインボストンスタディープログラムと自らの罹災体験に基づくもので､体験に根ざした深みを持つものとなった。こうした経験をもとに、他校との交流を活発化させていきたい。

Ⅲ より深い学び（探究的な学び）

Ⅳ　研究発表　長野県上田高等学校グローバルスタディ報告会

１　ねらい

長野県職員のＳＤＧｓに関する基調講演を土台として、課題研究はＳＤＧｓ１７カテゴリーに関連づけて発表する。

午前は Web 会議ツールを用いて各教室を繋げ、全体会を行う。１年生の課題研究中間発表、２年生の諸活動報告、３年生及び卒業生の発表、ゲスト発表を行い、学年を超えた意見交流の場を設ける。

午後は会場を細分化し、ポスターセッションを行う。２年生は、グローバルスタディⅠⅡを通して行ってきた課題研究の最終発表をする。１年生は２年生のポスターセッションを聞き、意見交換することで探究の意欲を高める。

プレゼンテーション・ポスターセッションに対して、講師より助言を受ける。

２　概要

日時：令和３（2021）年２月６日（土）　　場所：長野県上田高等学校（オンライン併用）

○午前

9:05-9:35	オープニングセレモニー		
	学校長挨拶・講師紹介	9:05-9:12	7分
	生徒代表挨拶　2年5組　髙本　志世	9:12-9:15	3分
	基調講演　藤川　まゆみ　NPO法人上田市民エネルギー理事長	9:15-9:35	20分
9:35-9:45	全体会の流れの確認	9:35-9:45	10分
9:45-11:10	プレゼンテーションⅠ		
セッションⅠ	グローバルスタディⅠ課題研究中間発表		
①	木内華子　中田結菜　「上田市の持続可能な発展をマコモ栽培から進めたい」	9:45-9:52	7分
②	小林大翔　「コロナ差別をなくしたい～ハンセン病差別からSNSを用いた解決法を学ぶ～」	9:52-9:59	7分
③	張驪驕　「日中友好のために～対話より会話をしよう～」	9:59-10:06	7分
質疑応答		10:06-10:13	7分
発表の感想共有・評価		10:13-10:25	12分
セッションⅡ	グローバルスタディⅢ活動報告・卒業生発表		
①	金井京花　鈴木日和　舟木乃彩　「GSから学んだこと」	10:25-10:32	7分
②	饗場己武（東京大学）　「東大で上高ジャージを着る」	10:32-10:39	7分
質疑応答		10:39-10:45	6分
発表の感想共有		10:45-10:55	10分
11:05-11:55	プレゼンテーションⅡ		
セッションⅢ	グローバルスタディⅡＪＥ活動報告		
①	羽田蒼馬　浅沼花奈　「日本語教室」	11:05-11:12	7分
②	吉池功多　榊原陽太　清水晋太朗　佐藤優衣　宮﨑あずさ　「オンライン台湾高校交流」	11:12-11:19	7分
③	赤羽陽里　齋藤優里奈　塩沢文萌　馬場彩加　宮嶌莉々菜　「Environmental Initiatives in Taiwan and Japan」	11:19-11:26	7分
④	松本県ヶ丘高等学校　上條佳夏　「あがたの森の池を汚す原因はエサです」	11:26-11:33	7分
質疑応答		11:33-11:40	7分
発表の感想共有		11:40-11:55	15分
11:55-12:05	講評　藤川　まゆみ　NPO法人上田市民エネルギー理事長		

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

○午後

12:35-13:00　ポスターセッション会場に移動　発表会場準備

会場		カテゴリ	2年	1年
生物室		技術①		
物理室		技術②		
化学室		技術③		
1年	4組	ビジネス①		
	5組	文化①		
	6組	人権①		
	7組	文化②		
	8組	教育①		

会場		カテゴリ	2年	1年
2年	1組	地域②		
	2組	ビジネス②		
	3組	国際②		
	4組	保健①		
	5組	教育②		
	6組	保健②		
	7組	人権②		
	8組	環境②		

会場		カテゴリ	2年	1年
3年	1組	国際①		
	2組	地域①		
	3組	環境①		
	4組	人権③		
	5組	人権④		
	6組	教育③		
	7組	保健③		
	8組	保健④		
324		ENGLISH ROOM		

13:00-14:25　ポスターセッション　２年全員ポスターセッション４グループにわけて実施、１年は聞き役

13:00-13:10	開会・方式説明	
13:10-13:25	グループ①発表	※15分の発表時間の中で、発表者は司会者の合図に従い２回発表をする
13:30-13:45	グループ②発表	聴衆もそれに合わせて別の発表者のもとに移動する
13:50-14:05	グループ③発表	※司会は放送で行う
14:10-14:25	グループ④発表	※評価票記入時間は後に設けてあるが、可能な限り適宜記入する
14:25-14:35	評価票記入	
14:35-14:45	講評（分科会毎）	

14:45-15:05　評価票回収　各ＨＲ教室に移動

15:05-16:00　クロージングセレモニー

講師挨拶　職員挨拶　アンケート記入

○外部講師（敬称略）

	お名前	所属	備考
外部講師	藤川まゆみ	NPO 法人上田市民エネルギー理事長	基調講演　全体会講評
	直井恵	ICAN 代表	ポスター国際①カテゴリー講師
	中田覚子	佐久大学講師	ポスター保健①カテゴリー講師
	矢島裕章	シナノケンシ	ポスター技術①カテゴリー講師
	饗場己武	東京大学法学部３年	ポスター人権①カテゴリー講師

※他に、オンラインで管理機関、連携校等より接続あり

↑午前の全体会　本部会場での発表の様子。
本部で発表した映像が、各教室に中継で届けられ、電子黒板に投影された。

↑午後のポスターセッションの様子。
例年よりも少人数の会場に分けての実施。
司会は放送により一括して行われた。

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

３　生徒の感想，アンケート

・自分の考えを発表することのみならず他の人の意見を聞くことができ、たくさん刺激を受け、とてもいい勉強になった。

・色々な意見を知ることができたこと、世界で起きている私自身が知らない問題について知ることができとても有意義な時間を過ごすことができた。

・自分と違う視点で研究をした人たちのプレゼンテーションを聞くことができ勉強になった。

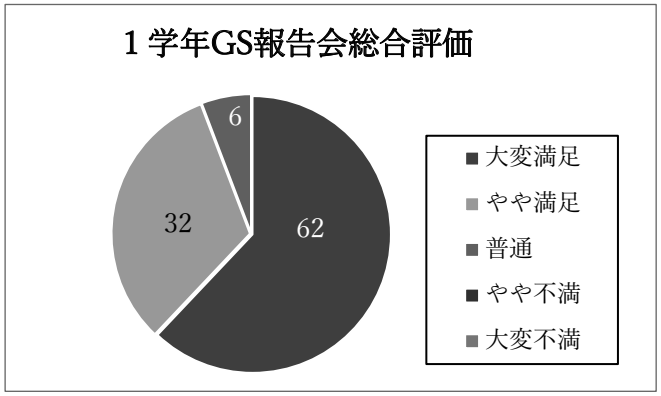
・環境問題や国際関係が、自分とは遠い話ではなく、「自分たち自身が周りを変えて行動するんだ」という意識が持てた。

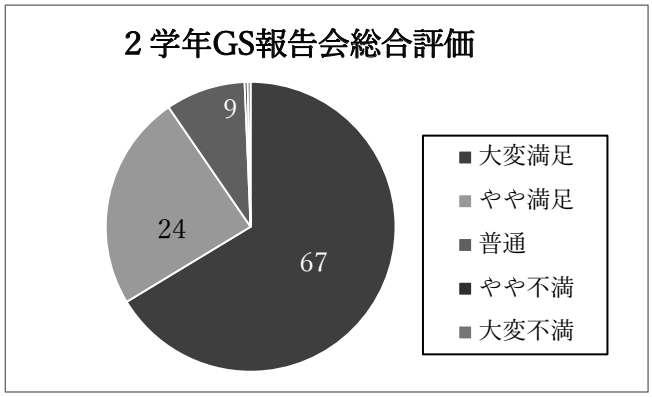
・自分の研究以外にも様々な課題や問題が世の中にはあり、解決策を考え行動に移すことの必要性を再認識できた。

・進路の参考になる様々な考え方を知ることができた。

・相手により分かりやすく伝えるために色々と考えて文章を構成することができた。

・他人の考えを知ることで、自分自身のより深く学ぼうとする姿勢が養われたと感じた。





４　評価と考察

年間のWWＬ諸活動の集大成を発信する行事で、昨年度までのＳＧＨ報告会の流れを受け継ぎ企画された。例年は外部施設が会場であったが、今年度は本校を会場に、web 会議ツールを併用しての開催となった。会場変更に伴い、昨年度までの、生徒の動きがクラスによって違う複雑な形式から、全校が同じ日程で動く形式へと一本化した。

午前中の全体会では、本部会場と各教室をオンラインで繋ぎ、プレゼンテーションを行った。各教室では１年生と２年生の混合グループが編成され、それぞれの発表についての意見交換や評価を行った。話し合いを通して多角的な視点が身に付けられた。評価と意見交換の時間配分を適切にし、グループでより深い対話ができる工夫をすることが、今後の課題である。

午後は複数のカテゴリーに分かれてポスターセッションを行った。２年生はこれまでの研究の成果を熱心に報告し、１年生も来年の自分の姿と重ねながら、先輩の発表を熱心に聴いていた。また、英語に特化した「ＥＮＧＬＩＳＨ　ＲＯＯＭ」も設けられ、オンラインを併用した発表も為された。

参加者からは、未来について一生懸命に考える生徒の姿に勇気を与えられたという声があがった。また、プレゼンテーションの時間帯には各教室内で１、２年が縦割りに編成されて議論が進み、ホールでは味わえない交流が生まれた。昨今の情勢により、学校も様々な行事が変更・中止を余儀なくされているが、暗い話題の多い現代だからこそ、工夫をしてこのような行事を行うことには大きな意義がある。

Ⅴ　参考資料　令和２年度WWL研究開発活動

1　課題研究に関する活動

4　6 月	新入生ガイダンス	
5 月半ば	ＧＳⅢフィールドワーク　　各自設定	生徒18名
5　21 木	松尾ゼミナール　　（コロナ禍により取り止め）	講師 佐倉　統さん（東京大学教授）
5　28 木	ＧＳＩ　国際理解講演会　　１学年全員　（コロナ禍により取り止め）	海外交流アドバイザー　直井恵さん
6　13 土	**ＧＳⅢ北陸新幹線サミット（オンライン開催）**	
6 月下旬	第１回ＫＤＤＩ特別授業　「これからの時代に必要な能力とは何か」	
7　29 土	ＧＳⅡ中学生対象課題研究2年生ポスターセッション	コロナ禍で体験入学延期に併せ９月に延期
8 月上旬	ＧＳＩ県内フィールドワーク下見（１年ＨＲＴ）	
8　28 金	１学年課題研究入門講座	講師14名
8 月下旬	ＧＳⅡ課題研究　全職員による指導開始	
9　16 水	**ＧＳⅡ首都圏フィールドワーク（～17）（コロナ禍で取り止め）**	2学年生徒全員対象
9　17 木	**ＧＳＩ県内フィールドワーク**　　16コース　　日帰り	1学年生徒全員対象
9 月中旬	第２回ＫＤＤＩ特別授業　「デザイン思考体験ワーク　～マシュマロチャレンジ～」	
9　29 火	ＧＳＩ国際理解教育ＪＩＣＡ　生徒リハーサル	講師 竹内岳さん
10　8 木	ＪＩＣＡ・ＩＣＡＮ国際理解教育　　１学年全員	講師 ＪＩＣＡ竹内岳さん・ＩＣＡＮ直井恵さん
11 月下旬	第３回ＫＤＤＩ特別授業　「課題発見 デザイン思考をはじめよう」	
11　27 金	WWL運営指導委員特別講座　小村俊平さん講演会（オンライン開催）	生徒17名、教員9名
12　16 水	令和３年度グローバルスタディⅢガイダンス①	ＷＷＬ推進係
12　17 木	ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃ調査	１学年２学年全員
1　12 火	ＧＳＩ課題研究　全職員による指導開始	
2　6 土	**長野県上田高等学校ＧＳ報告会**	
2　16 火	ＧＳＩ　ＪＩＣＥ連携　国際理解講演会　　１学年全員	講師 マナベ　バージニアさん、脇田 ルリコさん
2　17 水	地域に暮らす定住外国人との共生について考える	原田 知博さん、ウラコワ マハバットさん
2　19 金	令和３年度グローバルスタディⅢガイダンス③	ＷＷＬ推進係
3 月中旬	第４回ＫＤＤＩ特別授業　「ライフデザインについて」	

2　海外研修・海外交流に関する活動

6　26 金	台湾教育旅行計画協議	恵崎良太郎さん
7　6 月	ヒューマンアクトインマニラ入札公示（プロポーザル方式）	ＷＷＬ推進係
7　6 月	ボストンスタディプログラム入札公示（プロポーザル方式）	ＷＷＬ推進係
7　22 水 ～　7　25 土	**ボストンスタディツアーオンラインプログラム**	**指導職員２人**
7　26 土	留学フェローシップ　海外進学・留学講座	職員２名、生徒14名　講師　留学生６名
10　2 金	令和４年度入学生台湾研修旅行業者入札	ＷＷＬ推進係
10　8 木	ＪＩＣＡ・ＩＣＡＮ国際理解教育・座談会（１学年）	JICA竹内岳さん･ICAN直井恵さん(座談会は取り止め)
10　8 木	台湾研修旅行事前学習会　映画「湾生回家」鑑賞（２学年）	
10　8 木	フィリピンスタディツアー計画協議	直井　恵さん来校
10　19 月	ヒューマンアクトインマニラガイダンス（11月中旬ツアー取り止め決定）	ＷＷＬ推進係　海外交流アドバイザー直井恵さん来校
10　20 火	ボストンスタディープログラムガイダンス（11月中旬ツアー取り止め決定）	蝦名　恵さん　猿橋　あや子さん　来校　ボストンブリッジ
11　5 木	国立新竹女子高級中学とのオンライン交流会（２年６組、１組）	
11　11 水	国立苗栗高級中学とのオンライン交流会（２年５組、７組）	
11　18 水	私立延平高級中学とのオンライン交流会（２年３組）	
11　19 木	私立延平高級中学とのオンライン交流会（２年３組、２組）	
11　20 金	私立延平高級中学とのオンライン交流会（２年２組）	
11　23 月	**２学年台湾研修旅行（～27）（コロナ禍で取り止め）**	
11　26 木	国立科学工業園区実験高級中学とのオンライン交流会（２年４組）	
11　26 木	長野県観光部台湾研修旅行協議	恵崎良太郎さん
11　27 金	国立科学工業園区実験高級中学とのオンライン交流会（２年８組）	
12　3 木	国立新竹女子高級中学とのオンライン交流会（２年６組）	
12　9 水	国立科学工業園区実験高級中学とのオンライン交流会（２年８組）	
12　10 木	国立科学工業園区実験高級中学とのオンライン交流会（２年４組）	
12　12 土	ボストンスタディプログラム事前学習開始	ＷＷＬ推進係
1　19 火	香港暮光英文書院生徒来校　　（コロナ禍で取り止め）	
1　26 火	韓国教職員招聘プログラム（オンライン）	生徒22名、教員８名参加
2　16 火	ＧＳＩ　ＪＩＣＥ連携　国際理解講演会　　１学年全員	講師 マナベ　バージニアさん、脇田 ルリコさん
2　17 水	地域に暮らす定住外国人との共生について考える	原田 知博さん、ウラコワ マハバットさん
3　3 水	フィリピンスタディツアー事前学習　講演会	海外交流アドバイザー直井　恵さん
3　17 水 ～　3　20 土	**ヒューマンアクトインマニラ(オンライン開催)**	担当職員２名
3　17 水 ～　3　20 土	**ボストンスタディプログラム(オンライン開催)**	担当職員２名
3月下旬	**カンボジア井戸プロジェクト(コロナ禍で取りやめ)**	引率１名予定

3 研究発表に関する活動

4	6	月	新入生ガイダンス	２年生課題研究プレゼンテーション
4	18	土	第１回アカデミックプレゼンテーション（コロナ禍により７月11日（土）に延期）	講師 海外交流アドバイザー直井　恵さん
5	21	木	松尾ゼミナール　　（コロナ禍により取り止め）	講師 佐倉　統さん（東京大学教授）
6	**13**	**土**	**ＧＳⅢ北陸新幹線サミット（オンライン開催）**	
6	20	土	第1回上田高校小学生対象説明会　生徒プレゼンテーション（コロナ禍で取り止め）	
7	4	土	**研究発表　松尾祭**　　スーパーグローバル教室（コロナ禍で取り止め）	
	～		フィリピンＮＧＯ　ＩＣＡＮのフェアトレード製品販売（コロナ禍で取り止め）	
	5	日	カンボジア井戸プロジェクトバザー（コロナ禍で取り止め）	
7	11	土	第１回アカデミックプレゼンテーション	
7	29	水	中学生対象体験入学　プレゼンテーション（コロナ禍で９月12日に実施）	生徒１名
10	10	土	第２回アカデミックプレゼンテーション	
11	7	土	信州ベンチャーコンテスト2020　高校生部門	生徒１名
11	14	土	長野県上田高等学校小学生説明会　生徒プレゼンテーション（コロナ禍で取り止め）	
12	12	土	「MY PROJECT AWARD 2020　長野県Summit」（～13）	白鳥 生徒３名
12	19	土	第4回和歌山県データ利活用コンペティション	横沢 生徒２名
12	20	日	ＷＷＬ全国高校生フォーラム高校生発表（オンライン開催）	高野 生徒１名　ポスターセッション
12	25	金	愛媛大学附属高校主催　「SDGs ×高校 ユースミーティング」	白鳥 生徒１名
1	30	土	松本県ヶ丘高校主催　KENRYO Researchers Grand-Prix 2020	生徒1名
2	**6**	**土**	**長野県上田高等学校ＧＳ報告会**	
2	13	土	青山学院大学、佼成学園女子中学□等学校、上田高校連携課題研究発表会	小林・白鳥　　生徒15名
2	14	日	留学フェローシップ　海外進学・留学講座	職員１名、生徒１名
3	20	土	金沢大学、金沢大学附属高校主催　高校生国際会議（オンライン開催）	白鳥 生徒２名
3	21	日	ＷＷＬ探究甲子園（オンライン実施）	白鳥 生徒３名

4 職員研修に関する活動

5	13	水	長野県上田高等学校第１回進路・学習研究会（コロナ禍で資料配付のみ）	全職員
7	29	木	ＷＷＬコンソーシアム構築支援事業　事務説明会（オンライン開催）	校長 教頭 白鳥
8	7	金	ＷＷＬコンソーシアム構築支援事業　第１回運営指導委員会（オンライン開催）	校長 教頭 ＷＷＬ係　於　上田高校
10	29	木	ＷＷＬコンソーシアム構築支援事業　連絡協議会（文科省主催，オンライン開催）	校長 教頭 ＷＷＬ係
11	20	金	ＷＷＬコンソーシアム構築支援事業　第２回運営指導委員会（一部オンライン開催）	校長 教頭 ＷＷＬ係　於　上田高校
12	4	金	ＷＷＬ県内連携校定例ミーティング（オンライン開催）	校長 教頭 白鳥
1	8	金	ＷＷＬ県内連携校定例ミーティング（オンライン開催）	教頭 白鳥
2	6	土	ＷＷＬコンソーシアム構築支援事業　第３回運営指導委員会（オンライン開催）	校長 教頭 ＷＷＬ係　於　上田高校(GS報告会と並行開催)
2	16	火	ＷＷＬ教員向け研修会（オンライン開催，第２回　2/26金）	校長
2	18	木	ＳＨフォーラム（オンライン開催）	校長
2	19	金	長野県上田高等学校第２回進路・学習研究会	全職員
2	25	木	文部科学省との意見交換会（オンライン開催）	校長 教頭 白鳥
3月中旬			長野県上田高等学校進路指導引継会	2学年3学年職員

5 本校への学校訪問

1	20	水	静岡県立韮山高等学校（コロナ禍で取り止め）	
2	6	土	**長野県上田高等学校ＧＳ報告会**	（以下はオンラインでの見学高校）
			講師　藤川まゆみさん　直井　恵さん　中田覚子さん　矢島裕章さん	須坂高校､上田染谷丘高校､野沢南高校
			饗場己武さん　チェルシー・ビールさん　ニール・ムルガンさん	塩尻志学館高校､松本県ヶ丘高校
			エイミー・エリザベス・ザウさん	

6 新聞に掲載されたＷＷＬ関連行事

7	1	水	第１回ＫＤＤＩ特別授業　「これからの時代に必要な能力とは何か」	信濃毎日新聞
7	1	水	第１回ＫＤＤＩ特別授業　「これからの時代に必要な能力とは何か」	信州民報
7	17	金	第１回アカデミックプレゼンテーション	信州民報
7	28	火	オンラインボストンスタディツアー	信州民報
8	1	土	ＧＳⅢ課題研究　衣類フリーマーケットの紹介	信濃毎日新聞
9	2	水	信州ベンチャーコンテスト2020高校生セミナー	信濃毎日新聞
9	24	木	第２回ＫＤＤＩ特別授業　「デザイン思考体験ワーク　～マシュマロチャレンジ～」	信州民報
10	14	水	第２回アカデミックプレゼンテーション	東信ジャーナル
11	18	水	台湾高校とのオンライン交流	東信ジャーナル
1	28	火	韓国教員と本校生徒・教員の交流会	信濃毎日新聞

共同実施校の取組

松本県ケ丘高等学校

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

(1) 探究科について

2018 年度に１期生が入学。自然探究科・国際探究科合わせて２クラス（80 名）募集。入試段階ではくくり募集をし、１年次は共通カリキュラム、２年次よりそれぞれのカリキュラムで展開する。

(2) 探究科の目標（育てたい生徒像）

○ 予想困難な時代の中で、深く思考し、柔軟に判断し、未来を切り拓く豊かな知識と教養を備える
○ 社会で解決が必要な様々な課題を発見し、生徒が主体的に、他者と協働して解決し、その成果を広く表現する力をつける
○ 様々な探究活動の中で、失敗を生かし、粘り強く挑戦を繰り返す

教職員は、探究が単なる調べ学習にとどまらぬよう、また課題解決の方法の「提案のみ」に終わらないよう、実際に生徒がアクションをおこしたり、実物制作に挑戦したりといった、「成果物」を残すことを心がけて指導にあたるよう留意している。

(3) 探究学習カリキュラム

時期	目標	内容
１年前期	探究の型を身につける	基礎スキル学習、プレ探究
１年後期	探究の術を身につける	信州学課題探究、首都圏研修
２年前期	視野を広げ探究を深める	海外研修、個人課題探究
２年後期	探究の成果を発信する①	個人課題探究、探究発表会
３年前期	探究の成果を発信する②	探究展　論文制作
３年後期	探究力で未来を拓く	

探究科は探究α＋総合的な探究の時間の週２時間で行う。

①　１年前期

ア　探究基礎スキル学習（４月～７月）：探究学習に必要なスキルを身に付ける
問の立て方、他者への伝え方、情報の集め方、論文の書き方などを講義やグループワーク、実習などを通して学ぶ。生徒は全員入学時に iPad を購入し、探究でフル活用する。

イ　プレ探究（７月～９月）：４人組で行う探究活動
中信地区の「環境」「観光」「教育」「健康」を探究分野とする。夏休みに地元の企業・施設にフィールドワークへ行き、課題探究を深める。９月末の発表会は、探究科２・３年生が評価、アドバイスを行う。

②　１年後期

ア　信州学課題探究（10 月～３月）：２人組で行う探究活動
・SDG s 学習を併せて行う。発表はポスター形式で、３月に発表会を行う。
・首都圏研修（12 月）（2020 年度は県内研修で代替）
１日目－事前学習、SDG s 研修
２日目－大学・研究機関訪問（７コースから選択）
３日目－研究機関訪問（木曽コース、臼田野辺山コース）

イ　海外研修（３月）：今年度は中止

例年は、約７日間の日程で、アジアコース（マレーシア）とカナダまたはニュージーランド等英語圏コースの２コースを設置し、生徒がどちらかを選択する。現地企業訪問、現地高校生と交流（プレゼンテーション、ディスカッション）、ホームステイなどのプログラム構成。

③　２年前期：個人課題探究

ゼミ活動による課題探究を行う。信州大学の学生がメンターとして探究活動を支援。

④　２年後期：個人課題探究

ア　ゼミ活動による課題探究を継続。

イ　12 月に探究科発表会を行う。探究科 80 名が全員ポスターセッション形式で発表。今年度は荒井英治郎先生に探究についての講義を依頼。

ウ　１月末に普通科と探究科の合同発表を行う。２年生全員（322 名）がスライド等を使ってプレゼンテーションを行う。本年度は「KENRYO Researchers GRAND-PRIX 2020」と題し、地元企業 19 社が協賛、探究活動を評価し、賞状・企業からの記念品を贈った。また近隣の高校、ＷＷＬ連携校にも企業賞へのエントリーを広げ、上田高校を含め３校が参加。

⑤　３年前期：探究展発表

個人探究の成果をポスター、動画にまとめて発表する。個人探究を論文にまとめる。

(4) 外部機関との連携

① 信州大学との連携

ア 教職支援センターによる、大学生のメンターの探究支援

イ 経法学部学生による政策コンテストを高校生が審査

ウ グローバル化推進センターによる海外交流のコーディネート、異文化理解講座

② 同窓会「縣陵の学びを支援する会」による支援

進路講座やセミナーの開催、講師派遣

③ KDDI との連携（探究科１年）

探究活動へのアドバイス、探究における情報の扱い方など、企業の視点から授業を実施

④ 地元の中学校との連携

市内の清水中学校の学習支援に本校生徒が出向いた。夏休みの宿題の質問を受けたり、中学生の探究活動の発表へのアドバイスを行った。

(5) ＷＷＬ事業への参加

① 全国高校生フォーラム 2020 にて審査委員長賞を受賞

令和２年 12 月に開催された大会に探究科３年生が出場した。本校生徒が中心的役割を果たしながら、県内の有志生徒が集まって、長野県の高校生がもっと海外留学に興味をもってもらえるようにと始めた「信州つばさプロジェクト」について、２年間の活動をまとめ、英語によるポスター発表を行った。審査員からは「課題設定が明確、プレゼンも明快で説得力がある」「活動の成果も極めて優れている」との評価をいただいた。

② 上田高校主催の各種行事への参加

拠点校である上田高校が主催する「北陸新幹線サミット」や課題探究発表会に本校生徒も参加した。

Ⅳ　国際的な学び

(1) ネパール　オンライン・スタディツアーの実施

コロナの影響で海外研修は中止となってしまったが、本校では生徒の課題解決能力の向上を目指し、オンラインを活用した海外研修を実施した。具体的には、松本市と姉妹都市であるネパール・カトマンズと結び、希望者によるワークショップを企画。ネパール・カトマンズの高校生や社会人へのインタビューを行い、ネパールの社会課題について生徒自身で調査、分析を行って解決すべき課題を特定し、解決策を提案するというプログラム構成とした。

① プログラム概要

ア　10 月から 12 月まで５回で構成。

イ　参加者 26 名（本校生徒９名、WWＬ連携校等５校から 17 名が参加）

ウ　基本的には本校で開催するが、オンラインと併用して実施。また JICA（青年海外協力隊）駒ヶ根訓練所の施設を使っての１泊２日の合宿を組み込んで実施した。

エ　ネパールの社会課題についての調査、オンラインによる現地インタビュー、JICA の OB・OG による課題の洗い出しや整理という過程を経て、課題解決策をグループで考えて提案した。

オ　12 月の発表会の後も、松本在住のネパール人や、ネパールからの留学生との交流の機会を設定し、他校のツアー参加者のうち希望者とオンラインでつなぎ、参加してもらった。ネパールの価値観や文化に触れることができたほか、自分たちが考えた解決策について、ネパール側の視点からも考えることができた。

② 工夫した点

ア　オンラインにプラスして対面でのワークショップや合宿といったプログラムを織り込んだ「ハイブリッド」方式で実施したほか、ネパール料理を味わう機会も設定した。オンラインの良さ、対面での良さ、双方を生かすことをこころがけた。

イ　本校生徒のみならず、WWＬ連携校にも参加を呼びかけた。

③ 効果

ア　参加した生徒たちの満足度は高く、「ネパールに行ったような気持ちになれた」「コロナで海外留学の夢が断たれた中でまた希望が持てた」といった感想から、オンラインでの海外研修でも工夫次第で効果的な海外研修を実施することは可能であると思われる。

イ　ツアーへの参加が探究活動へのモチベーションアップとなった。「課題解決のプロセスに自身の探究活動へのヒントを得られて有意義であった」という感想から、自分の今後の探究活動にも応用できる課題解決に向けたスキルを一定程度獲得できたと思われる。生徒の中には、このプログラムで提案した解決策を実現すべく、その後も探究活動を継続している者もおり、どのような形になるか、今後が楽しみである。

ウ　本校生徒のみならず、WWＬ連携校等からの参加は有意義であった。他校の生徒から受ける刺激は大きく、また学校の枠を超えてチームで取り組んだことは、校内では得られない有意義なものとなった。協働して課題解決にあたる能力の育成という点でも、できるだけこうした機会を共有するようにしていくことが望ましいと考える。

(2) 海外留学講座の実施

県主催・留学フェローシップによる海外留学講座を、本校をメイン会場として県の中・南信地区生徒向けにオンラインで実施した。本校からは、生徒 14 名、教員４名が参加した。

(3) 信州大学グローバル化推進センターとの連携

中止となった探究科の海外研修の代替として、センターのコーディネートにより、３月にマレーシア及びカナダの大学生とのオンライン交流を３月に実施予定。また、信州大学が連携するロシア・ノボシビルスク大学の日本文化・日本語専攻の学生（３年生：12 名）とオンラインで交流を予定。

Ⅵ　その他（生徒の自主的活動）

(1) 生徒主体の自治的活動―生徒会によるオンライン手法の最大活用

本校では、探究科がスタートした３年前より、同窓会から WiFi 環境整備等の支援を受け、入学時に生徒全員が購入するタブレット端末（iPad）を活用し、日頃から ICT を活用した学びを行っている。そこに本校の生徒がもともと持っている自治活動への高い意識と、探究的な学びのこの２年間の取組の成果が、コロナ禍とあいまって、オンラインを活用した様々な活動となって花開いた。休校中でも生徒会活動を止めることはなかった。

① オンライン対面式

４月、三密を避けるため、新入生を歓迎する対面式をオンラインで実施し、生徒会長の歓迎の言葉や学校生活の紹介などを生徒会室から各教室の電子黒板に配信。

② 新しい「クラブ説明会」・新しい「応援練習」

各クラブの活動の様子や新入生歓迎のメッセージ等を動画で作成し、新入生が昼休みの教室で視聴できるようにした。また、応援練習は、声を出して飛沫が飛ぶことを考慮し、三密にならないように、学年を二つに分けたり、教室と校庭で場所を交代したり、気温も上がるので熱中症にも配慮して実施した。工夫を重ね、本校伝統の行事をやり遂げることができた。形を変えても、予定の行事をひとつひとつ実施することの積み重ねが生徒の自信となっていった。

③ オンライン生徒総会

例年は４、５月に生徒総会を開いて、本年度の活動や文化祭の計画・予算などを審議する。コロナによる休業がいつ明けるか見通しがつかない中、生徒会役員は週１回オンラインで役員会議を続け、学校再開に備えていた。

文化祭をやるのかやらないのか、またやるとしても生徒総会で承認を経なければ実施できない。５月 22 日（金）15 時からオンライン生徒総会を実施。大人数が参加できデータ共有も可能な音声チャットアプリ「ディスコード」と「YouTube ライブ」を併用し、議事の資料は事前に共有。全校 957 名中 937 名が自宅からスマートフォンやタブレット端末を使って「出席」し、総会は成立、予算案など議案への投票を実施した。この場で文化祭でもオンラインを活用する方針を示した。議案への承認を呼びかけると、賛成の数字がどんどんと伸び、過半数に達すると「承認されました」と議長がアナウンス。総会は 30 分ほどで終了した。

④ オンライン文化祭

オンラインを最大限活用した文化祭を実施。密になるのを避け、全員が安全に文化祭を楽しめるよう、開祭式・前夜祭・後夜祭は体育館から「中継」し、生徒は各クラスの電子黒板でその様子を視聴した。また土日の一般公開はせずに、生徒は自宅から縣陵祭に参加した。

ア　生徒会が配信する YouTube ライブ視聴

イ　インスタグラムによる展示発表（文化系クラブ作品、探究科研究発表など）

ウ　アプリ「cluster」を使用した、バーチャルリアリティ（仮想現実）展示

エ　市内コミュニティＦＭ局「エフエムまつもと」で生徒制作の 30 分番組の放送

オ　「市民タイムス」の紙上文化祭

（QR コードで動画再生）

アは限定公開としたが、高校生が一生懸命取り組む姿に地元企業も賛同してくれ、エやオのような協力を得られたことは大きかった。保護者や近隣中学生等、幅広く楽しんでもらうことができた。またマスコミにも大きく取り上げられ、反響も大きかったことから、生徒の得た達成感も大きかった。

⑤ 「長野県高校生徒会交流会」をオンラインで実施

良い取り組みは自校だけでなく、積極的に他と共有する、というのが本校を貫く姿勢である。令和２年６月、長野県内約 40 校の生徒約 140 人が参加し、生徒会役員の交流会を実施した。もともとこの地区の高校は本校生徒が中心となって、2016 年から生徒会役員の交流会を開いてきたが、今回はこれを全県に広げて、ウェブ会議システム（zoom）を使って実施することとなった。当日は５つの分科会に分かれ、本校の生徒がファシリテーターとなり、文化祭や生徒会活動について議論した。コロナウイルスの影響で生徒会活動に制約がある中、文化祭などの行事をどう運営するか、共通する悩みの解決策を出し合った。参加生徒から「思うように活動できず悩んでいたが、悩みを共有し、不安を解消できそうな気がした」という感想が聞かれた。交流会で出た意見をまとめ、「高校生がコロナ禍であっても生徒会活動が正常に行えるように県教育委員会は支援してほしい」という旨を原山教育長へ報告した。

令和３年１月には、新役員による同様の交流会が行われ、県内 59 校 311 人が参加し、代替わりした１、２年生が意見を交わした。

⑥ 主体性を育むオンライン交流会

長野県がＷＷＬプラットフォームの一つとして整備するものの一つに「主体性を育む夏合宿 」がある。これは県高校校長会が主催し、４年前から実施しているもので、毎年夏に全県の高校から希望する生徒が集まり、社会課題について話し合うなどし、その結果を 12 月県議会の折に県議会議員に提案し、意見交換を行うというスタイルでやってきた。

本年度はコロナウイルスの感染拡大により合宿は中止、代わってオンラインによるイベントを生徒が企画・運営するというスタイルに変更となった。生徒実行委員が結成され、本校１年生が積極的に参加し、実行委員を牽引した。９月にオンラインイベントを開催して、「夢」について語り合い、その結果をまとめ、１月には県議会議員に対して「政治や議会にのぞむこと」として、県内高校の教育環境の ICT 化の遅れについて問題提起した。参加者からは「学校の枠を超えて話をすることで視野が広がると感じた」といった意見が聞かれたほか、本校生徒のプレゼン力・対話力・意見表明力についても評価をいただいた。

松本県ケ丘高校　探究科　3年間の活動と教育のねらい

生徒が主体的に、他者と協働して課題解決に取り組む「縣陵探究」を位置づけ、生徒の課題解決能力等の育成に取り組む

探究科の目標（育てたい生徒像）
・予想困難な時代の中で、深く思考し、柔軟に判断し、未来を切り拓く豊かな知識と教養を備える
・社会で解決が必要な様々な課題を発見し、生徒が主体的に、他者と協働して解決し、その成果を広く表現する力をつける
・様々な探究活動の中で、失敗を生かし、粘り強く挑戦を繰り返す

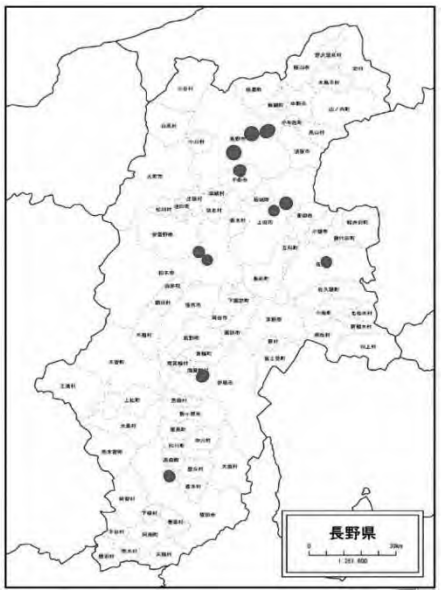
縣陵3大精神とグランドデザイン
質実剛健であれ　　確かな知 … 深く思考し、柔軟に判断するための確かな知
大道を闊歩せよ　　関わる力 … 自分の道を知り、歩んでいくために、他と関わる力
弱音を吐くな　　挑戦する力 … 世界を切り拓いていくために、あきらめず挑戦する力

期	目標			主につけさせたい力	評価指標
探究Ⅰ期 1年4月～1年9月	探究の型を身につける	4月～7月　探究基礎スキル学習 7月～9月　プレ探究 8月　中信FW GOAL　プレ探究発表会	・プレ探究は「課題を発見する」「問いを立てる」ことを主に、活動を行う。 ・夏休みに、中信地区の企業、施設でFWを行い、各分野の課題を見つける。	・探究基礎スキル　・情報を読み取る力 ・論理的思考力　・批判的思考力 ・ICT活用力　・課題発見力	・探究学習ルーブリック ・GPSアカデミック（5月） ・プレ探究発表（9月）
探究Ⅱ期 1年9月～1年3月	探究の術を身につける	9月～2月　信州学課題探究 12月　首都圏研修FW GOAL　信州学発表会	・信州学はプレ探究で得た力を生かし、「課題を設定」し、「探究計画書」に基づき、探究活動を行う。 ・様々な場面で失敗を経験させる。 ・首都圏（県内）研修は、実際の研究の場面に接することで探究活動の一助とする。	・課題設定力　・探究計画力 ・協働的思考力　・取材力 ・情報収集力　・情報分析力	・信州学中間発表（1月） ・信州学最終発表（3月）
探究Ⅲ期 1年3月～2年9月	視野を広げ探究を深める	3月　海外研修FW 4月～9月　個人課題探究① 8月　海外研修FW（希望者） GOAL　中間発表会	・海外での活動を通し、視野を広げ、2年次以降に海外への敷居を低くする。価値観の多様性と異文化の理解を、2年次の探究活動へとつなげる。 ・探究の日に縣陵OBOGから、探究活動に特化した講義を受け、課題設定の動機付けとする。 ・1年次の失敗、反省を生かして活動する。長期間の探	・失敗を活かす力　・幅広い視野 ・計画実行力　・足で稼ぐ　汗をかく ・挫折を乗り越える力 ・GRIT（度胸（Guts）復元力（Resilience） 自発性（Initiative）執念（Tenacity）））	・GPSアカデミック（5月） ・個人探究中間発表（9月）
探究Ⅳ期 2年10月～2年3月	探究の成果を発信する①	10月～2月　個人課題探究② 各種コンテスト応募 3月　海外研修（希望者） GOAL　グランプリ	・第Ⅲ期の中間発表会の時点で、ある程度、活動がまとまっていることが望ましい。9月以降から始まる各種コンテストに、1人1つ以上は応募するよう促す。 ・グランプリの発表では、4月の講演者を審査員として招き、1年間の成果を見てもらう。	・提言力　・まとめる力　・プレゼン力 ・質疑対応力	・各種コンテスト（適宜） ・個人探究最終発表（12月） ・グランプリ（1月）
探究Ⅴ期 2年3月～3年8月	探究の成果を発信する②	3月～6月　探究展に向けて 各種コンテスト応募 7月～8月　論文作成 GOAL　探究展　論文完成	・第Ⅳ期の発表で受けた意見を元に、追研究、追実験を行う。 ・探究展、各種コンテストに向けて、ポスター、ppt、説明動画の質を上げる。 ・論文作成の術を学び、各自論文を完成させる。	・発信力　・見せる力　・論文作成力	・GPSアカデミック（5月） ・各種コンテスト（適宜） ・探究展（6月）
探究Ⅵ期 3年8月～3年3月	探究力で未来を拓く	8月～3月　探究発表 ディベート、小論文 レポート、受験指導 Goal　進路実現	・これまでの探究活動で得た力を生かして、現代社会の様々な問題について教養を深め、ディベート、小論文等で活用する。 ・これまでの探究活動で得た力や、受賞歴等を生かして受験を突破する。	・幅広い知識と教養 ・ディベート力	・小論レポート ・受験

連携校の取組

連携校９校は長野県全域に位置している。それぞれの学校が地域で特色のある取組をしている。

今後、ＡＬネットワーク内での連携をさらに深め、連携校がそれぞれの特色を生かして、ＡＬネットワークに貢献するとともに、他校の良い取組を取り入れて、ＡＬネットワークに参加する全ての学校における学びのレベルアップを目指して取り組んでいく。



****

連携校の取組

長野高等学校

Ⅱ　カリキュラム開発（文理融合のカリキュラム開発）

本校は平成 26 年度から平成 30 年度までの５年間は SGH 指定校として、令和元年度から令和３年度（予定）までは「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型)」指定校として、「グローカルファシリテーター※」育成カリキュラムの構築に取り組んでいる。学校設定教科「SGH」（令和元年度からは「NGP」として継続）を設け、「情報」と「英語」を融合した学校設定科目「英語キャリアプロジェクトⅠ」「英語キャリアプロジェクトⅡ」においてプロジェクト型学習として英語による発信力の養成を目指す。

※グローカルファシリテーター：グローカル人材として、多様な人とチームを作り、地域の抱える課題の解決に向けた提言ができる人

Ⅲ より深い学び（探究的な学び）

「総合的な探究の時間」を「長野のグローカル戦略を探る（１年次)」「SDGs から見た長野のグローカル戦略（２年次)」に編成し、２時間の授業を連続させた 110 分の授業として１，２年次の通常授業の時間割に組み込んでいる。１年次前半からブレスト体験・ディスカッション講座・インタビュー実践などを積み重ねてスキルを養成、１年次後半はグループでのフィールドワークに基づく課題研究中間発表を実施。２年次は個別の課題研究に

【写真】１年生ディスカッション講座
地元大学生による支援

移行し、フィールドワークを経て最終発表のプロジェクト発表会・課題研究発表会を行い、論文作成につなげる。

Ⅳ 国際的な学び

１年次は連携協定を結んだ APU 立命館アジア太平洋大学の留学生へのインタビューを実施。２年次は台湾高雄市政府教育局との連携で、７クラスが現地の７高級中学と訪問交流する。訪問に備えた事前のオンライン交流を含め、１対１の関係での交流の機会を設定し、米国リーダー研修や「総合的な探究の時間」の「グローカルアカデミア（３年次)」における『国際会議グローカルアカデミア』へ向けたリーダーシップ育成を行っている。新型コロナウイルスの影響で、台湾や米国への訪問ができなくなっているが、オンラインを活用し、交流の対象をより広く求めることで、長野に居ながらにして実現できる持続可能な学びの形を追求する。

特に令和２年度の『国際会議グローカルアカデミア 2020　SDGs 地方創生会議』は、本校の育てたい生徒像である「グローカルファシリテーター」のひとつの具現化であったと言える。生徒たちは休校期間中にもオンラインミーティングを重ね、これまで築いてきた各自のネットワークから参加者を集め、「ポストコロナの観光」をテーマにしたグループディスカッションをファシリテートし、それぞれのグループの提言を英語で発表し、その様子を YouTube で発信し、ニュージーランドにいるゲスト講師に講評してもらうというものであった。「活動を通して学んだことは、今まで経験したことのない状況に置かれた時にどう対処するか、そのスキルを身につけることの重要性です。…スキルを身につける方法の一つとして、多様性溢れる仲間たちと意見交換しながら自分の価値観やコミュニティを広げていくことが挙げられます。その点で国際会議や NGP 活動はとても良い機会だったと実感しました。」(『国際会議グローカルアカデミア 2020 報告書)』より)

【写真】２年生台湾とのオンライン交流
協働プロジェクト表彰式の様子
大学生による支援を受ける

【写真】３年生国際会議
WWL 連携校も参加
大学生による支援を受ける

Ⅵ　その他（特色ある取組）

令和３年度は「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローカル型)」指定校最終年度となる。SGH 事業と NGP 事業を通してこれまでに構築してきたカリキュラムの成果を、信州 WWL をはじめとする県内外へ発信して共有する。本校独自のコンソーシアムや信州 WWL などのネットワークを活用し、グローカルファシリテーターの育成継続を目指す。

連携校の取組

長野西高等学校

Ⅱ　文理融合のカリキュラム開発

１学年の探求学習として、SDGs に関する学習を行い、11 月からは SDGs を意識しながら、信州学のレポート・動画を作成し、信州の魅力や課題についての理解を深めることに取り組んだ。その際「メンターリスト」を作成し、全職員が助言可能な分野を公表することで、生徒が質問しやすい環境となるようにした。

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

学校設定科目の ‘Active English’（１・２年次）において、英語によるプレゼン能力の向上を目指すとともに、価値観の相違から世界各国で起きている諸問題に目を向け、体系的、批判的思考力や、協働していく力を育むことに取り組んでいる。１年次には身近なテーマから始まり、２年次にはスピーチコンテストや模擬国連のテーマに沿って、より難解で抽象的なテーマにも挑戦する。最終的には卒業論文として１人１研究を行い、校内プレゼンコンテストと卒業論文集の執筆を行っている。

Ⅳ　国際的な学び

10 月に、国際教養科１学年を対象に善光寺ガイド研修を実施した。長野県通訳ガイドネット会員の方２名をお招きし、実際に自分たちでガイドする時のことをイメージしながら、熱心に取り組んだ。生徒の感想からは、身近な善光寺に関して新たに発見があったことや、ガイドする際に気を付けるべきことを学んだことが伺える。

また、新たな試みとして中国の天津外国語大学附属外国語学校で日本語を学んでいる生徒たちとの交流（リモート）を実施した。大人数での交流ではあったが、日本文化に興味を持つ生徒も多く、活発にやり取りが行われた。

Ⅴ　高度な学び

10 月に国際教養科全学年を対象に外務省高校講座（リモート）を実施した。外務省総合外交政策局 政策企画室の方に、外務省の仕事や異文化理解にとって大切なことについてお話しいただいた。聴講した生徒にとって、外務省の実際の仕事内容の一端に触れられる貴重な機会となった。

Ⅵ　その他（特色ある取組）

１学年の保護者懇談会において、生徒が親と担任の前でプレゼンテーションを行った。「入学してから 12 月まで力を入れて取り組んできたことは何か。それによって得たものは何か。」「12 月～３月、力を入れて取り組むことは何か。その取り組みを選んだ理由は何か。」という内容のプレゼンを行い、発信力や表現力等を身に付ける絶好の機会となった。

連携校の取組

篠ノ井高等学校

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

１－１「2020 年度　課題研究発表会」～Zoom を用いた探究研究発表会～

１）目的

令和元年度末に予定されていた「課題研究発表会」（１・２学年合同）が、コロナ禍により延期されていた。数年にわたり研究活動をしている生徒や海外研修の報告を兼ねた発表会を行うことにより、生徒達の「探究的学び」に資するため。

２）概要

①日時　2020 年７月 16 日　５，６時間目 13：45～15：45

②内容　発表者８グループが Zoom の画面共有を用い発表。流れは「発表―質問―討論―講評」。講評は信州大学の荒井英治郎准教授・同大学生及び大学院生８名から。司会進行は、生徒が運営し全校生徒は各教室で視聴・参加。

③発表者（２グループ・４個人合計 17 名）JENESYS2018 マレーシア派遣チーム・帰国後のアクションプラン実践報告、フィリピン医療ボランティア派遣チーム報告、フランス及びウイーン短期留学報告、長野 SDG s プロジェクト活動報告、子ども食堂の活動報告等。

３）評価（生徒の記述感想から抜粋）

仲間の「学び」を深く共有することができた。以下は、生徒の感想である。

・発表者、信州大学の方々と一緒にプレゼンを見て、互いに意見感想を出し合って、進められ、とても良い時間だった。

・いろんなディスカッションテーマがあって、それを聞いて考えるのが楽しかった。フランスに短期留学したくなった。

・自主的に探究活動をして、小学校で模擬授業をするなんて本当に素晴らしい。

・「物質的な豊かさは真の豊かさでは無い」という言葉がすごく心に刺さった。貧困地域の格差を無くすために直接的な活動は今の世界の状況や立場からではできないが、未使用の歯ブラシやタオルなどを集めることが大きな１歩に繋がると思った。

１－２「2020 年『人権教育』（第２回南長野ブロック学校人権教育連絡協議会・公開授業）

～Zoom を用いた人権教育「多文化共生」に焦点をあてて～ 授業者　英語科　小岩井秀樹

１）目的

本校生徒が、将来に向けて、多文化を理解することにより外国籍の人々と共生し、バランスのとれた人権感覚を持った人間に育つことを願って、本年度のテーマを「多文化共生」とした。

２）概要

①日時　2020 年 11 月 10 日（火）４，５，６時間目 12：45～15：30

②内容　全体会と分科会の２部構成。全校生徒対象で Zoom の画面共有を用い発表。流れは「発表―質問―討論―講評」。講評は、３年生で「2020 年度　課題研究発表会」で発表をした生徒で構成された、支援サポートチームのメンバー。

③テーマ　「長野県国際交流課 CIR(国際交流員)と共に多文化共生について理解を深める」（総合的な探究の時間）

・全体会・講演会 12：55～13：55 （授業会場　各 HR 教室）

演　題「日本で生活して驚いたこと、困ったこと」

講　師　Ian Sacks（米国）・李妮（中国）・呉錫英（韓国）（県国際交流課 CIR）

・分科会　14:05～14:45

＊生徒が分科会に分かれ討論を通して「多文化共生」について理解を深めた。発表者は、今回の人権教育運営委員会の代表生徒。テーマは、第１分科会（中国　医療現場の外国人対応～医療現場の「やさしい日本語」）、第２分科会（韓国「近くて遠い国～相互理解のために～」）、第３分科会本部（アメリカ　「LGBTQ について～知らないことを知る～」）

＊テーマはすべて生徒が自主的に話し合いにより決定。

・分科会からの報告　15:00～15:15

＊代表生徒が全校生徒に話し合いの成果を発表。

３）評価

・右表から明らかなように、「多文化共生・人権についての意識が深まったか」に対して、90％の生徒が深まったと回答。

記念撮影　CIR と人権教育運営委員会の生徒達

生徒の感想から（記述）

・アメリカでは人種差別、中国では多文化共生、韓国では男女平等について学んだ。新型コロナウイルスの影響で、外国人の方と直接的に関わることは少なくなったが、人権に対してはこれからも、しっかり向き合っていきたい。

・外見による判断、国籍による偏見とかではなく、人として尊重し合うこと、文化が違うことを理解し、コミュニケーションをとることが大切だと感じた。誰にでも固定概念や偏見はあると思うから、そこを見つめ直す機会になったと思う。

Ⅳ　国際的な学び

昨年度、本年度と本校同窓会企画の海外研修（費用全額同窓会負担）が中止となっている。現在、次年度に向けての校内運営体制が整い、詳細について検討中。

Ⅵ　その他（他校との連携プログラムの試み）

１）長野高専

「JENESYS2018 マレーシア派遣」の事前研修としてスタートした長野高専留学生との交流が続いていたが、現在、休止中。過去において５回交流している。交流の継続を検討中。

２）WWＬコンソーシアム連携校として上田高校との連携の一環

上田高校主催の「ボストンスタディーオンラインプログラム」に本校から３名参加。現在、一校単独で海外研修オンラインプログラムの企画を実施することが困難な学校にとっては、先進校のプログラムに参加することで、他校生との知的な交流を経験することができ、新たな学びのきっかけとなった。

連携校の取組

屋代高等学校・附属中学校

◎SSH 第５期（令和３年度の採択）申請に向けて、今後の本校の教育の在り方を校内及び外部機関と検討するなかで、以下の取り組みについて計画準備をしています。

Ⅱ　文理融合のカリキュラム開発

○世界へ向けて新たな価値を創造できる科学・技術人材を育成するために STEAM 教育に基づく探究的な学びの推進をする。さらに異分野学問（文学、歴史学、哲学、倫理学など）との横断的な学びにも取り組み、生徒の教養の底上げをはかる。

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

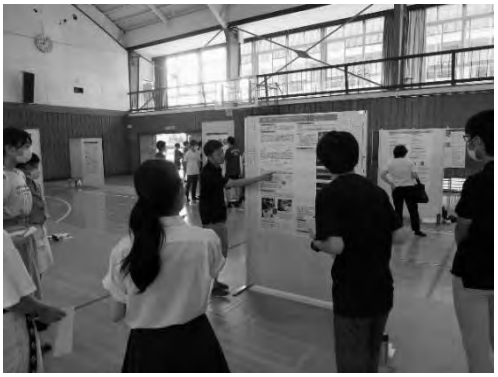
○本校の探究的な学びは主に、中学校３年間で「科学リテラシー①②③」、高１で「一人一研究（選抜生・理数科生）、一人一研究α（一貫生）」、高２で「課題研究（理数科生）、課題探究（普通科生）」で取り組んでいる。この取り組みに新たに高３生の「SS 探究（令和３年度入学生から）」を加えることで、ルーブリック評価やアンケート評価に基づいた、体系的な課題研究のプロセスを６年間または３年間繰り返し、より深く発展的な学びを実現させる。

Ⅳ　国際的な学び

○本校で手薄な「国際的な学び」に対して、令和３年度入学生から高１生全員に「国際情報（１単位）」、高２理数科生に「サイエンスイングリッシュ（１単位）」を新設する。
論理的思考力、批判的思考力を育成するとともに英語によるコミュニケーション能力を身につける。また、SDGｓの視点から、グローバルな課題に目を向け、新たな課題を発見させる。

Ⅴ　高度な学び

○「NAGANO サイエンスコンソーシアム（NSC）」の形成
本校を拠点として県内大学と連携し、科学･技術教育に特化したコンソーシアムを形成する。連携校として SSH 指定校や理数科設置校等で組織する。このコンソーシアムを活用することで専門性の高い先進的な課題研究に取り組み、その成果を多角的に評価検証するシステムを開発する。また、ＷＷＬコンソーシアムとの連携でグローバル人材育成に向けて、専門性の高い高度な学びの共有と普及を目指す。



連携校の取組

上田染谷丘高等学校

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

１）教科の学習における探究的な学び

(1)「社会と情報」（１年生、２年生　普通科・国際教養科）

①　概要

A 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題をたて情報を集め整理・分析して、まとめ・表現する。（グループ学習や個人研究などの多様な学習形態をとる）

B １学期　『沖縄と SDGs』修学旅行事前学習　レポート作成し展示発表（２年）
　　『新しい生活様式への提案』　レポート作成しクラスでプレゼン（１年）
　２学期　『SDGs 身近な取り組み（県・市町村・企業等）の紹介』の個人発表（２年）
　　『写真が語る身近な SDGs』レポート作成・クラスで発表（１年）
　３学期　『持続可能な社会構築のため SDGs の視点からできること』グループ発表(２年)
　　『染谷高生の生活実態に関する調査』アンケート調査の実施と集計・考察（１年）

②　教科の学習における探究的な学びの目的

A 情報技術を活用して課題を発見、解決していくための資質・能力の育成を目指す。

B コンピューターや情報通信ネットワークなどを適切かつ効果的に活用して、情報を収集・整理・発信する学習活動が行われるようにする。

C 他者と協働して課題を解決しようとする学習活動や、まとめ表現する学習活動が行われるようにする。

③　教科の学習における探究的な学びの評価（生徒の感想やアンケートの結果など）

A 情報収集・分析・まとめ・表現などから総合的に評価し、発表会は生徒の相互評価も行う。

B 発表会まとめ（生徒アンケート）より

・発表原稿を作り時間を考えながら、一人一人がプレゼンの設計がしっかりできていた。
・発表する内容をよく理解して詳しい説明ができるよう、調べ学習も大切にしていきたい。
・自分の伝えたいことを明確にして、相手に自分の伝えたいことを正確に伝えたい。
・映像、グラフ、写真などを使ってイメージができる発表にすることで、聴く人たちも一緒に考えることができる参加型の発表になると思う。
・プレゼンを複数回行なったので、前回の反省を生かして少しずつプレゼンが良くなった。

(2)「家庭実践」（２年次　２学期～３学期）

①　概要

A 地域社会における課題を発見し、問題解決活動を発展的に繰り返す学習活動を実践する。

B 自身のライフプランニング明確化（進路希望含む）、「地域の魅力」発見、ウェビングマップ作成、「地域の課題」発見、解決策を考えるブレインストーミング、課題解決のための行動を起こす、まとめと考察、プレゼン資料作成と発表、「MY PROJECT AWARD 2020」参加

②　教科の学習における探究的な学びの目的

A 変化の激しい地域社会に主体的に関わり、自ら学び、自ら考え行動して、よりよい地域社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付ける。

B 自分のライフプランニングや進路希望を見据えながら、地域の魅力や課題を見つけ、SDGｓの目標に照らし合わせた課題解決の取り組みを通して自己実現できる基礎能力を習得する。

③ 教科の学習における探究的な学びの評価（生徒の感想やアンケート結果など）

・取り組んでいくうちに「どうせやるなら、しっかりやろう。自分の進路実現のためにも地域に関する学習は大切だ。」と考え方が変わった。実際に小学校で探究活動できた時はとても嬉しかった。教育学部に進学して小学校の先生になる覚悟ができた。
・ウェビングマップを作成することで、自分自身の進路や将来に対する目標が見えてきた。
・探究学習を通して SDG s の解決策が、より身近なところにあるものだと理解できた。
・地域の課題を解決するために実際に地域に出て行動をすることが重要である。また、私たち高校生の取り組みに、地域住民の皆さんは優しく協力的であることが分かった。
・「MY PROJECT AWARD 2020」に参加してよかった。他校の実践例は素晴らしいものが多く今後のヒントを得ることができた。

Ⅳ　国際的な学び

１）国際教養科の諸学習における国際的な学びの概要

(1)　授業
・外国語科目（英語・第２外国語）
・国際教養科目（異文化理解・テーマ学習・外国事情・マルチメディア演習
・総合的な探究の時間や情報における「国際的な学び」の扱い

(2)　行事
・English Camp（１年：２泊３日・英語のみの使用を目指しての活動と生活）
・English Days（２年：「テーマ学習」における自分の研究成果を英語で発表する会）
・オーストラリア語学研修　（２週間。生徒 20～40 名参加。約８～９割が国際教養科生徒）

(3)　国際交流活動
・２～４校の海外の学校（台湾姉妹校を含む）からの訪問の受け入れ、ホスト役として国際教養科生徒が企画運営をして交流の実施。また、年に１回上田市内の日本語学校との交流。

(4) 学外の活動
・学外での活動（セミナー・海外派遣・交換留学・海外ボランティアなど）への参加
※今年度は上記のうち下線部分について中止。その代替として姉妹校との年賀状交換、オンライン交流（姉妹校＋１校）、英語国内研修などを企画、準備中）

２）国際教養科の諸学習における国際的な学びの目的

国際教養科は国際関係に関わる分野の学習や活動に積極的に取組み、国際的に活躍できる人材の育成を図る。「国際的な学び」によって視点を国内にとどめず、広く世界へ目を向けることで地球市民としての素養を身に付ける。SDGs など現代社会の諸問題は、国家間の ボーダーを取り除いて解決に向かう姿勢が求められる。また、「国際的な学び」においては、国外の事象、文化等のみを学ぶのではなく、自分自身のアイデンティティを問う中で自国をより深く知ることが重要である。「国際的な学び」は自分の拠り所となる文化や事象を他者へ表現できるように学ぶことであり、同様に、他の文化、事象との「違い」を認識した上で、その「違い」を当然あるものとして寛容出来る姿勢を身に付ける。

３）国際教養科の諸学習における国際的な学びの評価（生徒の感想やアンケートの結果など

(1)「国際的な学び」を求めて入学してくる生徒がほとんどであり、意欲的に学び満足感をもって卒業する生徒が多い。何か一つ学ぶと次へ次へと学ぶ意欲が高まり、更には学外へ学びの場を広げていく生徒も現れており、進路においても更に国際分野での学びを深めようとする意欲のある生徒が多い。

(2) 今年度は語学研修や海外の学校から生徒を迎える交流活動が出来ず、学ぶ場が減って残念な思いを持つ生徒が多かった。

連携校の取組

野沢北高等学校

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

本校では普通科と理数科の２科で探究的な学びを展開している。

普通科では平成 29 年度より「総合的な学習の時間」において、「探究基礎」、「探究」と銘打ち、主に人文・社会科学分野の事象について探究する授業を展開してきた。昨年度より「総合的な探究の時間」がスタートし、１年次「探究基礎」、２年次「探究」に加え、今年度から３年次でも「探究」を先行的に実施している。各学年の内容は以下のとおりである。

【探究基礎】（１年次 10 月まで）

・探究活動に必要な「ものの見方や考え方」「コミュニケーション能力」「論理的思考力、表現力」を養うために、本校オリジナルテキストに従ってさまざまなグループ活動を行う。

　この部分は「探究」活動に入る前の、主に「ものの見方、考え方」を揺さぶる部分であり、「考えること」や「他人の意見を尊重しながら協力すること」等の面白さ、難しさを経験させながら、論理的な思考力・柔軟な発想力を養うとともに、普段の自分を見直すことが狙いである。

【探究】（１年次 11 月～３年）

・１年の 11 月から２年次末まで、以下の５つのカテゴリーに関わるテーマについて、各グループで課題を設定し、その課題解決に向けて、協力しながら探究を進め、２年次１月に発表会を行う。

　探究のカテゴリー

　「国際」　国際政治経済　地球環境　異文化理解　国際協力　など

　「歴史」　政治と社会制度　産業と経済　都市と村落　思想と文化　など

　「地域」　佐久平振興　信州学　現代の日本　など

　「生命」　誕生と死　人間　地球の生命　医療　など

　「芸術」　美術　映像　芸能・音楽　など

・２年次発表後から３年次５月末まで個人で探究を続け、論文を完成させる。それ以降は個人の進路に向けた研究（志願理由書の書き方、面接試験の対策等）を進める。また、これまでに行ってきた探究活動のまとめや、大学（上級学校）入学後の探究的な学びについてのリサーチ等も合わせて行う。

理数科では平成６年度創設以来、「課題研究」において自然科学分野の事象を研究（探究）している。１年次前期は普通科の「探究基礎」に相乗りし、探究的な学びの基礎を作り、１年次後期から２年次末まで物理・化学・生物・地学・数学の分野に分かれて、グループで研究を深めていく。２年次の１月には普通科とは別の日に「理数科課題研究発表会」を行う。また同時に論文にまとめていく活動を展開している。

今年度はコロナ禍により、普通科の「探究」も理数科の「課題研究」も２か月半遅れてスタートした。探究（研究）活動の時間は大幅に短縮せざるを得なかったが、外部講師の講義

やフィールドワーク等をオンラインに切り替え、学びを止めないよう努めた。例年と比較すると探究した内容の深度は浅くなってしまったが、生徒たちもできる範囲内で精一杯努めたので、発表会も充実した形で終えることができた。なお、１月に佐久地域の感染警戒レベルが５に上がり、発表会は外部の参観者の来校を中止し、Zoom を使ってリアルとオンラインのハイブリッド形式で実施した。参観者からの評価も概ね好評だった。

Ⅳ　国際的な学び

台湾への修学旅行を予定していたが、コロナ禍によりキャンセルした。別の形態で国際交流を検討中である。

Ⅴ　高度な学び

理数科において、信州大学工学部や筑波大学の研究室にて最先端の実験等を経験するプログラムを実施しているが、今年度はコロナ禍により中止した。

また、臼田スタードームにて天体観測実習及び宇宙についての講義を受けるプログラムを実施しており、今年度は感染対策を十分に行ったうえで実施した。

Ⅵ　その他（特色ある取組）

本校は「未来の学校」構築事業にて、「卓越した探究的な学びを推進する高校」の実践校として指定を受けている。探究的な学びのモデルとなるよう、SDGs を基に新たな社会や地域の創造につながる、先進的・先端的な連携先との連携による探究的な学びのカリキュラムを研究し、コロナ禍ではあるが、少しずつ実践をしている。

連携校の取組

伊那北高等学校

Ⅱ　カリキュラム開発

令和４年度から始まる新学習指導要領に合わせて、文理融合の科目を設定するための委員会を発足させた。詳細は現在研究中である。

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

本年度より総合的な探究の時間・理数科課題研究の時間を通常時間割の中に入れた。これはコンスタントに探究活動を行う目的で行った。昨年度までと比較してより体系的に探究の方法を学ぶことができたと感じている。前期授業評価アンケートでは９割以上の生徒が好意的にこれらの授業をとらえていることが明らかになったことから、探究に対する生徒の意識水準も高いと言えるだろう。来年度以降はさらなる洗練と、効果の検証を行っていきたいと考えている。

Ⅳ　国際的な学び

東京大学今須良一教授の協力を得てロシアウラル大学との連携で海外研修を計画した。サイエンスアソシエーションプログラムの助成金を頂いたが、コロナ関連の問題で実施に至らなかった。リモートによる交流も検討したが、受け入れ先の都合もあり断念した。来年度以降も海外との連携先を探して、積極的に交流していきたいと考えている。

Ⅴ　高度な学び

東京大学今須良一教授のご紹介を受けて、Dragon/J-ALPS Project という大気観測プロジェクトに参加させていただくことになった。2020 年３月から PM2.5 の観測が開始されて、観測作業を生徒が行うことになった。観測に先立って、NASA・東京大学・近畿大学・京都情報大学院大学・国立環境研究所の先生方にご講演いただいた。観測に当たって生徒の作業や実験考察を予定していたが、コロナウイルス感染拡大の関係もあり観測が最も盛んにおこなわれた時期に生徒が参加できなかったことが悔やまれる。

Dragon Project のつながりで、PM2.5 の測定器や CO_2 測定器をお借りして、理数科１年生の生徒実験を行った。実験のデザイン・考察・発表を行わせる手法は東京大学の授業を参考にして行った。上記Ⅲの探究的な学びにも関連しているが、これらの時間を通常の授業内に取り入れることで、探究をコンスタントに行い、高度な学びにつなげることを目的とした。

本校で長年行われている CPA 教養講座というものがあり、本年度も実施された。教科教育では取り扱わない内容を、本校教員の有志が土曜日などに行うものである。本年度は「実験を経験し教えてみよう（発光の科学)」「“製剤”をやってみよう」「化石クリーニング講座（白亜紀アンモナイト)」「絵本からペーパーバックへ～英語多読に挑戦～」「競技百人一首の世界」の講座が開かれて、生徒には大変好評であった。「実験を経験し教えてみよう」の講座では地元の中学生の参加を募り、高校生が講師として講座を展開したが、こちらも大変な好評であった。

連携校の取組

飯田高等学校

Ⅱ　文理融合のカリキュラム開発

検討中

Ⅲ　より深い学び（探究的な学び）

〈１学年〉

ＳＤＧｓをテーマに１人１研究

大学模擬講義

〈２学年〉

（修学旅行の代替として）

大学の先生方から頂いた課題を選び、その課題について調査・研究

学年で発表

大学の先生方とリモートでつなぎ、講義や意見交換

〈３学年〉

（２学年時に）

グループで調査・研究→ポスターセッション

修学旅行時に大学を訪問、大学の先生に発表

Ⅳ　国際的な学び

検討中

Ⅴ　高度な学び

上記Ⅲ参照

（教員による大学レベルの講義を指すのであれば）検討中

【課題】

探究（＝研究）の方法論の教授が必要ではないか

・調べ方　・論文の書き方（参考文献の書き方など作法面）　・発表の仕方　etc

連携校の取組

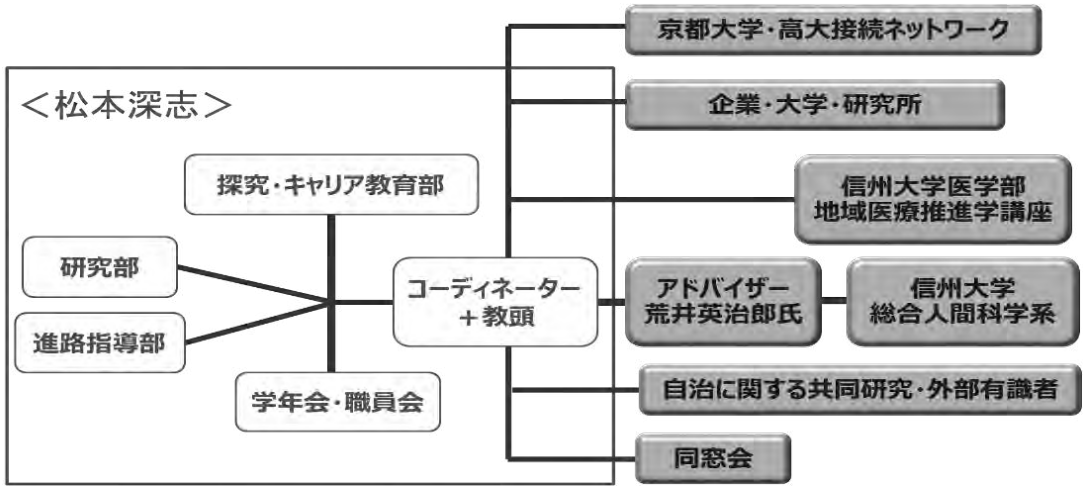
松本深志高等学校

Ⅴ　高度な学び：県立高校「未来の学校」構築事業実践校としての取組

校是としての“自治”を問い続け、その理想をすべての場面で追求・具現化することにより他者と協働して新たな価値や社会を創造できる骨太のリーダーを育成することを目標として、研究を進めている。

今年度入学生は、「総合的な探究の時間」の一環として、「深志課題探究ゼミ 2020」と銘打って、土曜午前に信州大学と連携したゼミ活動を実施（３時間×年間５日）してハイブローな学びを体験し、その後に進める各自の課題研究につなげている。

(1)　「未来の学校」構築事業での連携体制



(2)　信大連携ゼミ　開設講座一覧

ゼミ	信州大学 担当教員名(敬称略)	専門分野	タイトル	テーマ	目標
A	①荒井　英治郎 ②田村　徳至 ③枡　千晶 ④庄司　和史 ⑤河野　桃子	①教育行政学 ②社会科教育・経済教育・消費者教育 ③臨床発達心理学、障害児心理学 ④特別支援教育学 ⑤教育哲学、教育思想史	人間と教育	現代社会の教育課題 ＴＨＥ　ファシリテーション教育を哲学する	現代日本が抱える教育課題を社会科学的に分析する 教育に関するテーマをめぐって、他の受講者とともに哲学的に考え対話することができる
B	分藤　大翼	文化人類学	異文化の学び方	当たり前を疑う	「私」から自由になる
C	林　靖人	ブランド論、地域経営	地域･社会と問題解決	価値の創出と課題の解決	人間の情報処理（認知）の特徴を知り、 価値創出のシカケを自ら創出する
D	勝亦　達夫	建築学、まちづくり、 キャリア教育	建築とまちづくり	まちを見る視点と課題解決	自分が暮らす町の歴史や環境からまちづくりを考える
E	速水　達也	スポーツ科学	健康・スポーツ科学	健康やスポーツに関連する事柄への多角的アプローチ	身体運動のメカニズムや運動の効果について、学術知識に基づいた理解をする。
F	加藤　彩乃	体育・スポーツ科学	スポーツとインクルーシブ社会	スポーツの視点からインクルーシブ社会を問う	日本のスポーツやインクルーシブ教育の限界から人文・社会科学の視点で分析する
G	仙石　祐	留学生教育，グローバル教育	グローバル	グローバルな課題，文脈，解決法，そして自己	グローバルな課題を分析することを通じて，自らが他者といかに生きるべきかの視座を得る
H	①金沢　謙太郎 ②浅野　郁	①環境社会学・環境人類学 ②森林生態学	環境問題への複眼的アプローチ	環境の切り口から社会課題解決に向けた糸口を探る	環境問題に対する自分なりの考察や批判ができ、それを周りの人に説明することができる。
I	三澤　透	天文学	宇宙について語り合うゼミ	文系、理系の垣根を越えて幅広く「宇宙」を考える	分野にとらわれずに宇宙のことを学際的に捉えることができるようになる
J	大塚　勉	地質学	松本の地質環境と自然災害	身近な野外の現象から大地の運動と減災を学ぶ	身近な野外の現象が大地の運動の結果であることを知り、発見の喜びを感じてほしい。
K	有路 憲一	認知神経科学(CognitiveNeuroscience) 神経教育学(Neuroeducation) 神経言語学(Neurolinguistics)	ミライノカガク	様々なカガクノミカタを通して、カガクすることの面白さを得る	カガクすることの大変さゆえの面白み （学から楽へ）や凄みを少しでも体感する
L	中澤　勇一	医療・介護・社会疫学	医療系、文系入試での小論文にも役立つゼミ	私たちは多くの人々に支えられ、また、多くの人々を支えることもできます！	毎回講師が違うオムニバスのゼミですが、その内容はどこかで繋がっています。 また、それぞれの回で学び考えたことが、将来何かと必ず繋がります。

(3)　効果検証：４種類の測定変数を設定し、信大連携ゼミでの学習効果を検証

①　測定変数について

ア　批判的思考態度（事前・事後：６件法）

定義：「批判的思考」の態度的側面（何をすべきか、あるいは何を信じるべきかを反省的に判断すること）

イ　課題価値（事前・事後：６件法）

定義：（学習）課題に対する価値の認知

ウ　エンゲージメント（各回：６件法）

定義：（学習）活動に対する積極的な関与

エ　自由記述

・事前調査：「信大連携ゼミに期待すること」

・各回：「感想」

・事後調査：「信大連携ゼミを通して学んだこと」、「信大連携ゼミの改善点」

②　結果概要

ア　事前→事後での「批判的思考態度」の変容

・論理的思考への自覚の平均得点は、信大連携ゼミ後に統計的に有意に高まった。

⇨信大連携ゼミを通して、対象生徒は論理的思考を遂行する自信が高まった。

イ　事前→事後での課題価値の変容

・興味価値の平均得点は、信大連携ゼミ後に統計的に有意に高まった。

⇨信大連携ゼミを通して、対象生徒は学校での学習に面白さや楽しさをより抱くようになった。

ウ　各回でのエンゲージメント

・エンゲージメントは回を重ねるごとに統計的に有意に高まった。

⇨対象生徒は、信大連携ゼミの回数を重ねるごとにより積極的に関与するようになった。

エ　エンゲージメントが「批判的思考態度」と「課題価値」に及ぼす影響

・信大連携ゼミのエンゲージメントの水準が高いほど、ならびに回を重ねるごとにエンゲージメントが高まった生徒ほど、論理的思考を遂行する自信が統計的に有意に高まった。

・信大連携ゼミのエンゲージメントの水準が高いほど、学校での学習が興味や楽しさを伴うものであることを対象生徒が認知するようになった。

Ⅵ　生徒の自主活動：「学校×KDDI 共創プロジェクト」としての取組

情報デザインの視点から学校ホームページ活性化を図り、生徒主体の情報発信を実現するため、KDDI や地元企業のエイブルデザインといった外部有識者からの助言が得ながら、生徒会有志が「学校ホームページ刷新プロジェクト」に取組んだ。

「生徒主体での HP コンテンツ制作」「生徒主体の発信」「持続可能な HP 運営体制構築」を実現するため、Web 会議やクラウドサービス等も利用して企画会議を進めることで、協働的な業務の進め方やツール活用といった汎用的なスキルの獲得にもつながった。

長野県上田高等学校ＷＷＬ事業の評価と考察

研究開発構想　**「いのち」を視点に、統合的・全体的アプローチによってＳＤＧｓを探究する**

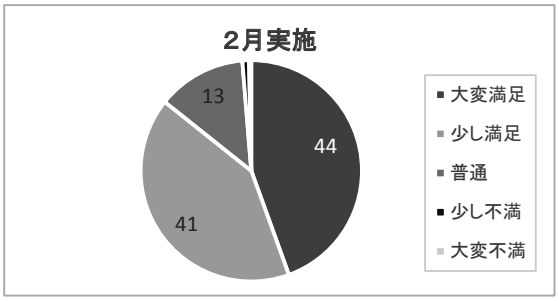
ＷＷＬカリキュラムにより生徒がどのように変容したかについて、定期的なアンケートによる調査を実施している。
また、ＧＰＳアカデミックにより３つの思考力を調査し、経年比較を行っている。

調査時期	１年生対象	２年生対象	３年生対象	教職員対象	保護者対象
４月	アンケート	アンケート			
９月	アンケート	アンケート			アンケート
１２月	GPSアカデミック	GPSアカデミック	アンケート		
２月	アンケート	アンケート		アンケート	

年度末生徒アンケート ～ＷＷＬ行事の自己評価と事業評価～

①　自己評価　上田高校ＷＷＬ(ＳＧＨ)行事やカリキュラムを体験して、あなたは自分をどう評価しますか？

ａ　令和2年度　１学年（ＷＷＬ１期生）　312名



ＳＧＨ５期生：コロナ禍の１年間ではあったものの、２年次末の調査で「大変満足」の生徒が６％増加した。

○２年生徒の意見

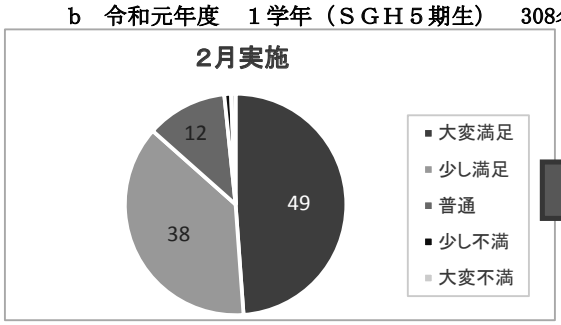
課題研究　課題解決への道筋をしっかりと立てることができた。
海外研修　海外の高校生と交流は刺激的で良い影響を与えてもらえた。

ＷＷＬ１期生：１年終了時の自己評価（ａ）は85％が満足感を持った。
ただし「大変満足」の比率は前年度よりも若干下がった。

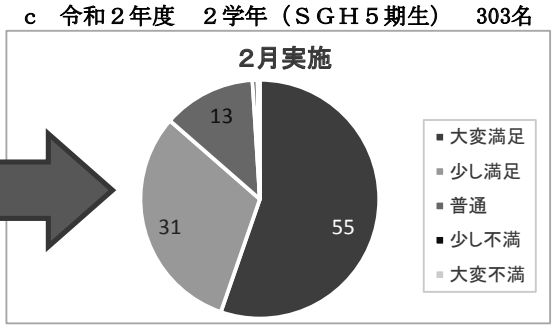
○１年生徒の意見

課題研究　一つの問題に対し多方面から考えることができるようになった。
海外研修　英語を使おうとする意識が高まった。

ｂ　令和元年度　１学年（ＳＧＨ５期生）　308名

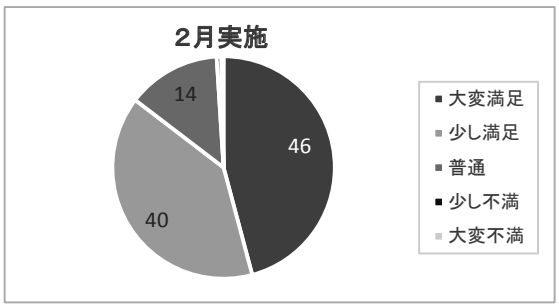


ｃ　令和２年度　２学年（ＳＧＨ５期生）　303名



②　事業評価　あなたは上田高校ＷＷＬ（ＳＧＨ）行事をどう評価しますか？

ａ　令和2年度　１学年（ＷＷＬ１期生）　312名



ＳＧＨ５期生：コロナ禍で様々な行事が中止や変更になったものの、「大変満足」の生徒は１年次に比べて若干増加した。

○２年生徒の意見

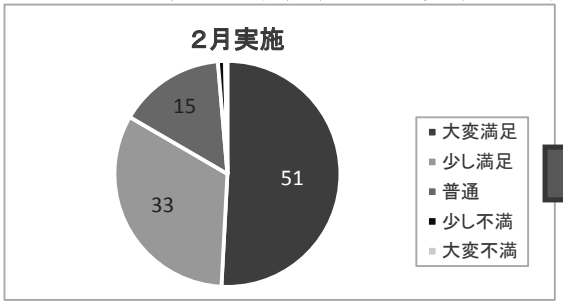
課題研究　自分で調べた課題に対する疑問を解決していくのが楽しかった。
海外研修　同世代の高校生との英語での文化交流で、新たな発見ができた。

ＷＷＬ１期生：満足感を抱いた生徒はほぼ例年並みだったものの、「大変満足」の生徒は昨年度に比べて若干減少した。

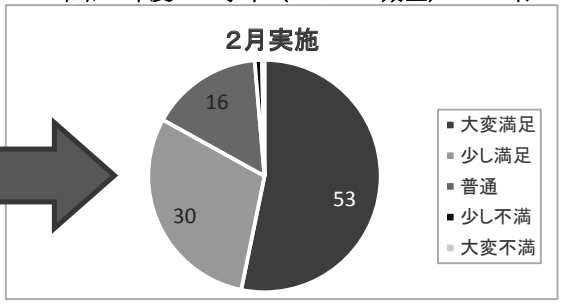
○１年生徒の意見

課題研究　自分とは違う視点の意見を取り入れることができた。
海外研修　検定等で英語を様々な場面で使うことができた。

ｂ　令和元年度　１学年（ＳＧＨ５期生）　308名



ｃ　令和２年度　２学年（ＳＧＨ５期生）　303名

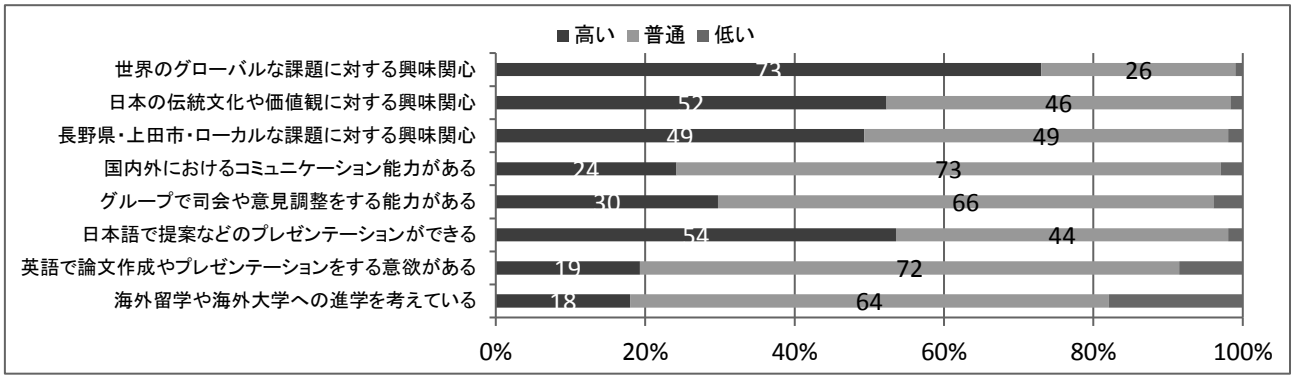


WWＬに関する１年間の意識の変化

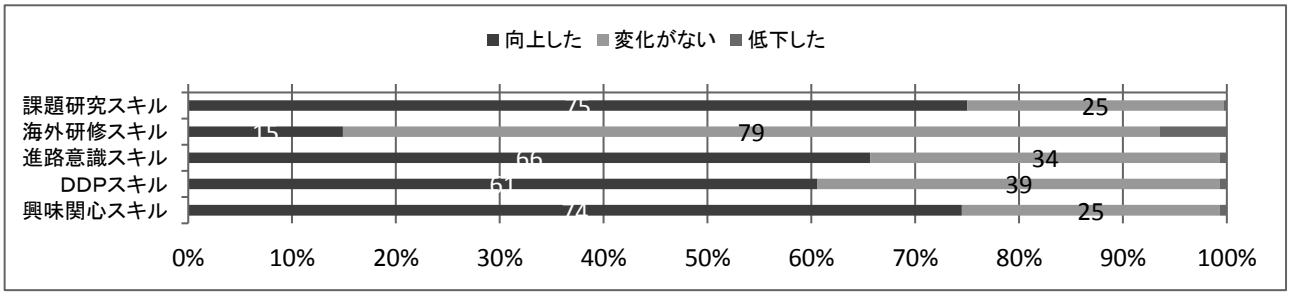
WWＬ１期生（令和２年度入学，１年生）とＳＧＨ５期生（令和元年度入学，２年生）

①　１学年アンケート調査　　**回答生徒数312人**

ａ　興味関心

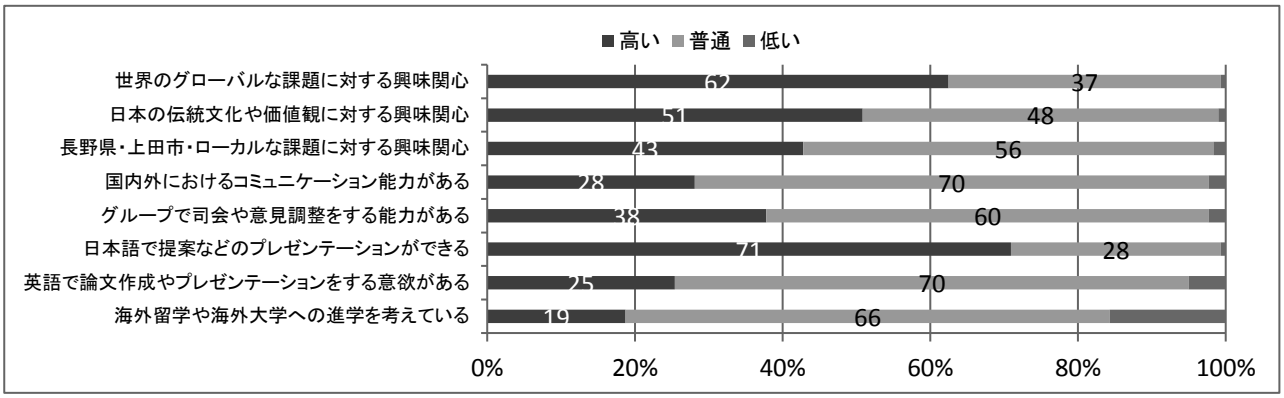


ｂ　WWＬに関連したスキル　※１年４月と比較して変化があったか？

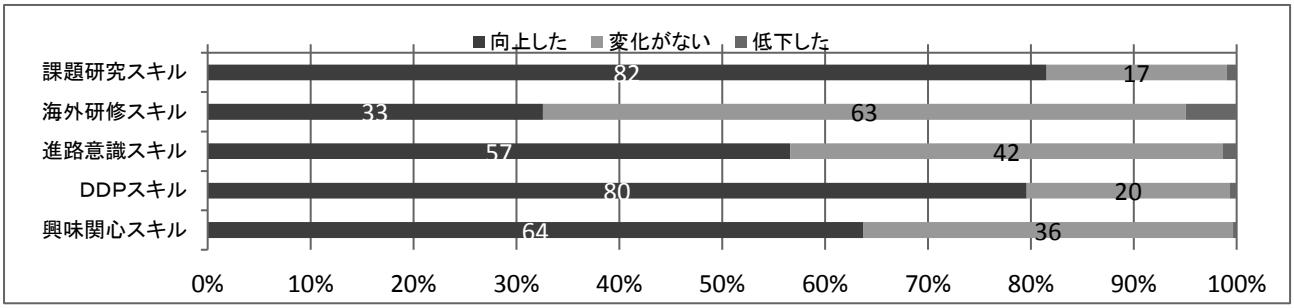


②　２学年　アンケート調査　　**回答生徒数303人**

ａ　興味関心



ｂ　WWＬに関連したスキル　※２年４月と比較して変化があったか？



③　評価と考察

１年：ローカル課題への興味関心が例年になく高まった。県内フィールドワークの改善の成果と思われる。

１年：「海外研修スキル」の向上を実感する生徒が昨年より14%下落したのは、例年行ってきた台湾との交流機会が全く持てなかった理由によると思われる。

２年 「グループで司会や意見調整をする能力」の高さを実感する生徒が、前年度より10%程度増加した。授業内での対話的学習を取り入れてきた成果と考えられる。

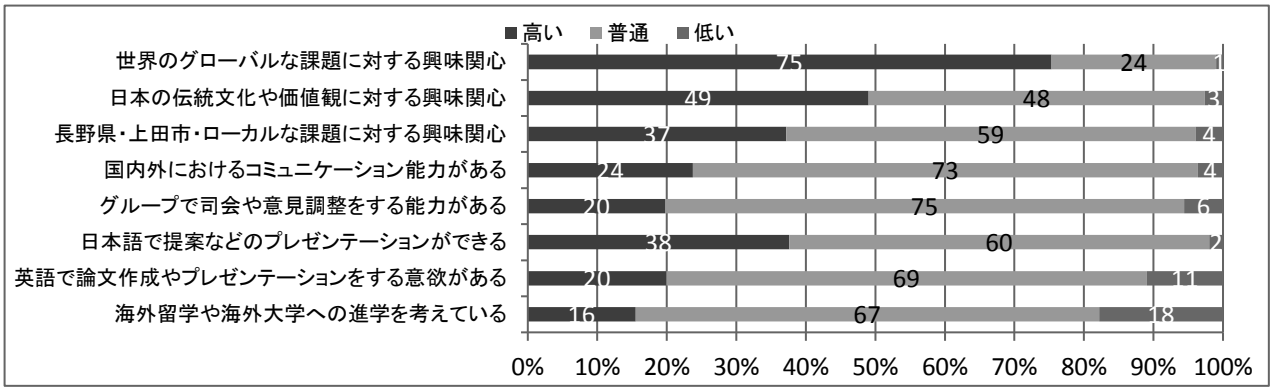
２年：台湾研修旅行が実施できず、「海外研修スキル」の向上を実感する生徒が昨年より30%下落した。

ＳＧＨ５期生の意識の変容

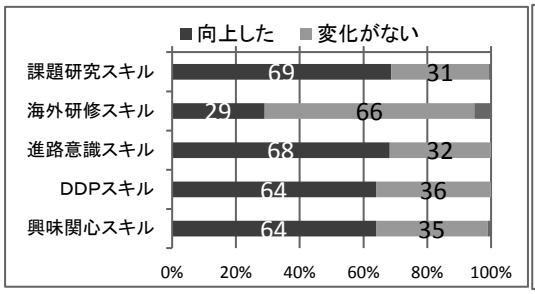
ＳＧＨ５期生（令和元年度入学，２年生）の１年次，２年次の比較

①　１年次（令和2年2月実施アンケート）　　**生徒312人**

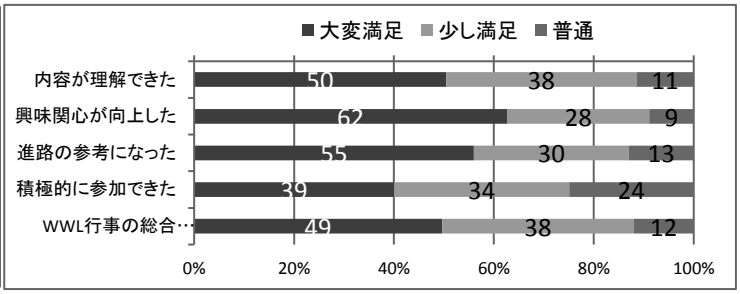
a　興味関心



b　ＳＧＨに関連したスキル

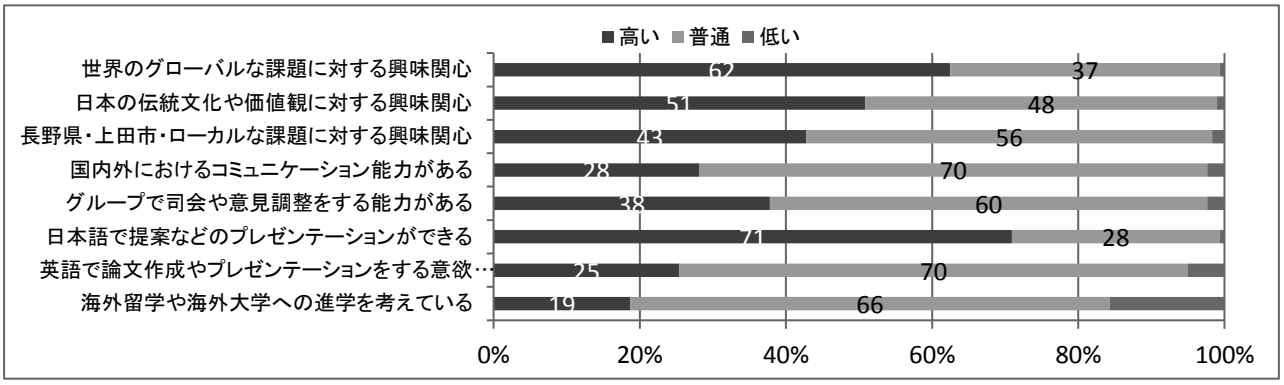


c　ＳＧＨ行事の総合評価

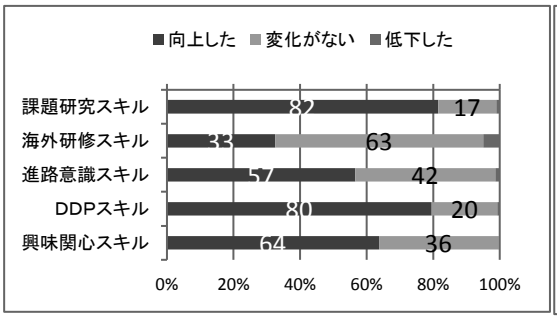


②　２年次（令和3年2月アンケート調査）　　**回答生徒数303人**

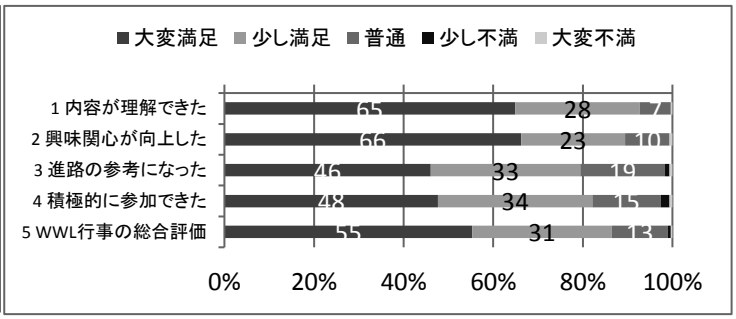
a　興味関心



b　ＷＷＬに関連したスキル



c　ＷＷＬ行事の総合評価

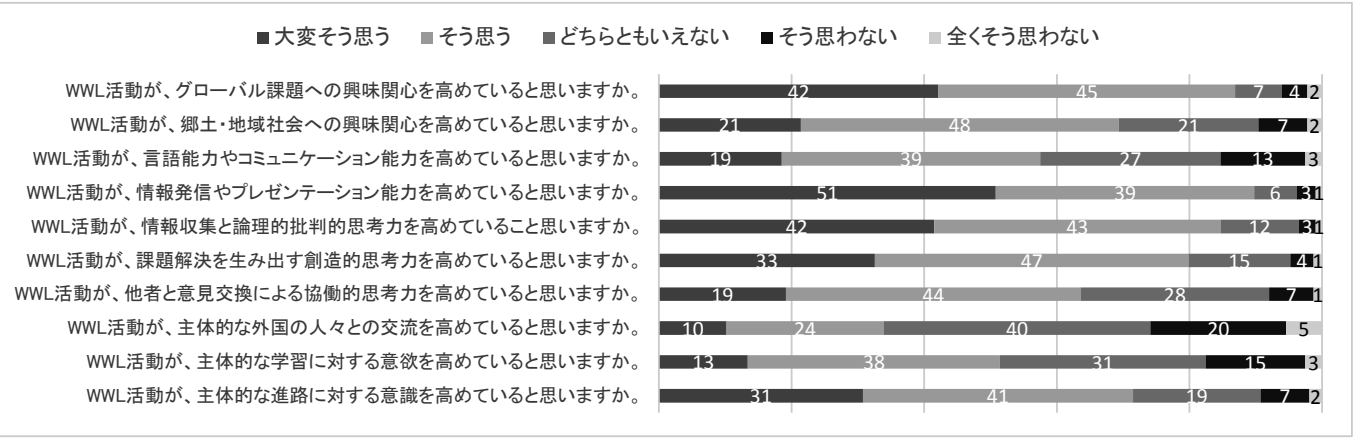


③ 評価と考察

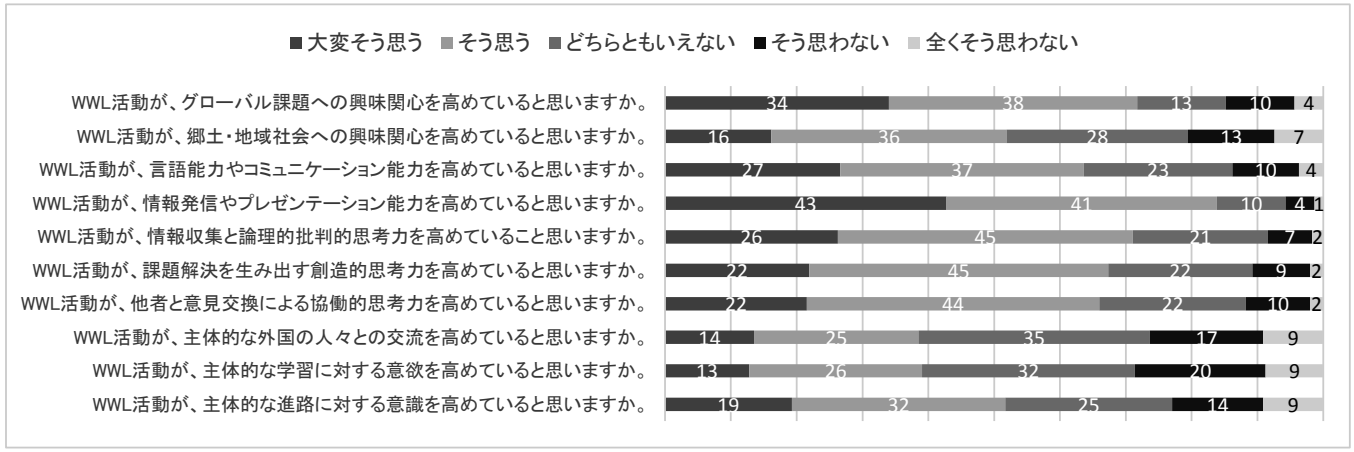
コロナ禍で、本学年の生徒は２年次において台湾研修旅行や首都圏フィールドワークができず、１年間でどのような意識の変容があったか注目されたが、「グループで司会や意見調整をする能力」の高さを実感する生徒が１年次に比べ18%、「日本語で提案などのプレゼンテーションができる」能力の高さを実感する生徒が33%増加した。これはＫＤＤＩ連携授業でのマシュマロチャレンジや日頃のグループ学習、さらにはＧＳ報告会での全員によるポスターセッションなどの成果と思われる。bの中では、「課題研究」、「DDP」のスキル向上を実感する生徒が着実に増えた。また、cの各項目も全般的には１年次に比べて満足度が着実に向上している。

WWL活動がどのような能力を高めているか？

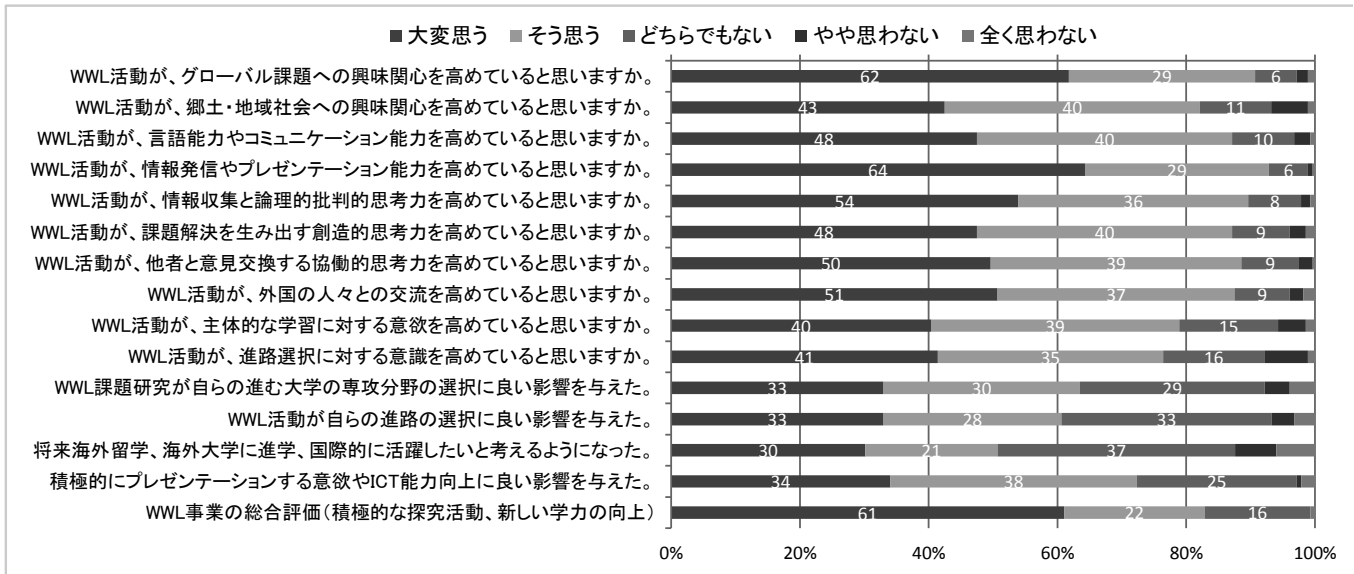
① １学年　　1学年326人　　12　17 実施



② ２学年　　2学年320人　　12　17 実施



③ ３学年　　3学年315人　　12　17 実施



考察　従来，質問に対する肯定的な評価が、学年の上昇にしたがって高くなる傾向が見られたが、今年度は３年生の満足度の高さと２年生のやや低い数値が目立った。背景にあるのは、コロナ禍にともなう２年生の首都圏フィールドワークと台湾研修旅行の中止であろう。代替行事として前者に関してはＫＤＤＩによるマシュマロチャレンジなど、後者に関してはオンライン交流を実施したが、１年次に県内フィールドワークを体験した以上、実際に現地に行く研修との落差を感じたに違いない。その一方で、３年生は２年次までの様々な研修を予定通りにできた分、卒業を控えて諸活動に対する満足感が高くなっている。

評価と考察　　ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃテストによる学力評価

ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃテスト　　2020年　12月 実施　　１年２年問題共通

○社会で必要な３つの思考力　　受験者　２年　299 人

1 批判的思考力　　2 協働的思考力　　3 創造的思考力　　受験者　１年　313 人

○問題解決のプロセス

課題の設定→　情報の収集→　整理・分析→　まとめ・表現→　振り返り・考えの更新

考察 本年、昨年のＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃテスト数値を比較して考察した。
２学年において協働的思考力のAランク層が厚くなった。
両学年とも創造的思考力のAランク層が昨年度比較で減少しているのが、今後の課題といえる。

①　思考力テスト度数分布と到達度

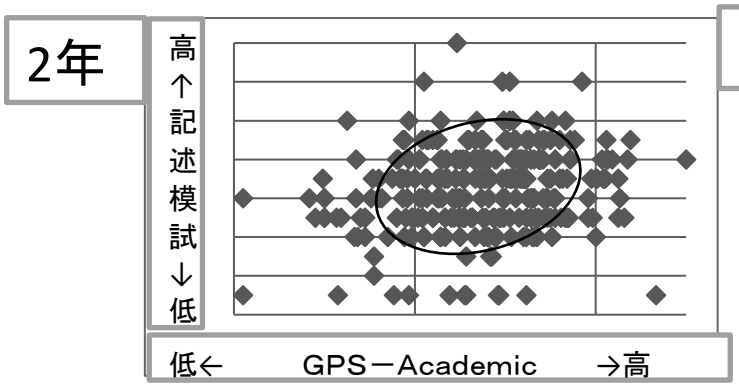
現２年　度数分布	A　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	0	42	50	5	0
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	1	52	41	4	0
創造的思考力	問題発見・問題解決力	0	35	57	5	0
現２年昨年１年度数分布	B　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	0	44	56	1	0
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	0	41	55	4	0
創造的思考力	問題発見・問題解決力	1	55	43	2	0
現２年昨１年比較	A－B　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	0	−2	−5	4	0
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	1	11	−15	0	0
創造的思考力	問題発見・問題解決力	−1	−20	14	3	0

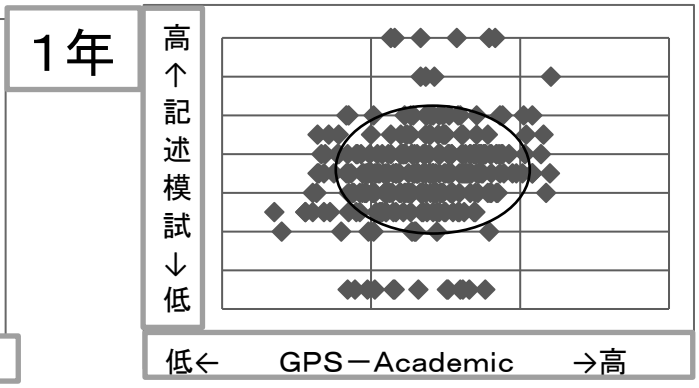
現１年　度数分布	C　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	0	32	63	4	0
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	1	38	55	7	0
創造的思考力	問題発見・問題解決力	0	24	66	9	0
現１年昨１年比較	C－B　　%	S	A	B	C	D
批判的思考力	情報抽出吟味・論理構成力	0	−12	7	3	0
協働的思考力	他者理解・協働的社会参画	1	−4	−1	3	0
創造的思考力	問題発見・問題解決力	−1	−31	23	7	0

思考力テスト結果	学年全体の到達度　　Ｓは目標
批判的思考力	Ｓ→　目的に応じてすべての情報を抽出し活用し、納得感のある主張を提示できる。
B　情報抽出吟味	やや抽象的な設定の資料から適切な指示に従って情報を抽出し活用できる
B　論理構成力	明確な主張回答がある
協働的思考力	Ｓ→　多様な考え方で、相互にアイデアを提供し、解決の主体者になろうとしている。
B　他者理解	相互のアイデアを提供または共有しようとし、その違いを受け入れることができる。
C　協働的社会参画	提示された問題の解決を実行している人々を支援する意志がみられる
創造的思考力	Ｓ→　資料と既有知識を結びつけ、実現可能性の高い独創性のある解決策を提案できる。
B　情報発見	与えられた資料と他の事例との相似性関連性を見いだし、他の事例に転用できる。
B　問題解決	提示された範囲で、問題解決のための条件を満たした解決策を提案できる。

②　ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃ・記述模試相関表　　教科学力（英語数学国語）１２月実施

考察　ＧＰＳ－Ａｃａｄｅｍｉｃスキルと教科学力はほぼ相関する。２年で教科学力とＧＰＳスキル値のいずれか片方に偏る生徒が目立つが、これは１年次から続く傾向である。
１年では、中心部への凝集度合いが高い。





③　思考力の自己評価×課題研究プロセス相関表

考察 問題解決プロセスでは、1年、2年とも情報収集能力の自己評価が高い。
２年の昨年１年次との比較では、課題の設定・情報の収集において値が上昇し、成長を実感している。

問題解決プロセス別

現２年　　A	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	3.2	3.5	3.3	3.0	3.3	3.3
協働的思考力	3.4	3.7	3.4	3.1	3.4	3.4
創造的思考力	3.1	3.4	3.1	3.1	3.1	3.2
プロセス平均値	3.2	3.5	3.3	3.1	3.3	
現２年昨１年　　B	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	3.1	3.4	3.4	3.1	3.2	
協働的思考力	3.3	3.7	3.4	3.2	3.5	
創造的思考力	3.1	3.3	3.1	3.1	3.1	
プロセス平均値	3.2	3.5	3.3	3.1	3.3	
現２年昨１年比較A-B	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	0.1	0.1	-0.1	-0.1	0.1	3.3
協働的思考力	0.1	0.0	0.0	-0.1	-0.1	3.4
創造的思考力	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	3.2
プロセス平均値	0.1	0.1	0.0	-0.1	0.0	

現１年　　C	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	3.3	3.4	3.4	3.1	3.3	3.3
協働的思考力	3.5	3.8	3.5	3.3	3.6	3.5
創造的思考力	3.1	3.3	3.1	3.1	3.1	3.1
プロセス平均値	3.3	3.5	3.3	3.2	3.3	
現１年昨１年比較C-B	課題の設定	情報の収集	整理・分析	まとめ・表現	振り返り・考えの更新	思考力平均値
批判的思考力	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	3.3
協働的思考力	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	3.5
創造的思考力	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.1
プロセス平均値	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0

④　テスト結果×自己評価相関表

考察 現２年の昨１年次との比較では、協働的思考力の上位割合が増え、近年の課題だったこの問題に明るい展望が持てた。
その一方で、今年度は創造的思考力の上位割合が低下し、自己評価の意識面でも今後の課題となった。

P

自己評価	現２年　批判的思考力		現２年　協働的思考力		現２年　創造的思考力	
5	66	50	69	77	56	35
4	22%	17%	23%	26%	19%	12%
3	105	78	69	84	136	72
2	35%	26%	23%	28%	45%	24%
1	D C	B A S	D C	B A S	D C	B A S

Q

自己評価	現２年昨１年　批判的思考力		現２年昨１年　協働的思考力		現２年昨１年　創造的思考力	
5	56	47	89	61	43	56
4	18%	15%	28%	19%	14%	18%
3	122	91	98	68	98	119
2	39%	29%	31%	22%	31%	38%
1	D C	B A S	D C	B A S	D C	B A S

P-Q

自己評価	現２年　批判的思考力		現２年　協働的思考力		現２年　創造的思考力	
5	10	3	-20	16	13	-21
4	4%	2%	-5%	7%	5%	-6%
3	-17	-13	-29	16	38	-47
2	-4%	-3%	-8%	6%	14%	-14%
1	D C	B A S	D C	B A S	D C	B A S

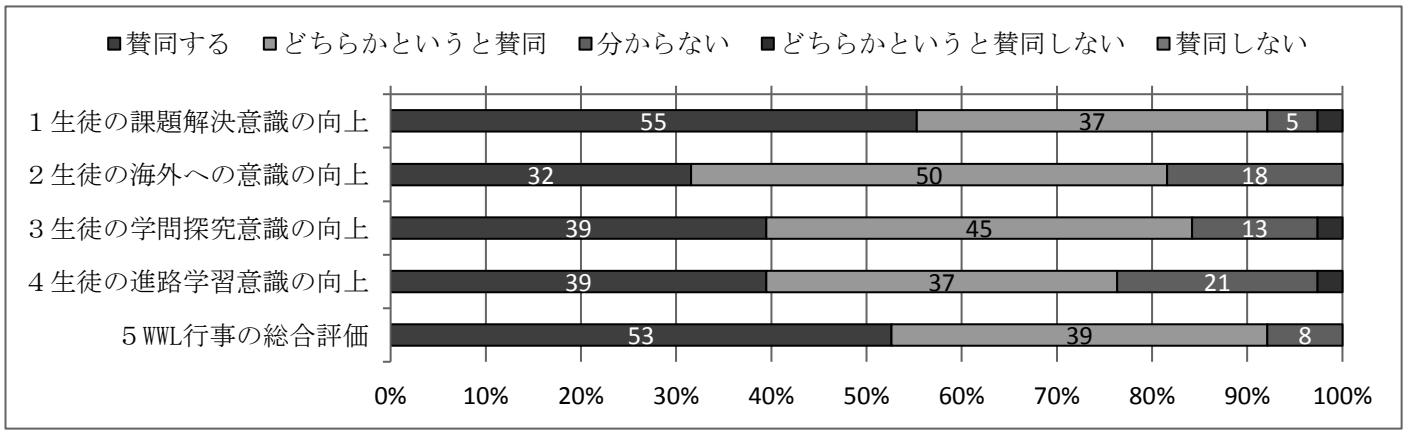
１年

自己評価	現１年　批判的思考力		現１年　協働的思考力		現１年　創造的思考力	
5	83	40	109	59	63	25
4	27%	13%	35%	19%	20%	8%
3	128	62	83	62	174	51
2	41%	20%	27%	20%	56%	16%
1	D C	B A S	D C	B A S	D C	B A S
	思考力テスト		思考力テスト		思考力テスト	

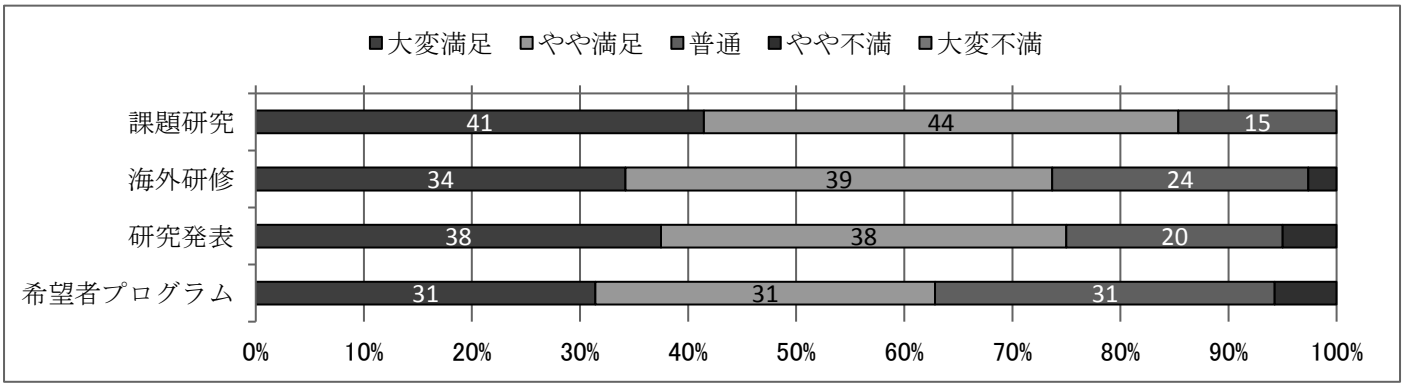
WWLに関する教職員アンケート

令和３年２月８日（金）実施

＜総合評価　WWL活動により、上田高校生の成長がみられたか？＞

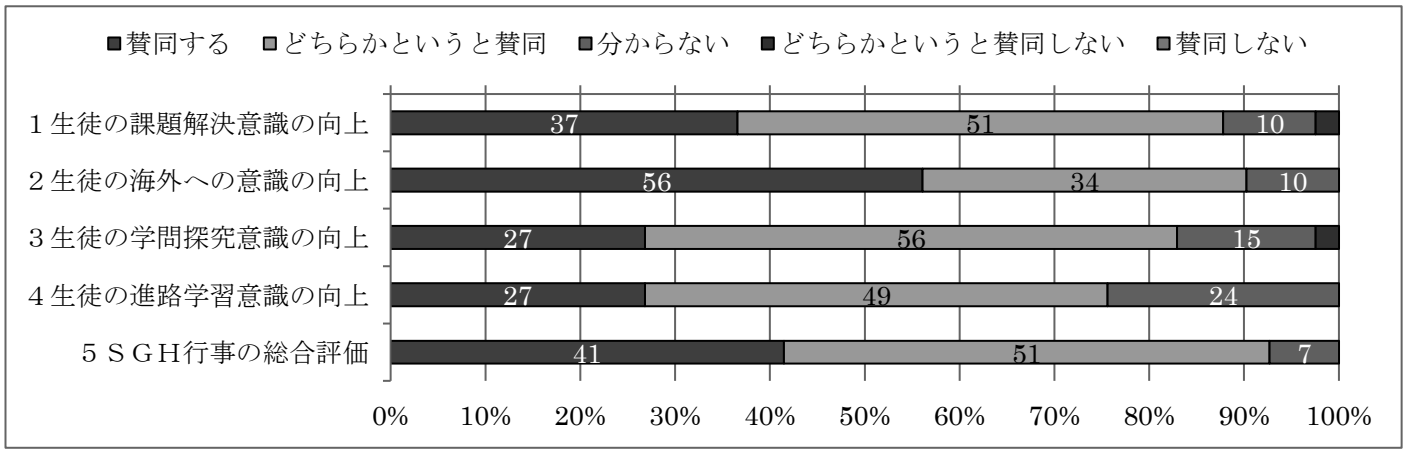


＜WWL活動に対する教員の分野別満足度＞

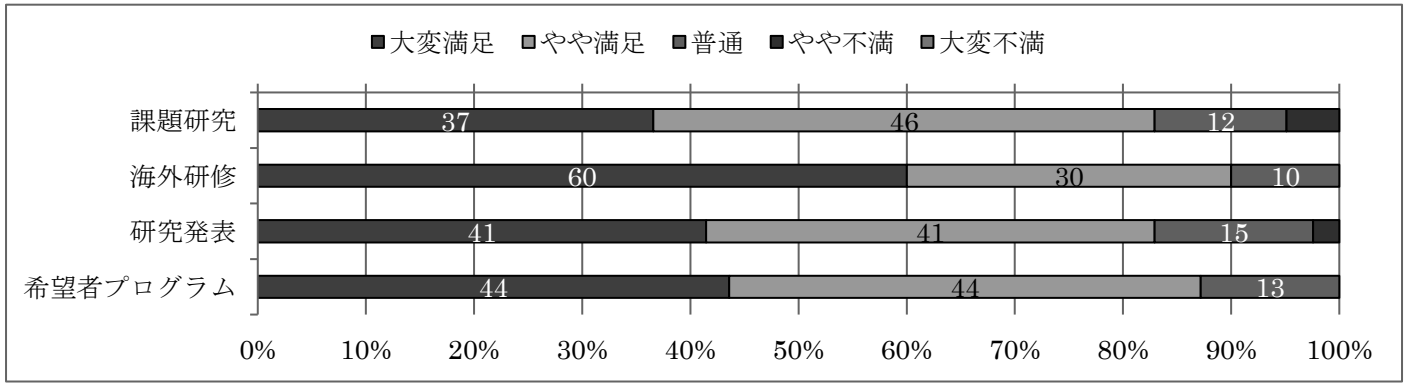


令和２年２月 12 日（水）実施

＜総合評価　ＳＧＨ活動により、上田高校生の成長がみられたか？＞



＜ＳＧＨ活動に対する教員の分野別満足度＞



A　課　題　研　究	
○良かった点	◇改善点・アドバイス
・これからの世の中で必要とされる力を育成している。 ・生徒は自分の目標を持ち、自分への問いかけが常にできていたように思う。 ・コロナ禍でも可能なことを模索して職員も生徒も活動していた。 ・活動を通して生徒たちは、情報発信力がついた。 ・「研究」というところの入り口に立つことはできた。 ・学問を追究することの意味は示せたかと思う。	・コロナ禍でやむを得ない部分があったが、１学年の県内フィールドワークは、クラスごとではなく進路希望別等のニーズに合ったコース選択ができた方がよかったのではないかと思った。 ・課題の焦点を絞る力のさらなる育成。
B　海　外　研　修	
○良かった点	◇改善点・アドバイス
・コロナ禍で実施方法を工夫でき、実行したこと。 ・出来得ること、新しいこと、試行錯誤しながら開拓できたと思う。 ・現地に赴くことはできなかったが、別の形の交流が実施できて良かった。 ・台湾交流が工夫されていて良かった。	・オンライン以外の方法の研究、開発。 ・オンライン環境のさらなる向上。
C　研　究　発　表	
○良かった点	◇改善点・アドバイス
・生徒全員が参加できる体制が確立していること。 ・プレゼンテーション能力、発表を支える研究の充実等、生徒の成長を感じることができた。 ・ポスターセッションでは、普段、比較的活発でない生徒も堂々と話す姿を見ることができた。	・ポスターセッションについては、発表時間、質問時間が短いと感じた。 ・研究というものの本質を理解できない生徒も若干存在する。
D　希望者プログラム	
○良かった点	◇改善点・アドバイス
・上級生が活動を次の世代に伝えようと自主的に取り組んでいること。 ・希望者は、目的意識をもって、意欲的に取り組んでいて良いと思う。	・ボランティア育成の校内態勢の構築。 ・底の浅い研究も一部にあった。
E　全体	
○良かった点	◇改善点・アドバイス
・一つの物事について腰を据えて考える機会があるのは良いと感じた。 ・国内外に発信・受信できるイベントがあり、生徒の語学や国際性を高めることができている。 ・教科の学習以外に視野を広げて、学習に取り組むことで、生徒は良い経験ができたと思う。 ・自分の興味あることについて研究することで、多くの生徒が熱心に取り組むことができたと感じる。 ・どの生徒の発表、ポスターの作成についてもかなり準備がなされていて、よくできていた。 ・教師だけでなく、下級生が上級生の取り組みを見る機会を設けることで、良き手本になっている。	・固定概念に捉われず、ピンチをチャンスに新しいことを恐れない、失敗ではなく、新たな課題に挑戦する前向きな姿勢を生徒も教員ももっと持てるといい。 ・班活や学習との両立に苦しむ生徒が多くいた。 ・係職員以外の先生の意識の高揚。 ・ＳＤＧｓにだけこだわり制約されずに自由な発想ができ、生徒同士がより討論できる場や時間も検討すべき。

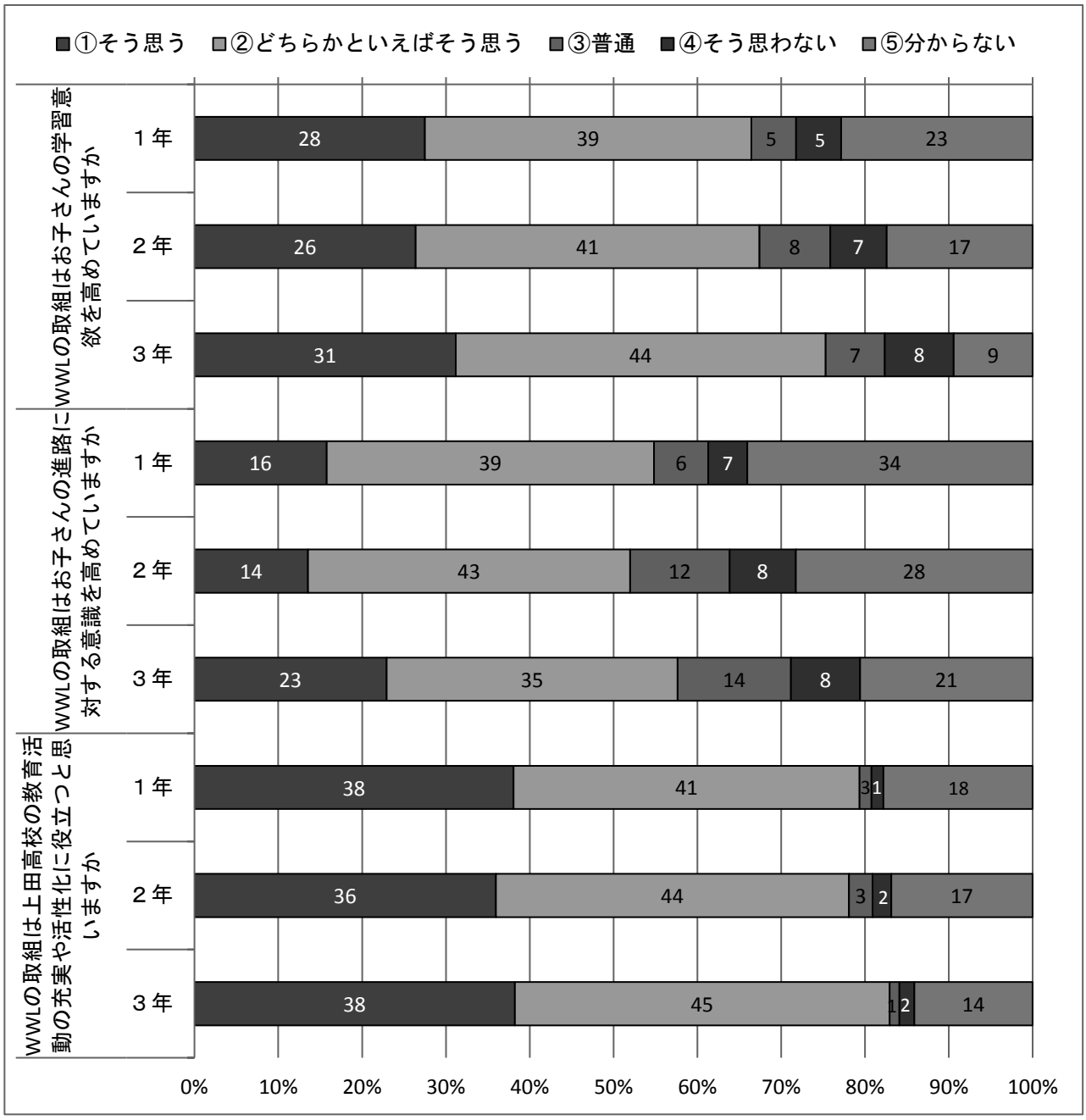
考　察

・今年度はコロナ禍で多くの探究活動が中止や変更を余儀なくされたが、生徒の成長への影響，という視点で職員の評価は概ね前年度より高くなっている。まさに「ピンチをチャンスに」変えようと、職員が新たな知恵を出して協力した成果として前向きに捉えたい。こうした背景には、昨年度から始まった全職員による課題研究指導や、１年担任団が係職員と協力してＧＳＩ指導を行って探究学習の裾野が広がってきたことがあげられよう。

・「生徒の海外への意識の向上」に関しては、厳しい評価が出た。コロナ禍のやむを得ない側面もあろうが、こうした状況ゆえに国際協力などを考える機会にもなる。来年度の新たな研究課題と位置づけたい。

保護者アンケート

① 期　　日　　８月28 日（金）～９月11日（金）　全学年保護者対象 有効回答数 629名



② 記述部分（本校の教育に関する全般的な意見より抽出）

・フィリピンスタディツアーや台湾研修旅行などがコロナ禍で中止となったが、それにかわる十分な代替措置の実施をお願いしたい。
・旧ＳＧＨが終了となりましたが、それを楽しみに貴校に入学し準備していました。コロナが落ちつきましたら、また活動を活発化してください。
・生徒の主体性を尊重し、それを叶えるために最大限の応援をして下さる先生方に、感謝しております。

③ 評価と考察

毎年秋に全保護者を対象に実施しているアンケートのなかからＷＷＬに関連する項目についてまとめてみた。全般的には肯定的な評価が多いと言える。今年度の特徴的として、これまでのＳＧＨ指定期間５年間の調査では、全般的に下の学年に行くほどＳＧＨに関する肯定的評価が高い傾向が見られたが、今年度は逆の傾向が見られたことがある。理由としては、何よりもコロナ禍による４，５月の休校措置や行事の縮減で、会員参加によるＰＴＡ総会や学年ＰＴＡ総会が持てず、ＷＷＬ活動の内容を周知できる機会が乏しかったことにあろう。１年生に関しては、入学式の方がＷＷＬ事業の拠点校指定日よりも早かったし、２年生に関しては首都圏フィールドワークや台湾研修旅行の中止が次々と決まる一方で、アンケート実施時期には代替行事に関しても保護者に伝わりづらかった。次年度に向けては代替教育活動を行う場合に早期に周知、計画的に実施し、積極的に広報活動を行うことが課題となる。

外部英語検定受検を用いた英語コミュニケーション能力の把握

１　＜課題研究推進のための英語力把握 ―外部英語検定（ＧＴＥＣ）の結果から―＞

２年生で行う課題研究では、英語でディスカッションやプレゼンテーションをする力が求められる。２年生に進級する前の英語力を、外部英語検定を活用して把握することで、１年間の指導を振り返り、進級後の外国語指導や課題研究指導、さらに来年度入学する１年生の外国語指導に活かす。

２　外部英語検定　結果

ＧＴＥＣ　＜Advanced＞

B1　：海外進学を視野に入れることができるレベル
A2.2：海外の高校の授業に参加できるレベル
A2.1：海外ホームステイや語学研修で楽しめるレベル

CEFR-J	令和２年度１年生	令和元年度１年生
技能トータル	A2.2	A2.2
リーディング	A2.2	A2.1
リスニング	A2.2	A2.1
ライティング	A2.2	A2.2
スピーキング	A2.2	A2.2

＜レベル別の人数＞　１学年３０２名受検　　第４６回　令和２年１２月実施

	トータル		リーディング		リスニング		ライティング		スピーキング	
	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数
B2	*1190*~	0	280~	0	290~	4	300~	0	320	1
B1.2	*1060*~	1	250~	4	250~	16	260~	4	300~	6
B1.1	*960*~	23	220~	31	220~	32	240~	69	280~	10
A2.2	*810*~	174	180~	163	190~	95	220~	121	220~	195
A2.1	*690*~	102	150~	98	160~	111	190~	104	190~	78
A1.3	*520*~	2	110~	6	130~	43	140~	2	140~	12
A1.2	*370*~	0	80~	0	90~	1	100~	2	100~	0

注) A1.1 以下については該当者なしのため省略した。

＜レベル別の人数＞　１学年３１７名受検　第４０回　令和元年１２月実施

	トータル		リーディング		リスニング		ライティング		スピーキング	
	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数	スコア	人数
B2	*1190*~	1	280~	1	290~	5	300~	0	320	2
B1.2	*1060*~	1	250~	0	250~	4	260~	7	300~	4
B1.1	*960*~	13	220~	8	220~	20	240~	92	280~	9
A2.2	*810*~	194	180~	133	190~	87	220~	129	220~	251
A2.1	*690*~	103	150~	165	160~	143	190~	86	190~	42
A1.3	*520*~	5	110~	10	130~	54	140~	3	140~	8
A1.2	*370*~	0	80~	0	90~	4	100~	0	100~	1

３　評価と考察

本年度は、ＧＴＥＣの全員受検が１年生のみだったため、昨年度の１年生と比較し、評価と考察を行う。ただし、年度によって受検者合計人数が若干違うことに留意する必要がある。

ＧＴＥＣの平均スコアを CEFR-J に換算すると、技能トータルでは平均 A2.2 であり、昨年と同様であった。技能別では、ライティング及びスピーキングが A2.2 であり、昨年と同様であった。一方、リーディング及びリスニングは A2.2 であり、昨年よりも平均レベルが上昇した。レベル別の人数分布をみると、リーディングでは、B1 以上と判定された生徒が令和元年では 9 名であったのに対し、令和２年では 35 名であった。またリスニングでは、B1 以上と判定された生徒が令和元年では 29 名であったのに対し、令和２年では 52 名であった。受容技能において上位層が増加し、その結果、平均レベルが上昇したと考えられる。

産出技能について、全体としての平均レベルに変化はなかったが、レベル別の人数には変化がみられた。ライティングでは、B1 以上の生徒数が令和元年では 99 名であったが、令和２年は 73 名であり、上位層に多少の減少がみられた。スピーキングについて、B1 以上の生徒数が令和元年では 15 名、令和２年は 17 名であり、大きな変化はなかった。しかし、A2.2 と判定された生徒数が、令和元年は 251 名、令和２年では 195 名であり、大きな減少がみられた。

受容技能における上位層の増加と産出技能における上位層（ライティングでは B1 以上、スピーキングでは A2.2）の減少という結果は、外国語の授業において、感染症対策として授業形態が制限されたことに起因している可能性が高い。特に令和２年度当初において、ペア活動などが制限されており、あるテーマについての会話やプレゼンテーション、ディスカッションなどスピーキング活動を行うことができなかった。また、２ヶ月間の休校期間があり、年間を通してまとまった量の文章を書く機会を授業中に確保することが難しかった。代わりに、生徒が各自で文法や単語を学んだり、授業中にリーディングやリスニングを行う時間が相対的に増加した。本年度の結果は、これらの要因を反映している可能性が高い。

本校では、２年生で課題研究を行う際、英語で資料作成をし、発表する機会がある。これらを支える英語力として産出技能は欠かせない。授業形態が制限される中でも、１年生が産出技能を向上させる方法を模索し実践する必要がある。

長野県が目指すものと WWL ～WWL の指定と 1 年目の取組に想う

カリキュラムアドバイザー　内堀 繁利
（長野県教育委員会事務局 高校改革推進役）

Nagano Prefectural Board of Education
学び応援キャラクター「信州なび助」©長野県教育委員会信州なび助

文部科学省の実施要項によれば、**WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業**とは、端的に言えば、「将来、世界で活躍できるイノベーティブなグローバル人材の育成を目的」とした、「高校生へ高度な学びを提供する仕組み（**AL ネットワーク**）の形成を目指す取組」である。AL ネットワークが提供する高度な学びの例としては、「テーマを通じた高校生国際会議の開催」があげられ、手法としては、「これまでのスーパーグローバルハイスクール事業の取組の実績等、グローバル人材育成に向けた教育資源の活用」、「高等学校の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備」「高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等との協働」をあげている。AL ネットワークは、将来的に、WWL コンソーシアムへとつなげることを想定している。**WWL コンソーシアム**とは、「高度かつ多様な科目内容を、生徒個人の興味・関心・特性に応じて履修可能とする高校生の学習プログラムの開発と実践を担うもののとして想定」されており、「将来的に、高校生6万人あたり1か所を目安に、各都道府県で国立、公立及び私立の高等学校等を拠点校として整備し、すべての高校生がオンライン・オフラインで参加することを可能とする仕組みを持つことが目指されている」とある。

これまで国の研究校等の指定を受けようとする際には、自分たち学校のその時点での方向や改革のスピードなどと乖離があることがままあり、実際に指定校になり実践を積み重ねることにより、結果的に、その事業の理念や実践の方向性が学校の特色になっていくことも多かった。一方で、すべての県立高校で「3つの方針」を定め、魅力化・特色化を進めている現況下では、研究指定校をはじめとする様々な事業は、理想的には、各校が目指す方向へと着実に進むための有効な手段となり得ることが重要であり、それが国の事業に手を挙げる際の判断基準の一つになりつつある。

この事業を目にしたとき、長野県や県内各校がこれまで積み上げてきたもの、そしてこれから目指しているものとドンピシャ、一致していると思えた。それは、AL ネットワークや WWL コンソーシアムが、長野県教委が2016年以降つくり続けてきた全県プラットフォームの発想に合致していた上に、「これまでのスーパーグローバルハイスクール事業の取組の実績等、グローバル人材育成に向けた教育資源の活用」、「高等学校の先進的なカリキュラムの研究開発・実践と持続可能な取組とするための体制整備」「「高等学校等と国内外の大学、企業、国際機関等との協働」といったものが、SGH 指定校を始め、県内の先進的な高校で積極的に取り組んできたものだったからだ。そしてそれは、まさに長野県や各校が「目指す方向へと着実に進むための有効な手段」ということになる。

というわけで始まったこの事業だが、新型コロナウイルス感染症の影響で、学校が休業になったり、国内外のフィールドワークなどが中止となったりする中、拠点校、共同実施校、連携校とも、「学びを止めない」「歩みを止めない」を合言葉に、「実施しない」という選択肢が辞書にないかのように、様々な工夫をして実践を進めていただいた。学校の取組を支え、アドバイスや伴走をしてくださった、事務局、運営指導委員の皆さん、各校の連携先の皆さんにも感謝を申し上げたい。

厳しい状況の中、意欲的な取組が展開された1年目。2年目は、連携校が2校増え、つごう13校で AL ネットワークづくりに向かう。うまくいかないはずがない。そう期待もし、確信もしている。

長野県 WWL コンソーシアム構築支援事業第１回運営指導委員会議事録

１　日時　令和２年８月７日　14 時～17 時

２　会場　上田高等学校会議室　Zoom 併用

３　出席者　（敬称略）

座　長　小村　俊平　　（ベネッセ教育総合研究所主席研究員）

副座長　荒井英治郎　（信州大学教職支援センター准教授）

委員　　讃井　康智　　（ライフイズテック株式会社取締役）

坪谷ニュウエル郁子　（東京インターナショナルスクール理事長）

南　希成　　（長野県立こども病院感染症科部長）

森　茜　（公益財団法人国連大学協力会事務局長）

カリキュラムアドバイザー　内堀　繁利　（高校改革推進役）

指定校　廣田　昌彦（上田高等学校校長）

市川　格　（上田高等学校教頭）

白鳥　敏秀（WWL 推進係主任）

髙野　芙美（WWL 推進係）

小林まゆ子（WWL 推進係）

菊原　健吾（WWL 推進係）

横川　憲　（WWL 推進係）

Andrew Parkinson(WWL 推進係)

杉村　修一　（松本県ケ丘高等学校校長）

徳永　佳代　（松本県ケ丘高等学校教頭）

近藤　慎　（探究科主任）

齋藤　亮　（教育課程委員長）

西川　智康（英語科代表）

管理機関　塩野　英雄　（教育次長）

曽根原好彦　（学びの改革支援課長）

北澤　潔　　（学びの改革支援課教育幹兼高校教育指導係長）

宮下　美和　（学びの改革支援課主任指導主事）

長嶋　幸恵　（学びの改革支援課指導主事）

４　内容

(1) 開会行事

①　管理機関あいさつ

②　委員自己紹介

③　参加者自己紹介

④　座長紹介　座長あいさつ

(2) 議事

① 事業概要の説明

(理念について)　　内堀カリキュラムアドバイザー

・ ワールドワイドラーニングコンソーシアムとは、高校生に対して高度かつ多様な科目内容をその興味関心特性に応じて履修可能とするもの。
・ 将来的にはWWLコンソーシアムを高校生６万人あたり１箇所を目安に都道府県に拠点校である高等学校を中心に整備。すべての高校生が選抜を経てオンライン、オフラインで参加することを可能とする仕組を作ることが目指されている。
・ AL(アドバンストラーニング)ネットワークとは、将来的にこのWWLコンソーシアムにつなげていくネットワークとして考えられるもの。
・ 長野県ではこのALネットワークの中に、中心となるカリキュラム開発拠点校として上田高校、共同実施校として松本県ケ丘高校、更に、連携校９校を設置。更に台湾の学校を中心に海外連携校を設置する。管理機関である教育委員会、国内外大学、国際機関、民間企業と連携を進めていく。
・ ALネットワークが目指すことは４つ。

ア) 将来イノベーティブなグローバル人材を育成するために,文理両方を学ぶ高校改革、高大接続改革を推進するリーディングプロジェクトである。SGHは、グローバルリーダーの育成が目標であるのに対し、WWLもしくはALに関してはイノベーティブという視点が入る。

イ) 高等学校と、大学企業国際機関とが協働し、高校生により高度な学びを提供する仕組を構築する。

ウ) グローバルな社会課題研究のカリキュラム開発や研究内容と関連する高校生国際会議の開催。３年後の実施に向けて準備を進める。

エ) 大学教育の先取り履修。高度かつ多様な科目内容を生徒個人の興味関心特性に応じて可能とする高校生の学習プログラムを開発する。

(具体的な取組について)　　宮下

・ 構想テーマは「SDGs未来都市長野」から世界へつなげる信州版ALネットワーク。
・ これまでの取組を活かして地方公立高校生に単独校では得られない教育の機会を与え、時間や場所等の条件を超えて、自らのアクションにより新しい価値や新しい社会を主体的に創造して行くことができるグローバルリーダーの育成を目指す。
・ 管理機関の取組は、外部機関との連携、APに向けた大学との協議、学校間連携の推進、留学生受入れのネットワーク作り、運営指導委員会、検証組織等の組織作り。
・ 学校は文理融合、STEAMを考慮した新しいカリキュラム作り。
・ 連携校内での遠隔授業等、カリキュラム共有の可能性の検討。

（質疑応答）

（森委員）32 社に及ぶ地元の企業とのとても心強いネットワークを作りつつあるということで良い。関東地方だと、企業で働く外国人の子供たちとの連携が大きな課題である。長野での状況はどうか？あるとすれば今後どのように行っていく考えか。

（宮下）上田市内にもいくつか日本語学校があり、交流を持っている。この事業においては連携を想定していなかったが、今後何かできることがあるか探っていきたい。

（坪谷委員）まとめると、情報機関と連携して上田高校と松本県ケ丘高校を中心に学際的な知識を持つイノベーティブなグローバル人材を育成するための、学際的なカリキュラムを３年間で作成するという意味合いでよいか。

（内堀アドバイザー）結構である。

②学校紹介

○上田高校　　廣田校長

・創立 120 周年
・クラブ活動が盛ん。
・生徒育成方針「常識や前例にとらわれない自分の意思で行動する力」、「新しい価値や未来を創造する力」、「他の人の幸福のために貢献する力」
・平成 27 年度から SGH５年間の取組により、生徒の主体性、授業改善による生徒の対話的で深い学びが進んだ。
・自分で考えて探究し、行動に移す生徒の姿が見られる。

○松本県ケ丘高校　　杉村校長、徳永教頭

・３年前から探究科を導入。生徒が主体的になってきて変化が見られる。
・県陵３大精神～生徒育成方針
「確かな知」「関わる力」「挑戦する力」が信州 AL ネットワークの求める人物像と合致。
・WWL 事業の主な取組
ア）探究科のカリキュラム開発
イ）高大接続を視野に大学との連携
ウ）海外研修プログラムの研究
エ）WWL の取組を生徒の自主活動と関連づけて推進

③カリキュラム開発拠点校より（レジュメ参照）

ア） WWL 指定の経緯について　　市川教頭

・SGH５年間の取組を継続しつつ他校との連携を広げていく。
・生徒全員が参加する。
・３つの探究、３つのフィールドワーク、３つの海外研修を中心に組み立てている。
・卒業生も巻き込んだネットワークになってきている。

イ）本年度の取組　　白鳥研究主任他

- アカデミックプレゼンテーション
- デザインシンキング授業
- ボストンスタディーツアーオンラインプログラム
- オンラインによるインタビュー
- 北陸新幹線サミット

（質疑応答）

（森委員）上田高校は、国連大学の見学の窓口としてこれまで付き合いがある。その時にボストンでするような形でのプレゼンテーションを国連大学の院生やフェローの前で行った。生徒はとても勉強してきて熱心に発表するが、やはりそれは生活の中から出た、身近なところから出た課題というよりは理念的なものだったのであまり噛み合わなかった。それが今回の県ケ丘の方針や上田の新しい方針の中でかなりその課題を身近なところへ掘り下げる、つまり、SDGs であってもその課題を身近なところで掘り下げる姿勢を方針として打ち出したことは、良い傾向である。

ウ）　生徒発表　御代田町の活性化プラン「僕と御代田の物語」

上田高校３年　森川景允

発表へのコメント

（讃井委員）素晴らしいプレゼンだった。今後、他のプランも考えて行く時に「思い」があるなら、まずそれを大事にしてほしい。それが全て探究の原動力である。テーマは何でもいいので、自分が思うことを一番大事にしてほしい。次に、who と what をもっと深めて、その次のプランニングをしてほしい。目的ははっきりしているので、その町に来て欲しい人とか情報を届けたい人は誰なのか（who）、そして、その人の立場に立って、共感して見た時に今のプランだけで本当に来てくれるのかとか、軽井沢に来てくれた、お客さんがまた来るにはどういった要素があればいいのかなど、今後の PR や新しさに反映させていけるといいと思う。

（森委員）上手なプレゼンだった。焦点もはっきりしていた。もし WWL コンソーシアムとしてこのような生徒をもっと育てていくということであるならば、その中にワールドワイドな視点、例えば思い切って「外国人の観光客を呼ぶためには？」といった視点が入ると、なお素晴らしいと思った。

（小村座長）何より嬉しかったのが、「御代田町はお金も観光地もないけど行政のやる気はある」というところ。高校生から「行政にやる気がある」と聞いたのは初めてだが、それを森川君がさらに発展させようというのが素晴らしい。非常にまっすぐなプレゼンに感銘を受けたがゆえにちょっと変化球を伝えたい。自分の地元が大好きで御代田というブランドを世に広めたいというのが、よく伝わったが、これを伝えるための方法として、あえて御代田を最初は使わないという方法もある。東京ディズニーランドが千葉にあるように、御代田のことを知ってもらい

たいのだが、客は軽井沢と勘違いしてくることもありうる。プロモーションということは、非常に大事で、社会人になると苦労することだが、プロモーションの奥義の一つは、勘違いを歓迎することである。まっすぐな人が、失敗する、力を出し切れないのは自分の思いをストレートに伝えようとしすぎてしまうからである。入り口のところは勘違いでも、実際御代田に来たら、好きになってもらうことで間口が広がるしネット上でも対面でもいろんな人がアクセスしてくれて、もっと魅力が伝わるかもしれない。

（森川君）今日発表させてもらえたのは、とても嬉しかった。自分の当初の目標は、観光だけでなく御代田の活性化なので、いただいたご助言をまた生かしていきたい。

④ 意見交換

（坪谷委員）コロナ禍の中で工夫して取組を進めている様子に感銘を受けた。私からは、４つの提案をさせていただく。

１つ目は、カリキュラム開発において、どういった能力・スキルを育成していく必要があるのかを明確にする必要がある。この明確になったスキル能力とそれに対応したルーブリックを設定する必要がある。これまでの発表と資料からは、今回のこのプロジェクトで育てたい能力・スキルは、１．課題発見力、２．チームの一員としての協働力、３．解決能力、４．行動力、５．新しいものを作り出すという意味での創造力、６．キャリアデザイン力、７．「私は誰」に紐づく地元に対するアイデンティティと見て取れる。まずはこの７つの能力に関して、明確なルーブリックの作成が必要だと思う。

２つ目は、その能力の育成をするために、その下にカリキュラムを作る際に大切なのが、学際的な学習を進めていくというのが一つの目的なので、「普遍の真理」、Concept Learning である。これは、時間軸、地理軸を超えての普遍に真理であるということである。真理とは「長野県でも東京でもヨーロッパでもどこでも真理で同じに正しいこと」で、なおかつ今も真理だし 50 年前でも真理だったというものである。例えば今日の生徒発表については、「宣伝は人々の選択肢に影響を与える」っていうコンセプトができる。それに紐づいて少なくとも三つの教科のアプローチからそれを探究していく。例えば言語学的にはどうだろうか、美術的にはどうだろうか、経済学的にはどうだろうかと、それぞれの学問分野からアプローチをする。そこに対して今度はスキルの紐付けが必要になる。今日の発表では、先ほどの７つの能力のうち、行動力、創造力、キャリアデザイン力、地元に対するアイデンディティ、課題発見力、解決能力 などかなりの能力とくっついてくる。ただ、ルーブリックがはっきりしていないので、生徒自身が、どんなところが能力として評価されるのか、どういうところがゴール設定とされているのか明確でない中で作っているのではないか。つまり、コンセプトを決めてそれに紐づいてどんな科目と接点を持っていくのか、その培われるスキルが７つの能力の中のどれと紐づけて行くのか、ルーブリックで、どこが最高の獲得能力とされているのか、ゴールを明確に設定して、それを生徒自身が明確にわかっていなければいけない、ということである。

３つ目にSINETの利用について。日本のほとんどの大学と、研究機関を国立情報学研究所が運営しているSINETというネットワークがある。日本のみならず世界の学術研究ネットワークと繋がれる。ここと繋がることで知の結集とつながることができる。ぜひ長野県はSINET GIGAスクール構想を取り入れて、使ってほしい。高校生の探究の時に非常に役に立つ。

４つ目がケンブリッジインターナショナルについて。知の結集のケンブリッジ大学、その下にケンブリッジインターナショナルという団体がある。英国以外の170カ国の１万校位の小中高校に、ケンブリッジが作ったプログラムを提供するというものである。最終的にはインターナショナルＡレベルという大学入学審査の試験をやって、そこで獲得されたスコアでどこの大学に行くか決まってくるというもので、これは、IB等と比べるといわゆる日本の大学入試と極めて親和性が高いと考える。３年間のプロジェクトの中で、学術的な知識を持つイノベーティブなグローバル人材育成のカリキュラムを３年間で作る、というタスクがあるのだから、それについてご指導いただいてはどうか。

（讃井委員）いくつか観点があるが、一つは、気になっているところでもあり、探究で大事な部分だと思っているが、中高生の課題をどう教員が引き出しているのかということである。私も課外活動とか学校の中でその探究の活動をする中で非常に難しいと思っているのが、そもそもオーセンティックな課題、リアルでかつ本人が思いを持てる課題をどう持ってもらえるかの指導である。

次に、探究の学びというのは、フォワードラーニングと言ったりもするが、答えが必ずしもない。一旦ちょっと探究して、それを町長に投げてみるとフィードバックがもらえて、こっちの探究行ってみようと、そして、町にヒアリングしたらそうじゃないって言われて、こっちいってみようと、進んで行く中で新しい課題が設定されて深彫られていく。研究指導と同じように、一旦行ってみてその後研究指導をしてまた深まって研究指導していく。つまり、課題を進めながら研究指導をしていくというところの難しさもある。こういった所を、まず教員がその課題設定とその進んでいく課題のフィードバックをする方法を長野県全体に広めていくために、そこ自体もナレッジを蓄積していく必要があるのではないか。個人的な見解になるが１クラス40人～50人いれば、先生達だけで、ちゃんと探究を深めてということが、時間的に大変なところもあるのではないか。ピアフィードバック、つまり生徒同士のやり取りでその課題を深めていくことができないかということが、個人的に大変気になっているところである。そのようなことに対して今どんな活動をしているのか、今後どんな仕掛けをされていくのか。

もう一点は、私はITの教育をずっと行ってきたが、ITは今の高校生の可能性をアップデートできる、もっとブーストできると考えている。つまり私が高校生の時、20年ぐらい前の高校生と今の高校生が同じ探究レベルにあるわけがないと思う。それはテクノロジーやインターネットがもっと今の高校生の可能性を引き出せるからで、何もプログラミングとか映像技術ということだけではなく、インターネットを活用することで今まではなかなかアプローチできなかった先行研究であるとか、グローバルな視点であればコロナが起きたからこそ、より様々な国とオンラインでつながることができるような素地もできてきたと思う。テクノロジーを上手く

活用することで探究を深め、高校生の可能性を引き出すことについても、テーマを定めて取り組んでいただけると嬉しく思う。

（森委員）コロナが３年間でどうなって行くかは見えないが、この子達は、少なくとも今の大騒ぎが少し治まって次の社会をどう作っていくかというところに放り込まれる。そうするとこの３年間で取り組むカリキュラムの中にはそこを見据えたものが必要になる。企業の役割がもっと強くなると思う。国連でも企業の Global Sustainability への参画、責任というものが強く言われてきたが、子供達は将来独立した起業家になるばかりではない。どこかの組織に入るということになるので、企業をもっと巻き込んだような取組ができないかなと思う。長野県自体の企業だけでもいいが、少し海外で既に国際的に貢献しているような住友化学等の経験も取り込んでもよい。要するに企業の視点がひとつほしい。

もう一つは、おそらく全世界的に見て地産地消の社会に移っていくだろう。そうするとＩＴ技術というのが発展しながら不可欠になっていく。思いつきではあるが、生徒全員をライフイズテックのキャンプに入れて技術を開発してもらってはどうか。

最後に、私はアフリカをやっぱりターゲットに入れて欲しいと思う。アフリカとのネットワークはなかなか難しいが、国連大学の場合には学生の主な出身地がアフリカで、国連大学協力会は卒業生のネットワークの事務局をしているので、心ある卒業生達と個別ではあるかもしれないが繋ぐことができる。オンラインでアフリカの現地から発言をいただきながら、生徒が考えていくというような機会を入れて欲しい。

（南委員）森川君の発表を見て、色々課題というかテーマを決めて、自分で人に聞きに行って、試みながら学んで行くというのは、意外とクラシックなことをやっているな、と思った。個々の学生さんがどんな課題を持つのか、それを誘導するのは難しいことだと思うので、教員がどうやって手助け、指導をしているのかが気になった。先ほど森先生がアフリカに関心を持って欲しいと言われて、僕もアフリカには思い入れがある。直接は関係がないが、エコノミーが一番上には持って来られないようにしてほしい。教育は、エコノミーをその上に持ってくると、すごく不自由になってしまうと思う。森川君も最初、観光の話だったが、最後の感想では、観光以外のことも考えてみたいと言っていたのはホッとした。ソサエティの上にエコノミーがあってと、縛りを設けてしまうのは不自由になってしまう、そんな感覚がある。

（荒井副座長）私からは、探究学習についてコメントさせてもらう。１つ目は、 高校側からの説明にもあるが、これからの学びにおいては、「社会に直接訴えかける」というアクションはとても大切になってくる。探究学習に関しては最初はどのようなテーマを設定してもいいかと思うが、今後コアなカリキュラムとして明確に位置付け、生徒の学びに対して、教員や多様な人間が関わりながら探究を深めていくという一連のプロセスを想定した場合、「外化」というアウトプットのあり方、何を、誰に、どのように伝えるかという観点も意識していくことも必要かと思う。

２つ目、探究学習に関するアクションの重要性である。私は「SDGs 型思考」と呼んでいるが、やはり課題意識等を最終的には具体的なアクションにつなげていくことが必要だと思う。アクションがありきで課題設定等をしていくことは、うまくいかないことや想定された成果を導くことができない場合もあるかもしれない。しかし、探究の本質を踏まえた場合、高校生らしさや探究の地味さ、泥臭さという点から、具体的にアクションをし、そのプロセスや成果を他者と共有するような「泥にまみれる」機会があった方が、学びのループとしては望ましいのではないかと思う。

３点目は、本日配布された「報告書」に記載されている教員アンケートの結果に関してである。報告書に記載されている「課題」を見てみると、「もう少し GS １の課題研究の時間が欲しい」、「独善性に満ちてはいけない」、「独りよがりではだめ」というコメントがある。こうしたコメントはいい傾向と捉えるべきだと思う。他方で、少し気になったのが「協働」に関わる部分である。「協働力」というのは他者と何かしらの関わりさえあれば自然と習得できるものなのか、問い直して欲しい。坪谷委員のご発言にもあったように、目標設定とルーブリックとの関係で捉えた場合、「協働力」の習得の必要十分条件とは何かを改めて考えていくことが必要だと思う。県教育委員会が案として示された「学びの指標」の議論とも直結する部分だと思う。今話題ともなっているコンパッション、共感を得るという観点も踏まえてみてはいかがだろうか。

４点目は、ICT の利活用に関してである。私は、ICT はもはや「文具」として捉えるべきだと考えているが、探究学習においては、「インターネットで調べただけ」のものも少なくないと聞く。あらかじめそういう課題をリスクとして捉えているのならば、その課題を乗り越える学びのカリキュラムをリテラシーとしてきちんと学んでもらうことも一案だと思う。

最後は、ピアフィードバックのあり方に関してである。「Question is answer. 」と言われるように問いを立てること自体が非常に難しい。課題設定の段階は誰もが非常に苦労するかもしれないが、それは必然であり探究はジグザグ的に進むものである。そこで、例えば、同じ高校生内でピアグループを作ってみることや、本学の学生などが支援に入らせてもらい大学生がメンターなどの形で継続的に関わらせてみるという形があってもいいと思う。こうした探究学習のプロセスで浮上する様々なやりとりを可視化していくプラットフォームが仕組みとして構築できれば、汎用性も拡大するし、実質的な高大連携になると思う。

（小村座長）私の方から皆様のお話を伺って、この辺りがポイントかなと思ったものプラス私のコメントも加えてお話しするが、その前に大事なことを確認させていただきたい。今回 WWL コンソーシアムで掲げている教育観、学習観だが、まさにそのイノベーティブな人材を育成していくとか、対立やジレンマを乗り越えていくとか、新しいものを創造していくとか、プロジェクト学習をするとかいろんな観点があるが、こういった学び方、方法に対する生徒側の感触について是非伺いたいと思う。というのも新しい取組に対して、必ずしも生徒が肯定しないこともある。そのあたり、生徒側の感触はどうか。

（小林教諭）生徒の方はSGHがWWLに変わったことを意識してはいない。今までの延長で自分たちも先輩と同じことをやると考えている。課題研究や探究活動をしていくことについては、今までの積み重ねもあるので、それをみて来た生徒たちはすんなりと受け入れているように感じる。逆に、ご指摘いただいた課題設定についてのところが、現場で一番苦労し、悩んでいるところである。生徒には、現実味がないというか、ちゃんと勉強しているものを課題にすることがなかなか難しい。発想は変えていってもいいのか、とか、もっと人に聞かなければいけないとか、インタビューしなきゃいけないとかというところは、かなりコロナの中で自分たちでも考えるようになってきている。自分ごととして捉えられるようになって来ている。インタビューや人に聞くことはハードルが高いが、今度、国連大学協力会の森さんにも協力いただき、オンラインでつなげてインタビューをさせていただくことになっている。そういうハードルを下げた取組がしやすくなったという点では、やりやすくなっている。

（近藤教諭）生徒の方が対応力があるというか、いろいろな変化に柔軟に対応している。ipadについても、与えるとすぐに使いこなし、「こういうものを使った方が良いのでは？」と、生徒が教えてくるような時もある。探究科３年目、色々なことをアップデートしながら、少しずつ変えながらやっている。課題設定というところについて、今１年生の探究科の生徒達が地域に出てプレ探究というフィールドワークを行っている。夏休みに動いて行くのは初めてで、その中で生徒が仮課題というものを元々設定していて、その課題を検証するためにフィールドワークに出て、そこからまた課題をアップデートして、本課題を設定して探究活動していくという取組をしている。生徒から、色々聞いていく中で課題が変わってしまったが、それでいいのかという相談が結構あった。これが探究活動だというのが生徒にはまだわかっていない。課題がどんどん変わっていって、その中で自分が検証を深めていく、自分が動いていく中で探究活動を深めていくような生徒を一人でも多く出したいなと思っているのが本校である。

（小村座長）答えにくい質問に率直に答えていただいた。今までの、委員の話を踏まえて５点ほど大事だと思ったものを挙げさせて頂く。

１つ目は、カリキュラム開発が目的であるということだが、どの水準のカリキュラム開発を行うか、関係者が合意しておくべきである。ここの目線が揃ってないと話が噛み合わないと思う。つまり、長野県で頑張る取組なのか、文科省が唸るような日本を代表する取組なのか、世界が注目する取組なのか、歴史を塗り替えるような取組なのか、ということだ。イノベーティブな若者を輩出したいということであれば、関わる大人にも歴史を塗り替える覚悟が必要である。容易ではないことを理解した上で言うが、様々な事情でやれることやれないことがあるが、生徒に対してイノベーションを期待した場合、そこに関わってくる大人たちも色んな軋轢を乗り越えていく、今までのルールを変えていくような動きが当然必要になってくる。その覚悟を持って皆で知恵を出していく場としてこの場のマインドセットを作っていってはどうか。その上で具体的に進めるに当たっては、ひとつひとつの能力についてどんな水準を目指すのか、ど

んな状態がうまくいっているのか、どういう風に評価していくのか、教員はもちろん、生徒ともしっかり合意していく必要があるだろう。

２つ目は、今日とても素晴らしいなと思ったのが、森川君が参加してくれたことである。これからの時代、学校、先生が頑張って生徒や家庭に良い教育を提供する時代ではない。素晴らしい学びのコミュニティとは全員で作り上げるものであり、生徒というのは一人の学び手であると同時に、学校を中心とした学びのコミュニティを作り出す一員である。その意味では参加すべきところすべきでないところがあるかもしれないが、一人のステークホルダーとしてしっかり発言をすることはとても大事なことだと思う。振り返ると、３年前の中教審の評価のワーキンググループで高校生が加わって発言したことがあった。国の委員会にも生徒が加わるというのは、その評価を聞いてどう思ったか、どのようなアクションをとるか、そこを考えることなしに政策を考えることはできないと文科省自身が思ったということ。政策決定者だけでなく、学校の先生、研究者、生徒が集まって政策形成を考えるべき。これは本当にこれからの政策決定でも大事ですし学校を中心とした学びの場を作っていく上でも重要になってくる。繰り返すと、最初に必要なマインドセットとしては教育委員会や学校が頑張って素晴らしい教育カリキュラムを作って提供していくことではなくて、素晴らしいものだからと一方的に押し付けるのではなくて、生徒も加わって一緒に作り上げる、やはりこのカリキュラム作り自体が生徒にとってのメタプロジェクト学習といますか生徒にとっても大きな学びの機会になるようなデザインとすることが大事なのではないか。

３点目が、教員の関わり方も非常にポイントだと思う。主体的、対話的で深い学びとか、プロジェクト学習に取り組むときには、教員が教えないことや、教えない勇気を持つことが大事ということが言われるが、振り子を振りすぎると行き過ぎることがあって、本当に何もしない教員が大量生産されたというのが各現場にあった。やはり何もしないってことはすごく大事だが、何もしないことと、教えないことは違う。どういう状況が良くて、どういう状況がまずいのか、教員が自分の言葉で語り合えることが大事でその基準を生徒とも共有する必要がある。どんな状況でどのように教員が関わっていくのか、そのあたりも整理する必要がある。

讃井委員からの話にもあったピアフィードバックについてだが、生徒同士のフィードバックもすごく大事だと思う。生徒 200 人の探究的な学びを一人で支えられる巨人はいない。学校の先生はとても難しい挑戦をしている。この挑戦を少しでも前進させるためには、一つの方法としてやはり集合知がある。生徒や専門家など、色々な人の手を借りる必要がある。企業の関わりという声もあったが、色々な人を巻き込んで学びのコミュニティを作っていく必要があるだろう。一方、もう一つ大事だと思うのは、言葉を選ばずに言うと専門家が正しいとか、企業がすごいっていう考え方を捨てた方がいいかなと思う。一番大事なのは生徒自身が成長することをゴールにしているので、生徒が試行錯誤、悪戦苦闘しながら成長するために、道具として専門家、企業があればいいと思う。企業や、専門家から正しいことを教えてもらうのではなく、インターラクションする中で、生徒が自分の出会いの中で色々出会った人を批判的に見て、「これはいいなぁ」とか「これは駄目だな」などど思ったりして、自分の考えをブラッシュアップしていくことが大事である。その中で、もちろん専門分野については専門家からアドバイスを

いただければと思っている。私自身、岡山大学学長補佐として SDGs ユースという高校生200人くらいのコミュニティを運営してメンタリングしたり、また新しい学びフェスタを2011年３月にカタリバと立ち上げて10年間探究のコミュニティを作っているが、その中でも生徒同士の交わりというのが、生徒のモチベーションを高め、前進を生み出すと感じている。長野県はもとより、長野県を超えた生徒のコミュニティをどう作っていくか、ピアフィードバックをどうするか、というのは考えていくべきである。

４点目は、これからのイノベーションはどこから生まれる考えてみると、欧米ではなく、アフリカやアジアということもあると思う。台湾との交流も行うとのことだが、例えば、海外大学進学についても、私は北京大学とか清華大学を勧める。大学は世界大学ランキングで横並びで比較されて、外国人留学生を欲しがっている。外国人留学生で英語が優秀な人の多くは、アイビーリーグやオックスブリッジに行ってしまう。そうであるがゆえに英語が母国語でない国のトップ大学は、実は今、日本に着目している。東京の御三家の学校にはドイツやイタリアのトップ大学や、中国からこぞってスカウトにくる。要は、日本人だったら、英語はそんなに得意ではないが、地頭はいいと知っている。中国語だったら日本人なら１年で覚えられることもわかっている。中国人ならまず入れない北京大学に日本人は入りやすい。世界は広がってきているので、今までの水準ではなく、イノベーションなのだから新しい可能性に目を向けたらどうだろうか。

５つ目には、エコノミーが中心でないという話があったが、まさに新しい学びの指標では Well-Being をキーワードに掲げている。その Well-Being は１人の Well-Being だけではなくて、社会全体の Well-Being を目指していく。そこが大事だと考えている。その Well-Being に向かう時にポイントになるのが、生徒１人ひとりの自己効力感や、生徒１人ひとりの社会や友達との関係性や、生徒１人ひとりの成長実感。これらは Well-Being の重要な要素だと言われている。このカリキュラムを作る中で自己効力感とか、関係性とか、達成感のようなものをどのように生徒に見える化していくか、その観点について、どう教員と生徒があるいは生徒同士がどうコミュニケーションするか、その辺りをしっかりカリキュラムに取り入れていくことが大事だろう。

（森委員）

エコノミーが上位でないということはその通りだが、21世紀は企業が変わるときであり、そういう意味で企業を絶対入れ込まないといけない。なぜならば日本人は Well-Being がとても上手で企業が社会と一緒に生きていくことができる。私の発言がきっかけでエコノミーという発言になったのであれば、そこをしっかり押さえていただきたい。

（坪谷委員）

進路指導のあり方を変えることは、長野県の全ての高校で簡単に導入でき、驚くほど生徒が変わる方法である。具体的には、これまでの、偏差値に合わせてどこの大学のどこの学部を選ぶかといった進路指導から、高校３年の２学期は、この先自分がどういう道に進みたいのかを

最終プレゼンするように変えてはどうか。これを取り入れることで生徒が自分で考えるようになり、驚くほど変わる。自分の将来を考える中で、人として大事なことを学び、自分の人生に責任を持てるようになる。ぜひ長野県全ての県立高校で取り入れてもらいたい。

（小村座長）

まさに進路指導を変えるというところは学びの指標ともつながるところである。どうやって実行するかが、今回のコンソーシアムに求められていることだと考える。

（森委員）

全国に WWL コンソーシアム構築支援事業の運営委員会があるのならば、固有名詞をつけてはどうか。

閉会行事

①管理機関あいさつ

②事務連絡

令和２年度　第２回信州ＷＷＬコンソーシアム構築支援事業議事録

期日　令和２年（2020 年）11 月 20 日（金）14:00～16:30
場所　上田高等学校
参加者（敬称略）（会議会場への直接参加と Zoom による Online 参加のハイブリッド会議で実施。）
運営指導委員
会場参加者；小村俊平、讃井康智、坪谷ニュウエル郁子、
オンライン参加：荒井英治郎、森茜
欠席者:南希成委員　（仕事の都合により）
カリキュラムアドバイザー　内堀繁利
学校関係者（拠点校、共同実施校、連携校）
教育委員会（塩野教育次長、北澤教育幹、宮下主任指導主事、長嶋指導主事）

１　開会行事

教育委員会あいさつ（塩野次長）
参加者自己紹介
日程説明

２　議事①取組報告

(1)上田高校より

半年間、STEAM のカリキュラム開発、オンラインを活用した取組など行なってきた。コロナの影響は大きく、海外研修が全て中止になって、生徒も困っている。うまくいかないことも多いが、大人も知らない解決策を見つける良い機会になっている。

・８月からの取組報告
県内フィールドワーク、STEAM 教育のカリキュラム開発、人権学習（世界が１００人の村だったら)、アカデミックプレゼンテーション、台湾とのオンライン交流、ボストン、フィリピンオンラインプログラム

(2)松本県ケ丘高校

競争から共創へ

①良いものは共有する
海外研修（ネパールオンラインツアー、信州大学グローバル推進センター、独自支援金）
②プラットフォームは積極的に活用する
（マイプロジェクト、主体性を育む夏合宿、つばさプロジェクト）

(3)松本深志高校

・自治の精神
・「未来の学校」実践校
・オンライン授業の実施（学校のＩＣＴ化）
・外部との連携による探究ゼミ（土曜日５回）→ 学びの評価
・KDDI との共創プロジェクト（ホームページ刷新）

(4)管理機関

・学校での取組は頑張っているが、そこに留まっていることに課題がある。
・プラットフォームの基盤作り。
・課題～点を線、面にしていくこと。

３　議事②　生徒発表

(1)上田高校　長崎航平

「芸術を着よう－好きな芸術家をファッションで応援」
身近なアーティストの作品をアパレル作品として販売。収益を芸術家支援に充てる。
QR コードにより、アーティストの情報がわかる。
無名のアーティストに特化することで、日本の芸術を盛り上げる。

(2)松本県ケ丘高校　田口壱星　後藤碧生

「生徒の主体性を育むオンライン会議を運営して」
学校の枠を越えて参加するプログラムで実行委員を経験。
会議の進行がうまくいかなかったことから改善を図るなど試行錯誤を重ねた。
１日の高校生交流イベントを実施。期待したより人数は少なかったがしっかりやり遂げられた。
チャレンジしてみることで自分たちの世界が広がり、多くを学んだ。

（質疑・助言）

坪谷委員　　声のトーンやピッチ、体の動きなど人に話を聞いてもらう時は、発表の仕方を勉強した方がよい。見せ方や発声の仕方で伝わることが違ってくる。

讃井委員　　アクションしていることが素晴らしい。ビジネスも高校生の枠に収まらないでどんどんやった方がよい。今までのルールにこだわらず、高校生に本当に情報を届けたいなら、SNS を利用するなど、自分たちらしい発信の仕方があったかもしれない。高校生だからこそ気づけることがある。自分たち自身で枠にはめてはいけない。

森委員　　とても興味深い発表。上田の発表により、個人の関心、興味を学校がどう育成していくかがわかる。松本県ケ丘の発表は学校がどう問題解決型の思考を指導しているかが見えた。カリキュラムを考える時の、個人の課題をいかにグローバル化して行くか、問題解決のための組織づくりをいかに進め、動かしていくか２つの視点が感じられた。いずれにせよ、先生方の指導を感じた。

授業参観

ＧＳⅡＪ（2 年 4 組）デザインシンキング（KDDI との協働）
授業者：小林まゆ子教諭、KDDI　横幕秀明氏

ＧＳⅡＥ（324 教室）台湾リサーチプロジェクトの発表練習
授業者：高野芙美教諭、Mr. Andrew Parkinson(Global Instructor)

４　協議③　意見交換

小村座長　資料 21 ページの育成する生徒像「イノベーティブなグローバル人材」について、学校の取組がこのような人材を育成する取組になっているか、フィードバックをもらいたい、ということである。それぞれ意見をもらいたい。

坪谷委員　最初のあいさつで統合のことに２～３校が触れていたが、少子化問題はピンチではなくチャンスと捉えたらどうか。国も少人数学級、個別最適化に向かっていく。少子化先進国の日本がこのプログラムを通じて好事例を作るチャンスととらえたい。

発表を聞いて、コロナで苦労している中、苦労しながらやっていることに感心した。１つ気になったことは、コンセプトがはっきりしているのか。例えば、台湾の研修の代替を検討するときに、どんなコンセプトに気づかせたいのか。例えば、「学びは環境に関わらず人の持つ原始的な要求である。」県ケ丘なら、「共創によりゴール達成はより容易になる。」「自分の選択は社会の影響を受けている。」など、まずはコンセプトの設定をしなければならない。その上で、問いを立てて具体的なアクティビティというのが順番。そうしないと軸がぶれる。最初にコンセプトを設定することで、より深く軸をぶらさずに、学際的に学んでいくことができる。深志高校であれば、「情報の共有はコミュニティ内のコミュニケーションをより深める。」とコンセプトをたて、その下に問いを作る。コンセプトを先にたてないと、ただやっただけ、リフレクションをしてもコマのリフレクションになってしまい、コンセプトのリフレクションにならない。

讃井委員　各学校で様々な取組をしている。そういう文化が長野県の高校にある。文化を引き継ぎ、下の世代に伝えていくよき伝統、文化を大事にしてほしい。組織コンサルタントとして、組織の文化改革が専門だった。文化ができあがってくると、人が変わっても新しいことやお客様にとって良いことを続けていくことができる。それが既に長野県にあることが素晴らしい。

個別の学びについてだが、どのテーマも意義があるが、高校生がなぜそれほど思い入れを持ち、学びを継続し、アクションまで繋げられるのかが不思議。ネパールや海外出身の子供の学習支援など皆が興味を持ちそうにないテーマにそれほど思い入れを持てるのか、希望者を集めてのプログラムと必修のプログラムをどうミックスしているのか気になった。選択は思いのある子どもたちがくるのが、必修になった時に、全員に思い入れを持ってもらうのが難しい。キーワードは中教審でも言われている個別最適な学びである。AI ドリルで知識を習得するだけでなく、一人ひとりの興味関心を見つけられること、その先に一人ひとりが取り組みたいプロジェクト、課題をもてることまで含めるのが個別最適な学びである。１対 40 で個別のテーマを持たせることは難しい。深志高校からサポーターで信州大学の学生が入っているという報告があったが、一人ひとりにテーマを持たせるときに、何かしらの driving question とか大学生メンターをつけることが局面だけでもあるとか、個別最適な学びをどう実現できるのか考えていきたい。

その中で先生の役割が変わってくるのが WWL の取組とセットだと考える。県ケ丘のプログラムではネパールの現地の人や、専門家や松本在住の人などいろいろな人のつながりを先生方がデザインしている。探究や学びがうまくいくように、学びのコーディネーター、トータルな学びのデザイナーとしての役割を果たしている。その役割が探究型の学びの中では重要になってくる。

カリキュラム案ということよりも、その中で、教員がどのような役割を担っていくか、スキルセット、マインドセットを研修等で広げていってほしい。

坪谷委員　先ほどのコンセプトの説明が足りなかった。コンセプトとは、時間軸・地理軸に関わらず普遍の真理ということ。今も昔も長野でも台湾でもネパールでも等しく成り立つことである。先ほど出したようなコンセプトの例はどこの国でも今でも昔でも成り立つ。

荒井委員　４点ほど述べる。１つ目は、各種の取組の方法論としてワークショップを導入することが

多く、そのこと自体は今までの高校現場の取組と比較して新しい手法ということで画期的かもしれないが、方法論だけ先行して、芳醇なリフレクションなしではそこでの経験が生かされず消化不良となってしまう可能性もある。従って、ワークショップの時間を経た後でのリフレクションを大切にしていくことを重視して欲しい。特に、生徒自身が振り返りを行った内容とその内容に対して教員や関係者がどのようなコメントやフィードバックを行うことができたか、その質がとても重要で、次の学びにつながるかを左右することになると思われる。

２つ目はプレゼンテーションに関してである。見た目よりも生徒自身に内面化される学びの内容の方が重要であることは改めて言うまでもないが、芳醇な学びがあっても、他者への伝え方次第で、その学びに対する印象がいい意味でも悪い意味でも変わってしまうことが多々ある。学んでいる内容や学んだ内容を言語化し他者に伝えるためには何を考えていくことが必要にして十分か、方法論的な話で恐縮であるが、早い段階で体系的に学習することも一案である。

３点目は、資質・能力に関して。今回は、「イノベーティブなグローバル人材に身につけされる能力」として、課題解決力、キャリアデザイン力、信州に根ざした確かなアイデンティティと世界に羽ばたく力が挙げられているが、これらは相互に影響を与え得る関係であるが、他方で、時間軸的に捉えても一定のタイムラグやズレがあると思われる。世界とつながった課題探究を行うことができたとしても、そのことと自分自身のキャリアに主体的に関わっていけるかどうかは通底しているが、別の次元のことでもある。資質能力の相互の関係性を踏まえた上で、学びに対して「真正の評価」論や「逆向き設計」論に基づく評価観を前提としたルーブリック評価法を知恵を絞って検討していくことが必要だと思われる。

４点目は、取組の成果を共有する方法に関して。今回も学校による事例発表があり、その意味では取組の成果を共有していると捉えられるが、このＷＷＬの真骨頂であり、今後ますます重要な点となると思われることは、学校における各種取組を下支えしている「教員」間に蓄積されているノウハウやチップスを共有していくことにもあるのではないか。今後は、ノウハウを共有していくために開発拠点校、共同実施校、連携校での教員間の情報共有の方法についてご検討いただきたい。

森委員　楽しく発見に満ちたミーティングだった。

イノベーティブなグローバル人材像が世の中に提起していくものの骨子になると考える。資料にある、「課題解決力」、「キャリアデザイン力」、「信州に根ざした確かなアイデンティティと世界に羽ばたく力」だが、①と②の間に乖離がある。間にアクションプログラミングというような段階が必要だろう。

発表を聞いて、これは、教育者の力次第という気がした。この残り２年間の実験で教員の力を発揮させるにはどのようなことが必要か、おそらく文科省の趣意書にはプログラムの開発ということで、教員の養成は書かれていないのだろうが、この場で得られたヒントから教員への提案ということも視野に入れていくといいだろう。

WWL４つの取組の中にアクションという部分が抜けている。高校生の発表もどちらもアクションがあってあそこまで進んだ。四つの箱の矢印のところに相互連関的にアクションを入れるといい。

小村委員　５点ほど申し上げたい。１つは、グローバル人材として国際社会で活躍する資質能力を育成するためには何が大事か。日本人は国際会議では、聞いてばかりで、真面目に話を聞いて国内の上司に報告することしか視野にない。大事なことは、国際会議全体に貢献する意見が

言えること。周りの国が言っていないことを根拠を示して言うこと。それだけで日本すごいね、と言ってもらえるようになる。単なるプレゼン力ではなく、相手の興味を把握して、相手にとって役に立ちそうなことを言うこと。そういった考え方を授業の中に取り込めるとよい。

第２に、思考するフレームを磨く仕掛けがデザインされているとよい。地理的、時間的，文化的なものを対比させることで考えを深めることができるし、それを超えて普遍的なものに合意していくことができる。異なるものを意図的に比較して、共通点は何か、自分にとって、相手にとって大事なことは何か、というフレームで考えていく。そのフレームを地理や歴史などそれぞれの教科で使って、教科の取組と連動させられると良い。

第３に、教員の資質能力の話が出ているが、ここが大事なところで、OECD の Education 2030 でも新しい教員の資質能力とは何か、をこれから議論する。私が OECD 局長に申し上げたのは、「想定外を喜ぶ力」である。これまでは、教育委員会なり、学校や先生が考えるゴールに対して、それにどれだけ近づけたか、その差分を評価し、差分をうめるように努力しよう、という教育が大事にされてきたが、それをどう乗り越えられるか。教員としては思い通りにならなかったとき、自分が考えていなかったことが出てきたとき、「面白いね。」「すごいね。」と言えるか。どんなリアクションが取れるかの、そこには心理的なプライドのようなものを含めて乗り越えるべき壁がある。先生方自身が想定外を面白がれるか、が大事である。そう考えていくと、資質能力にある、「解を見つける力」という言葉が気になる。課題を見抜くこと、はよいが、解は「見つける」というか、「創造するもの、作り出すもの」である。そうしておかないと、子どもたちは、先生たちが思っている解を探しに行くことになる。今はない解を作っていく、今はない合意をみんなで編み出していく、そういったメッセージが発信できるとよい。

４つ目は、外部連携について。学校間、企業・大学との連携は素晴らしいし、もはや学校だけでやっていける時代ではないことは承知の上だが、陥ってはいけない落とし穴は、「企業や大学はすごい。」という考え方だ。企業や大学の立場から言えば、企業や大学は大したことない。学校の先生は学校のことしか知らないというが、企業は企業のこと、大学の教員は自分の専門分野しか語れない。高校の先生の方がいろいろ触れる機会がある。企業や大学がすごいというのは違うと思う。企業、大学にこそ高校から学ぶべきことがたくさんある。企業大学がすごいからあこがれて連携、というのではなく、企業・大学も答えをもっていないからこそ、みんなでフロンティア（社会の課題解決）を一緒に考えていく、企業・大学がすごいからではなく、みんなで答えを編み出して行こうというムードになっていくとよい。

最後に、対話する文化の重要性。対話の質がこれからの学校教育では大事。他の学校の委員もしているが、みな大事にしているのが、対話。質の高い対話があるところには、自然に探究が育っていく。いきなり探究、問いを出せと言われても生徒たちは出せないし、あるいは、出した方がいいと思われるものを出してしまう。フラットに対話する文化が大事。質が高い対話のためには、つぶやきが大事。生徒が感じたことを素直につぶやけるかどうか。そうでないと、生徒は忖度して認めてもらうための意見を言う。対話は独り言、つぶやきの積み重ね。その文化ができるとよい。生徒たちは今日もワークシートにたくさん記入していたが、先生が言ったことを書き取るだけでなく、自分が感じたことをたくさん書く。思考・判断・論理的に考えられることではこれからの世の中では差がつかない。ＡＩもサポートしてくれる。差がつくのは、インプットの段階である。物事を感じ取る力、世界を読み取る力が大事である。資質能力を育成するなかで、しっかりと体験する、世界をどう自分が感じるか

を自分なりに表現するアクティビティが根付くとよい。

坪谷委員　この取組を線にする、面にする、そのための具体的なアクションプランが必要。高大連携もあるし、学校の壁だけでなく、自治体の壁も超える。長野の取組を日本へ発信する。戦略を立てて一番効果的な方法を考えてほしい。「あんなことやったね。」というだけではもったいない。

讃井委員　探究的な学びの中では、解を見つけるよりは、解を作っていかなければいけない。Knowledge building、知識の構築と言ったりもするが、フィードバックがとても大事である。探究プログラムをやっても、コンテスト形式でお題だけ与えて、あとは自分たちで頑張って、という場合と、途中で大学生メンターやフィードバックをいれる場合では、出来上がりが大きく違ってくる。問いを投げかけるだけでも違う。研究指導においては、指導教官との打ち合いの中で高まっていく。答えのない中だが、評価というよりフィードバックが探究を導く言葉になっていくと思う。

荒井委員　先生方から質問や、意見交換があれば。

内堀アドバイザー　坪谷さんのコンセプトの話と讃井さんの driving question に関係して、High Tech High に行ったときに、探究をするときに essential questions というのと driving questions があって、最初に essential questions を設定して、個々の日常は driving questions で回すのだけれども、でも結局は essential questions に戻っていく、この概念をどなたか説明していただけないか。

坪谷委員　プログラムを設計する際に、まず concept が決まり、その次に essential questions が決まる。あらかじめ、どういう問いを立てるのか、デザインをする人が、例えば学際的に問を立てていく。これが essential questions で、それに対する答えを追究するのが軸。それをやっていく間に補足的に後からでてくるのが driving question と理解している。前もって考えている人もいるが、その場で偶発的にでてくることもある。

荒井委員　こうしたある種理論的な事柄についても勉強会あるいは研究会等でWWＬを軸に県内の高校において前提を共有していく時間があるとよいと思う。改めて説明するまでもないが、アーチボールドとニューマンによって提唱された「真正の評価」論やウィギンズとマクタイを中心として提唱された「逆向き設計」論が参考となる。そこでは、単元を通して探究する「本質的な問い（essential questions)」と、それに対応して身につけさせたい「永続的理解（enduring understandings)」を明確にすることが重要であると理解されている。ここでの理解とは、スキルや知識を洗練された柔軟なやり方で使いこなせる状態を指し、「思考力・判断力・表現力」と近しい概念と理解できる。「本質的な問い」によって、個々の知識やスキルが関連づけられて総合され、「永続的理解」に至ることができるという流れである。「本質的な問い」とは、学問の中核に位置する問い、教科の中核に位置するような「原理や一般化」を看破することを促す問い、生活との関連から学習の意義が見えてくる問い、単純な１つの答えがない問い、一問一答では答えられない問い、概念理解や方法論を尋ねる問い、単元を超えても繰り返し現れるような問い、カリキュラムの系統性を指し示す問い、などとされている。例えば、社会科で三権分立を学ぶときに、立法・行政・司法があるという説明をただ単に羅列的・並列的に説明をするのではなく、「相互の機関の構造と機能はどのような関係にあるのか」、「どうして権力を均衡する必要があるのか」、「権力が一つの機関に集中することはなぜ問題なのか」、「権利の濫用を抑止するためにはいかなるシステムが求められるのか」、「権力の区別・分離と各権力相互間の抑制・均衡を図ることで、国民の権利・自由の確保を保障しようとするシステムのメリットやデメリットは何か」など、本質的

な問いをあらかじめ学習者と共有していくことが重要であるとされている。「本質的な問い」に繰り返し取り組むことで、学習者は「問う力」をも身につけていくことができるとされている。

おそらく信州教育の中で、大事にしてきた「めあて」とか「問い」をもう一度考え直していくという、義務教育でよく取り上げられてきた、問いの設定の仕方の本質論と関わると考えている。

小村座長　経産省「未来の教室」で、コロナウィルスのプログラムを岡山大学と制作している。コロナウィルスに関係する問いの曼荼羅を学術会議のメンバーと作っている。コロナウィルスでも学術部分がどんどん広がるし、今回は高校の授業でやるために、教科の見方、考え方と結び付けようとしている。先生方とワークショップなどしてもいいかもしれない。

森委員　もし、余裕があるのであれば、個々の事例がこれまで上がってきたような、方法論でもアクションでも構わないので、教育上のモデルとなりうるような、どのような特性をもっているのか、ひとつひとつ拾ってみてもらうと、とても構築的な報告書になると思う。

讃井委員　essential questions は、大きな問いで大人がみんな「よい」と思っている問い。地域課題を解決することは、大人はみんなよいことだと思っているが、子どもたちは必ずしもやりたいわけじゃない。そういう構造がある。大人として、子どもたちにこうなってほしい、という思いと、子どもが興味を持てる問いとの両立を図る難しさが PBL にはある。コンセプトと同じように、大人が考えるテーマがあって、それに子どもが乗り切れないとき、PBL を楽しんでやるために driving questions の役割があると考える。essential questions はみな共通だが、driving questions が個別最適のためには大事。

小村座長　driving questions にこそ高校の先生方の役割があると考える。意見交換する中で、２つの論点が見えてきた。１つは、個々の学びの質を高めるためにはどうしたらいいのか、今日は十分に意見交換できなかったが、優れた取組をどう普及していくかについても考えていかないといけない。

５　閉会行事

あいさつ（北澤教育幹）

事務連絡

信州WWLコンソーシアム構築支援事業

第3回運営指導委員会議事録

期日　　令和3年2月6日（土）午後2時から午後4時30分
場所　　上田高等学校及びオンライン
参加者
○運営指導委員
荒井英治郎　小村俊平　讃井康智　坪谷ニュウエル郁子　森茜　南希成
○カリキュラムアドバイザー
内堀繁利
○カリキュラム開発拠点校（上田高等学校）
廣田昌彦　市川格　白鳥敏秀
○共同実施校（松本県ケ丘高等学校）
杉村修一　徳永佳代　近藤慎　齋藤亮　羽賀規真　西川智康
○連携校
三輪元子（長野）　黒岩周平（長野西）　小岩井秀樹（篠ノ井）　宇都宮仁（屋代）
佐々木史直（上田染谷丘）　吉澤健二　清水貴弘（野沢北）　倉石典広（伊那北）
牧内千明（飯田）　馬場　正一（松本深志）
○管理機関　学びの改革支援課
曽根原好彦　北澤潔　腰原智達　宮下美和　長嶋幸恵

1　開会行事

2　「GS報告会」報告

（1）行事の説明（市川教頭）
（2）生徒の発表
①「日本語教室について」（仮題）　　2年　羽田蒼馬　浅沼花奈
上田市在住の外国ルーツの子供に対する支援活動を行なった。宿題のサポートをし、中国語を教わる。見つけた課題「学習できる環境の整備」「子どもたちの文化的背景」「学校が個々の抱える問題に対処しきれない」→地域全体の包括的な支援が必要。行政や地元の企業にも協力を仰ぎたい。
＜質疑応答＞
坪谷委員　外国ルーツの生徒たちは一条校の生徒か？
発表者　　日本の学校に通っている。
坪谷委員　就学していない子どももいるのか。
発表者　　過去には居たと聞いている。高等学校には行かず家居の子どもは何人かいる。
坪谷委員　就学させる義務は日本国籍の子供達に対してのみで、一条校以外の学校（ブラジル人学校）に通っていると公立高等学校への進学が難しいなどの問題がある。そういった社会問題にも着目して良いのではないか。

荒井委員　このテーマは長野県でも全国的にもホットで現代的な問題。国レベルでは夜間中学校の設置が推進されているため、長野県にはないが、他県の動きを調べるなど改革動向を調べてみるのもいいのではないか。松本でもＭ ウイングで「ヤング日本語教室」という取組があり、信州大学の学生も関わっている。また県ケ丘高等学校の高校生でも同じような問題意識を持っている生徒もいるようなので、情報共有しながら一緒に活動していけるといいのではないか。

讃井委員　学習支援の教室の中での指導上の課題はあるか？

発表者　家庭では両親の言葉を使っているので、日本語ばかりになっていいのかジレンマを感じる。子どもは日本語が割とできるが、親に子どもの問題を日本語で伝えることが難しい。

讃井委員　対子どもだけでなく、親や環境などの背景の課題にも目を向けていて良い。子供達のバックグラウンドの大きな課題にもアプローチして欲しい。

森委員　レベルの高い活動だと感じた。長野県の外国ルーツの人の人口比率が高いことは全国的に知られている。彼らを日本人社会がどう受け止めていくかの視点が表れていた。この点を面にしていくことが大事。公立図書館には、多文化グループの活動があるところもあり、地域の公益財団と手を繋いで活動を変容させている。地域の団体の活動とつながっていくと、いろんな年齢の外国人を支援していくことができる。

発表者　地域の子ども食堂やＮＰＯと繋がっていくことも考えていきたい。

南委員　病院でも外国ルーツの方は一定数いるが、コミュニケーションなど考えさせられることも多い。早い時期から福祉や制度などに目を向けて、接続していけたらいろいろな不利益が解消されていくと考える。よい取組だった。

小村委員　外国ルーツの子どもたちにもしっかりした学びの環境を作っていくことは大事なテーマ。もちろん学習支援は大事だが、友人関係や地域のコミュニティも大切。非常にこの問題は難しくアイデンティティの問題とも関わってくるが、そこに踏み込んでいくと、より一層深いテーマになっていく。調べる範囲として日本だけではなく、他国の状況もみてみると更に立体的にいけるのではないか。更に深めてほしい。

②「オンライン台湾高等学校交流」（仮題）２年　吉池功多　榊原陽太　清水晋太朗
佐藤優衣　宮崎あずさ

台湾への研修旅行が行けなくなり、クラスごとに台湾の４校とオンライン交流を行なった。現地には行けなかったが、たくさん準備をして良い交流になった。

国立新竹女子高級中学　互いの文化交流
国立苗栗高級中学　合同調理実習
私立延平高級中学　文化交流
国立科学工業園区実験高級中学　グループに分かれて自由なテーマでプレゼン

＜質疑応答・コメント＞

坪谷委員　修学旅行がキャンセルになり、大変残念な思いをしたということだが、オンラインだからこそ良かったこともたくさんあったのではないか。これを機会に、例えば台湾も日本も東アジアに属するのだから、地域の共通の課題を出し合って共にプロジェクトを組んで、その課題を解決するために、ある程度中長期的なプロジェクトを組むという次の一歩を踏み

出してみてはどうか。

森委員　　とてもいいヒントをもらった。このような形で交流ができるということはコロナが終わった後に、リアルのコミュニケーションが取れるようになったときにも混ぜ合わせ交流ができるということを示唆してくれていると思う。そういう意味で、今後にも活用できて多様性が生まれるとても実績のある交流になったと評価する。

讃井委員　　今回、リモートでの交流になり、その中での難しさもあったと思うがリモートでの交流を行うことの難しさと工夫や対策はあったか。

発表者　　台湾交流を実際にする前に、台湾の生徒たちとどういうプレゼンをするかなど、内容は自分たちで決めた。この時に英語を使って会話したが、周囲がざわざわしている中で、普段使わない英語で内容を決めていくのは難しかった。一方で、現地に行かないけれども事前に生徒同で交流して本番ではスムーズに交流できたし、交流が終わる時にSNSなどを交換して継続してやり取りする人も出てきた。そういう点ではリモートで良かったこともあった。

讃井委員 すばらしい。事前のミーティングやSNSでやり取りを続けていくことはコロナ禍に限らずこれからも続けていけることだと思う。今後に活かしてほしい。

荒井委員　今回は「交流」に焦点が当てられていたが、「交流」から「対話」へ、互いの違和感も含めて色々な価値観の違いが分かると、もっと発展的な方向にいくのではないかと感じた。「共通」の土台を探るという矢印と、「違和感」のありようを探るという矢印も引き続き続けてほしい。

南委員　高校生同士の交流ができて良かった。実際にオフラインで現実に行ったり会ったりすると、台湾は近い海外ではあるが、違った感じをもつことがあると思う。オンラインとオフラインのギャップもまた非常に勉強になると思う。これからもそういった繋がりを続けて対話を続けていくとよい。

小村座長　去年の夏に10か国200人くらいの高校生が集まって国際会議を開催し、2030年の学校について話し合った。学校というテーマ１つとっても、国によって全然違ったものが見えてくる。先生と生徒の関係のあり方や学校が何をやってくれるか全く違う。そういう意味で１つのテーマ、１つの課題について話をすると日本だけでは見えなかったものが見えてくる。テーマを定めて比べたり議論をすると非常にいい交流になると思う。もう１つは、今回オンラインの交流だが、会えなくて残念ではなくて、オンラインだからこそできたこともあり、会えるようになってもオンラインでやりたいとか、色々な可能性を感じたことがあったと思う。毎週話しているが会ったことがないという関係がこれからは増えていくかもしれない。会った事はないが一緒に仕事をしているというのは、海外の人との関係性と同じ。そういうときに、どうコミュニケーションをするとより仲良くなり、より信頼できるのか考えてみると、非常に面白いし、これから色々な活動する時にも役立つと思う。

発表者　友達に感想を聞いても、この台湾交流学習が良かったという人が多かった。もっと台湾について知りたいとか、機会があったら台湾に行ってみようという人がいる。この交流にとどまらず、多分個人的にも台湾とかに行く人も多いと思うので、今回知り合ってSNSの交換をした人たちと交流を続けて、現地に行ったときは会えるように、今回の交流が無駄ではなかったと思えるようにしていきたい。

③「Environmental Initiatives in Taiwan and Japan」

２年　赤羽陽里　齋藤優里奈　塩沢文萌
馬場彩加　宮嶌莉々菜

環境問題への取組については台湾と日本で共通していることと異なることがある。

・原子力発電について
・再生可能エネルギーに関わる政策について
・資源の有効活用やゴミ問題について

坪谷委員　It's great that you guys did some research for that environmental issue to find out some similarities and differences in both Taiwan and Japan. However your next step will be how Taiwan and Japan can cooperate together to solve the issue. It is great that you've done research, but "research" is "research". What's important is how we can solve this problem and do action. I'm looking forward to that.

荒井委員　今回の取り組みは「how」に着目したテーマだったかと思う。高度な要求になるが、課題研究として、「why」の問いもアプローチしていくと、さらに探究が深まるだろう。

讃井委員　英語で発表できたことが素晴らしい。英語で世界中の人とコミュニケーションできるかどうかということで幅が広がってくる。課題を深掘っていって、海外の人と協働していくとすると、今日の英語の発表で第一歩を踏み出したと言える。最初はうまくいかなくてもにしないで今後も英語でのプレゼンテーションを続けてほしい。

森委員　着眼点も取り上げる素材も身近だった点がよかった。ゴミの分別ポスターのようなものから問題点を発見しうることに気づかせてもらった。

南委員　身近な所からそれぞれの国の共通点や違いに入っていくのは、フレッシュで勢いのある取組だと思った。

小村座長 英語が得意でない人にも分かりやすいプレゼンテーションだった。資料が分かりやすかった。比較は分析の基本。それぞれ条件が違うから意思決定が変わってくることになる。加えて何かをするとすれば、例えば、修学旅行で台湾との交流があるのだから、環境意識についてそれぞれの国の高校生の意識調査をして比べてみるとか、現地の高等学校の協力を得て同じテーマで互いの国でアンケートをするとか joint research 等をやると面白い。

発表者　英語で挑戦するというのが、あまりないことなので緊張したが、協力して多くの感想をもらえて嬉しかった。この活動を通して得たものを、これからの学びにも繋げていきたい。

＜休憩＞

３　議事

(1) 管理機関より１年間の取組報告。

・多くの高等学校で特色のある取組をしている。それらをＷＷＬの資源として活かしていきたい。
・コロナ禍で生徒たちの学びが制限を受けてしまうというところが辛いところ。
・ルーブリックの活用。

(2) 意見交換

小村座長　　それぞれの委員からコメントを頂戴したい。

坪谷委員　　ＡＬネットワークの取組を県内のみならず日本全国また海外にも広げてほしい。今や情報は瞬時に世界を駆け巡るので、長野での取組が広く影響を与えられるような形に構築していくことを考えてはどうか。２点目、教員の研修については、コンセプトラーニング（概念学習）を加えてはどうか。3 点目、ルーブリックについて。要は最初に生徒たちに学ぶルールやゴールを把握させてから学びを進めていくこと。その点を再認識してほしい。

森委員　高校生の発表に感銘を受けた。２年生の段階で全員がポスターセッションをすることで、全員がそれぞれ課題認識をして自分なりの研究をして起承転結を立てて発表していくという以前から行われている実践が下地にあるのだろう。今回のWWＬで初めて実践したことではないが、これまでの評価できる点なども、教育方法の中に組入れて構築されることを勧める。一朝一夕でこれだけのことができたわけではないし、１人もとり残さずに全員に自分自身で考える力を付けていく教育はこれまでの考えの上に立って初めて成り立つと思った。

讃井委員　来年度に向けて改めてゴールイメージの確認をしたい。WWＬの取組、ＡＬネットワークを通じて長野県の子どもたちはどうなっていくといいのか。ゴールイメージは複数あってもいいと思うが、そこのレベル感をどこに持ってくるかによってかなり活動が違う。今日は１年生の発表だったのでルーブリックでいうと登り始めた段階。１年生にすべてを求めるということではないが、国際的なことを調べて表現することも第１歩だし、さらにそれをすごく深掘ることでその課題の洞察を深めたり、前回上田で発表した生徒のように、実際アクションをしていくとか。アクションした後に自分たちで振り返り、改善をしてまたアクションをしてその振り返りまでしている高等学校もある。例えば台湾の学校と交流関係であるのであれば、台湾の子達と一緒にコラボラティブに課題解決していくこともステップの１つとしてあるのか。また、デザインシンキングを学んでいるということだが、どこに生かされているのか。プロトタイプとして実際にもの作り、表現作り、例えば、ＩＴの分野だと web サイトや、アプリのモックアップを作るといったアウトプットの仕方もあると思うが、ゴールイメージをどのあたりに置くのか。

管理機関　この探究的な深い学びを深めていってアクションを起こせる生徒というようなところは、１つの目標ではあるが、みんなができるものではないと思う。できる子のやりたいことを制限せずにチャレンジさせられるような形になればいいと考える。

廣田校長　マシュマロチャレンジで１回目はうまくできないが、その後、デザインシンキングの考え方を確認したのだが、休憩中も生徒は全く動かずに、アイディアをどんどん出す姿があった。トライして失敗して、それをさらに改善した形で次に繋げていく、高校生の時に何回もこの体験をさせることが大事。３年生になってアクションを起こせる生徒もいるが、高校生のうちに起こせなくても、社会人になったとき自分の考えていることや自分の意識を社会に問うたり、失敗したときもまた改善してやっていくことに繋がると考える。

坪谷委員　情報から読み取る力、分析・要約するリサーチ力は育てているし、プレゼンにつながる発信力もやっていると思うが、大学に入る前に小論文くらいは書けなくてはいけない。書く力も養ってほしい。

讃井委員　小論文というのは、表現としての小論文か、それとも先行研究を調べてリサーチクエスチョンを定めて調査をし、最後コンクルージョンを出すという思考プロセスを経てのアカデミックな論文を書くということも大事だと思う。どちらの意味合いか。

坪谷委員　当然ながら論文を書く過程は、その既知の知識に関して問いを出して踏み出す自分がしていかなければいけないプロセスがある。そこでは思考力が大変重要。論文にはルールがあるのでそこがアカデミアの部分になってくる。ルールを知り、コミュニケーションの１つとしてプレゼンテーションのみならず書くことによって 表現することも必要なのではないか。日本の場合は大学の教養課程で書き方を学ぶが、大学に進まない生徒もいる。社会に出る前に、高等学校で思考プロセスやルールを含めて書く能力を養うことは非常に重要。

森委員　坪谷委員の意見に賛成。国連大学の仕事の経験によると 明らかに開発途上国出身は先進諸国の出身者より条件が不利。思考力や才能があっても評価はエッセイで決まる。たまたまその訓練がされてないということだけだろうが不利になる。そういう意味でコミュニケーション、それを論理構成して文字で表現することが大事である。教育目標の１つに、今まで日本人が不得手だったデザインシンキングと論文を書く力を顕在化させていくことに賛成。

小村座長　探究の学びの交流会を開催している。アカデミック、イノベーション、メーカーズの３部門であるが、この３つの部門でそれぞれ生徒の動機も出てくる成果物も違う。ここを混同してはいけない。自分はどんな世界に今興味を持ち、どんなルールで戦おうとしているのかその辺りを生徒に自覚的になってもらうことが必要。更にベースとなる振り返りの力は当然必要。社会活動を論文にするには１～２年間という活動は短いかもしれないが、大学の志望理由書では自分がどんなところにフォーカスをしてどんな学びができたのか、今後どうしたいのか言語としてしっかり書けるようになって欲しい。このあたりの目線合わせが、それぞれの学校のこれまでの歴史と現在の土壌さらには目指すところの中で議論がなされるといいと思う。

讃井委員　小村座長とイメージが近い。マルチゴールイメージというのか個々人の探究の方向性に合わせて選べるといいと思った。

南委員　少し話は戻るが、今年はいろいろ制約があって手をつけられなかった課題とかもあると思うが、生徒は取組んでいく中でどう感じながらやっているのか興味がある。そのリアクションというかどんな風にWWLの考え方を消化して自分たちのものとして取り組めているのか。一方で生徒の発表はフレッシュで、非常に身近なところから実践的な問いかけを問題提起して取組んでいてそれ自体はすごくいい。ただ目標としているところが大学で学ぶような論文の書き方や研究の進め方を教え込んで、高校生を早めに大学生化する促成栽培になってしまうとつまらないという印象を危惧として持った。

荒井委員　１つ目は、情報共有に関して。WWL全体のウェブサイトはあるが、県内版ものがあってもいいかもしれない。理念の確認に役立つ全体像を示した「ポンチ絵」のようなものを載せておくだけでも意義がある。２点目は、探究の方法論に関して。論文の書き方など、いわゆる「学術リテラシー」を多くの高校生が学ぶ機会があった方がいいという考え方に共感する。例えば、学術リテラシーに関する情報や方法論に関して、生徒がいつでもどこでも受講できるようにしておくことを検討してよいのではないか。３点目は、ルーブリックに関して。今後ルーブリックの内容に関して、教員同士、さらには生徒にも共有する機会があってもいいのではないか。このような対話や議論がないと、機械的に優先順位をつけるだけで終わってしまう可能性があることを危惧する。最後に、前回もコメントしたが、参加している教員同士で議論・共有するような時間を意識的に設けてはどうか。教員同士の振り返りを期

待したい。

小村座長 具体的な提案があったが、事務局ではどうか。

事務局　ウェブサイトについては作業中。近々公開する予定。生徒が探究のためにいつでも訪れられるサイトについては信州学などの部分も合わせて作りたいと検討中。教員間でのミーティングは短時間ではあるが、情報交換するような時間を月１回取るようにしている。

小村座長　少しコメントをして更に議論を続けたい。高校生の国際会議について基本的な考え方を紹介する。国際会議を考えるときに重要な言葉がバイとマルチという言葉。バイは２国間でマルチというのは多国間。２国間と多国間でやることが全く違う。今回WWＬで目指すのはマルチの国際会議だと思う。マルチな国際会議では、新たな国際的な枠組みをみんなで考えることが目標。皆にとって大事なこと、環境問題など、国際的に大事にしたい新しい価値観や国際的な合意をしてマルチな取組を目指すといいと思う。もう１つは、日本人の国際機関での評判である。日本人は個人としては優秀だけれどもチームでパフォーマンスを発揮できない、これが日本人に対する定説。英語力の問題もあるが、１番大きいのは自己効力感や自己肯定感が低いこと。訳が分からない状況で言いにくいことを言ったり、積極的に発言したり、みんなの意見を聞いてまとめて新しい何かを定義したりできない。今回WWＬという枠組みで 普段の学校の中の人間関係を超えて広いコミュニティの中で挑戦する機会なのでなるべく日常できないような挑戦ができる場を作れるといいのではないか。そうすることで日本人が普段苦手とされている全く見ず知らずの人や文化・背景が違う人とも交流して互いの意見を聞いて新しい何かを生み出す場を作ることが可能になる。WWＬの２年目、３年目に向かって行くときのゴールをすり合わせて行くときの参考になると思う。もう１つは、２年目の落とし穴について。慣れてくると、生徒は前例を踏まえて成功の法則を使おうとする。５年程前は高校生にイグノーベル賞の話が非常にウケたが、最近はそれがウケなくなってきて、ノーベル賞の話を聞きたがるようになってきた。生徒が成功したがるのは、気持ちとしてはわかるが、ノーベル賞もすごいけれど、イグノーベル賞も面白いと感じてほしい。高等学校の限られた時間の中で、すごいとか社会的にかっこいいからとかではなく、自分自身がやること自体の楽しみを見出せることが凄く大事だと思う。自分の中で沸き起こるようなものが見つけられるかどうか、そういう機会を作れるかどうかがWWＬの取り組みの中で非常に大事なことだと思っている。自分自身が面白いと思うものにのめり込めることをやること自体が正しいことだと考えられるマインドセットを先生方も生徒たちも持てるといいのではないか。以上を私からのコメントをさせて頂く。残り時間で自由にコメントをしてほしい。

讃井委員　今の話は、とても大切だと感じた。まさにその総合的な探究の時間でもそうだが、まず自分で本当に夢中になれるものをこのWWＬやＡＬの活動の中で子供たちも見つけてほしい。発表する生徒たちがそれを見つけてのめり込んだ姿を見てきた。その姿を作る先生方の取組を続けてほしい。また、有識者ミーティングのような雰囲気だと硬くなってしまうので、今後も Zoom でやるなら最後の方はブレイクアウトルームに分かれて少人数で振り返りをするなど、委員と教員が意見交換する機会を設けてはどうか。

小村座長　そういう対話的な取組は大事。対話が豊かになるように応援したい。

坪谷委員　国際会議でも小さな会議でも底辺は同じだと感じる。平和にしていく、持続可能にし

ていくという底辺のところ、コミュニティの中で共通のスキームを作っていくというところは同じ。求められるスキルも同じ。元々の教育の原点に戻ると、生徒に輝くものを見つけてそれを引き出して花を咲かせることだと思う。長野県はすでに取り組んでいるのだから、その動きを日本中に広げてほしい。

森委員　事務局に確認をしたいが、来年度のいつからまとめの作業に入るのか。２年間やってきて、その中でルーブリックも一応作ってみたわけだが、教員同士が振り返る機会や生徒が自分たちがやってきたことや自分たちがどのように位置づけられているかをこれを見てどう考えるかということを吸い上げていくような過程があった方がいいと思う。来年度のこの会議の中でそれらを委員が咀嚼できるようなタイミングまでにやることを盛り込んでほしい。また、ルーブリックが少し細かすぎる気もする。教育される個人がその個人から社会に向かってどのような対応をするかという側面とその個人が自分自身に対してどうやって行くかという側面とが整理されるとわかりやすいだろう。例えば社会性を見るところで自らの行動を振り返るレジリエンスの次に、人生を構想する力とあるが、人生を構想するというのは難しいこと。その前に、もう１つ自分自身を捕まえ直すような「立ち直る力」というようなものをどうやって育成するかというのが入るといいと思う。

(3) カリキュラムアドバイザーより　　内堀　繁利高等学校改革推進役

２点ほど申し上げる。　１点目は拠点校である上田高等学校それから共同実施校である松本県ケ丘高等学校、それから現在９校、来年度１１校になる連携校、それぞれコロナ禍で海外研修や、フィールドワークのような人と接するようなこと、どこかに出かけていくようなことも制限される中で本当に様々な工夫をして枠を超えるような形で実践をしていただいたことに敬意と感謝を表したい。学校は知識やスキルを身につけるだけではなくて、これからの時代を作っていく力や自分自身の幸福を追い求める力を身に付ける場所だと思う。その時にこれは無理だからやめましょうと、学校が次々とやめてしまうと、子ども達は知らず知らずのうちに最初は不満を感じたとしても、次第に「そうだよね」となってくるように思う。だからその感化力というか薫陶というか、学校にいる教員が諦めない姿勢で事業に取組んでいることは大きな意味がある。やはりそういう取組をしているところは子供たちも生き生きと様々なことに挑戦できる大人に育っていくと思う。そう言った意味でも事業の推進の意味でも重要なことである。

もう１点は、このWWLの事業は、最終的には６万人程度を対象にイノベーティブでグローバルというような人を育てていくための、高度な学びを提供する「WWLコンソーシアム」というものを構築することを視野に入れながら、その中核となるＡＬネットワークを構築するもの。当面３年間をかけてその中核となるものを作っていく。　中核となるものというのは仕組としての　ＡＬネットワークであり、カリキュラムとしてのＡＬネットワークというふうに整理している。仕組の方は次第にできてきて、カリキュラム開発を今やっているところである。そういう視点からまた今後も様々な取組に運営指導委員の先生にご指導頂きたい。その中で１つ大きく取り組んでいることとして各校がやっていることを連携校まで含めた 11 校で共有している。どこかがやっていることに希望者が参加するだけでなく、カリキュラムや手法やあるいはそのやっていること自体をこの 11 校で共有することで、それを自分自身の学校に取り入れて自分の学校のカリキュラムを変えていくことも非常に重要だと考える。共有し参加したり、共同開発することで、何か自分の学校に活かしていくことが大事。

それぞれが成長した 11 校が中核にいることで、WWＬを牽引していく。カリキュラムは、無機質な紙の上に書かれたものという風に考えがちだが、カリキュラムマネジメントという言葉があるように、生き物として捉えて日々それを改善していくことが大事。

もう１つは持続可能なものにしていかないといけない。人が変わったら終わってしまったり、全く別物になることがある。教員側では属人性をできるだけ小さくする、つまりこの先生だからできるということではなく、こういう仕組だからできる方に寄せていくということが１つ大事だと考える。また、生徒の側では「どこかの学年がやりました」「次はやりませんでした」ではなくて、先輩が後輩と一緒にやるとか先輩がチューターになって後輩を世話するとか、そういう仕組を生徒同士でも作っていくことが大事だと思う。

4　閉会行事

信州WWLコンソーシアムALネットワーク　育成する生徒像ルーブリック（案）

			S	A	B	C
混沌とした社会の中にある課題を見抜いて、テーマを設定し、チームとして協働しつつ、対立やジレンマを乗り越えて解を見つけ、アクションを通じて新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができる	課題発見力	世の中の事象から課題を見つけ出し、自分ごととして設定することができる。	課題を自らの生き方と結びつけて設定することができる。	見つけた課題を自分の身の回りの事象と結びつけて設定することができる。	・事象を多角的に見て、オリジナルの課題を見つけることができる。	・課題を設定できるが、オリジナリティが感じられない。 ・一面的である。
	協働力	人と協力して共に活動することができる。	学校の外の人とつながり、協働することができる。	自ら仲間を探し、協働することができる。	グループの人と協力することができる。	自主的に人と協力する姿勢が見えない。
	解をつくり出す力	試行錯誤を繰り返す中から最適な解をつくり出すことができる。	自らつくり出した解を試行錯誤を重ねて改善していくことができる。	自分が取り組む課題にふさわしい解をつくり出すことができる。	一般的に知られている解を組み合わせて自分の解とすることができる。	インターネットや書物一般的に知られている解を見つけることができる。
	アクションを自ら起こす力	課題解決のために活動を起こすことができる。	起こしたアクションを改善しつつ継続することができる。	自ら必要なアクションを起こすことができる。	指示により活動することができる。	アクションプランがプランにとどまっている。
	新しい価値や社会を創造する志	課題解決を通じて新しい価値や社会を生み出し、世の中を良くしようという志を持っている。	自ら生み出した新しい価値や考え方を実社会にapplyしようとしている。	新しい価値や社会を生み出そうとしている。	新しい価値や社会に関心を持っている。	考えが現状にとどまっている。
社会（世界）との関わりの中で、「一度しかない人生を自分はどう生きたいか」とういう自分の人生を構想する力	自らの行動を振り返る力・レジリエンス	自らの取組を評価し、失敗しても試行錯誤を繰り返し、努力し続ける態度。	失敗を省みて試行錯誤を繰り返しながら、改善に取り組みより良い解にたどり着いている。	失敗を省みて改善に取り組んでいる。	失敗を省みて改善に取り組もうとする。	失敗を省みることができる。
	人生を構想する力	課題に取り組む中で自分の人生や生き方を構想することができる。	自分の人生や生き方を構想している。	高校卒業後の将来の自分について考えている。	短い期間の将来の自分について考えている。	考えが現状にとどまっている。
信州に根ざした確かなアイデンティティと世界に通じる広い視野、資質・能力	地域に根ざしたアイデンティティ	地域と積極的に関わろうとする態度。	課題に取り組む中で広く地域と関わり、輪を広げようとしている。	課題に取り組む中で広く地域と関わろうとしている。	部分的ではあるが、課題に取り組む中で地域と関わろうとしている。	自分の考えに固執している。
	グローバルなマインドセット	世界を見る視野を持ち、他者の多様な考えや価値観を理解し受け入れようとする態度。	十分に他者の多様な考えや価値観を理解し尊重している。	十分に他者の多様な考えや価値観を理解し受け入れようとしている。	他者の多様な考えや価値観を理解し受け入れようとするが不十分である。	自分や自分の価値観に固執している。
	世界に通じる教養	幅広い知識と教養を身につけている。	学んだことを更に深め、実社会に活かそうとしている。	課題解決のために必要な知識を身に付けている。	課題解決のために必要な基本的な知識を身に付けている。	基本的な知識を一部身に付けているが、不十分である。
	世界に通じるコミュニケーション力	自分の考えを書いたり話すことで伝え、人の考えを書物や対話を通して理解し、恐れず対話をすることができる。	他者と十分に意思疎通を図った上で、対話を通じて新しい考えを生み出すことができる。	十分に他者の考えを理解し、また、自分の考えを伝えることができる。	他者の考えをおおまかに理解したり、自分の意見の要点を伝えることができる。	十分ではないが、他者の考えを理解したり、自分の意見を伝えようとしている。

長野県教育委員会事務局学びの改革支援課

〒380-8570　長野県長野市大字南長野字幅下692-2
TEL/026-235-7435　　FAX/026-235-7495
E-mail：　kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

長野県上田高等学校
〒386-8715 長野県上田市大手1−4−32
TEL/0268-22-0002　　FAX/0268-23-5390
E-mail：　ueda-hs@pref.nagano.lg.jp